

茨城県教育財団文化財調査報告 IX

冬木地区土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書

—冬木A貝塚・冬木B貝塚—

6+510+69+34+10=929

昭和 55 年 度

財 団 法 人 茨 城 県 教 育 財 団

序

「岩井・境都市計画冬木特定土地画整理事業」は、昭和48年度に日本住宅公団によって計画され、県西地区の開発事業として期待されております。

この地域の、埋蔵文化財包蔵地としては、冬木A貝塚・冬木B貝塚が存在するため、財団法人茨城県教育財団は、昭和54年度に日本住宅公団から委託を受けて記録保存のための発掘調査を実施いたしました。その結果、冬木A貝塚から10数体に及ぶ人骨をはじめ、多数の獣骨・魚骨などが出土し、郷土の歴史を解明する上に貴重な資料を得ることができました。

この冊子は、発掘調査の報告書として昭和55年度に整理し執筆・編集したものであります。この報告書が上梓するまで種々の御協力をいただいた日本住宅公団、五霞村教育委員会、地元関係者及び御指導いただいた茨城県教育庁文化課、人骨の科学的処置による取り上げの御指導をいただいた東京国立文化財研究所、それに人骨・獣骨・魚骨等の調査執筆にあたって下さいました東京大学総合研究資料館等の各位に対し、心から感謝を申し上げます。

おわりに、本書が学術研究の資料としてはもとより、教育資料としても十分活用されますことを希望してやみません。

昭和56年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 竹内藤男

例 言

1. 本書は、日本住宅公団と財団法人茨城県教育財団との委託契約に基づいて、昭和54年度に実施した猿島郡T農村に所在する冬木A貝塚・冬木B貝塚の発掘調査報告書である。
2. 冬木A貝塚・冬木B貝塚の調査にかかわる当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事長	竹内 藤 男 (茨城県知事)
副理事長	大 命 野 一 (茨城県教育財団) 吉 橋 清 (茨城県教育財団)
常務理事	川野辺 四 郎 (昭和52.4～)
事務局長	大 内 秀 夫 (昭和52.4～55.3) 小 林 義 久 (昭和55.4～)
調査課長	川 俣 吉之助 (昭和52.4～55.3) 大 塚 博 (昭和55.4～)
企画管理課長	疋 秀 雄 (昭和54.4～)
企画管理班	鈴 木 三 郎 (昭和52.4～) 粟 田 孝 志 (昭和53.4～)
調査第1班	吉 木 善 夫 (昭和54年度班長) 荒 瀬 彰 夫 (昭和54年4月～12月調査) 高 村 勇 一 (昭和53年度整理・調査、冬木A11塚) 根 本 康 弘 (昭和54年8月～12月調査) 野 本 勉 (昭和55年度整理・調査、冬木B11塚)
前 助 員	野 淵 和 彦 宮 内 良 隆 仙 波 亨

3. 本報告書で使用した記号等は次の通りである。

S I……………生居址 P ………………柱 穴 (ピット)
 S K……………土 壘 K ………………貝 層
 S D……………溝 Y P……………黄色パミス

4. 生居址や土壘、ピットなどの深さは、すべて遺構確認面からの計測値である。
5. 土層及び土器の色については「新版標準土色帖」(農林省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
6. 冬木A貝塚・冬木B貝塚の発掘調査、出土遺物等の整理に際して御指導、御協力を賜った関係諸機関・各位に深く感謝の意を表したい。

目 次

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 冬木A貝塚	9
第1節 貝層・人骨・自然遺物	9
1 貝 層	9
2 人 骨	15
3 獣骨・魚骨	22
第2節 遺構と遺物	22
1 住居址	22
2 土 壕	93
3 溝	201
第3節 まとめ	230
第4章 冬木B貝塚	239
第1節 貝層・自然遺物	240
1 貝 層	240
2 獣骨・魚骨	241
第2節 遺構と遺物	241
1 住居址	241
2 土 壕	248
3 遺 物	259
第3節 まとめ	294
別冊 冬木A貝塚の自然遺物と漁撈活動	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

日本住宅公団の行う51haに及ぶ「岩井・境都市計画事業冬木特定土地区画整理事業」が、昭和48年に計画された。

この区域内の埋蔵文化財包蔵地については、茨城県教育委員会と五霞村教育委員会による分布調査が実施された。その結果に基づいて、茨城県教育委員会・五霞村・日本住宅公団の二者により協議された結果、冬木A貝塚・冬木B貝塚の2遺跡については現状保存が困難であるため、記録保存の措置をとることで合意した。

茨城県教育委員会は、冬木A貝塚・冬木B貝塚の発掘調査について、日本住宅公団に対して財団法人茨城県教育財団を紹介した。これにより茨城県教育財団と日本住宅公団は、昭和54年4月に発掘調査業務についての委託契約を締結し、冬木A貝塚・冬木B貝塚の調査については同年4月1日より同7月までの予定で実施することになった。

このため、当教育財団は五霞村の冬木A貝塚・冬木B貝塚に関する発掘調査に「調査第1班」の調査員3名を配置し、業務の進行を図ることになった。

調査員は4月より現地へ赴き、日本住宅公団冬木宅地開発事務所・五霞村教育委員会などと互いに連絡をとりながら、作業員募集・現地調査事務所の建設・発掘器材の搬入・調査区設定・残土置場の問題など調査前の諸準備を進めた。

第2節 調査の経過

4月23日から小調査区（グリッド）設定のための杭打ち作業等発掘調査に入る前の諸準備に入った。

5月9日 冬木A貝塚において敷入れ式を挙行し、本格的な調査を開始する。

〔A貝塚〕遺跡の南側、D2区より遺構分布状況確認のためのグリッド発掘を開始した。とりあえず表土のみを除去することにし、中旬以降はC2区・C1区・B1区・A1区・A2区まで行なった。表土層下付近より多くの縄文土器片・獣骨等が出土し始めた。

6月〔A貝塚〕 上旬から表土除去の終了したグリッドの掘り下げ、D2区内の溝・住居址・土塙などの調査を開始した。雨が少ないため調査区域内の乾燥がはげしく、作業は困難であった。作業はD2区及びC3区を主に進めたが、全体に貝層の広がりが見られ、貝層上面で一時ストップし、以後貝のサンプリングをしながら作業を進めた。

20日 日本住宅公団・茨城県教育委員会及び当教育財団で協議の結果、調査期間が延長されることになった。

〔B貝塚〕 これまではA貝塚のみの調査であったが、B貝塚も同時に調査を進めることになり、下旬に遺跡の全景写真を撮影した。

7月 〔A貝塚〕 D2区内の遺構調査を続行する。住居址は6軒を確認した。中旬からC3区及びC2区内の遺構調査に入ったが、貝層の調査・処理に時間がかかり、思うように進まない。特にC3区は全面貝層に近いので、出土遺物も多かった。骨類は保存状態も良好で、多量に確認された。25日、C2a₃において頭蓋骨の一部が発見された。これまで多くの骨類は出土していたものの、人骨の出土は初めてである。これ以後18体分もの人骨が続々と発見されることになったが、この時点では想像もつかなかった。記念すべき第1号人骨であった。

〔B貝塚〕 遺跡西側A1区・B1区より遺構分布状況確認のためのグリッド発掘作業を開始したところ、多くの土壌やピットが検出され、中旬以降は各遺構の調査を開始することにした。

8月 〔A貝塚〕 人骨の出土状態は良好なため、取り上げ保存を図ることにし、11日東京国立文化財研究所文部技官青木繁夫氏の指導を受け、23日に取り上げ作業を実施した。下旬にはC2区内の遺構調査にとりかかった。南側の遺構は密度が高く、多くの土壌及び8軒の住居址を検出した。

〔B貝塚〕 遺跡が低湿地状のため、雨が降るとしばらく作業が中断され、調査が遅れがちであったが、A1区を主に調査を進めた。南及び北側が低く、中央部が馬の背状に盛り上がっており、遺構も中央部に多く検出された。

9月 〔A貝塚〕 毎日のように新たな人行が発見され、それにつれて見学者の数も増加し、調査員は西苦八苦の口が続いた。C2区内の調査を続けながら、C3区内の遺物の処理を行なった。下旬から雨天日が多く、作業も中止がちとなり、調査にもかなりの影響が出た。

10月 〔A貝塚〕 C3区の調査が終了し、B1区・B2区・A1区・A2区の調査に移った。D2区で検出された溝は、C3区内においても北北東に伸びて検出された。

〔B貝塚〕 水はけ不良のため連続した作業ができず、調査が遅れがちである。掘り込みの終了した遺構から、写真・平面図作成などの作業を進めていった。

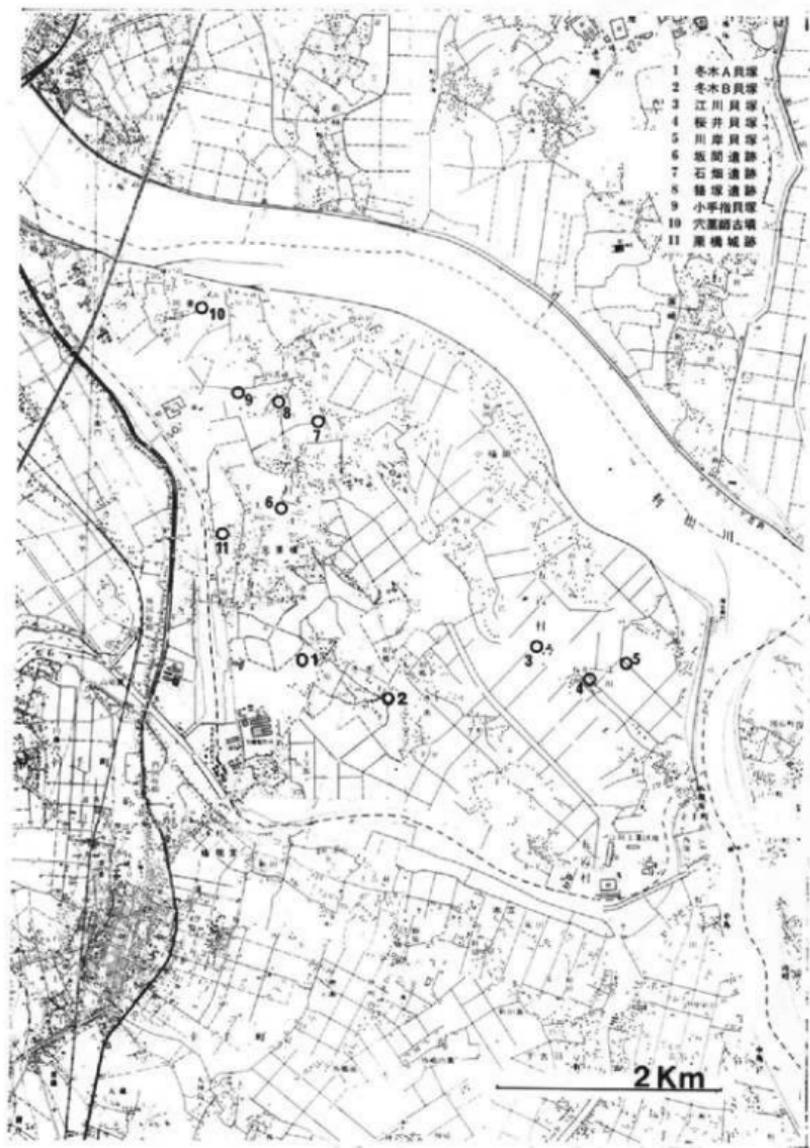
11月 〔A貝塚〕 上旬にC2区、下旬にはC1区も調査が終了し、遺跡北西側のA区・B区の一部を残すのみとなった。B2区・B3区より調査を開始し、これまで通路としていた部分についても調査を進めた。

〔B貝塚〕 各遺構の調査は平面図作成を残してほぼ終了し、12月末を目標に作業を進めた。

12月 〔A貝塚〕 18体の人骨処理も上旬には終了し、遺構の掘り込みも中旬にはほぼ終了したため、18日にはB貝塚とともに航空写真を撮影した。河遺跡とも写真と平面図を残すのみとな

り、事務所内の整理も開始し、27日をもって全ての現地における調査活動を終了した。

昭和55年1月18日 五葎村協和会館において、大澤村長はじめ村関係者・日本住宅公団等多数の出席者を得て、発掘調査報告会を行なった。



第1図 五殿村遺跡位置図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

猿高郡五箇村は関東平野のほぼ中央にあり、茨城県の南西端に位置する。北から北東にかけて利根川を隔てて古河市・総和町・境町に接し、東は江戸川を隔てて千葉県閑宿町に、南西は権現堂川を隔てて埼玉県幸手町・栗橋町に接する。東西約6km、南北約5km、面積は23.32km²であり、楕円形に近い輪中の様相を呈する。人口は約8,700人を数える。

台地は最高点で標高13~14mを測るが、一般的には12m前後と比較的低く平坦である。低地との比高は1.5~2mを計る。周囲を河川に囲まれているため洪水が多かったが、現在は河川改修・土地改良がなされ、従来畑地として利用されていた台地も陸田化している。

住民は、日常の買物等は埼玉県幸手町や栗橋町へ行くことが多く、生活感覚は茨城県よりも埼玉県に近い。また、都心部まで40数kmで、栗橋町・幸手町へ出れば国鉄・私鉄・四号国道により容易に都心へ達することができる。このことから、近年工場の進出、住宅の建設等が行なわれている。

A貝塚は冬木字貝塚にあり、県道幸手一境線の西側に接し、権現堂川の東側約0.8kmに位置する。B貝塚は、A貝塚の東南東約0.8kmに位置する。両遺跡とも奥東京湾に互した低台地上に立地し、A貝塚は標高約12m・南西側水田との比高1.5~2mを計り、B貝塚は標高約12m・南西水田との比高約1mを計る。ともに平坦な地形である。ただしA貝塚はかつては南側が高く北へ行くにつれて低くなっていたが、10数年前木工所建設の際に削平され、現在の地形になったものである。

第2節 歴史的環境

五箇村に存在する遺跡は地図に示す通りである。

縄文時代の遺跡はほとんどが盗掘状態にある。この中で調査が行なわれたのは、小手指貝塚・冬木A貝塚・冬木B貝塚・江川貝塚（以上、埼玉県立不動岡高校社会クラブ）（注1）・坂間遺跡（立正大学考古学研究会）（注2）・石畑遺跡（石畑遺跡調査会）（注3）であるが、石畑を除けばいずれも遺跡の一部及至確認調査だけがったようである。これらの調査によると、小手指貝塚において縄文中期の土器の出土が見られ、冬木A貝塚が縄文後期初葉・冬木B貝塚が縄文後期中葉~後葉に形成された遺跡とされている。石畑遺跡は昭和51・52年に調査され、住居址2軒・土壘200基弱が検出された。縄文前期から晩期にまたがる集落址であり、ヤマトシジミを主とする地点貝

塚が確認された。耳栓・土俵・土版・土葺等が出土している。なおB貝塚については、本来は今回の調査区域に隣接した内側の雑地が遺跡の中心部であったと思われるが、住宅建設によりその大部分が破壊されており、今回調査した地点と異にしている。

弥生時代の遺跡は、現在までのところ確認されていない。

古墳時代の遺跡には、小手指の伊勢塚古墳(前方後円墳、全長 60 m・後円部径 40 m・高さ 7 m、破壊)・元栗橋の猿塚古墳(前方後円墳、全長 50 m・高さ 6 m、破壊)・川妻の県指定史跡穴藪師古墳(円墳、径 30 m・高さ約 4 m)がある。穴藪師古墳は昭和 44 年に調査が行われた。主体部は羨道・前室・玄室から成り、奥壁には五輪塔に似た板状の石を用いており、胴張りを呈する貴重な横穴式石室である。この古墳は古くから知られ、「利根川図説」(赤松宗良著)に「川妻の鹿里膳院伝説」として紹介されている。昭和 47 年に復元・整備が行われた。

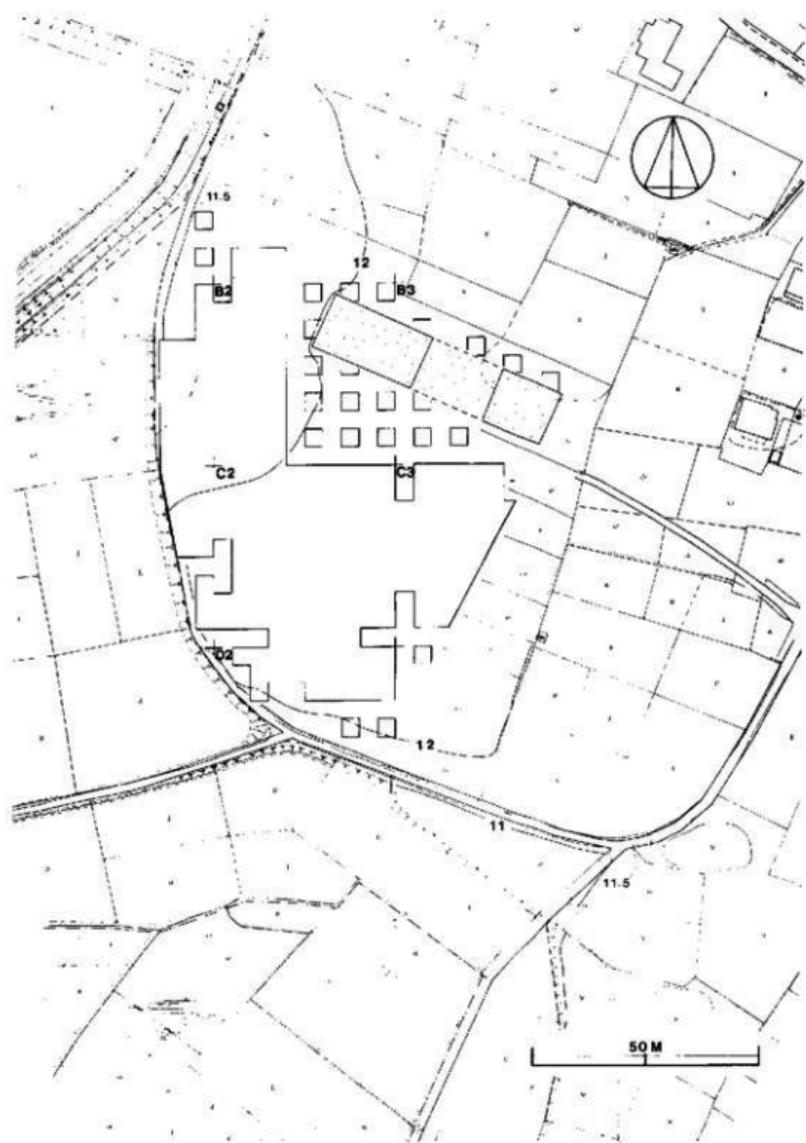
元栗橋には十代の栗橋城跡(城山城跡)がある。これは古河公方足利氏にゆかりのある城跡である。一部宅地となっているが、堀跡の保存状態は良好である。

注 1 金井忠夫 ひびき、5～8 埼玉県立不働岡高校社会クラブ 1963～1966

※ 「五箇村の貝塚」

注 2 立正大学考古学研究会 「坂間遺跡B地点発掘調査報告概要」 1974

注 3 茨城県浦島郡五箇村教育委員会 「石畑遺跡」 1977・3



第2図 冬木A貝塚全体図



第3図 冬木B貝塚全体図

第3章 冬木 A 貝塚

第1節 貝層・人骨・自然遺物

今回の発掘では、二層をI層(表土)・II層(黒色土・黒褐色土)・III層(暗褐色土)・IV層(褐色土、一部地山)とした。貝の混入が見られる場合、それぞれに「K」を付し、これを表わした。「IK層」「IIK層」の如くである。

純貝層は全て表土下にある。混土貝層・混貝土層は純貝層と同一層位を成す場合が多く、一部がIII層に落ち込みを見せていた。しかし、各貝層には明瞭な重層関係は認め難く、土器も層位により決まった形式を出土したわけではない。II・IIK各層の出土遺物は堀之内式に属するものが圧倒的に多く、称名寺式・加賀利B式・安行式に属するものがわずかに混在していた。

1. 貝層

冬木A貝塚における貝層の堆積は、図に示したように6ヶ所が確認された。この中で、a～cの各堆積区はその規模が小さく、高棄された遺構内に投棄された貝殻によって形成されたものと判断される。ここでは、d～fの各堆積区について論述する。

d堆積区(図5)

全面に貝殻が散布するもの一様ではなく、堆積の厚さ・貝殻の密集の度合はさまざまである。また、純貝層の下から住居址等の遺構が検出され、その周辺には混土貝層・混貝土層が見られた。このことは、高棄された遺構等に対する貝殻の投棄の範囲が、堆積の進展に伴って漸次拡大し、ついに連続するに至ったものと推察することができる。

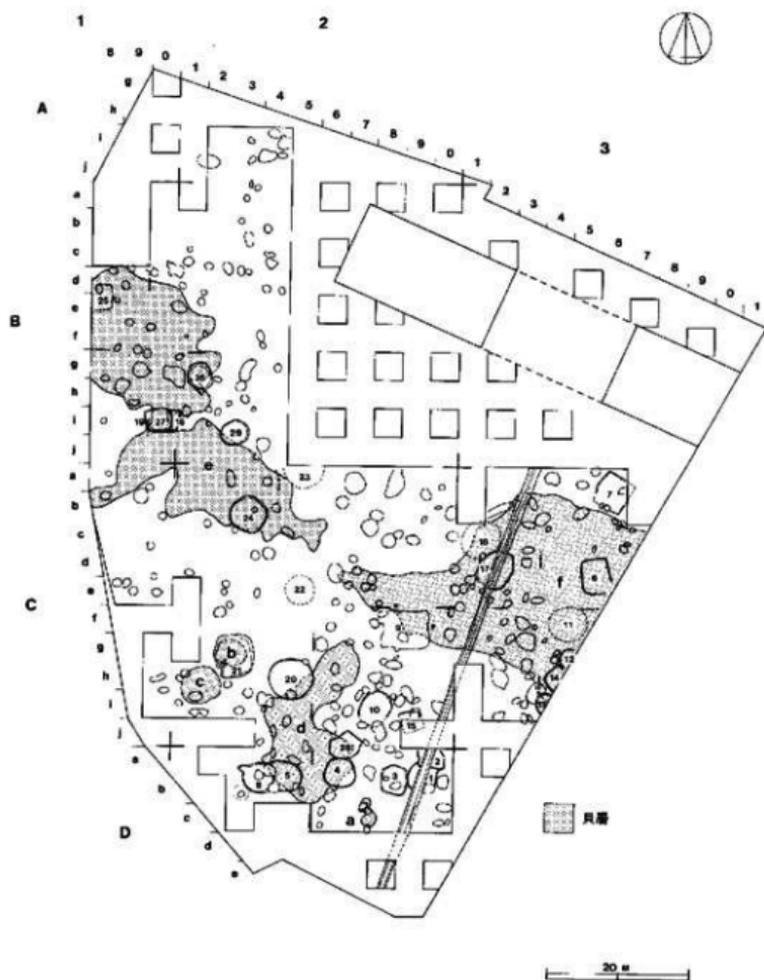
本堆積区の貝層を構成する貝類はシジミが大部分を占め、一部にカワニナを混ざるがほとんど単一種から成ると言える。

断面図のC2i₁・h₁には暗褐色土層中に黒褐色混貝土層の落ち込みが見られ、その上に堆積する黒色混貝土層にはさまれるように貝殻が集中して堆積している部分があることが認められる。この部分が遺構の一部であることは確実であり、調査を進めた結果、第20号住居址が確認された。

本堆積区の貝層下及び周縁部からは、第2号・11号・15号・17号の各人骨が発見された。土器は、堀之内式期のものが大部分を占め、称名寺式期のものが散見される。

e堆積区(図6)

部分的に貝殻が密集する堆積状況が観察された。貝層はd堆積区と同様の過程を辿って形成されたものと思われる。エリアの西端は、土掘りのために崖になっている。この崖面にも貝層の堆



第4図 冬木A貝塚グリッド及び遺構配置図

積が見られた。これは本堆積区の一部であり、更に西へ伸びていたことを示すものである。土地の人達の話によれば、エリア西側の土が削り取られた部分にも貝殻が散布していたということであり、上記の事実はその裏付となる。

純貝層は30～40 cmの厚さに堆積しており、d堆積区よりも広範囲に及ぶ。廃棄された遺構を埋めた後も、継続して貝殻の投棄が行なわれたものと思われる。

本堆積区の貝層を構成する貝類は、d堆積区同様に少量のカワニナを混じり、大部分をシジミが占める。しかし、C1区内にはタニシを多量に含む純貝層が見られた。

断面図のB1c₀には、暗褐色土中に泥貝上層の落ち込みが見られ、その上に堆積している純貝層にも泥貝上層中に落ち込んでいる部分があることが認められる。この部分に遺構があるものと予想されたが、床・柱穴等を確認することはできなかった。B1f₀・g₀にも土塊状の落ち込みが見られ、第159号土塊・第153号土塊が確認された。第153号土塊が暗褐色泥土上貝層を埋り込んでいることは、断面図から判断することができる。さらに、この土塊の覆土に堆積する黒褐色泥土貝層がB1f₀の北端付近まで8 mにわたって堆積しており、暗褐色土・暗褐色泥土貝層を埋り込んだような状態にあることが認められる。この部分でも遺構の存在が考えられたが、確認することができなかった。

本堆積区の貝層中及び土層下からは、第1号・4号・7号等11体の人骨が発見された。土器は、堀之内式期のものが大半を占め、前半と南端付近に加曾利B式期のものが少量認められる。

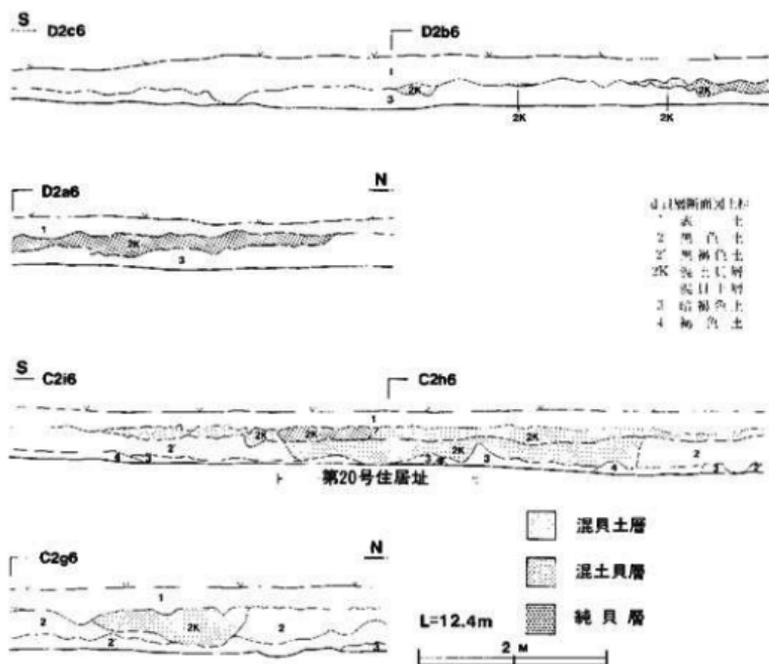
1 堆積区 (図7)

本貝塚中最も大規模なものである。表土にも貝が散布しているのが顕著に認められた。エリア東側の陸田にも貝の散布が認められ、更に東へ伸びていることは実地である。貝層の形成過程は、d・e各貝層と同様であったと思われる。貝殻が密集する様子は、断面図においても顕著に認めることができる。

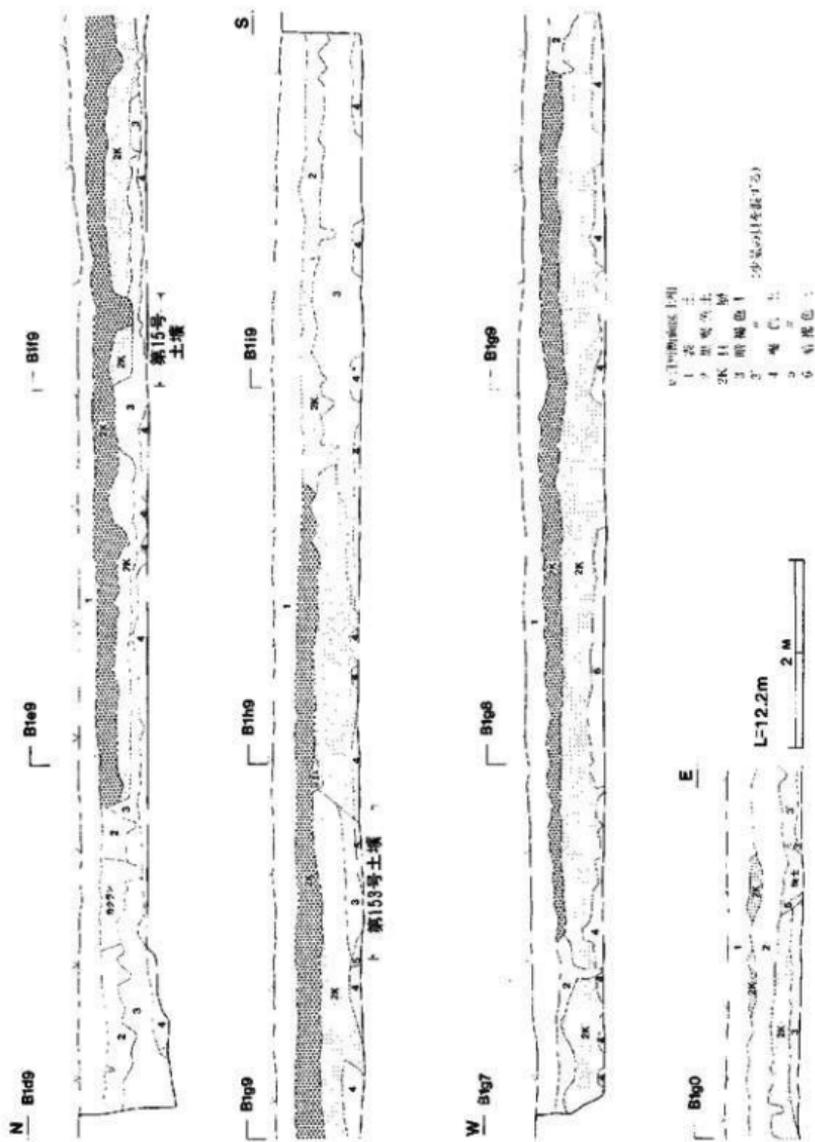
本堆積区の貝層を構成する貝類は、一部にタニシとシジミがほぼ半々に混在する純貝層が認められたものの、全体にシジミの占める割合が非常に高く、e堆積区と同様である。エリア東寄りの部分には、破碎されたシジミの貝殻を含む泥貝土層が認められる。

断面図には、数ヶ所の純貝層が認められる。調査の結果、遺構も確認された。東西の断面図では、C2f₀に認められる純貝層下に第197号土塊があり、C3e₀・e₀の純貝層下には第11号住居址があった。C3e₀の純貝層下では東側純貝層下から第71号土塊、西側純貝層下から第77号土塊をそれぞれ確認している。断面から、第71号土塊が第77号土塊よりも古いと考えられた。出土遺物についても同様のことが可える。しかし、C3e₀の純貝層下には、遺構を確認することはできなかった。

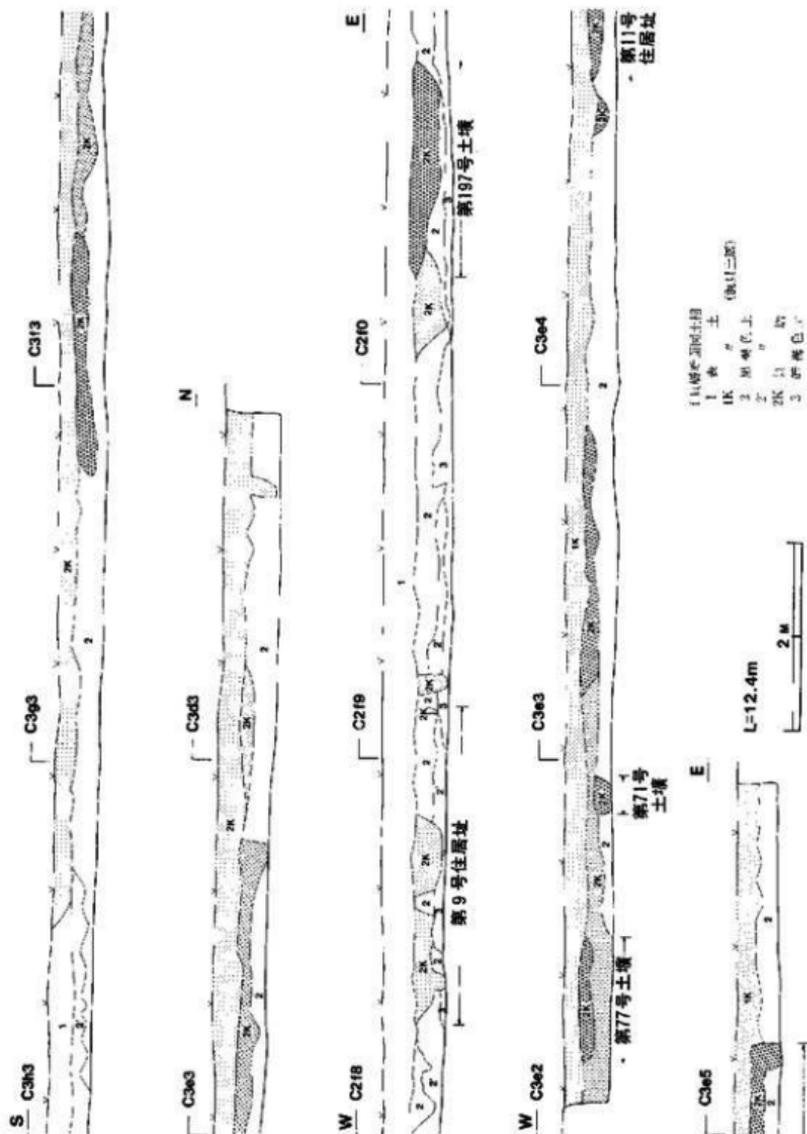
本堆積区西端の貝層下からは、第5号・6号の人骨が発見されている。土器は、堀之内式期の



第 5 图 d 貝層断面图



第6图 土层断面图



第7图 第一層断面图

ものが大部分を占め、一部に加曾利B式期のものが認められた。

以上のように、冬木A貝塚の貝層はその大部分がシジミによって形成されており、ほとんど単一種から成ると言っても過言ではない。C1区・C3区に部分的にタニシを多量に含む貝層が存在する以外は、少量のカワナを認めるにすぎない。

貝層下には遺構を確認する機会が多い。貝層の堆積は、廃棄された住居址等への貝殻の投棄によって進展したと言える。人骨の埋葬場所は、貝層下及びその周縁に集中する。これは骨の保存の可能性と関係があることはもちろんであるが、いずれも堆積区の周縁部に近く、貝層の堆積が比較的薄い部分であることを併せ考えると興味深い。

2. 人骨

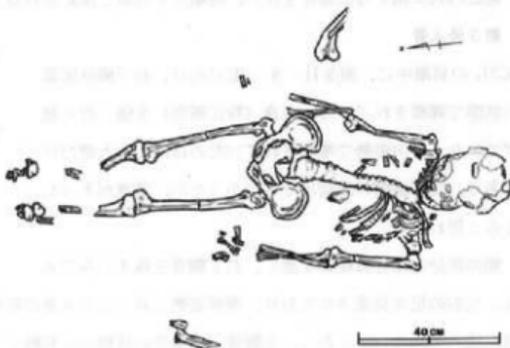
冬木A貝塚において出土した人骨は、以下にその出土状況を詳述する。文中「右膝位」とは、人骨の膝が体の中心線よりも右側に位置する事を意味する。頭位は、骨盤の中央（またはそれに相当する場所）と頭頂部を結び、決定した。

第1号人骨

C2aの貝層中に、頭をS-10°-Eに向けた仰臥伸展葬の状態に埋葬されていた。埋葬遺構は確認できなかった。

脚部はほぼ南北に真直に伸ばしているが、骨盤及び背骨は20°ほど東へ曲がり、首から上が再び南北に真直になる。一見投げ出されたような印象を受ける。顔は西へ傾いている。

本貝塚において出土した人骨



第8図 第1号人骨

の中では、保存状態は良い方であるが、右手骨及び左右の脛骨以下の部分の保存は悪かった。脱落したものと思われる歯が数本、顎骨周辺に見られた。土圧のため骨盤が押し広げられた状態にあり、長骨も折れていた。頭部は右側頭方向からの圧力により、つぶれかかっていた。

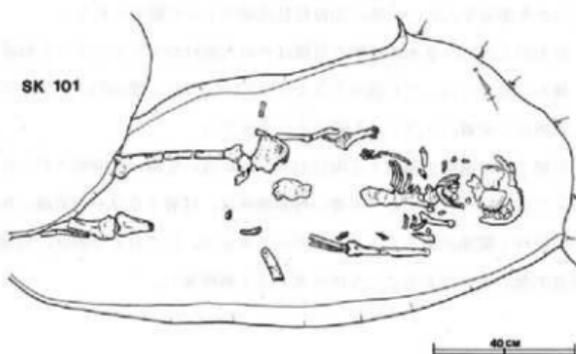
発掘に際し、堀之内式に属する土器片の出土をみたが、人骨の時期を示すものか貝層の堆積時期を示すものか、確証は得られなかった。

第2号人骨

C2gの貝層下に、頭をS-59°-Eに向け、仰臥伸展葬の状態に埋葬されていた。埋葬遺構は、

平面形状が長楕円形を呈する墓塚であるが、長径は不明である。短径は70cmを計る。なお、膝から下の部分は、第101号土壌によって切られている。

下顎骨は歯と共に比較的良く残っていたが、上顎骨にほとんど残っていない。この上顎から脱落



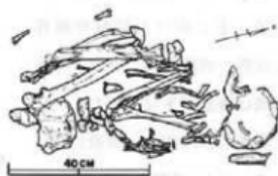
第9図 第2号人骨

したと思われる歯が、頸椎付近において検出された。骨盤から上の部分は保存が悪く、背骨及び左右の手骨はほとんど残っていない。大腿骨及び脛骨の遺存部の保存は良い。しかし右腰部から右大腿部にかけて擾乱を受け、特に右大腿骨はほとんど直立していた。

堀之内式に属する土器片を伴い、時期もその頃と推定される。

第3号人骨

C2f.の貝層中に、頭をH-9°Eに向け、右下横臥屈葬の状態で見られる。全身（特に脚部）を強く折り曲げており、この姿勢で埋葬されていたのは、この人骨だけである。埋葬遺構の確認はできなかったが、墓塚があったものと思われる。



第10図 第3号人骨

顔の部分の保存は極めて悪く、右下顎骨を残すのみである。左右の足を交差させており、埋葬姿勢と共にこの人骨の特色となっている。両足骨・両手骨共に残っていない。しかし、上腕骨・前腕骨の状態から判断して、両手は胸のあたりでそろえていたようである。後頭骨下に鹿の下顎骨があり、副葬品の可能性がある。

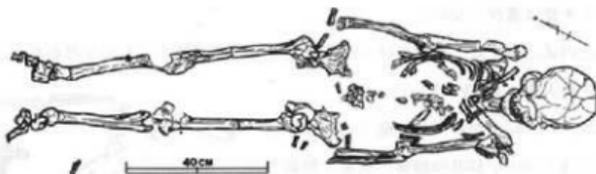
堀之内式に属する土器片と加曾利B式に属する土器片を伴うが、貝層形成と人骨埋葬のいずれの時期を示すものかは不明である。

第4号人骨（写23-1・2）

C2c.の貝層下に、頭をS-25°Eに向け、仰臥伸展葬の状態で見られる。埋葬遺構は、平面形状が長径240cm・短径70cmの長楕円形を呈する墓塚である。

上顎右第2門歯が抜歯を受けているのが、この人骨の特色である。また、左上顎が下顎にくいこみ、上顎左第2門歯及び犬歯が脱落していた。右鎖骨の上において2本の歯が見られ、その形

状から脱落した
歯であると思わ
れる。これは、
左側頭方向から
強い土圧を受け
たためと思われる



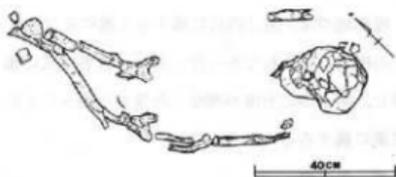
第11図 第4号人骨

る。この他にも、左右大腿骨・右前腕骨・左上腕骨がほぼ中央で折れており、やはり土圧の影響によるものと推測される。なお、左右の手骨は遺存していない。

本貝塚で出土した人骨の中では、最も保存状態が良好であったにもかかわらず、伴出遺物に乏しく、時期は不明である。

第5号人骨

C2d₁の貝層下に、頭をS-48°-Eに向け、右膝位仰臥屈葬の状態 で埋葬されていた。埋葬遺構は、長径 100 cm・短径 50 cm の楕円形を呈する墓墳である。



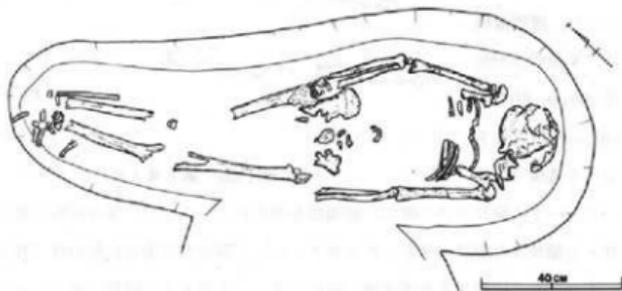
第12図 第5号人骨

保存状態が悪く、遺存する骨もわずかであり、非常に脆かった。

墓墳内に堀之内式に属する土器片が見られたが、人骨の時期を確定するには至らなかった。

第6号人骨

C2d₁の貝層下に、頭をS-45°-Eに向け、伏臥伸展葬の状態 で埋葬されていた。伏臥の状態にあったのは、この人骨のみである。埋葬遺構は、平面形状



第13図 第6号人骨

が長径 170 cm・短径 70 cm の楕円形を呈する墓墳である。

墳底はゆるいスリパチ状を呈し、人骨もわずかに弓なりに反っていた。足は墓墳端にかかり、顔は左側頭を下にし、右側頭部を上にしていた。胸部・背骨の保存は悪い。右手骨は右腰部の下に入り込み、右膝を少し折り曲げるなど、埋葬の際に墓墳に投げ込まれたかのような印象を受け

る。左手骨は遺存しない。

堀之内式に属する土器片を伴い、人骨もその時期に属するものと思われる。

第7号人骨(写23-3)

C2a₃ から a₁ にかけての貝層下に、頭を S—25°—E に向け、仰臥伸展葬の状態で見つめられていた。埋葬遺構は確認できなかった。



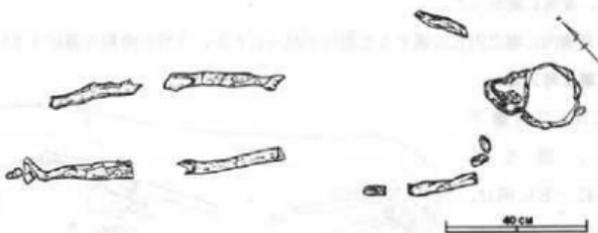
第14図 第7号人骨

この人骨は、頭部が目と耳を結ぶ線で上下に分かれ、上部が後方及び右方へそれぞれ4分の1回転した状態にあり、さらに左手骨が大きく腰部の下へもぐり込み、右寛骨の下で右手骨と重ねられた状態にあるという特異な埋葬形態を呈していた。

埋葬地点は、堀之内式に属する土器片を包含する貝層の約30 cmであり、しかも貝層には攪乱の様子は見られなかった。また、称名寺式に属する土器片を出土した第149号土塙が東側に隣接し、明らかに土塙が埋没した後から葬ったものと判断された。このことから、本人骨は堀之内式期に属するものと思われる。

第8号人骨

C2b₁ から b₂ にかけての貝層下に、頭を S—54°—E に向けて埋葬されていた。埋葬遺構は、平面形状が長径200 cm、短径90 cmの長楕円形を呈する墓壇である。



第15図 第8号人骨

グリッドの掘り下げの際に、前頭部を削られてしまった。保存状態が悪く、頭部・左右の上腕骨・大腿骨及び脛骨が遺存したにすぎない。下顎骨及び歯は比較的良く残った。

加曾利B式に属する大型深鉢の破片を伴い、人骨もその時期に属するものと思われる。

第9号人骨

C2a₁ の貝層下に埋葬されていた。保存状態は劣悪であり、しかも下半身部に攪乱を受けているため、頭位・葬法ともに不明である。埋葬遺構の存在は確認された。平面形状が円形を呈する墓壇と思われる。しかし、北半に攪乱があり、長径方向が南東を示すと思われること以外には、判然としない。

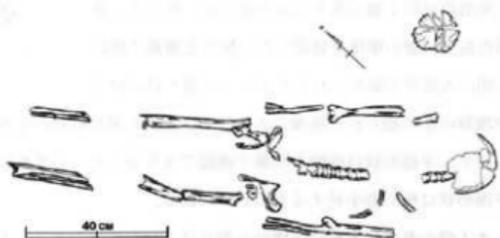


第16図 第9号人骨

第10号人骨 (写23-3)

C2a₄の貝層下に、第7号人骨と並ぶように頭をS-38-Eに向け、仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は確認できなかった。

右側頭部から右肩部にかけて攪乱を受け、頭蓋骨の破片が右上腕骨の東側 20 cm の所に

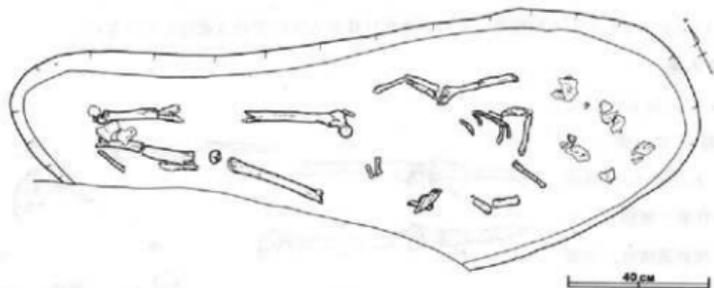


第17図 第10号人骨

あった。保存はあまり良い方ではなく、左右の手骨・膝関節部・足骨は遺存しない。

上部を覆う貝層は堀之内式に属する土器片を包含し、しかも本人骨の下には称名寺式期に属する第149号土壌があり、人骨は堀之内式期に属するものと思われる。

第11号人骨



第18図 第11号人骨

第2号人骨の南側に隣接し、頭をS-62-Eに向け、仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。2体の人骨が意図的に並べられて埋葬されたものとは思えない。埋葬遺構は確認できなかった。

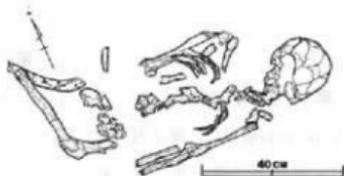
頭蓋骨は原形をとどめなほほどバラバラになっていた。又、9月末の台風の際に厚板がぶつか

り、かなりの骨が壊れた。この時、右側頭部に相当する位置が崩れ、石剣が発見された。しかし、人骨に伴う（または射込まれた）ものと判断することはできなかった。

時期は不明である。

第12号人骨

C2b₁ から c₂ にかけての貝層下に、頭を S-79-E に向け、右膝仰臥屈葬の状態で埋葬されていた。両グリッド間のベルトの断面に、暗褐色土中に黒褐色混貝土層の落ち込みが見られ、その上に黒褐色混土貝層の堆積を確認した。混貝土層最下部に人間の大腿骨が認められたため、この落ち込みが人



第19図 第12号人骨

骨埋葬の際に掘られた墓墳であることは確実と思われた。しかし、慎重に調査を進めたにもかかわらず、平面形状は明瞭な状態で確認できなかった。いずれにせよ、墓墳の存在は確実であり、平面形状は楕円形を呈するものと思われる。

本人骨の墓墳は黒褐色土層から掘り込まれたものである。上に堆積する混土貝層は、さらに西へ伸びるが、墓墳から西へ 1m 程の所で切れる。墓墳覆土中に貝の混入が見られ、埋葬地点すでに貝が投棄されていたことをうかがわせる。混土貝層は、埋葬後に投棄された貝が堆積したものであろう。この貝層には加曾利 B 式期の土器が見られ、人骨もその時期に属するものと思われる。

額から顔に相当する部分にかけて陥没しており、頭頂部がひさし状を呈していた。顔は左側を向いていたようである。右前腕骨・左右手骨及び膝から下の部分は遺存していない。

第13号人骨

C2b₁ から c₂ にかけての貝層下に、頭を S-27-E に向け、仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は、平面形状が長径 230cm・短径



80cm の長楕円形を呈する墓墳である。

第20図 第13号人骨

墓墳の下から、第24号住居址のビット列の一部が検出された。この住居址の時期は加曾利 B 式期と思われることから、人骨の所属する時期はそれ以降と判断される。しかし、明確な時期を決定することはできなかった。

頭部左半分と左肩に攪乱を受けている。保存状態は劣悪で、長骨が遺存しているのみである。

第14・16号人骨

いずれも第4号人骨の周辺で発見された頭蓋骨の破片で、発見順に番号を付したものである。

第4号人骨が埋葬された際に攪乱を受けた人骨と思われる。

時期は不明である。

第15号人骨(写23-4)

C2g₁からh₇にかけての貝層下に、

頭をS-80°-Eに向け、右膝位仰臥屈葬の状態に埋葬されていた。埋葬遺構は確認できなかった。

骨は全体に小さくて薄く、脆かった。下顎骨を発掘する際に歯冠が抜け落ち、歯槽内に萌出しようとしている歯があることが認められた。これは、この人

骨が永久歯の萌出前(または萌出期中)に葬られたものであることを示しているものと思われる。

時期は不明である。

第17号人骨(写23-5)

C2j₁の貝層下に、頭をN-16°-Eに向け、右膝位仰臥屈葬の状態に埋葬されていた。埋葬遺構は、平面形状が長径150cm・短径60cmの楕円形を呈する墓墳である。

左足は強く折り曲げられ、右足の上に重ねられている。左腕はひじで曲げられ、手は顔

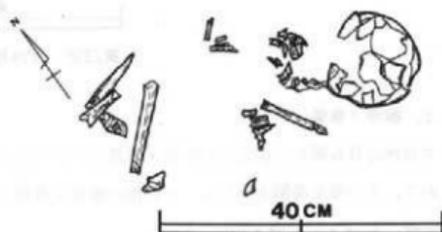
の付近にあったものと思われる。頭蓋骨全体が左に傾いており、左手を左頬に添えて首をかしげたような状態である。上顎骨はほとんど遺存せず、歯だけが並んでいた。下顎骨は歯とともに比較的良好的な保存状態であった。

時期は不明である。

第18号人骨(写23-6)

B2j₁の貝層下に埋葬されていた。埋葬遺構は小規模な墓墳である。平面形状は判然としない。死後バラバラされた骨を、小さな墓墳内に乱雑に積み重ね、最後に頭骨を乗せたような状態にあり、再葬が行なわれたものと思われる。保存状態は劣悪であり、遺存した部分も少なかった。

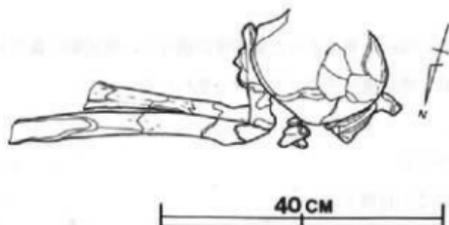
時期は不明である。



第21図 第15号人骨



第22図 第17号人骨



第23図 第18号人骨

3. 獣骨・魚骨

本貝塚のII K層から出土した獣骨・魚骨については、東京大学助教授赤澤威氏に分析を依頼したので、その項を参照されたい。その他の獣骨・魚骨については、以下に簡単に記す。

獣骨 (写 56・57・58・59)

シカ・イノシシ・イヌ・タヌキ・テン

シカ・イノシシが大部分を占める。両者を比較すると、シカの方が多い。テンは下顎骨1点を確認したのみである。

魚骨 (写 60・61・62)

ボラ・スズキ・フグ・タイその他

ボラが多く、スズキ・フグがそれに次ぐ。その他は数点を確認したのみである。

第2節 遺構と遺物

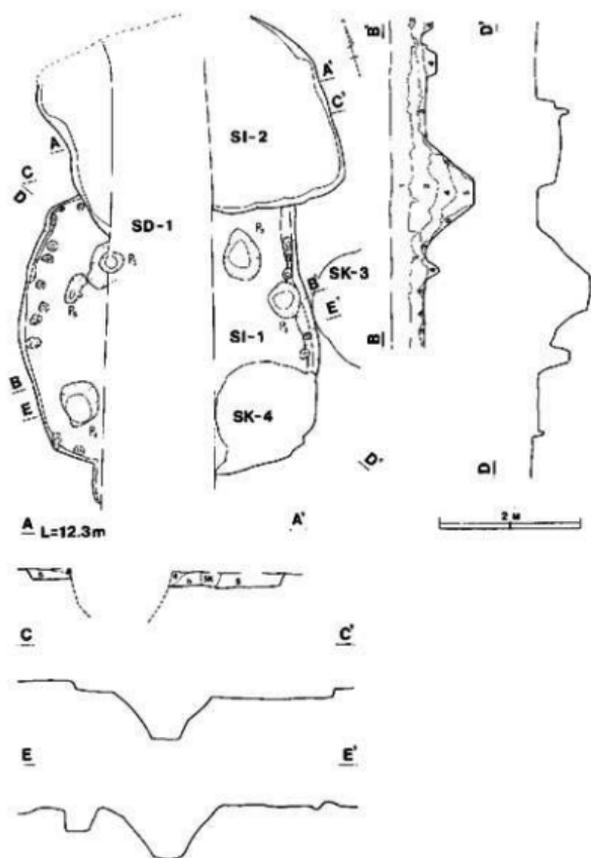
1. 住居址

第1号住居址 (実測図 図24, 遺物 図29, 写5-1)

本住居址は調査区南側D2区に位置し、第2号・第4号住居址と重複関係にある。第2号住居址との新旧をみると、当住居址の方が古いとみられる。なお南から北にかけて第1号溝が縦断している。

主軸方向はN-23°-Eで、長軸約4.15m、短軸約3.7mの隅丸方形を呈している。床面までの深さは5cm内外と非常に浅い。このため壁の立ち上がりは確実ではないが、ゆるやかに立ち上がるものとみられる。壁溝は東側及び西側に部分的に検出できた。壁溝内及び壁直下に径15cm、深さ15cm内外の壁柱穴があり、ほぼ25cmの等間隔で並んでいる。

床面はほぼ平坦であるが、締まりはない。炉址は検出できなかったが、恐らく第1号溝によって失われたものと考えられる。ピットは5ヶ所検出されP₁~P₅が主柱穴とみられるが、第4号



第24図 第1・2号住居址

第1号・第2号住居址土層解説

- 1 表 土
- 2 黒 褐色 土 (YP・ツフトロームブロック・粘土ブロックを含む)
- 3 黄 色 土 (細砂を少量含む)
- 4 黒 褐色 土 (YP・小石を含む)
- 5 " (層よりなくYP・ハードロームブロックを含む)
- 5 K 黒 褐色 土 (灰汁土)
- 6 暗 褐色 土 (ソフトロームブロックを多量に含む)

二塚・第1号溝内にも存在したと思われる。深さは30cm～50cmであるが、P₁は88cmと例外的に深い。覆土は表上下第3層が浅く不規則に堆積し、柱穴などの落ち込みには小礫を含む黒褐色土が堆積している。

出土遺物は少く、深鉢形土器片、磨石片などである。

第2号住居址（実測図 図24、遺物 図29）

本住居址は調査区南側D2区に位置し、第1号住居址・第1号溝と重複している。第1号住居址との新旧関係を見ると本住居址のほうが新しいと考えられる。

主軸方向はN-87°-Wで、長軸3.75m、短軸約2.9mの不整形を呈している。床面までの深さは15～20cm程で、壁はいずれも外傾して立ち上がる。柱穴をはじめ取溝や壁柱穴は全く検出されなかった。

床面は粘まりがなく、炉址は確認できなかった。遺構内覆土は1層のみで、部分的に混貝土層の混入がみられる。いずれにしても本住居址は第1号溝の掘り込みによる擾乱の影響が大きかったものと思われる。

遺物は少量で、称名寺式とみられる土器片が出土している。

第3号住居址（実測図 図25、遺物 図28・29・30、写5-2）

本住居址は調査区南側D2区に位置し、第1号住居址の西側に接している。なお床面上に第8号・9号土塚が存在しており、第9号土塚は明らかに本住居址を切って掘り込まれていることがわかるが、第8号土塚は竈突ではない。

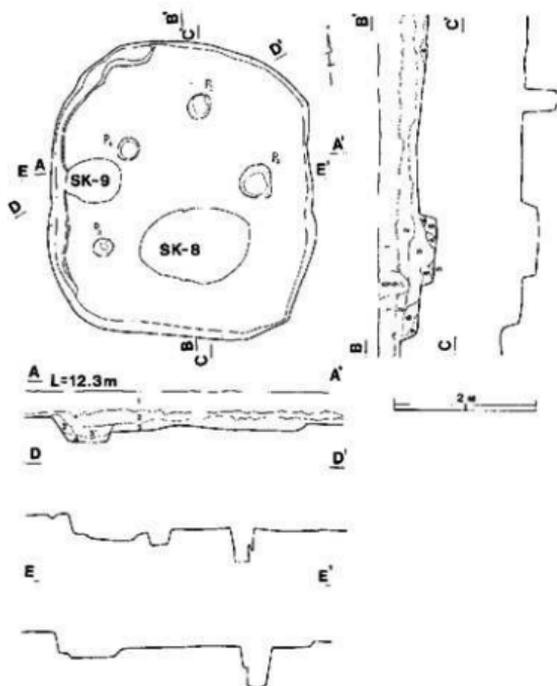
主軸方向はN-8°-Eで、長軸4.13m、短軸3.76mの隅丸方形を呈している。床面までの深さは、5～30cmで、南及び西に向かって傾斜しているが、凹凸はほとんどなく平坦である。したがって壁も南及び西側では明確に立ち上がりが認められるが、東及び北側ではほとんど認められない。

床面はロームで、中央部はやや粘まっているが、周辺部は軟らかであり、炉址はない。ただ覆土中に焼土粒子を多量に含んだ土層の堆積がみられた。ピットは4本検出され、P₁・P₂は50～60cmと深いが、P₃・P₄は12～20cmと浅くなってしまふ。

覆土は1層のみで、黄色バミス・焼土粒子を含む褐色土層である。南東部コーナ付近には少量の貝の堆積がみられた。床面からは20～30cmぐらい上面に当たる混貝土層である。

出土遺物は縄文土器片多数と、磨石1点、石棒片1点などである。

第4号住居址（実測図 図26、遺物 図30、写6-1）

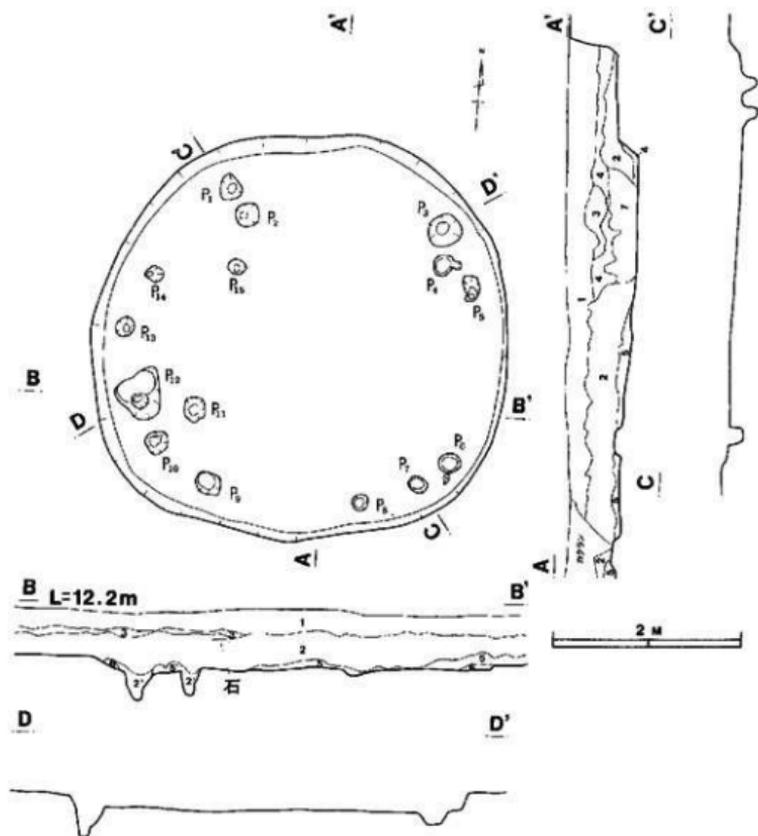


第25図 第3号住居址

第3号住居址上層解説

A-A', B-B'

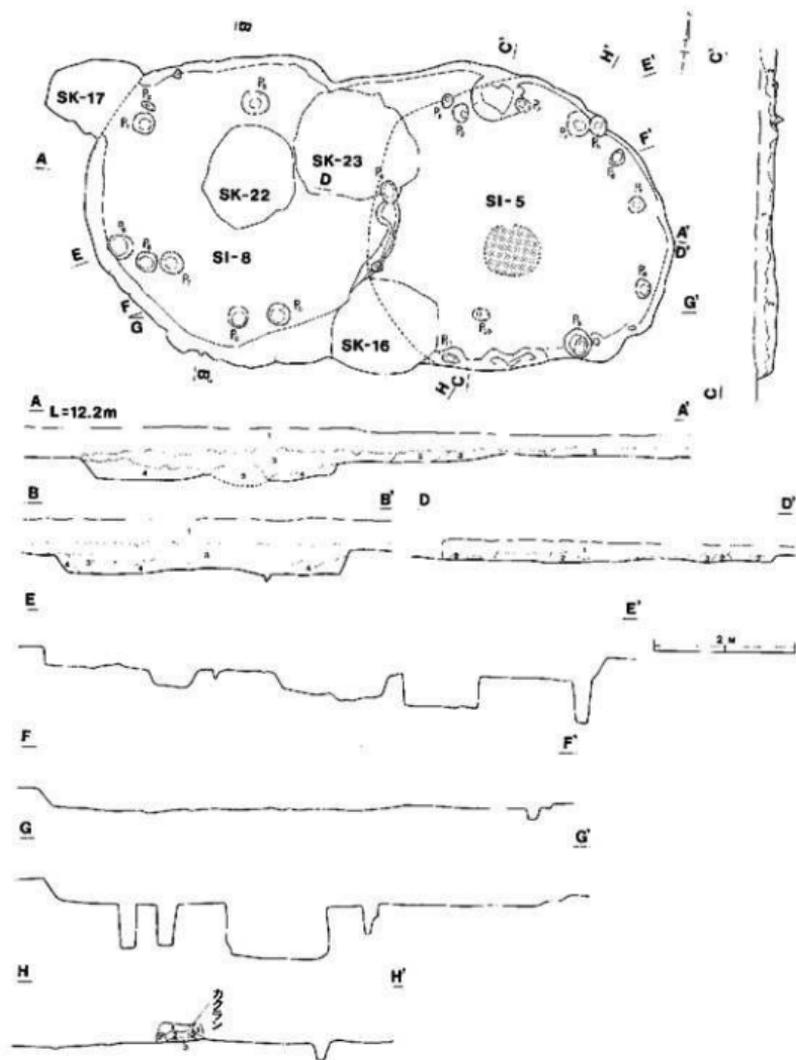
- | | | | |
|----|------|---|---------------------------------|
| 1 | 表 | + | |
| 2 | 赤褐色土 | + | (YP・粘土粒子を含む) |
| 3 | 褐色土 | + | (極めて固くYP・粘土粒子を含む) |
| 3' | 〃 | + | (3に同じ、ハードロームブロックを含む) |
| 4 | 〃 | + | (広く種よりハードロームブロックを多量に含む) |
| 5 | 〃 | + | (極めて固く粘性あり、ハードローム中にソフトロームが混入する) |
| 6 | 暗褐色土 | + | (YP・ハードロームブロックを含む) |
| 7 | 褐色土 | + | (よく種よりローム質) |



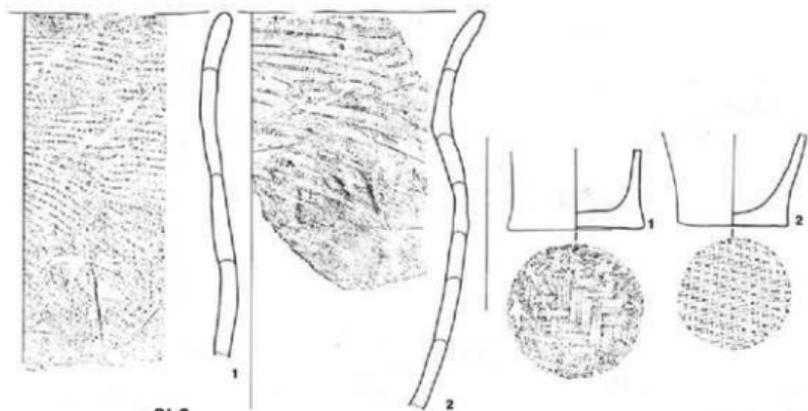
第26図 第4号住居址

第4号住居址土層解説

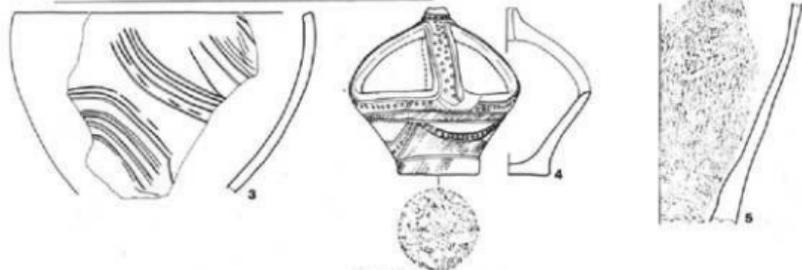
- | | | | |
|----|---|----|-----------------------|
| 1 | 表 | 土 | |
| 2 | 黒 | 褐色 | 土 (YPを含む) |
| 2' | " | " | (あまりなくソフハシムブロックを多く含む) |
| 3 | 黒 | 色 | 土 (混土層) |
| 4 | 灰 | 褐色 | 土 (あまりなくYP含む) |
| 5 | 暗 | 褐色 | 土 (よく締りクリーム質) |
| 6 | " | " | (ハードにムブコックを含む) |
| 7 | " | " | (よく締まりハミスを多く含む) |



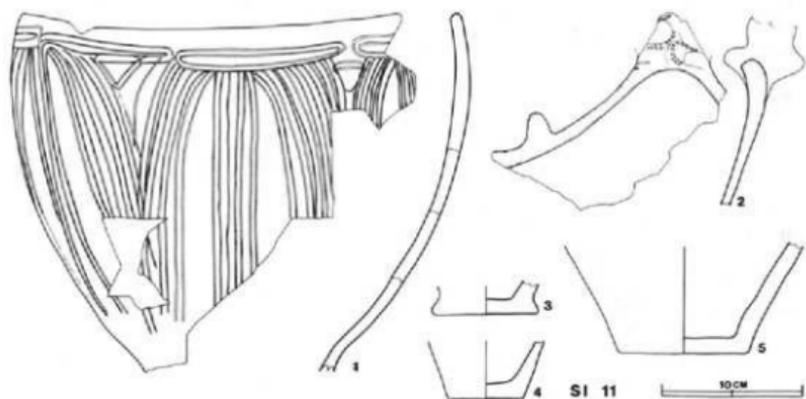
第27图 第5·8号住居址



SI 9

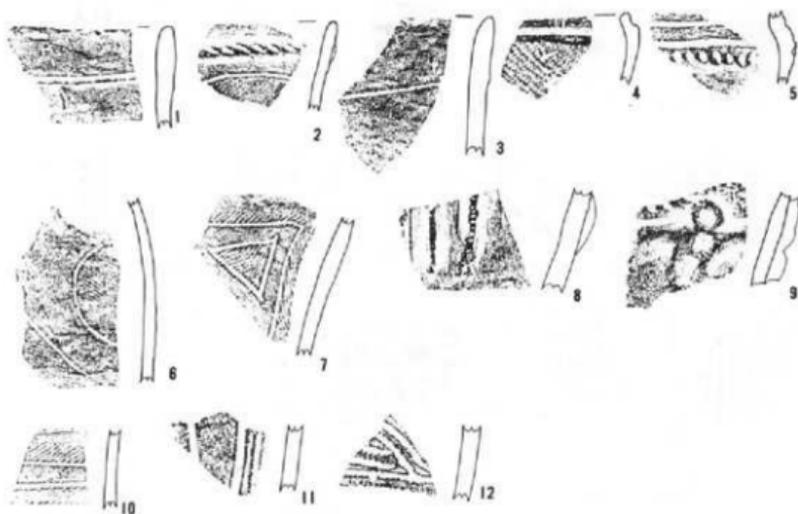


SI 10

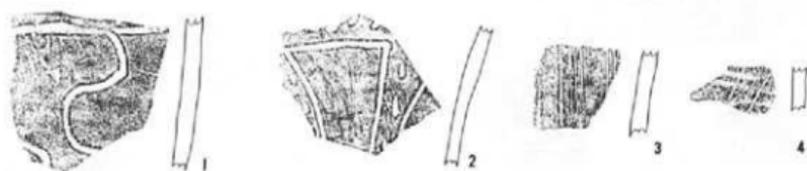


SI 11

第26図 住居址出土遺物



SI 01



SI 02



SI 03

10 CM

第29図 住居址出土遺物

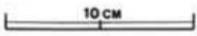


SI 03



SI 04

SI 05



第30图 住居址出土遺物

表1 第28図 住居址出土遺物

出土遺物・×	器物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-09	1	深鉢形	口径 29.2	縄文(RL)のみ施文 内面はヘラ彫形	胎土にスコリア微粒を含む赤褐色を呈する
			現存高 25.7		
胴径最大径 29.8					
	2	深鉢形	口径 (32.8)	大型の粗製土器で、斜方向のヘラ削り彫形がみられる	胎土に砂粒、スコリアを含む、にぶい褐色を呈する
			現存高 26.1		
SI-10	1	深鉢底部	口径 9.1	外面 ヘラナデ 内面 ヘラ削り	胎土にスコリア砂粒を含む、にぶい赤褐色を呈する
			現存高 5.7		
			口径 9.6		
	2	深鉢底部	現存高 6.6	内外面ともヘラ削り整形、底部に網代に文を有する	胎土に砂粒を含む。外面は、にぶい褐色を呈し、内面は、黒色を呈する
			口径 7.8		
3	鉢形	口径 21.9	内面は、ヘラ削り、外面はヘラ削り整形、底部に半截竹管で凹状沈線を描する	胎土にスコリア微粒を含む。赤褐色を呈する	
		現存高 12.7			
4	釣子形一器	高さ 11.8	平行沈線、凹状沈線による区期内に縄文・列点文を配する。釣子集合形は縁上がり貫通孔を有する。底部網代文	胎土に砂粒・スコリアを含む。にぶい褐色を呈する(写39-7)	
		口径 5.8			
5	深鉢形	現存高 15.5	胴部に粗い縄文(LR)を施す。内面は、ヘラナデ	胎土にスコリア砂粒を含む。灰褐色を呈する	
SI-11	1	鉢形	口径 26.7	半截竹管による長円形形のモチーフを描し、下部に懸垂文、弧線文を配しコート状空間に、三角形を部案化した配する	胎土に砂粒を含む。にぶい褐色を呈する
			現存高 25.3		
	2	波状口縁	現存高 13.4	口縁に粘土を盛り上げ、内側ささる波頂部は隆起させ刻みを配する	胎土に細砂粒を含む。黒褐色を呈する
	3	深鉢底部	口径 7.5	全面ヘラナデ整形	胎土に砂粒、スコリアを含む、外面は、明褐色、内面は黒色を呈する
	4	深鉢底部	現存高 4.1	全面ヘラナデ整形	胎土に砂粒・スコリアを含む、黒褐色を呈す
口径 5.3					
5	深鉢底部	現存高 7.6	全面ヘラナデ整形	胎土にスコリア、砂粒を含む。にぶい褐色を呈する	
		口径 9.3			

表2 第29回 住居址出土遺物

出土調査・区	遺物	器形・部位	法寸 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-01	1	口縁部		口縁部に横1本の沈線が走り部分的に浅い刺突文が残る	
	2	#		口縁部を貼付け、これにななめ方向の刺突を加える。沈線区画内に刺突	
	3	#		無文帯の中に横方向の沈線	
	4	#		口縁部内側・口縁下部に凹みをもち割柄にかけての地文はR L	
	5	頸部		紐縁で区切られ、上部は刺突を地文とし太目の沈線が横方向に2本	
	6	胴部		沈線で区画された中にまぼろし刺突が散在される	称平寺式
	7	#		刺突を地文とし沈線で区画され、区画外は磨消し	彫之内式
	8	#		地文なし縦方向の隆帯に細かな刺突がある	#
	9	#		8の字法の筋十組張り付け	#
	10	#		沈線で直線的に区画し、内部はL Rの刺突、区画外は磨消し	#
	11	#		太い沈線が縦方向に走る。ヘラ整形	
	12	#		沈線が上で若干の刺突がみられる	
SI-02	1	胴部		曲線状の沈線。ヘラ整形	
	2	#		直線及び曲線の沈線で区画し内部に米粒状の刺突がある	称平寺式
	3	#		縦製。縦方向の刺突	
	4	#		縦製。ななめ方向の刺突	
SI-03	1	口縁部		地文はL Rの刺突で沈線。口縁部は平帯で刺突が散在される	
	2	#		口縁部に2~3本の沈線が横方向に走る。胴部にかけて刺突	彫之内式
	3	#		直線的な沈線で区画され、刺突が散在される	
	4	#		L 唇部下に1本の沈線	
	5	#		口縁部上縁は無文。胴部の刺突とは沈線で区画される	

表3 第30図 住居址出土遺物

出土場所・区	遺物	形状・部位	法長 (cm)	表裏・裏背の特徴	備考	
SI-03	6	鉢形口縁部		口縁部はゆるく内彎する。頸部はくびれ1帯の沈線が施される	甗之内式	
	7	口縁部		口縁部はくびの平状に内彎する。粗頸部の円形刺突が施される	#	
	8	#		口唇部に1本の沈線。縦方向の径行沈線が施文される	#	
	9	#		口縁部はゆるく外反し、口唇部に平行沈線が走り内部には連続刺突文が施される	#	
	10	#		紀線を貼り付ける。縦方向の沈線間に右下がりの沈線が施される		
	11	胴部		連続刺突文で文様帯が又両され上部は平行沈線文が施される		
	12	胴部		落帯が縦及び横方向に走り、上に刺突が施される		
	13	#		曲線状の平行沈線が施され、内部に連続爪形文が施される		
	14	#		No.13と同様に平行沈線一連爪形文		
	15	#		太い沈線が縦方向に施され、間に曲線文が施される		
	16	#		波状沈線が横走る。地文は縄文		
	17	#		落帯が梅円形に貼り付けられ、半截竹管文がみられる		
	SI-04	1	口縁部		口縁部は外反して立ち上がる。平行沈線間に半截竹管により刺突で短める	前期
		2	#		口縁部は直立し、散本の沈線が横走る	
3		#		口縁部はゆるく外反し、平行沈線間に山形の平行沈線が施される	前期	
4		胴部		直線・曲線からなる沈線文。地文はさげらな縄文	#	
5		#		スリットの入る落帯で又両され、下部は縦方向の細密線		
SI-05	1	胴部		平行沈線間に刺突を施す		
	2	口縁部		口縁部はゆるく内彎し兼文である。口唇部に円形刺突が並ぶ	甗之内式	
	3	胴部		2本の沈線が横走り、直下に三角形の刺突文が施される		
	4	#		沈線文		
	5	#		口縁部に近い割部で2本の沈線が横走る。地文は縄文		
	6	#		縦及び斜位の平行沈線文。地文は瓦い縄文		
	7	#		縄文のみ		
	8	#		沈線による曲線文	甗之内式	
	9	口縁部		極めて短い縄文のみ		

本住居址は調査区南側D2区に位置し、第3号・第5号住居址にはさまれており、本住居址に接する形で第28号住居址が北側に存在する。なお第28号住居址とは重複しており、新旧関係をみると本住居址の方が新しいものと思われる。

平面形は長径 4.63m、短径 4.5m の円形を呈し、床面までの深さは、北側で約 20cm、南及び西側は浅くなり 5~10cm 程である。よって壁も北側では外傾して立ち上がるが、南西部では明確な壁はみられない。壁溝及び壁柱穴は検出されていない。

床面はほとんど平坦であるが、わずかに北東部に向けて傾斜している。床全面がロームであり中央部を除き締まりがない。炉址は元来なかったものと思われる。ピットは 15ヶ所検出された。いずれも壁内側、円周上に並ぶように確認されたものが多い。直径 15~30cm、深さ 10~20cm のものが主であるが、P₁ だけは内部に段がつき、深さ 34cm を測ることができる。覆土は暗褐色土層のみであったが、自然堆積の炭相をみせている。表土直下には部分的に泥目土層の堆積がみられる。

出土遺物は深鉢形胴部片などの縄文土器片の他、磨石片が 1 点出土している。

第5号住居址 (大割岡 図 27, 遺物 図 30, 写 6-2)

本住居址は調査区南側D2区に位置し、第8号住居址、第14号・15号・16号・18号・23号土塙の各遺構と重複している。なお本住居址は第8号住居址に切られており、より古いことがわかる。第16号・23号土塙は本住居址の床面を切っており、第14号・18号土塙は床面上に検出された。

主軸方向はN-85°-Wで、長径 3.9m、短径 4.24m の楕円形を呈している。長径が短径より短いのは、西側 4 分の 1 程を第8号住居址に切られているためであり、本来は 5.5~6m 程になるであろう。床面までの深さは 20~30cm であるが、南側では壁は確認できず浅い壁溝だけの検出にとどまる。この壁溝も東及び北側では検出できなかった。

床面は平坦で締まりがあり、南側にゆるく傾斜を有する。中央やや南東寄りに炉址とみられる焼土の層が検出された。しかし床面の掘り込みもなく灰土層も極めて薄いものであることから長期間の使用を考えるのは無理であり、炉址かどうかの断定は避けたい。ピットは 11ヶ所確認され、壁及び壁溝に沿ってアトランダムに並んでいる。直径 15~40cm、深さ 10~50cm を測るものが大部分である。

覆土は 2 層に分かれ、上層は粘土貝層であり、遺構内全面に堆積していた。住居廃棄後の凹みに貝が捨てられたものであろう。貝はその大部分がシジミ類であった。

出土遺物の大半は粘土貝層中からで、深鉢形土器の破片とみられるものが多数認められた。他に黒曜石の割片が数点出土した。

A A・B B'		3 暗赤褐色土 (ローム層)
1 表 土		D-D'
2 黒褐色土 (粘土質)		1 黒褐色土 (粘土ブロック・ローム粒子を含む)
3 "	(よく締まりY Pを含む)	2 暗褐色土 (粘土が多い)
3' 暗褐色土 (3と同じ)		3 "
4 "	(強く締まりY Pを含む)	
5 黄赤褐色土 (粘土質)		H-H'
C C'		1 暗褐色土 (粘土粒子を含む)
1 黒褐色土 (粘土質)		2 黒褐色土 (よく締まりY P・焼土粒子を含む)
2 "	(粘土ブロック・ローム粒子を含む)	2' 暗褐色土 (2層と同じ)
		3 暗褐色土 (ローム粒子・貝片を含む)

第6号住居址 (実測図 図31, 遺物 図35, 写7-1)

本住居址は調査区東側C3区に位置し、北側に第7号住居址、南西側に第11号住居址が検出されている。

主軸方向はN 7°-Wで、長軸5.05 m、短軸4.0 mの隅丸方形を呈している。南東コーナー部はエリア外のため確認できなかった。床面までの深さは南側で15 cm、東側で12 cmであるが、北及び北西部ではわずかに数 cmの立ち上がりが見られるに過ぎない。壁溝及び礎柱穴は検出されなかった。床面はロームで、それほど締まりはなく半乾であるが、南から北に向けてゆるい傾斜を有している。が址は確認されなかった。

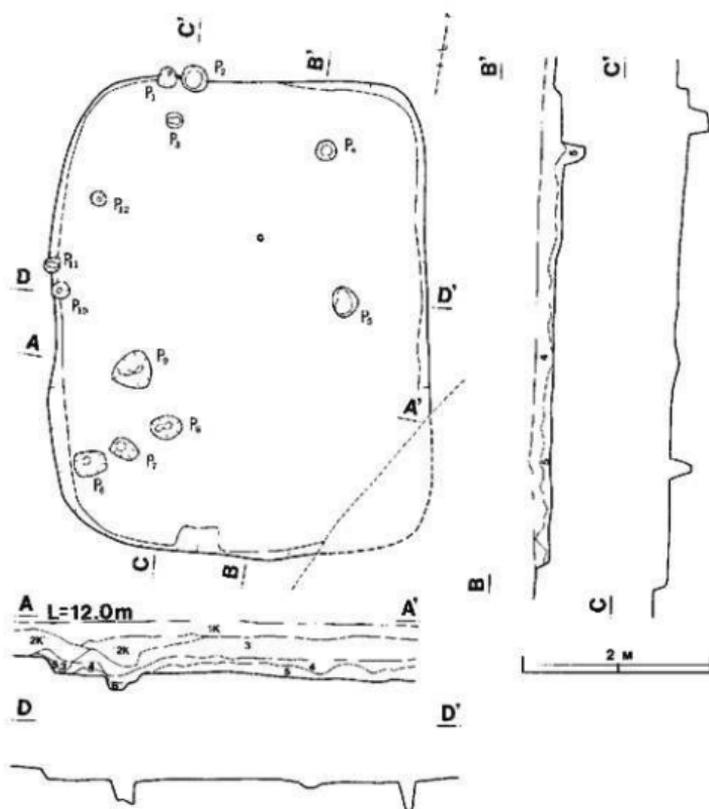
ピットは壁及び床面より12ヶ所検出されたが、位置及び形状はまちまちである。深さ20 cm前後のものが主で、P₆の46 cmが1番深いピットである。覆土は大きく2層に大別される。自然堆積と思われ、ともに良く締まりをおびた暗褐色土層である。覆土上部には貝の堆積がみられ、厚さ15~45 cmである。西側では2層に分かれ、上から完全な貝の多い混土貝層、混貝土層であるが、他は混土貝層だけである。なおこれらの貝層はそれぞれ焼土粒子を多く含むのが特徴である。

出土遺物は縄文土器片と打製石斧1点である。

第7号住居址 (実測図 図32, 遺物 図35)

本住居址は調査区東側C3区に位置し、第24号・57号・59号土層と重複している。各土層とも本住居址よりは新しいと思われ、中でも第24号土層は明らかに住居址を切って掘り込まれたことがわかる。

主軸方向はN-30°-Eで、一辺約4.7 m (推定)の方形を呈する。北及び東側は後世の掘削やエリア外のため確認できなかった。床面までの深さは5~10 cm程で、壁はゆるく外傾して立ち

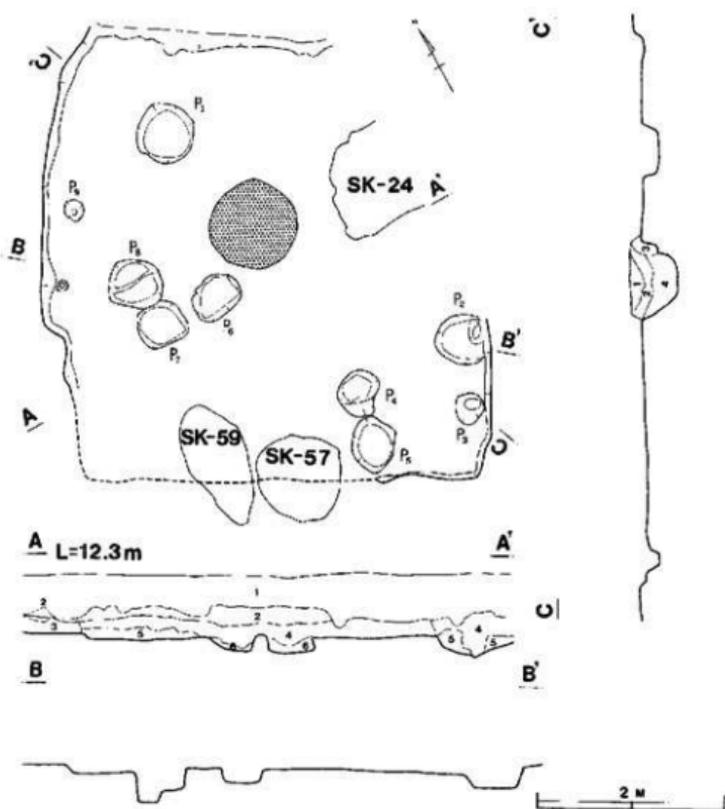


第31図 第6号住居址

第6号住居址土層解説

A-A', B-B'

- | | | |
|-----|------|---------------------------|
| 1K | 黒褐色土 | (粘土質層) |
| 2K | 〃 | (黒川土層、YP・焼土粒子を含む) |
| 2K' | 〃 | (2Kに同じ、焼土粒子が多くなる) |
| 3 | 〃 | (固く締まりYP・ハードロームブロックを含む) |
| 4 | 暗褐色土 | (固く締まりYP・ハードロームブロックも多く含む) |
| 5 | 〃 | (よく締まりハードロームブロックを含む) |
| 6 | 褐色土 | (ハードロームブロックのみ) |



第32図 第7号住居址

第7号住居址土層解説

A A'

- 1 土 十
- 2 褐色 土 (多く細まりホレキを含む)
- 3 褐色 土 (YPを含む)
- 4 赤褐色 土 (YP・ロームブロック含む)
- 5 土 (YPを少量含む)
- 6 褐色 土 (ロームブロックを含む)

C C'

- 1 褐色 土 (焼土・ローム粒子・炭化物を含む)
- 2 暗褐色 土 (焼土を少量含む)
- 3 褐色 土 (、(細まりローム粒子・炭化物を含む)
- 4 暗褐色 土 (ローム粒子・焼土・炭化物を含む)

上がる。床面はロームで、傾斜もなく平坦である。炬屋周辺は少々縮まりがみられるもの他はそれほどではない。住居北土軸線上のほぼ中央部に炬屋が設けられている。直径 95 cm の円形を呈し、深さ 35 cm の地床炉である。炬屋内部には、炭化物・焼土粒子混入の層が 3 層ほど堆積していたがハードな焼土層は認められなかった。

ピットは床面上に 9 ケ所確認されたが、規則的な配置は認められない。いずれのピットも小規模で、径 23~55 cm である。深さは 12~35 cm を測る。P₆だけが 2 段掘り込みのピットであり、径 60 cm、深さ 23 cm と 35 cm である。覆土は自然堆積の状態を示しているが、おおむね暗褐色土 1 層であった。

出土遺物は少量の縄文土器片だけであり、床面からの出土遺物はみられない。

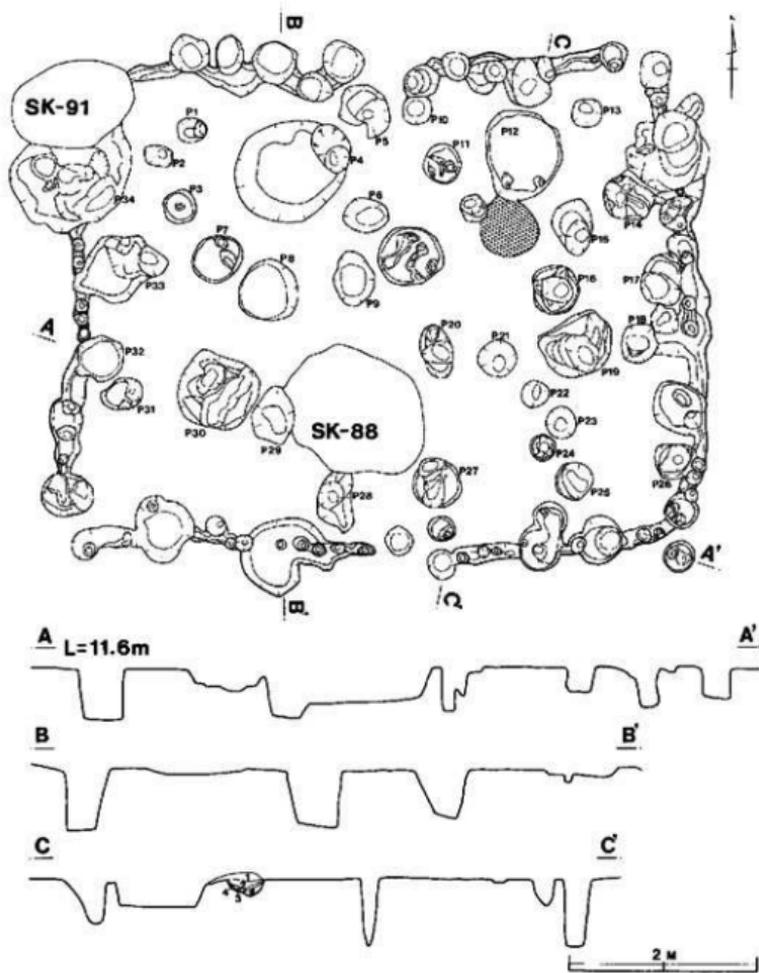
第 8 号住居址 (実測図 図 27、遺物 図 36)

本住居址は調査区南側 D2 に位置し、真側で第 5 号住居址、第 16 号・23 号土壌と、中央部で第 22 号土壌と、そして西側で第 17 号土壌の各遺構と重複している。本住居址との新旧をみると、第 5 号住居址・第 17 号土壌よりは新しく、第 16 号・22 号・23 号土壌よりは古いと思われる。

平面形は不完全ながらも直径 4.4 m の円形を呈している。床面までの深さは 25~37 cm で、壁は外傾して立ち上がっている。しかし重複している第 5 号住居址と床面のレベルが同一であるため、東側では壁の検出ができなかった。ただ壁溝状のわずかな凹みがみられ、この部分が本住居址東側の境界になると考えられる。床面は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦で、傾斜もみられない。ロームを掘り込んだ床面であり、P₂~P₆の周辺はよく踏み固められてしまっているが、他の部分はそれほど顕著ではない。炬屋は検出されなかったが、あったとすれば第 22 号土壌により破壊されてしまった可能性が大きいと思われる。ピットは床面外側に沿って 9 ケ所確認された。規則性はないが、直径 30 cm、深さ 60~70 cm のピット (P₅・P₆・P₄・P₃) と直径 30~35 cm、深さ 10~39 cm のピット (P₁・P₂・P₃・P₄・P₅) の 2 種がみられる。

覆土は大きく 2 層に分かれ順に黒褐色土層、暗褐色土層である。上部での貝層は認められなかったが、1 層下部まで掘り下げたところ、中央部及び東部の 2 ケ所から貝層が検出された。貝層二層は床面レベルより 20 cm 上にあたっている。覆土上の貝層であったため、そのまま床面まで掘り下げたところ、貝層は床を切って堆積していることが判明した。結果的にこの貝層は住居址覆土を切って掘り込まれた第 22 号・23 号土壌の覆土であったわけである。以上の経過から 2 基の土壌は住居址床面から掘り下げられているような結果になってしまったが、実際には床面より最底 20 cm 以上も上部から掘り込まれていたと考えられるのである。

出土遺物はその大部分が覆土中からで、縄文土器片(深鉢形土器の破片が主)、無茅石鏡 2 点(黒曜石・チャート)などであった。



第33図 第9号住居址

第9号住居址土層解説

C-C'

- 1 暗黒褐色土 (炭屑土層)
- 2 灰白色土 (埴器土を含む)
- 3 暗赤褐色土 (成土層)
- 4 黄褐色土 (ローム、灰けて固い)

第9号住居址（実測図 区33，遺物 区28・36・37，写8 1・2）

本住居址はC2区東側に位置し、第88号・91号土庫と重複している。また北側に接して第145号土庫が所在する。床面がロームを掘り込んで作られていないためにピット列のみの確認しかできなかった。したがって2基の土庫との断面図作成が不可能であったため、新旧は不明である。

主軸を東西方向に有し、長軸6.8m、短軸5.35mの長方形を呈する。前述のように遺構確認直が床面であった関係で壁の検出はできなかった。壁溝は断続的に周回しており幅15cm、深さ5cmである。平溝内には壁柱穴がある。これは2種に大別でき、径15cm深さ5~10cm程の小柱穴と、径25~50cm深さ30~80cm程の大柱穴とである。床面はロームでよく締まり平坦である。特に炉址周辺は貼り床と思えるほど踏み固められていた。炉址は主軸北側、やや東寄りに確認され、長径65cmの楕円形を呈している。床面より約15cmほど掘り下げた地床炉で、赤褐色に焼けた焼上の堆積がみられた。

ピットは壁柱穴以外に35ヶ所認められた。主柱穴としてP₃・P₉・P₉・P₁₀・P₁₁・P₁₆・P₁₇・P₁₈・P₂₇・P₂₈・P₂₈・P₃₁などが考えられ、径35~65cm、深さ26~94cmを測る。P₁₈は径(95cm)のわりに浅く(28cm)、灰及び焼土粒子の堆積が認められたことからそこから出た灰などを一時的に捨てるためのピットと考えても良いと思われる。遺構内の壁土は確認できなかったが、C3区から西に向かって伸びる貝層の先端部直下に当たっている。表土数cmよりヤマトシジミを主にした純貝層が遺構北東部上面に堆積していた。

出土遺物の多くの縄文土器片の他に、粗製深鉢形土器、深鉢形土器の口縁部片などがあり、ピット内からも土器片の出土をみた。

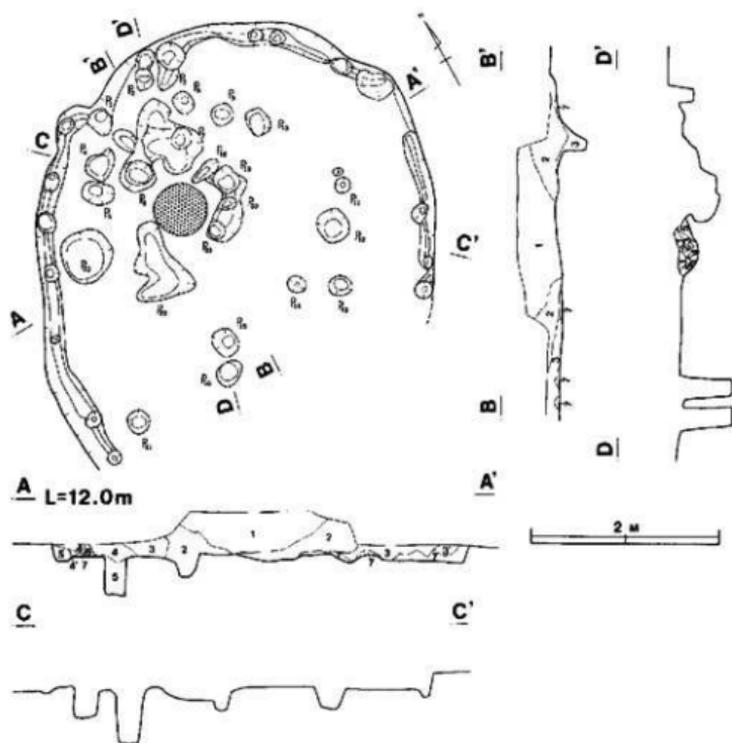
第10号住居址（実測図 区34，遺物 区28・37，写9 1・2）

本住居址はC2区南東部に位置し、第15号住居址の西側にあたっている。

主軸方向はN 34° Eで、長径5m以上、短径4.26mの楕円形を呈している。両側は通路や土庫との重複のため確認できなかった。床面までの深さは5~20cmで、壁は外傾して立ち上がる。壁溝は北及び東側の一部で切れているが、幅約20cm、深さ約5cmのものが検出された。壁溝内には径・深さとも20cm前後の壁柱穴が存在している。床面は炉址周辺が高く締まり、ほぼ平坦である。中軸の西側やや北寄りに炉址があり、径55cm、深さ17cmの地床炉である。床面を土状に貼り付けたもので、厚さ8cmの焼土がみられた。

ピットは床面に23ヶ所確認された。炉址周辺及び北側に多く集中しているのが特徴である。径17~58cm、深さ16~74cmを計る。覆土は住居北中央部に純貝層・泥土層が厚く床面まで堆積していた。住居廃棄後、早い時期から貝の堆積が始まったものと思われる。

出土遺物はほとんど覆土からで、多数の縄文土器片、深鉢形土器、釣手付土器、石皿片、砥石



第34図 第10号住居址

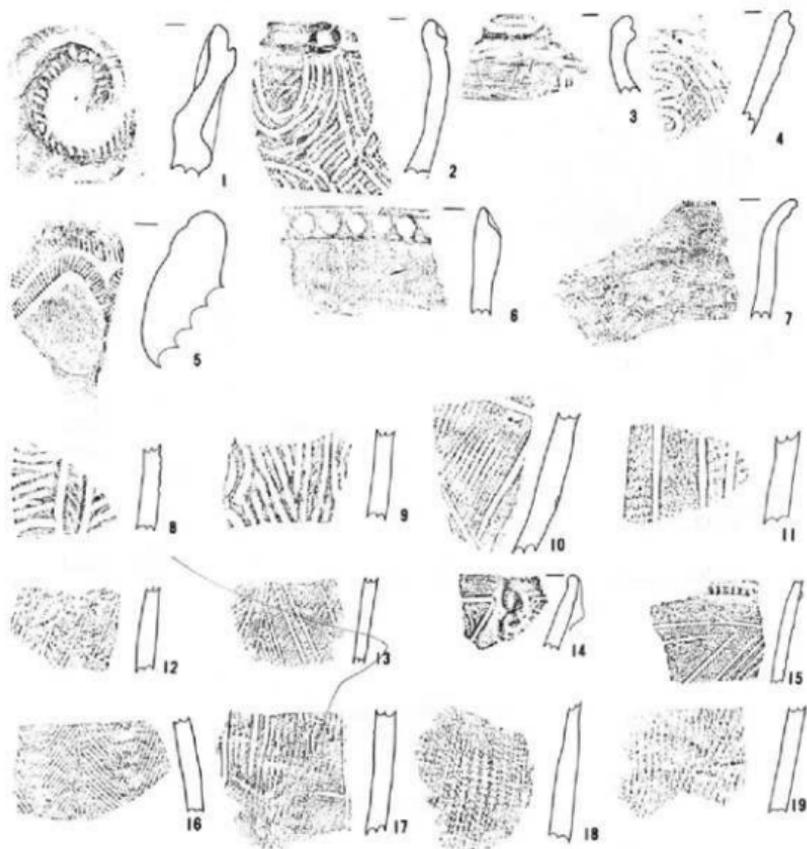
第10号住居址土層解説

A-A' B-B'

- 1 焼 土 層 (濠の上層)
- 2 赤 褐色土 (よく焼きたり焼土・灰・Y.Pを含む)
- 3 暗 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 4 黒 褐色土 (灰・細まりY.P・ハードロームブロックを含む)
- 4' 暗 褐色土 (灰)がありY.Pを含む)
- 5 暗 褐色土 (ロームブロック・ゾック・ハードロームブロックを多く含む)
- 6 褐色土 (大変固く締まっている)
- 7 黒 褐色土 (灰・細まりハードロームブロックを含む)

D-D'

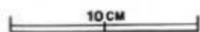
- 1 灰褐色土 (灰・焼土粒子を含む)
- 1' 灰褐色土 (灰を含む、他は1に同じ)
- 2 灰褐色土 (大部分が灰で焼土粒子を含む)
- 3 明 褐色土 (焼土層、大変固い)
- 4 暗 褐色土 (上述の熱を受けて固い、灰土を含む)
- 5 暗 褐色土 (灰・焼土粒子を少し含む)



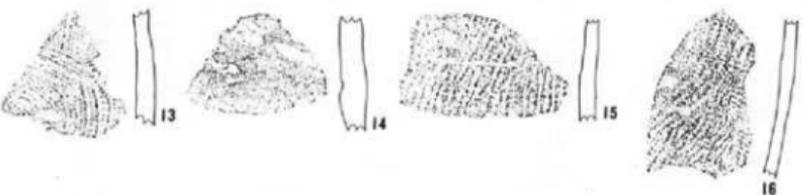
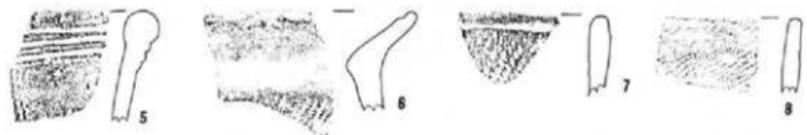
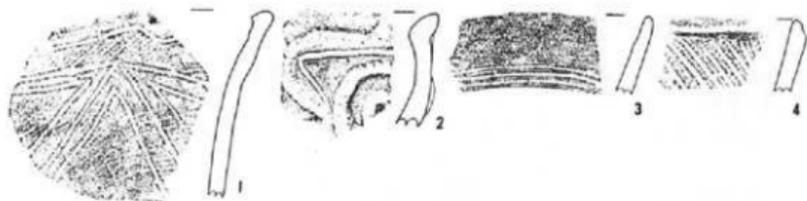
SI 06



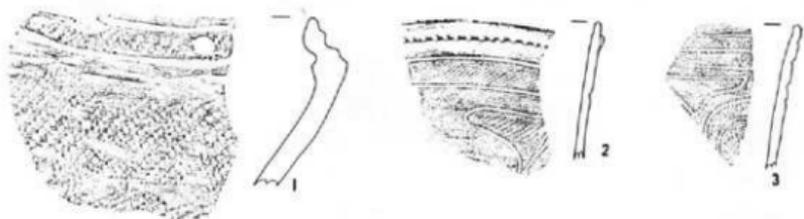
SI 07



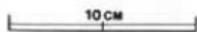
第35圖 住居址出土遺物



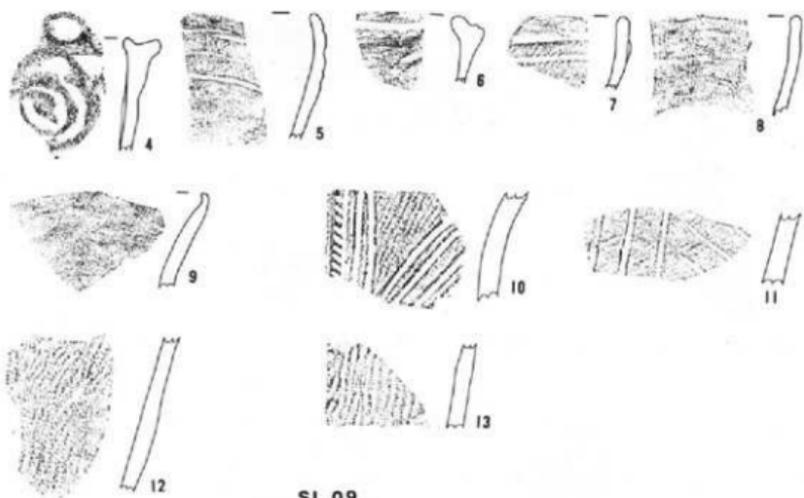
SI 08



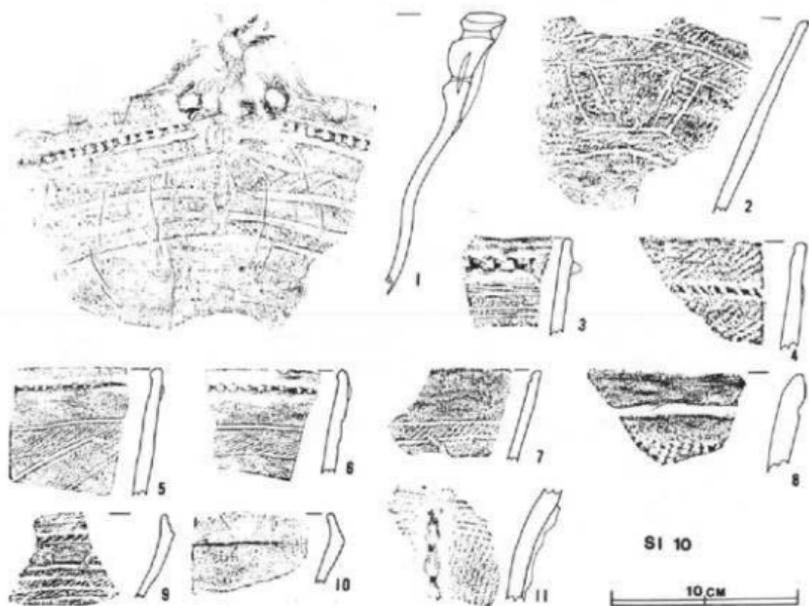
SI 09



第36図 住居址出土遺物



SI 09



SI 10

10 CM

第37图 住居址出土遺物

表4 第35区 住居址出土遺物

出土遺物・区	形状・部位	法とcm	表面・表面の装飾	備考
SI-06	1	波状口縁	蓋部を波状口縁に作り付け、そこに滑円形の刺突文を配する	
	2	口縁部	口縁部は内側へ、太い増産する波線と、弓形の彫り付けがある。波状の波線を上にして、間を斜行波線で埋めている	
	3	"	外反する口縁で波状の波線を配する	
	4	"	口縁は直立して立ち上がり彫り波線を配する。地文は縄文	
	5	波状口縁	波状口縁の突出部で、口縁に平行して2本の波線を配し、間を刺突文でつめる	
	6	口縁部	口縁部に向けて弓形の刺突文を配する。地文なし(ハク雲彩)	
	7	"	ほとんど刺突文の口縁部で、所々に波線又は縄文が残る	
	8	口縁部	波状の波線を配し、その間を斜行波線でつめる	脚之内式
	9	"	波線及び波線の波線文のみ。地文は縄文	ホ
	10	"	直線的な波線。地文は縄文	
	11	"	高低の波線を配す。地文は縄文	
	12	"	斜行波線。地文は縄文	
	13	"	地文は刺突文で、直線的な波線	
	14	口縁部	8の字状彫り付け。波線で幾何学的な文様を区画し内部は縄文。外は磨り消し。	脚之内式
	15	"	側へ波線を配し、波線で直線的な文様を区画し、中に縄文を充填する。外側は磨り消し	ホ
	16	胴部	羽状刺突文のみ	
	17	"	胴下半部にあたり、口縁からの波線が止まる。地文は縄文	
	18	"	刺突文のみ	
	19	"	刺突文のみ	
SI-07	1	口縁部	1本の横走する波線が刺突文され、上部は刺突文	
	2	胴部	弓形刺突文から出る波線で区画され、与部に刺突文を充填する部分も磨り消し部に分かれる	
	3	"	高低の平行波線。地文は刺突文。	
	4	"	波線で直線的な文様を区画し、中に刺突文を充填する。外は磨り消し	
	5	"	刺突文のみ、L.R	

表5 第36図 住居址出土遺物

出土遺構・区画番号	形状・部位	法量 (cm)	表型・裏面の特徴	備考
SI-08	1	波状口縁	小突起をつくる波状口縁部で外反して立ち上がる。沈線で線状的な文様を構成する。地文は縄文	
	2	口縁部	内湾して立ち上がってきて、口唇部でくの字状に外反する。連続刺突文が曲線状に配置される	
	3	#	口唇部は無文帯で、下部数条の沈線が施される	
	4	#	口唇部に沈線を有し、胴部にかけて多数の沈線が施文される	
	5	#	ゆるく外反して立ち上がり、口唇部と平行に二本の沈線が施される。幾何学的に刺突文も施され、内部は煮酒しである	
	6	#	くの字状に強く外反する口縁部で、内部が若干凹んでいる。下部は縄文	
	7	#	直立する口縁部で、口縁に平行に1本の沈線を有し、下部は比較的短い縄文	
	8	#	直立する口縁部で、縄文のみ	
	9	#	わずかに外反する口縁部で、地文は縄文。口唇部内側に若干凹む	
	10	割部	二重竹管文が感状に配置される	
	11	#	座帯をY字状に知り付けそこに刺突を有する。沈線が曲線状に施文される。地文は縄文	
	12	#	横位の座帯に刺突文を有し、地文はまばらな縄文。ヘラ整形がみられる	
	13	#	沈線が曲線状に施文される。地文は縄文	
	14	#	無文。ヘラ整形がみられる	
	15	#	縄文のみ	
	16	#	縄文のみ。I, R	
SI-09	1	波鉢鉢口縁部	口唇部に2本の沈線を施し、形々に凹形の刺突文を有する	
	2	小型深鉢口縁部	口唇部に細い沈線を施し、割部にかけて直線及び曲線の沈線で交差した中に縄文を充填する。外に煮酒し	複製品
	3	#	口縁部はゆるく外反し、沈線で直線及び曲線的な文様を区画し、中を縄文で埋める。外側は煮酒し	#

表 6 第37回 住居址出土遺物

出土遺物・区	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SI-09	4	口縁部		波状口縁の突起部で、口縁部に楕円形の刺突文を有す。太い沈線		
	5	浅鉢 口縁部		口縁部は内灣して立ち上がり、二本の沈線を施文し、中にまばらな縄文を施す。胴部は磨削し		
	6	口縁部		口縁部内側がくの字状に内灣する。口唇部は厚手で沈線と刺突を施文する		
	7	"		口縁部は内灣する。口唇部に平行な符縄文を有する		
	8	"		内灣して立ち上がる口唇部で、無文		
	9	"		ゆるい波状口縁を呈し、無文		
	10	胴部		隆帯を縦位に貼り付け刺突を有する。平行沈線の直線的につく。地文は縄文		
	11	"		直線的な沈線文。地文は縄文		
	12	"		縄文のみ		
	13	"		縄文のみ		
	SI-10	1	波状口縁		口縁は平縁で突起を有し、楕円形の刺突文が3ヶ所ある。細い紐線がつき、下部にC字状及び縦位の沈線を施文する。胴部は無文	器之内式
		2	口縁部		口縁部は直立し、2本の沈線を2段に配し、さらに併行する沈線を間に施文し内部に縄文を充填する	"
		3	"		口唇部は直立し、一共の紐線を配する。胴部には平行沈線が2段に施文される。地文は縄文	
4		"		口縁部に隆帯を有しその上に刺突を施す 地文はR.Lの縄文		
5		"		口縁部に細い紐線を配し、沈線で直線的な文様を下面し、中に縄文を充填する。外縁は磨削し	器之内式	
6		"		No.5と同一体	"	
7		"		2本の平行沈線を有し、中を縄文で埋める。他はへう整形		
8		"		口縁部に平行な太い沈線を有し、地文は広い縄文		
9		"		横位の沈線を工体とし、S字状の沈線を縦位に配する。口唇部の地にきざみがある		
10		"		口縁部がくの字状に内反し、無文である		
11		刺部		縦位に隆帯を貼り付け、その上に刺突を加える。横帯を数本の沈線もみられる		

状石器、たたき石、磨石片、磨製石斧などがある。

第11号住居址（実測図 図38、遺物 図28・43・44・45、写10-1・2）

本住居址は調査区東側C3区に位置し、北東2mに第6号住居址、南2mに第12号住居址が存在する。平面形は円形で、直径は約5.2mである。遺構確認が覆土上部でできなかった関係で、壁や壁溝は検出できていない。

灰面は平坦であるが、北東側にゆるい傾斜を有する。なお中央部及び北西部に浅い落ち込みがあるが、これは炉址直下の掘り込みとみてよいと思われる。ピットは23ヶ所検出された。特徴的なことは径30cm・深さ30cm前後のピットと、径40～45cm・深さ63～90cmのピットが80cmの間隔をおいて交互に確認されたことである。なお大ピット列は小ピット列より30cm程内側に位置している。この規則的なピット列も、南側においてはいくらか不規則になっており、出入口との関連が考えられそうである。

遺構内壁土は確認できなかったが、遺構上面は泥土只層の堆積がみられ、この只層下部で炉址が検出された。しかしそれに対応する遺構が確認できないため掘り下げていったところ、本遺構が検出されたわけである。結果的に炉址が床面より40cm浮いてしまうことになった。炉址内部には灰白色の灰、赤褐色の焼土の堆積がみられた。なお本遺構には北側床面上にもう一ヶ所炉址が検出されている。長径約105cmで、楕円形を呈し深さ35cmの地床炉である。しかしPと重複していることもあり、本遺構に伴うものかどうかは判定しがたい。

出土遺物は縄文土器片の底部片5点、口縁部片、石皿片、磨り切り手法によるとみられる刀子状装身具などがある。

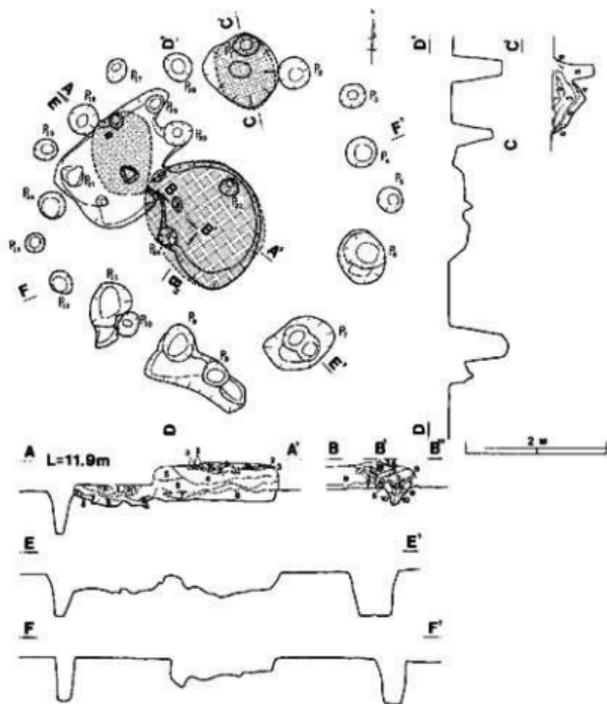
第12号住居址（実測図 図39、遺物 図45・46）

本住居址は調査区東側C3区に位置し、北に第11号住居址、南に第14号住居址が存在する。東側はエリア外のため確認できなかったが、径約2.75mの円形を呈するものとみられる。床面までの深さは約20cmを測り、壁溝・壁柱穴は存在しない。

床面はコームであり、平坦で傾斜はない。炉址は検出されなかった。ピットは3ヶ所検出された。径30～40cm、深さ16～20cmのピットで、径に比して浅いものである。覆土は現地表面が混土上層であり、その下部にも混土上層が堆積する。遺構内部は自然流入による椀相をみせ、暗褐色土・黒褐色土の堆積がある。

出土遺物は縄文土器片の他に、完形の椀形土器1点、無茎石銀1点などがある。

第13号住居址（実測図 図40、遺物 図57）

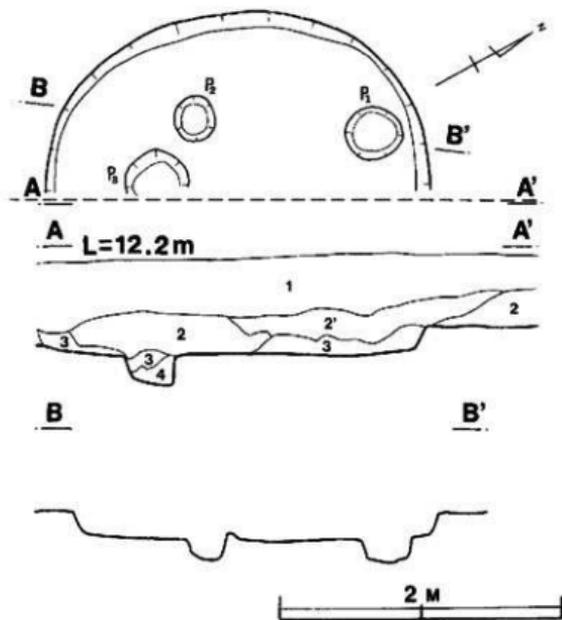


第38図 第11号住居址

第11号住居址土層解説

- A A'
 1K におい黄褐色土 (混土貝層)
 2 におい黄褐色土 (固く締まり強土ブロック・炭化物を含む)
 3 明褐色土 (黒色土を含む)
 4 黒褐色土 (YP・焼土ブロックを含む)
 5 # (YP・ハードロームブロックを多く含む)
 6 # (締まり強くYP・ハードロームブロックを含む)
 7 暗褐色土 (コム粒子・ソフトロームブロックを含む)
 8 におい黄褐色土 (締まり弱くソフトロームを多く含む)

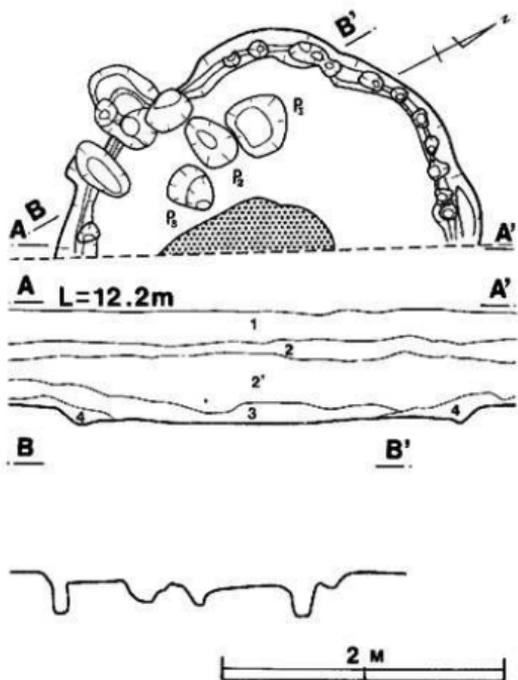
- R-B'
 1K におい黄褐色土 (混土貝層)
 2 灰黄褐色土 (固く締まり、炭化物・黒色土ブロックを多く含む)
 3 におい黄褐色土 (固く締まり強土・炭化物を含む)
 4 におい粉色土 (締まり弱く焼土粒子・黒色土ブロックを含む)
 5 壁色土 (焼土のすに灰が混入する)
 6 明褐色土 (黒色土ブロックを含む)
 7 黒褐色土 (固く締まり強土・YPを含む)
 8 # (締まりなくYP・ハードロームブロックを含む)
 9 暗褐色土 (ソフトロームブロックを含む)
 10 におい黄褐色土 (ソフトロームを多く含む)
 C-C'
 1 黒褐色土 (焼土粒子・灰を含む)
 2 におい黄褐色土 (しりなく灰をブロック状に含む)
 3 におい黄褐色土 (固く締まり強土・炭化物を含む)
 4 暗褐色土 (黒色土ブロックを含む)
 5 暗褐色土 (凝り固く締まる)



第39図 第12号住居址

第12号住居址土層解説

- 1 黒褐色土 (濠河土質)
- 2 暗褐色土 (Y.P.・ハードロームブロックを含む)
- 2' 黒褐色土 (Y.P.・貝片を含む)
- 3 褐色土 (Y.P.・ソフトロームを含む)
- 4 n (ハードロームブロックを含む)



第40図 第13号住居址

第13号住居址土層解説

- 1 暗褐色土 (混同土層)
- 2 " (YP・ハード・ロームブロックを含む)
- 2' 黒褐色土 (団・半団片を多く含む)
- 3 褐色土 (YP・ソフトローム含む)
- 4 暗褐色土 (YP・粘土粒子含む)

本住居址は調査区東側C3区に位置し、北側に第14号住居址・第48号土壇などが存在している。調査エリアぎりぎり位置しているため、50%以上の部分が調査できなかった。

調査できた範囲では南北約3m、主軸方向をN-45°-Wに有する楕円形の住居址であろうと思われる。床面までの深さは約7cmで、壁は外傾して立ち上がっている。壁溝は幅5~10cm程で、壁柱穴が約20cm間隔で並んでいる。深さはおおむね20cmを測る。

床面はロームで、締まりがなく軟らかい。起伏はほとんどないが北側に向けてゆるい傾斜を有している。炉址はその大部分がエリア外に位置しており、西端部が確認できたにすぎない。ピットは壁柱穴以外に3ヶ所確認できた。径30~40cm、深さ15cm程である。覆土は固く締まった褐色土と暗褐色土である。地表面近くには混貝上層が約20cmの厚さで堆積していた。

遺物は縄文土器片の他に、完形の小型鉢形土器の出土をみた。

第14号住居址（実湖岡 図41）

本住居址は調査区東側C3区に位置し、北及び南側を第12号・13号住居址によりはさまれている。東側は第13号住居址同様エリア外のため確認できないが、一辺約3.4mの方形を呈するとみられる。遺構確認面からの深さは8~15cmを測り、壁は外傾して立ち上がっている。壁溝はほとんど確認できず、壁柱穴も極めて浅いものが数ヶ所検出できたにすぎない。

床面はロームで、傾斜もなく平坦であるが、P₂・P₃を囲むように長軸約80cmの浅い凹みが認められた。炉址は検出されていない。ピットは7ヶ所検出され、P₁・P₄・P₅が主柱穴の一部であると思われる。径35~50cm、深さ54~61cmを計る。覆土は固く締まった黒褐色土・暗褐色土であり、地表面より20cmの厚さで混貝層がみられた。

遺物は極めて少量で、破片が数点出土しただけだった。

第15号住居址（実湖岡 図42、遺物 図57、写11-1）

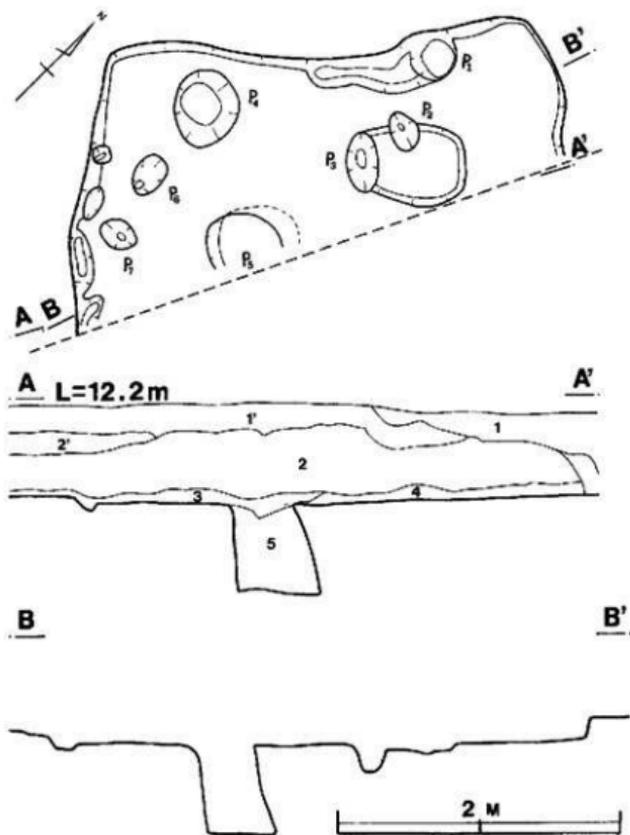
本住居址はC2区南東部に位置し、内部に第99号土壇が所在する。本遺構との新旧関係であるが、住居北内壁上を切っている様子もないことから、同時期、すなわち本住居址に付属する貯蔵穴とみてもよいと思われる。

遺構の大半が通路にかかっているため、正確な主軸方向は計測できないが、西側に傾くとみられ、南北1.4m、東西3.2mの長方形を呈している（現況）。床面までの深さは7cmで、遺構中央部では深くなり約25cmを測る。壁溝は北及び西側において部分的に検出された。壁柱穴は20~40cmの間隔を置いて検出され、径は15cm前後、深さは24~31.5cmである。

床面はロームで締まりがなく、中央部に向けてゆるい傾斜を有する。炉址は確認できなかったが、恐らく通路下部に存在していると考えられる。ピットは2ヶ所しか検出されなかった。覆土

ほおおむね2層に分けられ、流上砂子や炭化物を含む暗褐色土層である。なお土城内には厚さ15cm程の純貝層が堆積していた。

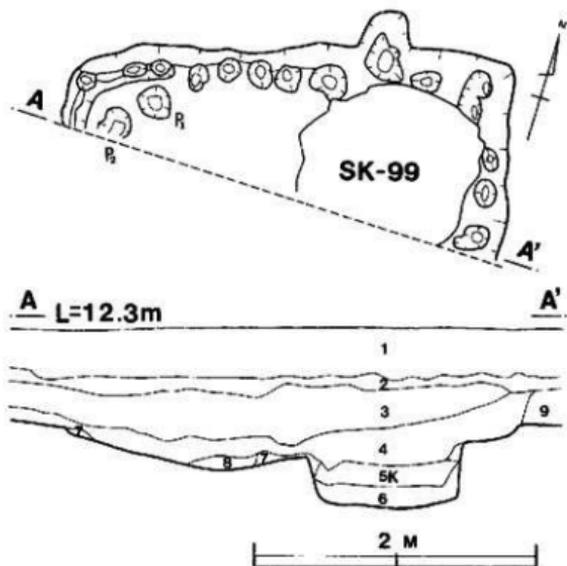
出土遺物として多数の縄文土器片、鉢形土器底部、無茎石甕などがある。



第41図 第14号住居址

第14号住居址土層解説

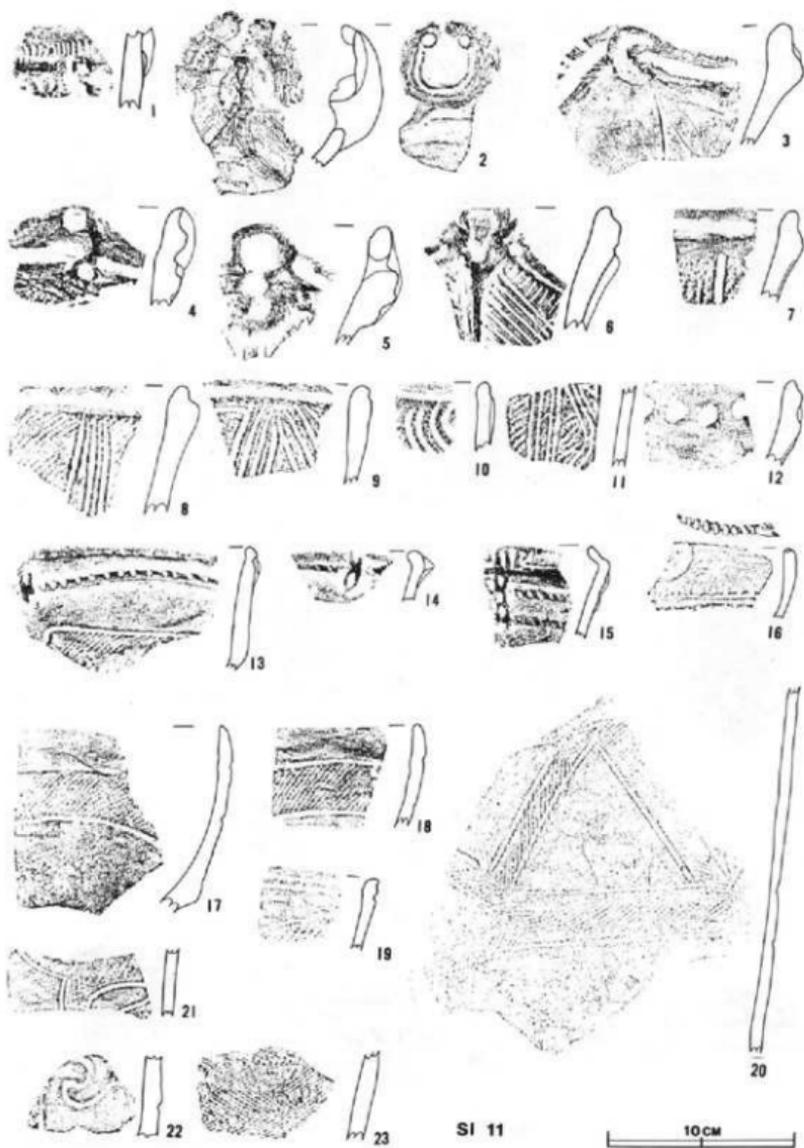
- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 赤褐色土 (割田土層) | 2' 黒褐色土 (H・土器片を含む) |
| 2' 暗褐色土 (※) | 3 暗褐色土 (Y P・粘土粒子を含む) |
| 2 Y P・ハードフォームブロックを含む | 4 褐色土 (Y P・ソフトロームを含む) |
| 2' | 5 ※ (ハードフォームブロック含む) |



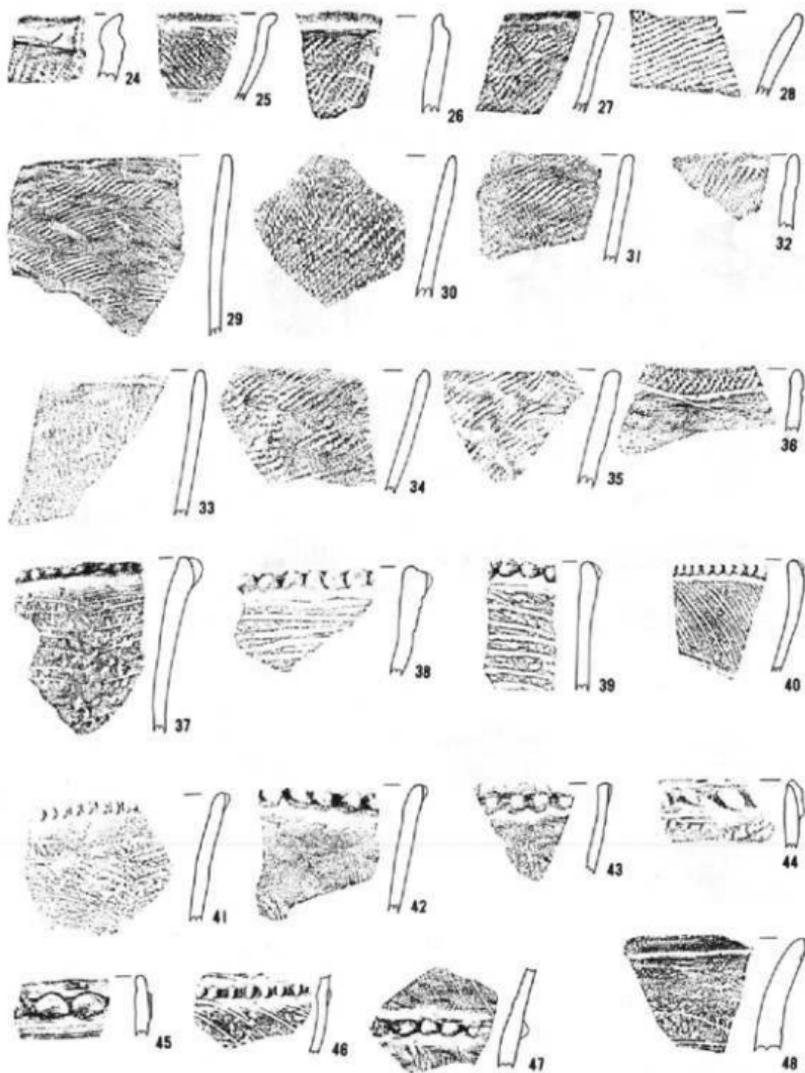
第42図 第15号住居址

第15号住居址土層解説

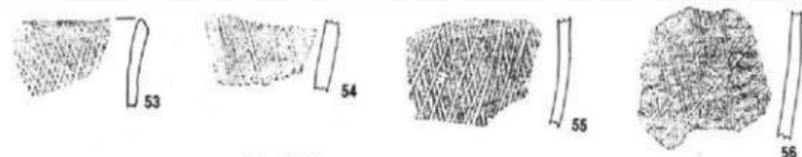
- | | | | |
|----|---|----|----------------------------|
| 1 | 表 | 土 | |
| 2 | 黒 | 褐色 | 上 (粘まりなくボロボロである) |
| 3 | 時 | 風 | 色 上 (よく練まりY P・粘土粒子・炭化物を含む) |
| 4 | | | (よく練まりY P・炭化物を含む) |
| 5K | 焼 | 土 | 層 |
| 6 | 黒 | 褐色 | 上 (極めて厚くロームブロックを含む) |
| 7 | 黄 | 色 | 土 (粘りがありロームブロックを含む) |
| 8 | 黒 | 褐色 | 上 (粘まり弱くロームブロックを少量含む) |
| 9 | 黄 | 褐色 | 土 (よく練まりロームブロックを含む) |



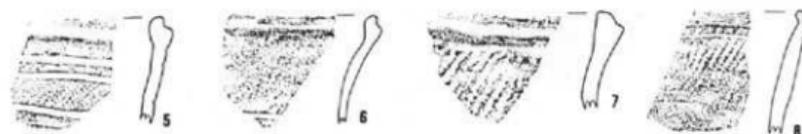
第43図 住居址出土遺物



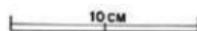
第44圖 住居址出土遺物



SI 11



SI 12

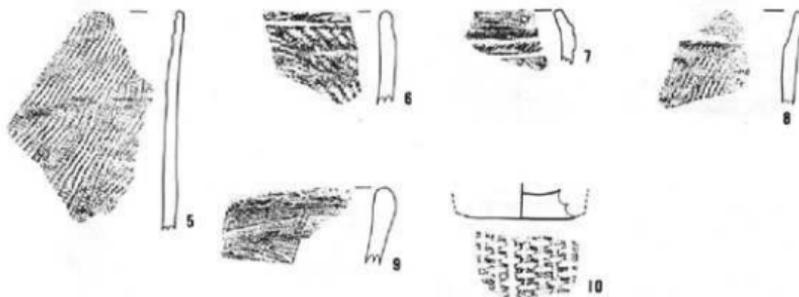
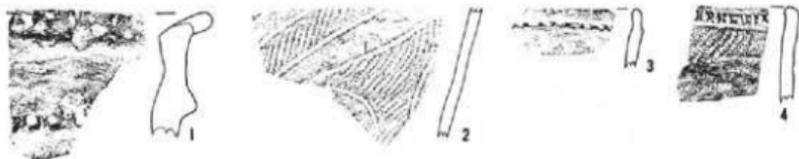


第45図 住居址出土遺物

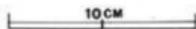


SI 12

SI 13



SI 15



第46図 住居址出土遺物

表7 第43図 住居址出土遺物

出土遺物・区	器物名・部分	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI 11	1 胴部		横位の縞帯をほき込んで刺突文を有する。	
	2 波状口縁・突起部		突起部で内側に大きく凹出し、2つの凹形突起部より下に口字状の沈線がはいり	
	3 波状口縁		口縁に平行して2筋のみならず、波状部にC字状の刺突文を有する	
	4 "		波状部から左右に太い沈線が入り、これをなぞり、形がC形の刺突文が2個配される。地文は縞文。	
	5 "		波状口縁の突起部で、大きなC形の刺突文が縦に3個並ぶ	
	6 "		波状部より縦位にY字状の縞帯を貼り付け、両側を直線的な沈線で包める	
	7 口縁部		口縁部はC字状。胴部に縦位の沈線。地文は縞文	縞文内式
	8 "		口唇部に凹状沈線、胴部に縦位の沈線。地文は縞文	"
	9 "		口縁部に1本の沈線。胴部に縦位の沈線で包める	"
	10 "		口縁部に1本の沈線。胴部に縦位の沈線がはいり	"
11 胴部		直線及び波状の沈線。地文は縞文	"	
12 口縁部		口縁部はゆるく凹出し、横方向に凹形刺突文が透される		
13 "		凹い縞帯が口縁と平行してあり、途中に8の字状の貼り付け文がある。沈線で幾何学的に文画され、中に縞文を充てる。外は磨消し		
14 "		刺突のある細縞帯をめぐらし、8の字状の貼り付け文を有する		
15 "		縦位及び横位の縞帯を有し、その上に刺突を施す。口縁部はくの字状に内側に包める		
16 "		口縁部は内凹し、口唇部にさざめを有する。口唇の平行沈線を施文し、その上下に並ぶ形で刺突文を加える		
17 "		内凹する波状の口縁部で、上下を沈線で包囲した縞文帯を持つ		
18 "		No.17と同型。縞文帯の中に縦方向的沈線あるいは刺突がある		
19 "		口縁部に凹する2本の沈線を付し、中に刺突を加える。胴部は沈線で区画された幾何学文である		
20 胴部		沈線で幾何学的な文様を区画し、中に縞文を充てる。外は磨消しである	縞文内式	
21 "		直線状の沈線で区画し、中に縞文を充てる。外は磨消し		
22 "		縦行沈線を施文する		
23 "		符号第1種		

表8 第44回 住居址出土遺物

出土品名・遺物No.	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-11	21	口縁部	口唇部がくの字状に外反する。胎部は縄文	
	25	"	口縁部はゆるく内側に立ち上がり、口唇部でくの字状に外反する。沙眼で区画された縄文帯がもつ	
	26	"	口縁部に1条の沈線を有し、胎部は縄文のみ。L Rが多い	
	27	"	口唇部内外に凸部を有す。地文は縄文。	
	28	"	縄文のみ。R L	
	29	"	わずかに外反する。縄文のみ	
	30	"	波状口縁。縄文のみ	
	31	"	地文は縄文	
	32	"	地文は縄文	
	33	"	口縁部に1条の沈線。胎文は縄文	
	34	"	口縁部は凹みをみせる。地文は縄文	
	35	"	地文は縄文。L ;	
	36	"	1条の沈線で区画し、口唇部まで縄文を有する	
	37	"	口縁部に縦線を付し、斜方向の斜沈線を施す。加賀列式(粗製)地文は広い縄文	
	38	"	口縁部に縦線を付し、横方向の沈線を施す。胎文は広い縄文	" "
	39	"	口縁部に縦線を付し、横方向の沈線を施す。地文は広い縄文	" "
	40	"	口縁部に縦線を付し、沈線で区画された中に加賀列式斜位の沈線を施す	
	41	"	口縁部に縦線を付し、広い縄文の上に斜位の沈線を施す	"
	42	"	口縁部に縦線を付し、斜・条線を斜方向に施す	"
	43	"	口縁部に縦線を付し、胎部は縄文のみ	
	44	"	口縁部に縦線を付す。地文は縄文	
	45	"	L 縁部に縦線を付す	
	46	胴部	胴部に縦線を付し、上下段ともに斜方向の沈線を施す。地文は広い縄文	
	47	"	胴部に縦線を付し、斜方向の沈線。胎文は縄文を施す	
	48	口縁部	口縁部に外反し、2本の沈線の間にまばらな縄文を施す	

表9 第45図 住居址出土遺物

出土遺物・区	遺物No.	形状・部位	法量 (cm)	表面・断面の特徴	備考
SI-11	49	口縁部		口縁部は外反する。斜行する沈線を描す	
	50	"		横定する沈線を描す。地文は灰い縄文	
	51	"		ゆるく湾する口縁部で、横定する沈線→斜行する沈線の順に施文する	
	52	"		右下がり→左下がりの順で沈線を描文する	
	53	"		右下がり→左下がりの順に沈線を描し、地文は縄文である	
	54	胴部		右下がり→左下がりの順に沈線を描す	
	55	"		右下がり→左下がりの順に沈線を描す	
	56	"		右下がり→左下がりの順に斜行沈線を描する	
	57	口縁部		内湾する茂林の口縁部で、数条の平行沈線を引き、間を斜位の沈線、磨消し、縄文などで施文する	
	58	"		古製の口縁部に刻みを行ち、外面に溝りによる内帯を残し、ここに刻みを有する	
	59	"		口縁部内側が凹み、文様はない	
	60	"		波状口縁を描し、底辺部から沈線が下がる。 () 形の単文文が2段に付く	
	61	底辺部		磨代痕	
SI-12	1	口縁部		透彫が筒形に回り、中央幾何学的な沈線をかざる	
	2	"		口縁部に内形刺突を施し内側に2条の沈線を描す。胴部に沈線を描文する	
	3	"		口縁部が内湾し、沈線を描す	
	4	"		数条の沈線で文様を施す。地文は灰い縄文	
	5	"		口縁部に太い沈線を描し、平行する数条の沈線が横走する	
	6	"		口縁部及び胴部に横走する沈線を描文する。地文は縄文	
	7	"		口縁部に太い沈線を描す。地文は縄文	
	8	"		口縁部に2条の沈線を描走させ、その間に点刺文を描す。地文は縄文	

表10 第46図 住居址出土遺物

出土遺物・区	遺物No.	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-12	9	口縁部		外反する口縁で、縄文のみ。I, R	
	10	"		内傾する口縁部で、口縁部のみ外反する。横 方への縄文	
	11	"		外反する口縁部で、口縁部内傾がくの字状に 屈曲する。縄文のみ	
	12	"		内傾する鉢形土器で、10本の沈線が横走り、 内部に縄文を充ちる。外は磨光し	加賀利B式
SI-13	1	口縁部		口縁部がくの字状に屈曲し、斜位及び傾斜に 隆帯を貼り付ける。ヘラ整形	
SI-15	1	口縁部		くの字状に屈曲する口縁部で、沈線を付し、 口縁部に刺点軌安が施される	
	2	胴部		沈線で区画した中にR1の縄文を充ちる。 外壁に磨光し	
	3	口縁部		口縁部が平行に細い縦線を付す。磨光し	
	4	"		口縁部はゆるく外反し、口縁部を沈線で区画し 内部は刺点軌安を加える。沈線部に縄文を施 す	
	5	"		直立する口縁部で、内部に縦長の沈線が入る。 縄文のみ	
	6	"		口縁部はゆるく内傾し、口縁部の1本の沈線で 区画する。縄文のみ	
	7	"		口縁部は内傾し、2本の平行沈線の間に斜位 の短い沈線で埋める	
	8	"		ゆるく外反し、口縁部内側は削り取られて枝 を成す。縄文のみ	
	9	"		ヘラ整形	
	10	底部		銅代底	

第16号住居址 (実測図 図63)

本住居址はB1区・B2区にまたがって検出され、第27号住居址と重複している。上層断面図をみると、第27号住居址に切られていることがわかるが、床面レベルが同一なこと、壁溝が連続していることなどから第27号住居址の拡張部分とも考えられる。しかしここでは各々単独の住居址として説明しておく。

主軸は東西方向であると思われ、確認部分の南北長3.21m、東西長1.5mを測る。壁は確認できなかった。床面は黒色土中に検出された比較的軟らかい。また傾斜もなく平坦である。地址は

なかった。ピットは1ヶ所検出され、北東コーナー部に位置している。なお床面上には混貝土層の堆積がみられた。出土遺物はない。

第17号住居址（実測図 図47、遺物 図57・58図、写11—2）

本住居址はC3区に位置し、第1号溝・第190号土壇と重複している。各遺構とも本住居址よりは新しいと思われる。特に第1号溝は遺構中央部を横切っているため、炉址などは半分近く失われていた。

主軸方向はN-25°Eで、長径5.5m、短径5.0mの楕円形を呈している。床面までの深さは東及び西側で深く18~23cmを測るが、北及び西側では極めて浅く5cm程である。壁溝や壁柱穴などは確認されなかった。床面は炉址の周縁は固く踏みしめられていたが、壁近くはそれほどでもない。また多少の凹凸がみられ、北東方向にゆるい傾斜を有する。

ピットは18ヶ所検出された。主軸と平行に東西に配列されている傾向がみられ、径25~80cm、深さ16~102cmを測る。この他に第1号溝内にも数ヶ所のピットが存在する。第1号溝により半分切断された形で炉址が床面のほぼ中央部に検出された。元米は長径75cm程の楕円形を呈していたものと思われるが、前述のように東半分は消失している。床面を25cm掘り円めた地床址で、焼土層の堆積がみられた。覆土は貝層と暗褐色土層に大別される。貝層は住居址中央部から南側一帯にかけて床面まで堆積しており、上面は混貝土層、下面は混貝土層である。

遺物は深鉢の破片とみられるものが多数みられ、他に完形の鉢形土器(加曾利B式)、小型深鉢形土器が出土している。

第18号住居址（実測図 図48）

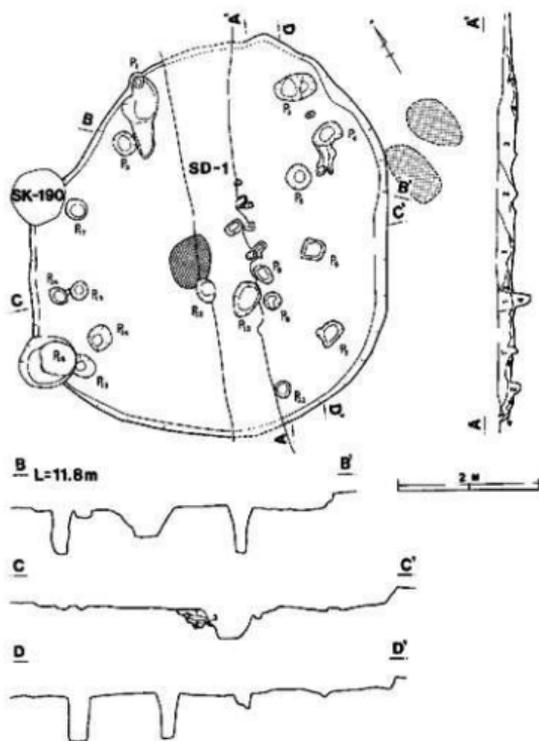
本住居址はC3区に位置し、南東部には第1号溝・第17号住居址が存在している。

表土掘り下げ後、ピット列としてとらえることのできた遺構で、径5.6mの円形を呈している。床面はロームで、それほど絡まりはみられない。炉址状の遺構が中央やや北寄りに検出された。この部分は焼土粒子の堆積が4cmの厚さに堆積してただけで、純粹の焼土層はみられず、長径約55cmの楕円形を呈している。床面の掘り込みなどもないことから、炉址であった可能性は少ない。ピットは11ヶ所検出された。径のわりに浅いものが多い。P₂・P₃・P₄は2段掘り込みのあるピットであった。

遺物として縄文土器片があるだけである。

第19号住居址（実測図 図49、遺物 図57）

本住居址は調査区西側B1区に位置し、第27号住居址の真下に当たっている。第27号住居址



第47図 第17号住居址

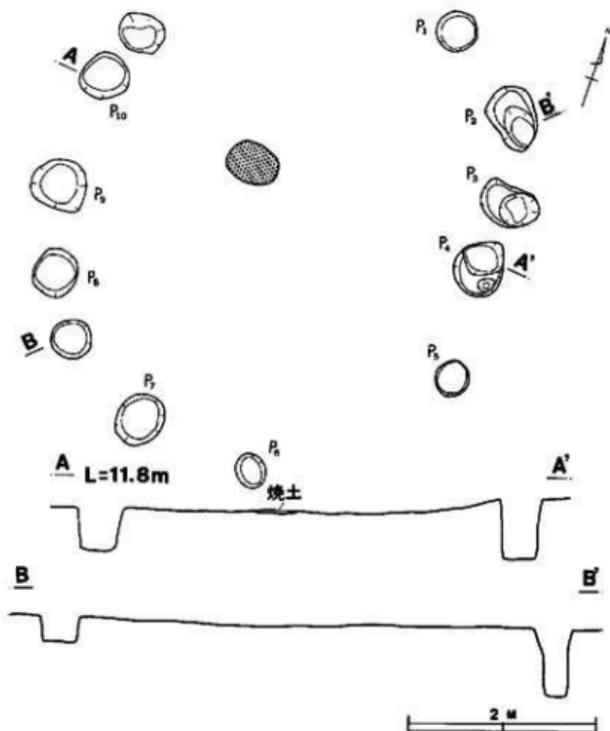
第17号住居址土層解説

A-A'

- | | | |
|----|------|------------------------------|
| 1 | 黒色土 | (泥上河層) |
| 1' | 〃 | (1と同じ, 貝がいくらか少量になる) |
| 2 | 暗褐色土 | (泥河土層) |
| 2' | 〃 | (泥河土層, ハードロームブロックを含む) |
| 3 | 〃 | (匠く締まりYP・泥土粒子・ハードロームブロックを含む) |
| 4 | 〃 | (匠く締まりYP・ハードロームブロックを含む) |
| 5 | 〃 | (締まり弱くハードロームブロックを含む) |

C-C'

- | | | |
|---|--------|-------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | (匠く締まり焼土粒子・ロームブロックを含む) |
| 2 | 暗褐色土 | (よく締まり焼土・ハードロームブロックを含む) |
| 3 | ラサい赤色土 | (匠く締まっている) |
| 4 | 褐色土 | (ハードロームブロックが多い) |



第48図 第18号住居址

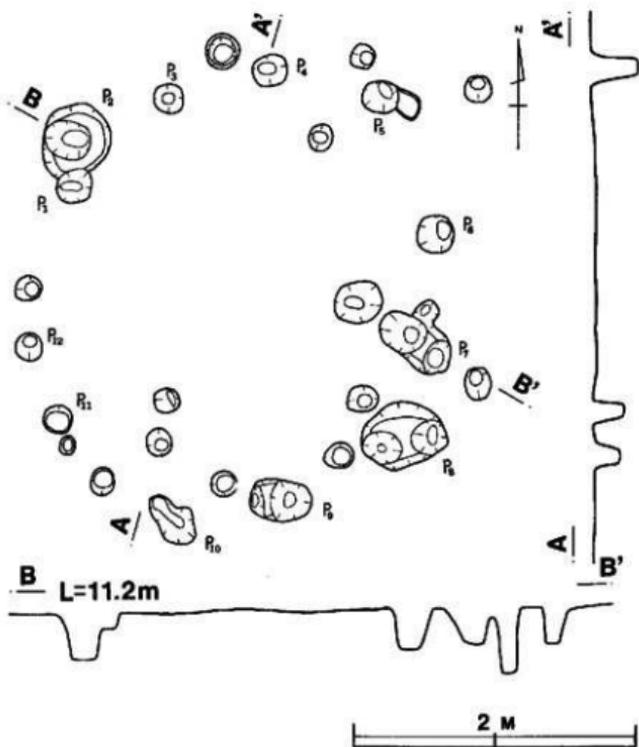
が黒色土中に営まれており、調査終了後に黒色土を除去したところ本住居址のピット列が確認された。

主軸方向はN-26°-Eで、長径約 3.8 m、短径約 3.3 m の楕円形を呈している。床面はロームで、締まりはなく、炉址も検出されなかった。ピットは 29ヶ所検出されたが、主柱穴とみられるものは P₁～P₁₂ である。それぞれ径 20～55 cm、深さ 30～63 cm を測る。

遺物として深鉢形土器の胴部片が覆土より出上している。

第 20 号住居址 (実測図 図 50、遺物 図 57・58)

本住居址は C 2 区南側に位置し、第 92 号・137 号土墳と重複している。新旧関係をみると、2 基の土墳とも住居址より新しいと考えられる。



第49図 第19号住居址

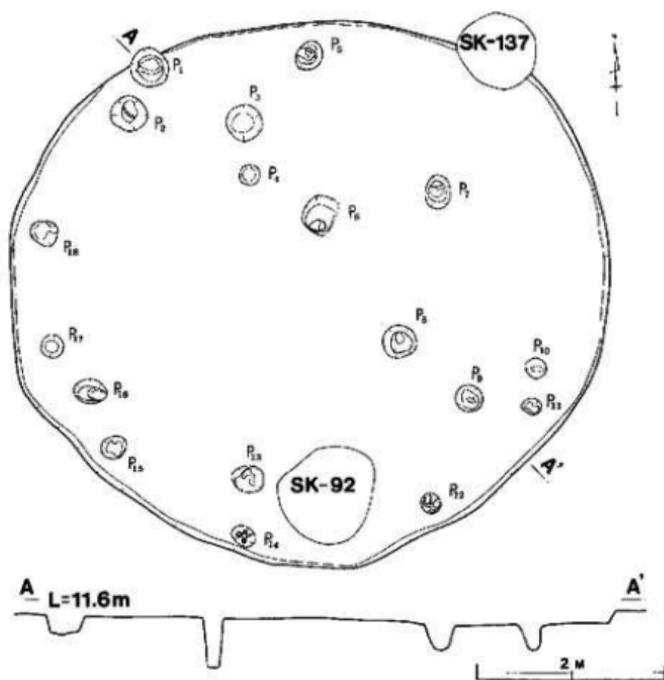
平面形は長径 6.35 m, 短径 5.83 m の不整形を呈している。遺構確認面と床面がほぼ同一レベルであったため、明確な壁は検出できなかったが、南東部で約 15 cm ほどの立ち上がりがあった。壁溝及び壁柱穴は存在しない。床面はロームで、中央部が若干締まりをおびている程度である。炉址はなかったものと思われる。遺構確認面と床面とが同一レベルであるため、覆土の状況は不明であるが、縄文上器片が多く出土している。なおピットは 18ヶ所検出されたが、径・深さとも小規模のものが多く、ともに 30 cm 前後である。

第 21 号住居址 (実測図 図 51, 遺物 図 56, 写 12-1・2)

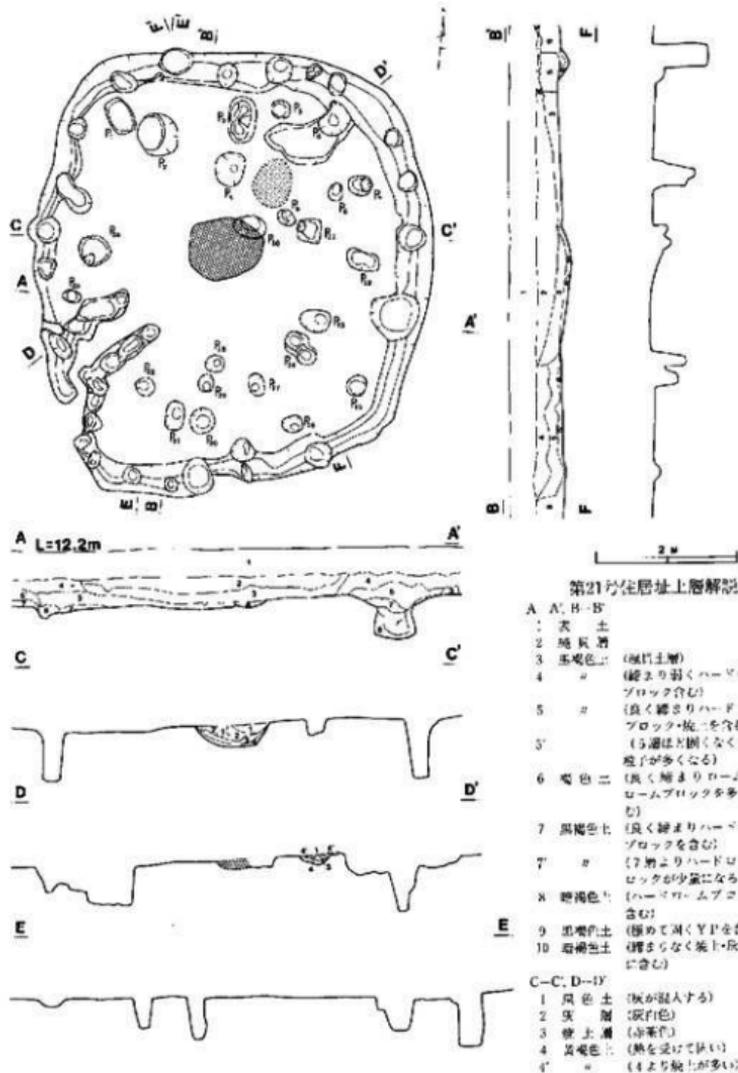
木住居址は C 2 区南西部に位置し南東方向に第 20 号住居址が所在している。

主軸方向はほぼ南北線上にあり、長軸 6.47 m、短軸 5.62 m の隅丸方形を呈している。壁は確認できなかったが、十層断面図でみると表土より第 2 層部分より掘り込みが開始され、床面までの深さは 40 cm を越えることがわかる。壁溝は南西コーナー部で切れている他は連続して検出され、幅 40 cm 前後、深さ 10 cm 程度の溝である。壁柱穴は 0.7~1.0 m の間隔をもって位置している。西及び北側の柱穴は比較的深いものも多く、40~71 cm である。これに対して東及び南側の柱穴をみると一部が深くなるだけで、他は径 30 cm、深さ 11~20 cm のものが多い。

床面は中央部が踏み固められて締まっているが、周辺部は軟らかい。また梅端な凹凹はみられないが、炉址周辺がいくらか高くなり、西側に向けてゆるい傾斜を有している。炉址は床面中央やや北寄りに検出された。長径 100 cm、短径 85 cm の楕円形を呈しており、床を 30 cm 掘り下げた地床状である。多量の灰、炭上の堆積がみられ、地山部も熱を受けてボロボロの状態であった。なおこの炉址の北東 40 cm の床面にも小規模な炉址が検出された。長径約 70 cm の楕円形で、床を皿状に 15 cm 程掘り下げたもので、内部には焼土の堆積もみられる。ピットは壁柱穴以



第50図 第20号住居址



第51図 第21号住居址

外に2ヶ所確認できた。深いもので76cm、浅いもので13cmと数値的にはバラツキがある。

覆土は上部に練瓦層がレンズ状に堆積していた。2層目は混貝土層で、この層は床面まで堆積していた。他の部分は黒褐色土及び暗褐色土であるが、いずれにしても住居廃棄後わりと早い時期に貝の投棄が始まったものと考えられる。出土遺物は少く、縄文土器片が40数点出土しただけである。

ところで本住居址では「出入口」とみられる部分が確認できた。これは南西コーナー部にあたり、一層してきた壁溝がつながらずにこの地点だけ床面が外側の地山と地続きになっている。この平坦な部分は幅15~40cmであり、その両側には深さ26~63cm程度のピットが連続して掘られ、溝状に深く落ち込んでいるようにみえる。平面図でわかる通り、最外部では幅50cmあり2度の屈曲をみせ、炉址方向に開いている。床の給まり具合からみても出入口と考えてよいと思われる。

第22号住居址（実測図 図52、遺物 図58、写13-1）

本住居址はC2区中央部に位置し、主軸方向はN-33°-E、長径5.0m、短径4.6mの円形を呈するものとみられる。遺構確認面と床面が同一レベルであったため、壁や壁溝は確認できず、多数のピット列としてとらえられた遺構である。床はロームで傾斜はなく、ほぼ平坦である。炉址は中央部に検出されたが、それほど良好なものではない。灰や焼土粒子を含む層は観察できたが、焼土自体の堆積はみられなかった。

さてピット列であるが、炉址を中心にして円形に並んでいるが、西側では2重に回っていることが確認できる。さらに第21号住居址で確認できた出入口と同様の形態をもつ遺構が、南西及び北東の2ヶ所に検出された。2軒の住居址が重複しているのかあるいは拡張された結果なのか、上層断面図が取れなかったこともあり断定はできない。

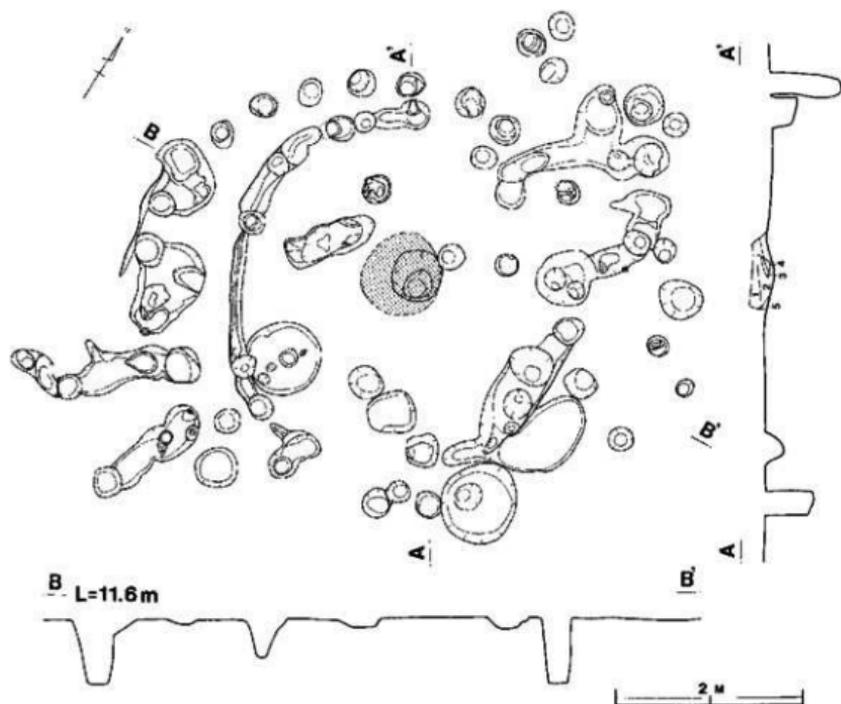
遺物はほとんどなく、縄文土器片10数点だけである。

第23号住居址（実測図 図53、遺物 図58）

本住居址はC2区北側、通路に接して検出されたピット列からなる遺構である。確認部分だけでみると東西5m、南北4.6mの半円形を呈している。

遺構確認面と床面が同一レベルであるため、壁や壁溝は確認できなかった。床面はロームであり、平坦で傾斜も有しない。しかし本来はもう少し上の面に床があった可能性が強い。炉址は確認できなかった。出土遺物は縄文土器片5点のみであった。

第24号住居址（実測図 図54、遺物 図58・59、写13-2）

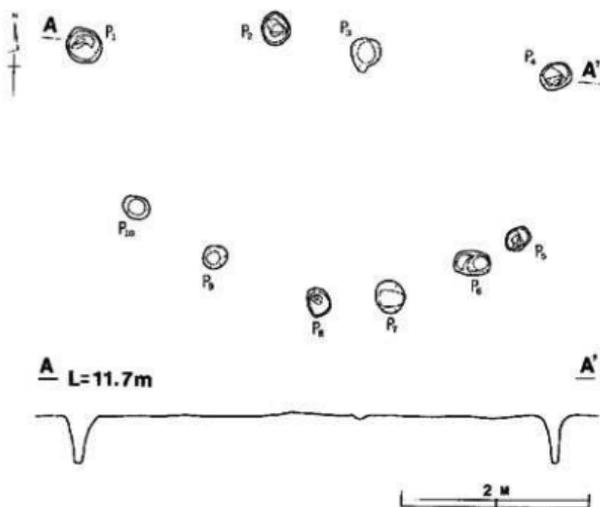


第52図 第22号住居址

第22号住居址土層解説

A A'

- 1 褐色土 (粘土質を含む)
- 2 暗褐色土 (灰・焼土粒子を含む)
- 3 灰褐色土 (灰を多量に含む)
- 4 赤褐色土 (灰土を多量に含み、熱を受けて縮まっている)
- 5 暗褐色土 (焼土粒子を含む)



第53図 第23号住居址

本住居址はC 2 又北西部に位置し、内部に第 139 号土壌が所在する。

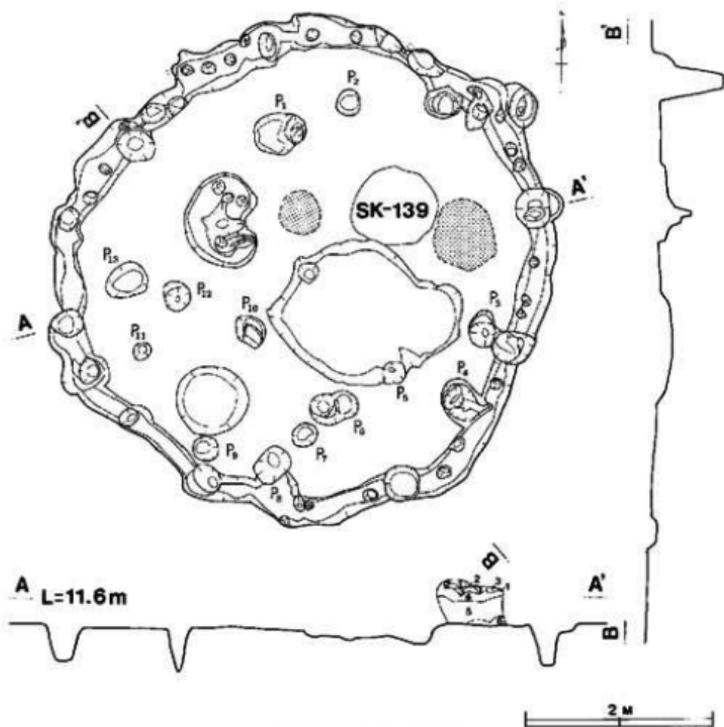
主軸方向はN-78° Eで、長径 5.67 m、短径 5.45 mの円形を呈している。壁は検出できなかったが、壁溝は縦 30 cm 前後、深さ 10 cm を測り、円形に向っている。壁柱穴は径・深さとも視別性がないが壁溝内に連続して検出された。径 15~50 cm、深さ 20~81 cm を測る。床面は中央部に向けてゆるい傾斜を有し、それほど踏み固められた様子はみえない。第 139 号土壌をはさむようなかたちで、東西に灰土の堆積が確認された。しかし床面の掘り込みは認められない。ピットは 13ヶ所検出された。それらの大きさは径 20~55 cm、深さ 18~50 cm を測る。

遺物は少く、縄文土器片、石製の破片等がある。

第 25 号住居址 (実測図 図 55、遺物 図 59・60、写 14-1)

本住居址は調査区西側 B1 区に位置し、第 177 号土壌と重複している。東側 0.6 m には第 176 号土壌が所在している。第 177 号土壌は本住居址の床を切っていることからより新しいと思われる。なお全体の半分以上がエリア外のため全体の調査はできなかった。

確認された範囲では主軸を東西線上に有し、短軸 3.8 m、長軸方向 2.7 m を測り、長方形を呈するものと推定される。壁はほとんどとらえることができなかったが、南側では約 10 cm の深さで外反して立ち上がることが確認できた。また壁柱穴と考えられる径 15~30 cm のピットが方形に連続して確認され、部分的ではあるがピットとピットをつないでいる溝状の落ち込みも検出できた。

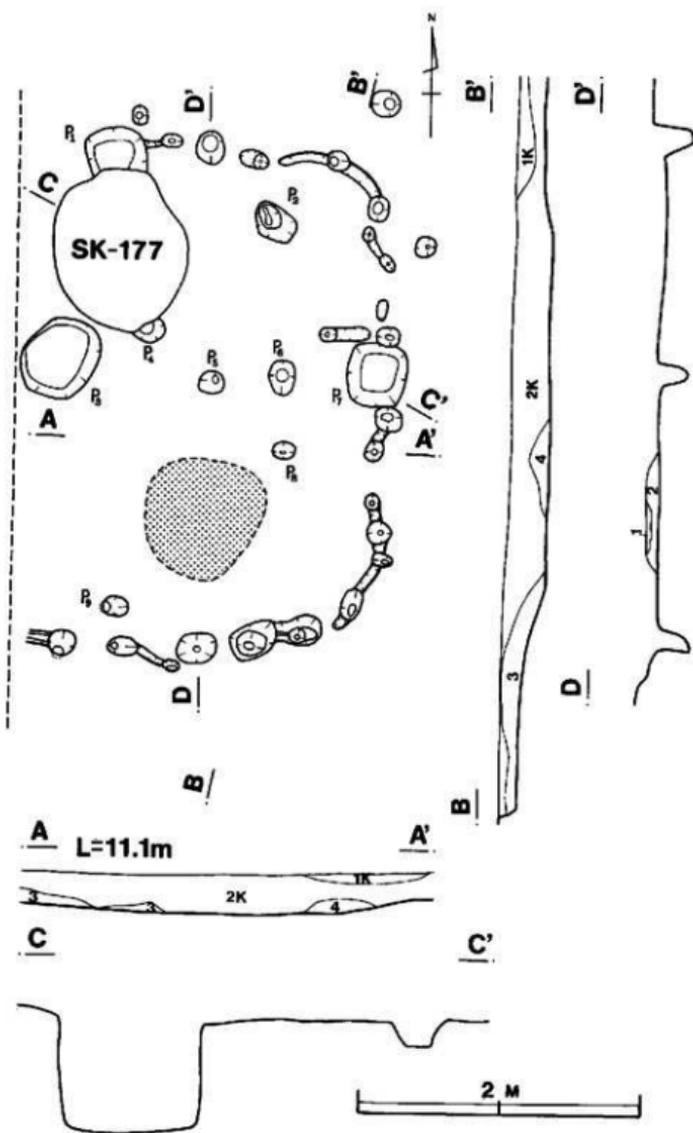


第54図 第24号住居址

第24号住居址土層解説

A A'

- 1 黒褐色土 (締まりなく焼土粒丁・灰・炭化物を含む)
- 2 濃い黄褐色土 (大部分が灰層, 灰土粒子を含む)
- 3 橙黄色土 (粘土)
- 4 黒褐色土 (締まり弱く焼土粒丁・炭化物・貝を含む)
- 5 ※ (よく締まりハードロームブロック・炭化物を含む)
- 6 暗褐色土 (ローム粒丁・炭化物を含む)



第55図 第25号住居址

床面はロームで、それほだまりはない。床面中央部が若干盛り上がっているが、周辺部は平坦である。炉址とみられる灰の堆積が南東コーナー付近に確認され、長径 90 cm、短径 85 cm を測る。灰及び炭化物を含む層で床面を掘り込んだ様子はみられない。ピットは 9ヶ所検出された。径 15~60 cm、深さ 16~38 cm を測る。覆土はその部分が灰層であった。混土上層が主で、部分的に混土貝屑も存在し床面まで堆積している。

出土遺物は多くの縄文土器片の他に、凹石、たたき石、打製石斧等がみられる。

第25号住居址上層解説

A-A', B-B'		D-D'	
IK	褐色土	1	馬糞色土 (灰と混ぜた貝殻を含む)
JK	黒褐色土	2	" (ほだまりなく炭化物を含む)
3	"		
4	"		

注: 3: 締まり強くハードフォームブロック・炭化物を含む。
4: 締まりなく灰ブロックの混入がある。

第26号住居址 (実測図 図62, 遺物 図56・57・60)

本住居址はB2区に検出され、他の遺構との重複はなかった。

主軸方向はN-6°Wで、長径 3.52 m、短径 3.31 m の楕円形を呈している。床面までの深さは約 50 cm で、壁は外反して立ち上がっている。壁溝はなく、明確な壁柱穴も検出できなかった。床面はロームで多少の凹凸をみせながら中央部に向けて傾斜を有している。炉址は最初からなかったものとみられる。ピットは 15ヶ所検出された。円形もしくは楕円形を呈し、径 14~34 cm、深さ 15~75 cm を測る。P₁・P₂・P₃・P₄などが主柱穴であろうか。覆土は黒褐色土・暗褐色土が3層に堆積し、自然流入の様相をみせている。

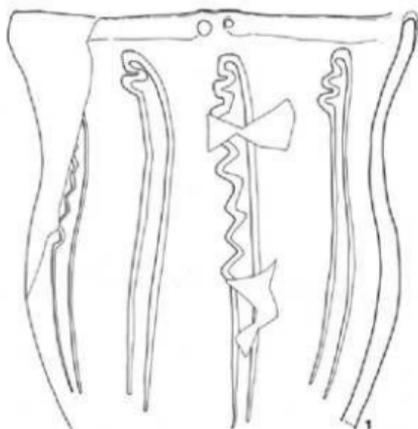
出土遺物として多数の縄文土器片、磨石、磁石などがみられる。

第27号住居址 (実測図 図63, 遺物 区57・61, 写14-2)

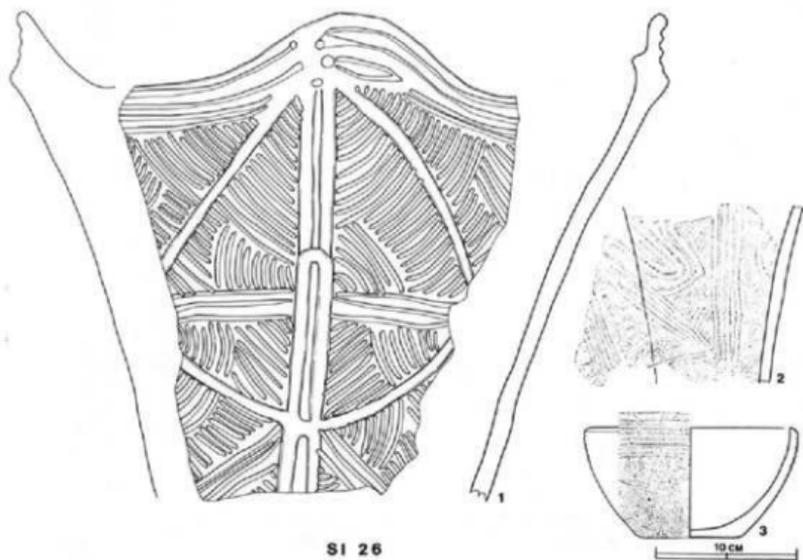
本住居址はB1区に位置し、第16号・19号住居址と重複している。

主軸を東西線上に行し、長軸 3.7m、短軸 3.41m の隅丸方形を呈する。遺構は黒色土中に確認され、貝及び焼土粒が全面に堆積していた。ただ確認面がすでに床面であったため、壁は検出できず、壁溝が幅 15~30cm、深さ 5cm の数値をみせて周回している。壁溝中からはピットが4ヶ所検出された。

床面は広く締まっておらず、貝破片の散布がみられほぼ平坦である。主軸線上中央に炉址をもっている。この炉址は長径 75cm、短径 60cm を測り、楕円形を呈する地床炉である。断面は逆台形で、床面から 20cm 程掘り下げである。内部には灰土・灰の堆積がみられた。ピットは9ヶ所

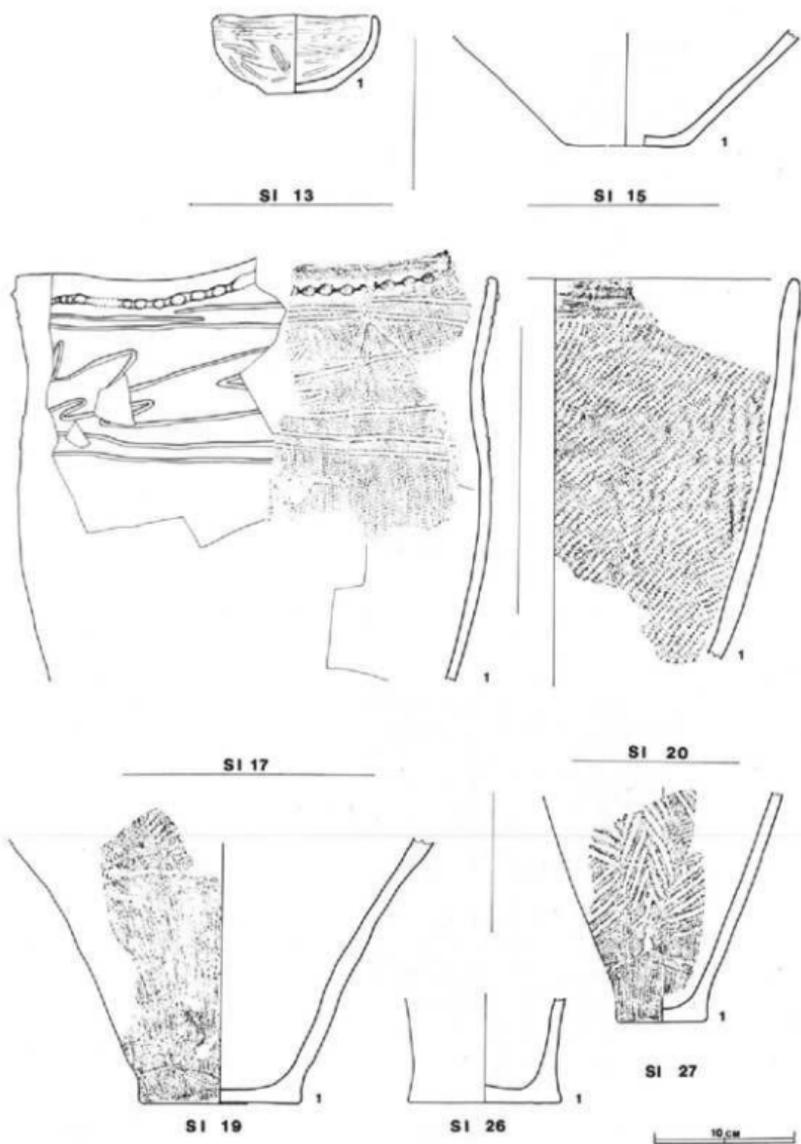


SI 21



SI 26

第56図 住居址出土遺物



第57图 住居址出土遺物



SI 17



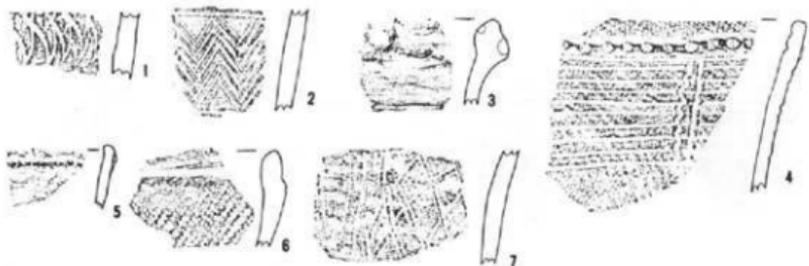
SI 20



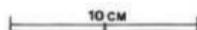
SI 22



SI 23



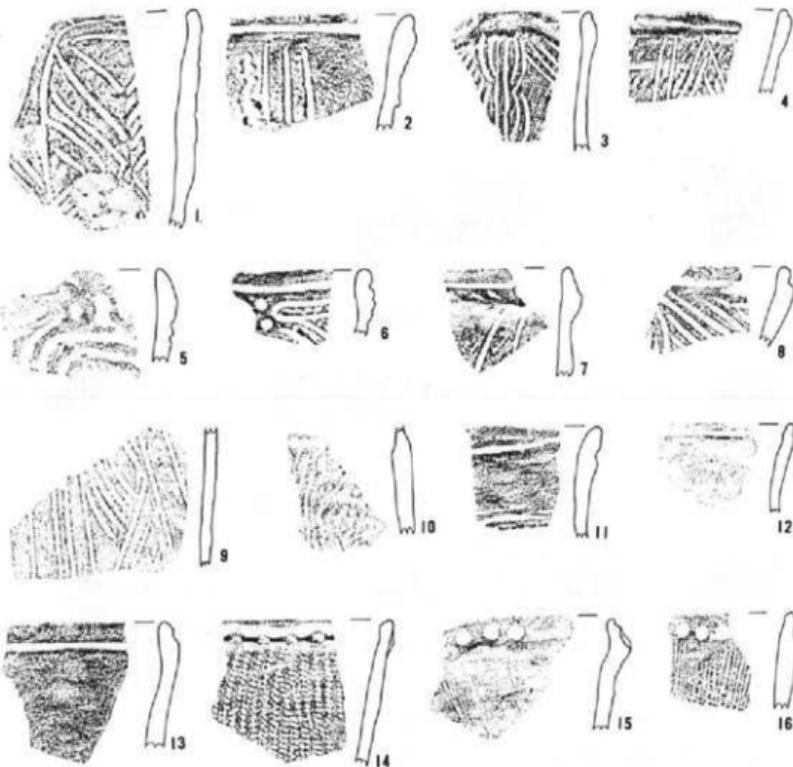
SI 24



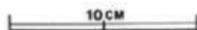
第58図 住居址出土遺物



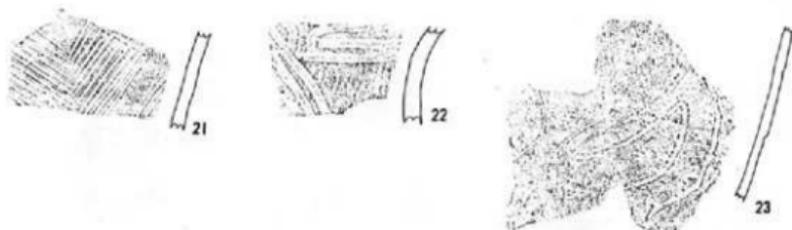
SI 24



SI 25



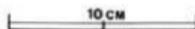
第59图 住居址出土遺物



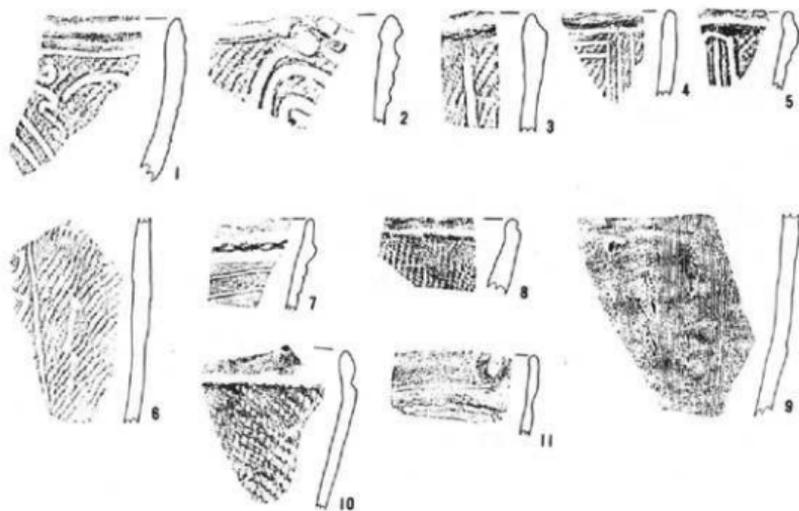
SI 25



SI 26



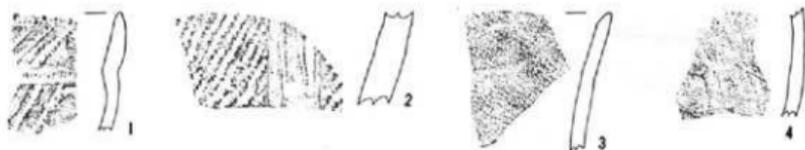
第60圖 住居址出土遺物



SI 27



SI 28



SI 29

10 CM

第61图 住居址出土遺物

表11 第56図 住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SI-21	1	深鉢形	口徑	28.6	口縁にイロヤの波線記・刺突を有し、口縁部 無文帯下に黒垂文が施される	胎色を早する。器之 内1式(写31-5)
			底径	29.4		
			現存高	26.4		
SI-26	1	深鉢形	口徑	45.0	口縁部に4×折の波線形を有するものと見わ れる。地文に縄文を施し、ナゲ型前後帯を 貼付け半条状に沈線を配する	外面は灰褐色で、内 面は黄褐色。器之内 1式波状口縁 (写31-1)
			底径	34.5		
			現存高	34.5		
	2	深鉢形	現存高	12.4	4本の垂下する沈線で並出し、間に間隔する 沈線文を配する	胎土に砂粒、砂礫を 含む。にぶい赤褐色 を呈する。器之内式
			口徑	(15.2)		
			底径	7.2		
	3	鉢形	口徑	(15.2)	口縁に平行な6本の沈線を施し、1段目と4 段目の沈線間には刺目を充満する。内外面 ともヘラナゲ	胎土に砂粒、砂礫を 含む。にぶい赤褐色 を呈する。器之内式 B式
			底径	7.8		
			現存高	7.2		

表12 第57図 住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SI-13	1	小型浅鉢	口徑	11.5	外面……ヘラ削り 内面……口縁部はヘラナゲ。胴部以下はヘラ 削り	胎土にスコリア粉粒 を含む黒褐色を早す る(写40-5)
			底径	5.6		
			現存高	4.4		
SI-15	1	鉢形底部	底径	7.6	内外面ともヘラナゲ 内面底部のみヘラ削り	胎土にスコリア砂粒 を含む。赤褐色を 呈する
			底径	8.7		
SI-17	1	深鉢形	口徑	33.6	口縁部に粘土紐を貼り付け、指跡による刺突 を施す。胴部は2段の平行沈線で2条の波状 線を配す	胎土に細砂粒を含 む。灰褐色を呈する (32-5)
			最大底径	33.6		
			現存高	28.4		
SI-19	1	深鉢底部	底径	18.7	胴部ト平は縄文(LR)を施す。胴部下平・ 底部はヘラ削り。内側はヘラ削り	胎土に砂粒を含む。 にぶい赤褐色を早す る
			底径	11.2		
SI-20	1	深鉢底部	口徑	34	全面に縄文(LR)が施されるが、口縁部に 黒文帯を有する	胎土に細砂粒・ス コリアを含む。暗褐色 を早する
			底径	27		
SI-26	1	深鉢底部	底径	12.4	全面ヘラ削り	胎土にスコリア・砂 礫を含む。にぶい黄 褐色を早する
			底径	10.7		
SI-27	1	深鉢底部	底径	16	地文として縄文(LR)を施し、刺突を施す 。沈線を配する	胎土にスコリア、砂 礫を混入する。赤褐 色を呈する
			底径	6.7		

表13 第58図 住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考											
SI-17	1	波状口縁			小波状口縁で、口縁に平行な沈線を施し、波 線及び蛇行する沈線を施す。地文は縄文	器之内式										
							2	口縁部		口縁部に左下がりの沈線3条を有す。地文は 縄文						
											3	口縁部	口縁部に平行な沈線をまわし、さらに螺旋状 の沈線が2段横位に施行される。地文は縄文			
														4	口縁部	沈線を付し、下部に平行沈線十列点刺突の手 法により逆じ字状の当帯を施す

出土遺構・区	遺物%	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-17	6	#		口縁部内側に凹溝を施す。縄文のみ	
	7	#		ヘラ彫形後、平行沈線・斜行沈線を施文する	
	8	波状口縁		大波状口縁の波頂部。若干の縄文を残す	
SI-20	1	胴部		沈線で区画された中に、米粒状の刺突文を充填する。ヘラ彫形	称老寺八
	2	#		斜行沈線の両側に層位の沈線を配し、さらに斜行沈線を施文する。地文は縄文	胴之内式
	3	#		縄文のみ	
SI-22	1	口縁部		口唇部埋まず。縄文のみ	
SI-23	1	口縁部		口縁部に筋線を付し、横位の沈線を施文する。地文は荒い縄文	
	2	胴部		縄文のみ	
SI-24	1	胴部		波状口縁文を施す	浮島式
	2	#		2本の沈線で区画された内部に半截竹管による平行沈線の山形に充填される	五瀬台式
	3	口縁部		口唇部表・裏面に刺突が施される	
	4	#		口唇部に筋線を付し、横走する10本の波線を施文し、所々層位の沈線を入れる。地文は縄文	
	5	#		腹めて用い縦線を貼り付ける	
	6	#		太い沈線で口唇部を区画し、胴部は地文	
	7	胴部		層位及び斜行する沈線を施文する	

表14 第59図 住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物%	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-24	8	胴部		傾方向の細い条線に不規則な刺突文を加える	
	9	#		縄文のみ	
	10	#		縄文のみ	
SI-25	1	口縁部		直縁及び波状の沈線で輪郭を埋める。地文は縄文	胴之内式
	2	#		口唇部に1本の沈線をめぐらし、直縁及び斜行状の沈線を共に施文する。地文は縄文	#
	3	#		ゆるい波状口縁を呈し、腹位に平行沈線を施文し、両側に異位の沈線を配する。地文は縄文	#
	4	#		口唇部に1本の波線を付し、斜行沈線を施文する。地文は縄文	#
	5	#		波状口縁の波頂部で、山形刺突文から直縁状の沈線がのびる	#
	6	#		口縁は内湾し、口縁に平たな沈線をめぐらす。内形刺突文を2層施し、横位・斜位の沈線を施文する	#

出土遺構・区画No.	遺物No.	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-25	7	口縁部		口縁に平行な沈線を行し、直下に列点刺突を配す。胴部に斜行沈線そのほか	*
	8	口縁部		口縁に平行な沈線を行し、斜行及び弧状の沈線を描す	*
	9	胴部		縦位の平行沈線の間に斜行沈線を施文する	*
	10	口縁部		灰色縄文地に数条の沈線を縦位に施文する	
	11	口縁部		口縁は外反し、数条の沈線が横走する。ヘラ刷り	
	12	口縁部		口縁は外反し、1条の沈線が内側についている。ヘラ刷り	
	13	口縁部		口縁はゆるく内凹し、口縁部に平行な沈線が1条横走する	
	14	口縁部		口縁部に横線を配し、胴部は縄文のみ	
15	口縁部		口縁部はくの字状に折曲し、3割1単位の間で斜行刺突を施す。胴部は斜行沈線	胴之内式	
16	口縁部		口縁部に円形刺突を行し、左下がより右下がりの形で沈線を施文する	*	

表15 第60図 住居址出土遺物

出土遺構・区画No.	遺物No.	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-25	17	口縁部		口縁は内彎する。縄文のみ	
	18	口縁部		縄文のみ	
	19	口縁部		横位及び斜行する沈線を描す	
	20	胴部		縄文のみ	
	21	口縁部		沈線を直交させて文様帯をつくり、その間は縄文を描める	
	22	口縁部		頸部と思われ、半截竹管による平行沈線を施文する	
	23	口縁部		内縁状の沈線を描す。縄文は近くまばらな縄文	
SI-26	1	胴部		縦位沈線を縦位に施し、竹管刺突を配する	
	2	口縁部		頸部を帯状に貼り付け、下に刺突を配する	
	3	口縁部		縦位で口縁部と区画され、沈線を縦位に引く。器之式地文は縄文	
	4	口縁部		沈線で四角形を描き、内面は縄文を施文する。外は磨消し	
	5	口縁部		3条の沈線を平行に施文し、下部を波状沈線で埋める	
	6	胴部		No.5と同一個体であろう	
	7	口縁部		くびれ部に縦線を配し、その上下とも横方向の斜行沈線を描す。縄文は縄文	田舎利B式
	8	口縁部		外反する口縁で斜めの横の刺突を描す	

表16 第61回 住居址出土遺物

出土遺物・区	品名	器料・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	装 束
SI-27	1	口 縁 部		内壁する口縁に平行して2本の沈線が引る。胴部にかけて進行・互線・曲線状の沈線を施す	彫之内式
	2	"		ゆるやかな波状の口縁の波道部で、円形を以て中心に、口縁に平行する沈線、蛇行沈線が引ける	"
	3	"		口縁部が内み、縦位の沈線を施す。地文は縄文	"
	4	"		横位・縦位の沈線。地文は縄文	"
	5	"		口縁部に1本の沈線を配し、縦位の沈線を施す。地文は縄文	"
	6	胴 部		蛇行沈線及び縦位の沈線を施す。地文は縄文。	"
	7	口 縁 部		口縁部に屈折を付し、横位の沈線を施す。沈線間には縄文を充填する	"
	8	"		口縁部に平行な沈線を配する。胴部は縄文	"
	9	胴 部		二重竹管による同心沈線を縦位及び斜位に施す	"
	10	口 縁 部		小突起を有する口縁で、太い沈線を配する。胴部は縄文	"
	11	"		縦位・斜位状の突起を有する	"
SI-28	1	胴 部		横位及び斜位の沈線を施す	
	2	口 縁 部		口縁に波条の沈線を横位にあてらう	
	3	胴 部		斜位沈線を施す	
SI-29	1	口 縁 部		沈線で直線的な文様を区画し、その沈線に沿って刻突を打てる	
	2	胴 部		縦位に高消し部を配し、この両端に縦位の沈線を引く。地文は縄文	
	3	口 縁 部		口縁部は外反し。縄文のみ	
	4	胴 部		細い沈線が斜行する	

検出された。直径は18~38cmを測るが、P₁・P₂は大きな掘り込みで底部に複数のピットを持ち、本遺構では特異である。覆上は10cm弱の部分しか確認できなかったが、ほとんどの層に貝殻片の混入が認められた。

出土遺物は縄文土器片多数の他に、小型深鉢形土器の胴~底部片、磨石片などがある。

第28号住居址 (実測図 図64, 遺物 区61)

本住居址はC2・D2両区にまたがって検出され、第4号住居址と重複している。新旧関係をみると第4号住居址は本住居址を切って営まれており、明らかに本住居址の方が古いと思われる。

主軸方向はN 53°-Eで、長径4.15m、短径3.5mの不整五角形状の平面形を呈している。床面までの深さは15cmで、壁は外傾して立ち上がっている。壁溝・壁柱穴はみられない。床面は踏み詰められた形跡はみえず、平口である。炉址はない。北西壁側に長径1.15m、短径1.05mを測る楕円形のピットがある。このピットの深さは45cmで底は平頂である。貯蔵穴と考えてもよいと思われる。その他に17ヶ所のピットが検出された。径23~45cm、深さ10~53cmを測り、P₁~P₆が主柱穴になるとと思われる。覆上は暗褐色土層が主で、この地区は貝層が分布していた場序にあたり、その一部とみられる混貝土層も部分的にみられる。

出土遺物は縄文土器片10数点がある。

第29号住居址 (実測図 図65, 遺物 図61, 写7-2)

本住居址はB2区に位置し、第26号住居址の南東約6mに当たっている。

主軸方向はN-83°-Eで、長径3.94m、短径3.52mの楕円形を呈している。床面までの深さは壁近くで20cm、中央部で38cmを測る。壁は南及び北側では2段掘り込みになっており、1段目の深さ15cm、2段目は35cmである(南壁)。壁構は回っていない。

床面はロームで、中央部に向けてゆるく傾斜している。炉址は検出されなかった。ピットは14ヶ所検出され径10~45cm、深さ10~64cmを測る。P₁~P₆が主柱穴であると思われる。中でもP₃とP₄は主軸線上に位置している。覆上はおおむね4層であり、1~3層までは炭化物を含んでいるのが観察できた。いずれにしても本住居址は自然堆積の様相をみせている。

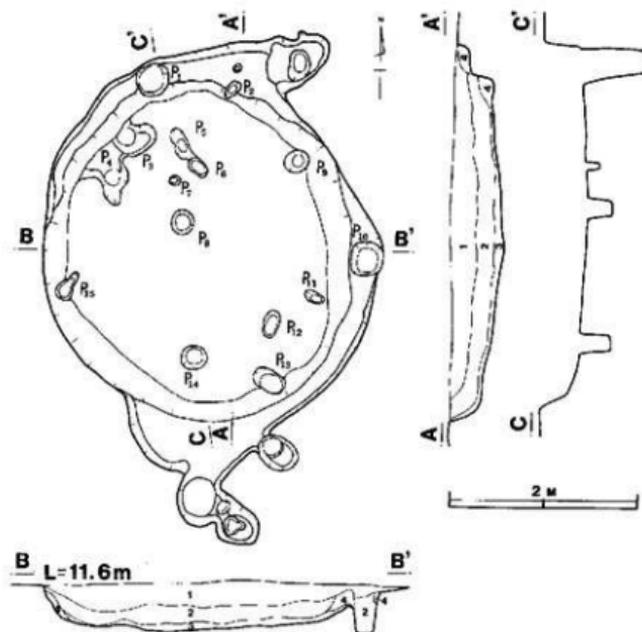
遺物として、覆土内より30数点の縄文土器片が出土した。

第29号住居址土層解説

A・A'・B・B'	4 極暗褐色土 (多量のYPを含む)
1 黒褐色土 (少量のYPを含む)	5 暗褐色土 (YP・細土灰を含む)
2 " (少量のハードロームブロックを含む)	6 " (少量YP・ハードロームブロックあり)
3 " (少量のハードローム粒子・炭化物粒子を含む)	7 褐色土 (ハードロームブロックを含む)
	8 " (細土あり、YPを含む)

- 9 黒褐色土 (少量のハードロームブロックを含む)
 10 褐色土 (粘りあり)
 11 暗褐色土 (少量のハードロームブロックを含む)

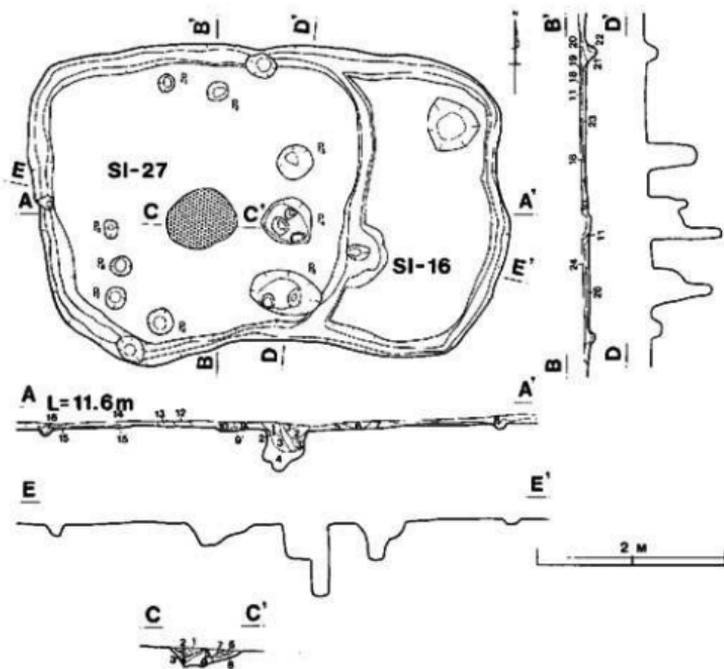
- 12 * (多くのハードロームブロックを含む)
 13 * (粘りあり、少量のY.P.を含む)



第62図 第26号住居址

第26号住居址土層解説

- 1 黒褐色土 (炭化物・ローム粒子を含む)
 2 * (よく解ま)ハードロームブロック・ローム粒子を含む)
 3 暗褐色土 (ローム粒子を多く含む)
 4 * (ハードロームブロック・ローム粒子を含む)



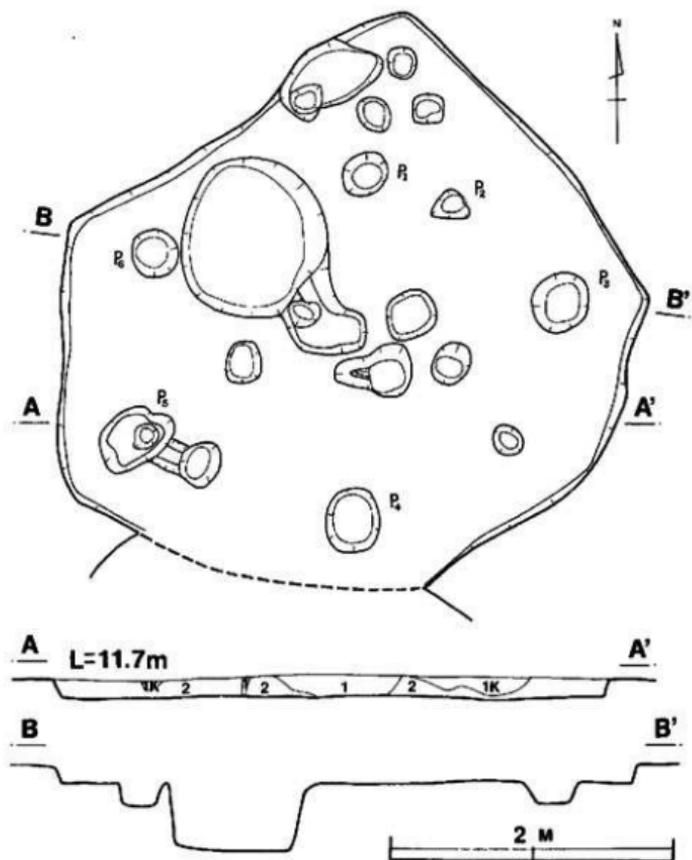
第63図 第16・27号住居址

第16号・第27号住居址土層解説

A-A', B-B'

- 1 極暗褐色土 (焼土粒子・炭化物・貝殻片を含む)
- 2 暗褐色土 (Y P・灰土・炭化物を含む)
- 3 # (焼土粒子・ハードローム・貝殻片を含む)
- 4 # (ハードロームブロックを含む)
- 5 極暗褐色土 (柔らかくY P・貝殻片を含む)
- 6 暗褐色土 (貝・焼土粒子を含む)
- 7 極暗褐色土 (Y P・焼土を含む)
- 8 極暗褐色土 (Y P・灰土粒子を含む)
- 9 暗褐色土 (柔らかく多量の灰を含む)
- 9' # (焼土・貝・Y P・炭化物を含む)
- 10 灰褐色土 (多量の灰・貝を含む)
- 11 暗褐色土
- 12 黒褐色土 (ハードロームブロック・焼土粒子を含む)
- 13 # (貝・焼土を含む)
- 14 # (Y P・焼土粒子を含む)
- 15 # (ハードロームブロック・焼土粒子を含む)

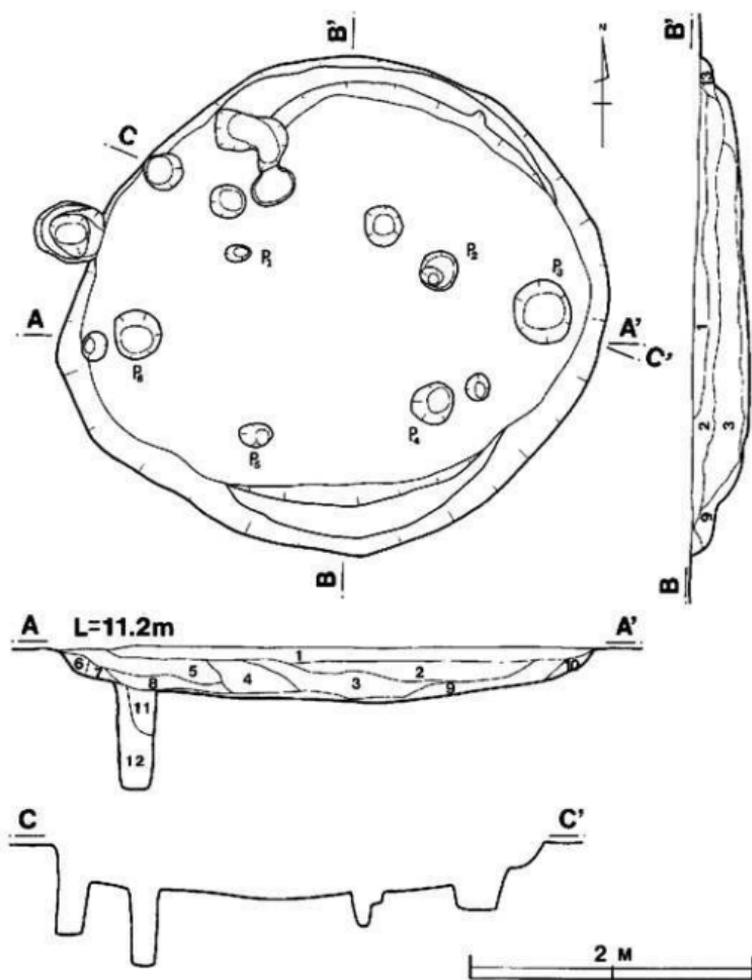
- 16 暗褐色土 (焼土粒子・炭化物を含む)
- 17 黒褐色土 (炭化物・焼土粒子・貝殻片を含む)
- 18 # (焼土粒子・貝殻片を含む)
- 19 暗褐色土 (多量の焼土粒子を含む)
- 20 極暗褐色土 (ハードローム・炭化物・貝殻片を含む)
- 21 暗褐色土 (焼土・炭化物を含む)
- 22 # (Y P・炭化物を含む)
- 23 黒褐色土 (焼土・ハードロームを含む)
- 24 極暗褐色土 (焼土・炭化物を含む)
- 25 # (焼土・貝殻片を含む)
- 26 # (焼土粒子・ハードロームブロックを含む)



第64図 第28号住居址

第28号住居址の層解説

- 1 茶褐色土 (よく締まりY P・ハミスを含む)
 IK " (凝結土層)
 2 " (よく締まりY P・第二粒子多含む)



第65图 第29号住居址

表17 住居址一覧表(1)

住居址No.	地 区	主軸方向	長軸 × 短軸(m)	庫高(m)	材 料	備 考
0 1	D ₂ a ₁ , a ₂ b ₁ , b ₂	N 23 E	4.15 ×	0.05	/	隅丸方形 ヒット5
			3.7			
0 2	D-a ₁ , a ₂	N-87-W	3.75 ×	0.15 }	/	不整形
			2.9	0.2		
0 3	D ₁ a ₁ , a ₂ b ₁ , b ₂	N 8 E	4.13 ×	0.05 }	/	隅丸方形 ヒット4
			3.76	0.3		
0 4	D ₂ a ₁ , a ₂ b ₁ , b ₂	/	4.63 ×	0.05 }	/	凹 形 ヒット15
			4.5	0.2		
0 5	D ₂ a ₁ , a ₂ b ₁ , b ₂	N-85-W	4.24 ×	0.2 }	?	凸凹形 ヒット11
			3.9	0.3		
0 6	C ₁ c ₁ , c ₂ e ₁ , e ₂	N-7-W	5.05 ×	0.12 }	/	隅丸方形 ヒット12
			4.0	0.15		
0 7	C ₂ a ₁ , a ₂ b ₁ , b ₂	N 30 E	4.7 ×	0.05 }	○ 地床知	方 形 ヒット9
			4.7	0.1		
0 8	D ₂ a ₁ , a ₂ b ₁ , b ₂	/	4.4	0.25 }	/	凸 形 ヒット9
				0.37		
0 9	C ₂ f ₁ , f ₂ g ₁ , g ₂	N-90	6.8 ×	/	○ 地床知	長方形 ヒット35
			5.35			
1 0	C ₁ , i ₁	N 34 E	5.0 ×	0.05 }	○ 地床知	楕円形 ヒット23
			4.26	0.2		
1 1	C ₁ f ₁ , f ₂ g ₁ , g ₂	/	5.2	/	○ 地床知	凹 形 ヒット23
1 2	C ₂ g ₁ , g ₂ h ₁	/	2.75	0.2	/	凹 形 ヒット3

表18 住居址一覧表(2)

住居址No	地区	主軸方向	長軸 × 短軸(m)	高さ(m)	印 址	備 考
13	C ₁ , i ₁	N-45-W	3.0	0.07	○	楕円形 ヒット3
14	C ₁ , i ₁	/	3.4	0.08 / 0.15	/	方形 ヒット7
15	C ₁ , i ₁	/	3.2 × 1.4	0.07	/	長方形 ヒット2
16	B ₁ , i ₁ B ₂ , i ₂	N-90	3.21 × 1.5	/	/	隅欠方形 ヒット2
17	C ₂ d ₁ , d ₂ d ₃	N-25-E	5.5 × 5.0	0.05 / 0.23	/	楕円形 ヒット18
18	C ₂ c ₁ , c ₂ d ₂	/	5.6	/	?	円形 ヒット11
19	B ₁ , i ₁	N-26-E	3.8 × 3.3	/	/	楕円形 ヒット29
20	C ₂ g ₁ , g ₂ h ₁ , h ₂ i ₁ , i ₂	/	6.35 × 5.83	0.15	/	不整形
21	C ₂ g ₂ , g ₃ h ₁ , h ₂	N-0	6.47 × 5.62	/	○ 地床が	涙丸方形 ヒット24
22	C ₂ d ₁ e ₁ , e ₂	N-33-E	5.0 × 4.6	/	○ 地床が	円形 ヒット列として確認
23	C ₂ a ₁ , a ₂ a ₃	/	5.4 × 4.6	/	/	円形 ヒット列として確認
24	C ₂ b ₁ , b ₂ c ₁ , c ₂	N-78-E	5.67 × 5.45	/	○ 地床が?	円形 ヒット13

表19 住居址一覧表(3)

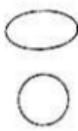
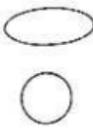
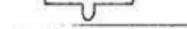
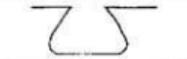
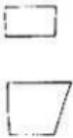
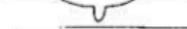
住居址No.	地 区	主軸方向	長軸 × 短軸(m)	壁高(m)	材 質	備 考
25	B ₁	/	d ₁ 3.8	0.1	?	長方形
			e ₁ 2.7			ビット9
26	B ₂	N-6°-W	g ₁ g ₂ 3.52	0.5	/	楕円形
			h ₁ h ₂ 3.31			ビット15
27	B ₁ i ₁ i ₂	N-90°	3.7	/	○ 地味材	隅丸方形
			× 3.41			ビット9
28	C ₁ a ₁ b ₁ D ₂ a ₁ c ₁ a ₁	N-53°-E	4.15	0.15	/	不整五角形
			× 3.5			ビット18
29	B ₂	N-83°-E	i ₂ i ₃ 3.94	0.35	/	梯形
			j ₂ j ₃ 3.52			ビット14

2. 土 壤

〈土壌の形態分類について〉

本遺跡では200基以上の多数の土塚が検出されたため、これらを整理の都合上いくつかのグループに分けそれをさらに細分する方法をとった。

分類の基本は平面・断面・深さ・ピットの有無の4点であり、出土遺物や時間的な要素は考えていない。大別すると3グループになったが、次の通りである。

グループ	平 面 形	断 面 形	類
A			A
			A1
			A'
			A1'
B			B
			B1
			B1'
C			C
D			D
			D1
			D'
E	A~Dグループのいずれにも属さず、かつ平直形が不定形のもの		

A・B・Dの3グループは深さにより細分してあるが、その深さはおおむね40~50cmを細分化の基準とした。

表20 土壤一覽表(1)

取	取	平面形状	長軸方向	長径(00)× 短径(00)m	深さm	備	考	分類	実測寸・写真
001	D ₂	b _r 長楕円形	N-29-W	1.87 × 1.11	0.24	北壁にピット1, 且 層あり		A1	図66
002	D ₁	c _r 隅丸方形	N-0'	(N-S)1.68 (E-W)1.5	0.18	層あり		/	図66
003	D ₂ b ₀	不整形	N-17-E	1.78 × 1.70	0.12			A	図66 (写17-1)
004	D ₂	b _r 不整形	N-58-E	1.50 × 1.36	0.25	ピット4, 土器片, 乙銀1		A1	図66
005	D ₂ c ₀	楕円形	N-23-W	1.28 × 0.98	0.09	ピット2		A1	図66
006	D ₂ c ₀	楕円形	N-15-W	1.49 × 1.05	0.06	騎馬北側にピット1		A1	図66
007	D ₂ c ₇	/	/	/	0.45	住宅の基礎にあたって いた		/	図66
008	D ₂	b _r 不整形	N-72 E	1.59 × 1.09	0.23	SI-03と重複する, 新旧関係は不明		A	図66
009	D ₂ b ₀	隅丸方形	N-85-W	0.77 × 0.63	0.11	SI-03と重複する		D	図66
010	D ₂ c ₀	楕円形	N-9-E	1.05 × 0.68	0.25			A	図66 (写17-2)
011	D ₂ c ₀	不整形	N-83-W	1.75 × 1.14	0.18			A	図66 (写17-3)
012	D ₁	b _r 長楕円形	N88 W	1.9以上 × 1.08	0.14	東側はノリアケ, 石 竃1		A	図67

表21 土壌一覽表(2)

土壌No	地 区	平面形状	長軸方向	長径(m)× 短径(m)	深さ(m)	備 考	分類	実測写真
013	D ₂ b ₁	不整三角形	N-17°-E	1.93 × 1.52	0.15	旗底凹凸多し、ビット7、層石片	D1	図67
014	D ₂ a ₃	隅丸長方形	N-45°-W	1.88 × 1.00	0.32	SI-05と重複、底まで洗貝上層が堆積する	D	図67
015	D ₂ b ₂	楕円形	N-5°-W	1.11 × 0.72	0.29	SI-05と接する護土上部は洗貝土層	A	図67
016	D ₂ b ₄	楕円形	N-57°-E	1.63 × 1.42	0.95	出壁 オーバーハンク、旗底まで混土貝層、浅鉢形土層	C	図67 (7/17-5)
017	D ₂ a ₂	楕円形	N-78°-W	1.4 × 1.1	0.18	SI-08 重複	A	図67
018	D ₂ b ₅	楕円形	N-36°-E	1.29 × 0.93	0.32	SI-05と重複、旗底まで洗貝層	A	図67
019	D ₂ a ₂ a ₃	不整楕円形	N-29°-E	1.11 × 0.90	0.82	オーバーハンク部の径1.4 m、旗底の径1.0 m	C	図67
020	D ₂ b ₂	円形	N-17°-E	1.07 × 1.03	1.13	オーバーハンク部の径2.4m、貝層あり	C	図68 (7/17-6)
021	D ₂ a ₄	楕円形	N-1°-E	1.80 × 0.84	0.38	混土貝層あり	A	図68
022	D ₂ b ₄	楕円形	N-6°-E	1.48 × 1.36	0.45	SI-08と重複混土貝層あり、多量の軟骨	B'	図68
023	D ₂ a ₄	不整楕円形	N-65°-W	1.82 × 1.70	0.45	SI-08と重複、ビット1、混土貝層あり	A'	図68
024	C ₂ a ₄	/	/	(N-S)1.02 (E-W)0.85	0.35	東側エリア外	/	図68

表22 土壌一覧表(3)

七標No	地区	平面形状	長軸方向	長(深淵)× 短(淵)mm	深さm	備 考	分類	実測区・写真
025	C ₂	c ₂ d ₂ 櫛 円 形	N 90°	1.58 × 1.02	0.22	ビット2、腐心	A1	図68
026	C ₂	g ₂ h ₂ 隅 丸 方 形	N 55° W	1.42 × 1.20	0.13	小ビット多し、断面 図からC類と推定し た、純貝層	C	図68
027	C ₂ h ₂	不整端円形	N-61°-E	1.49 × 0.68	0.08		A	図68
028	C ₂	g ₂ g ₂ h ₂ h ₂ 長 楕 円 形	N 85° E	2.54 × 1.26	0.1	ビット1	A1	図68
029	C ₂ h ₂	楕 円 形	N 0°	1.65 × 1.25	0.3	湖底が2段になる	A	図68
030	C ₂ h ₂	不整楕円形	N-61°-E	1.65 × 1.48	0.62	ビット2、覆土上部 に浮貝土層あり	A1	図69
031	C ₂ c ₂ c ₂	楕 円 形	N-20°-E	1.14 × 0.89	0.15	ビット1	A1	図69
032	C ₂ a ₂	/	N-0° (N-S) 1.0以上 (E-W)1.24		0.37		A	図69
033	C ₂ a ₂	楕 円 形	N 85° W	1.57 × 1.18	0.18	ビット2	A1	図69
034	C ₂ h ₂	楕 円 形	N-85°-E	1.47 × 1.24	0.2		A	図69
035	C ₂	a ₂ a ₂ 長 楕 円 形	N-6°-W	3.04 × 1.53	0.23	ビット2、貝層が混 入	A1	図69
036	C ₂	b ₂ ,b ₂ c ₂ ,c ₂ 楕 円 形	N 62° -E	2.27 × 1.65	0.4		A	図69

表23 土壌一覧表(4)

土壌No	地区	平面形状	長狭方向	長径(m)× 短径(m)	深さ(m)	備 考	分類	実測図・写真
037	C ₂ b ₁	長楕円形	N-54°-E	2.49 × 1.47	0.14		A	図69
038	C ₂ c ₂	楕円形	N-40°-E	0.99 × 0.78	0.13		A	図70
039	C ₃ b ₁ c ₂	楕円形	N-43° W	1.17 × 0.82	0.18		A	図70
040	C ₂ b ₁ c ₂	楕円形	N-55°-W	1.48 × 0.84	0.11		A	図70
041	C ₂ c ₂ c ₂	楕円形	N-58°-W	1.06 × 0.73	0.13	溝底東側2段掘り込み、ピット1	A1	図70
042	C ₂ a ₁	不規則楕円形	N-77°-E	1.84 × 1.49	0.75	オーバーハング部の 径2.15m、円心	C	図70 (写18-1)
043	C ₂ c ₂	楕円形	N 19°-W	0.71 × 0.56	0.27		A	図70
044	C ₂ c ₂	/	/	(N-S)1.45 (E-W)1.1	0.34	東側は通路	A1	図70
045	C ₂ R ₂ h ₁	涙丸長方形	N 2°-E	1.95 × 1.58	0.25		D	図71
046	C ₂ b ₂	楕円形	N-64° E	1.36 × 1.09	0.25		A	図70
047	C ₂ i ₂	/	/	(N-S)0.8 (E-W)0.66	0.15	南側通路	/	図70
048	C ₂ h ₁ , h ₂ i ₂ , i ₁	楕円形	N-16° E	3.03 × 2.53	0.29	SI 13と重複	A	図72

表24 土壤一覽表(5)

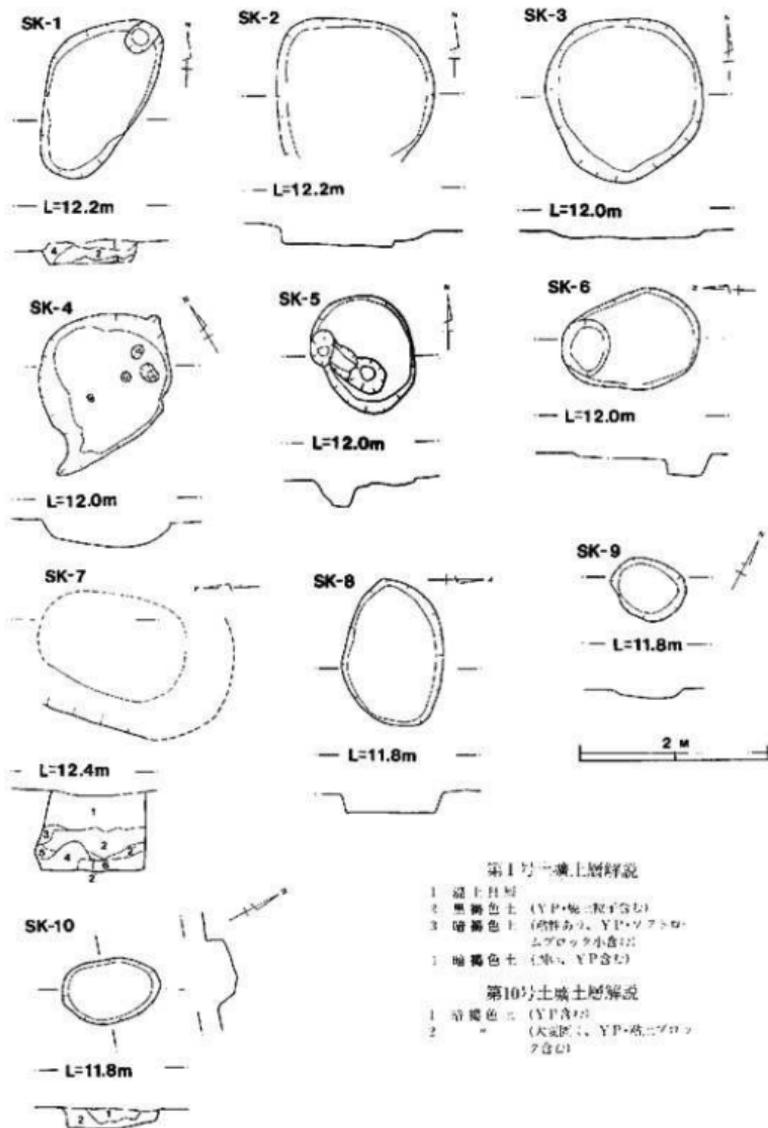
土壌No.	地区	平面形状	長軸方向	長径 \times 短径 \times 傾斜 \times 傾斜 \times	深さm	備 考	分期	実測寸・写真
049	C _{3b}	不整形円形	N 58° E	1.71 \times 1.2	0.47	南側は道路、石皿	B'	図70
050	C _{3a}	/	/	(N-S)0.73 E-W)0.9;	0.52	SK-047 と接する。 城底が同心、且形二 舌	/	図70
051	C _{3b}	/	N-7°-W	2.11 \times 1.5	0.08	SD-1 と重複	/	図71
052	C _{3c}	楕円形	N-7°-W	1.56 \times 1.08	0.42		A	図71
053	C ₃	b ₃ 隅丸長方形 c ₃	N 90°	1.93 \times 0.98	0.55	城底は2段掘り込み	B'	図71
054	C _{3c}	長楕円形	N-86°-W	1.04 \times 0.72	0.22	ピット4	A'	図71
055	C ₃	g ₃ 隅丸長方形 h ₃	N-38°-W	2.76 \times 1.74	0.28	城底は2段掘り込 み。ピット7、泥付 土層あり	D	図71
056	C _{3g}	楕円形	N-73°-W	1.17 \times 0.85	0.07	凹石	A	図72
057	C _{3b}	不整形形	N-13° W	0.98 \times 0.91	0.09	SI-07 と重複	A	図72
058	C _{3b}	楕円形	N-26°-W	1.85 \times 1.19	0.18	SD 1と重複、ピッ ト1	A1	図72
059	C _{3b}	長楕円形	N-6°-E	1.36 \times 0.65	0.09	SI 07 と重複	A	図72
060	C _{3a}	不整形形	N 38°-E	1.78 \times 1.33	0.15		A	図72

表25 土壌一覽表(6)

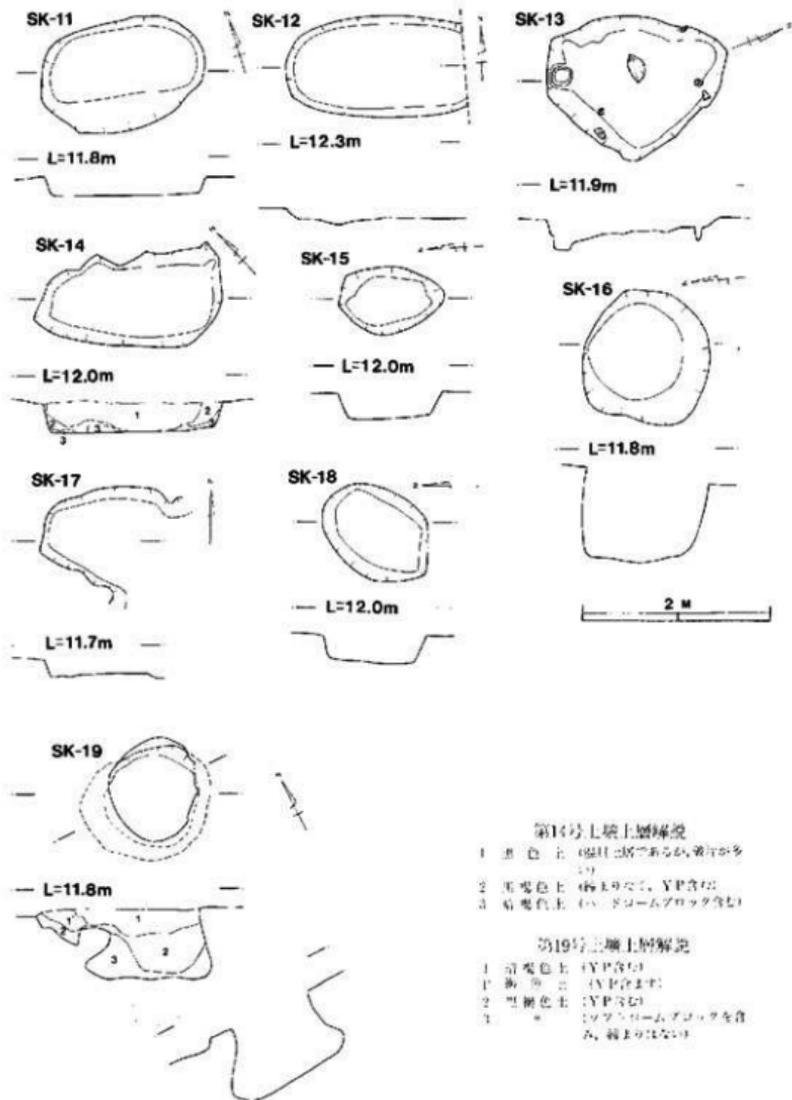
土層No.	地区	平面形状	長軸方向	長径m × 短径m	深さm	備考	分類	実測図・写真
061	C ₁ i	楕円形	N-76°E	0.95 × 0.8	0.15	SK-060 に接する ヒット1	A	図72
062	C ₁ i ₂	楕円形	N-10°E	1.65 × 1.07	0.15	SK-081 と重複	A	図72
063	C ₁ h ₂	不整楕円形	N 43° W	約2.8 × 2.13	0.9	壁南部は2段になる	B'	図73 (7月18-2)
064	C ₂ h ₁	隅丸長方形	N 48° E	1.0 × 0.82	0.11	ヒット4	D1	図72
065	C ₁ i ₁ g ₁	不整楕円形	N 35° W	2.94 × 2.49	0.2	ヒット多数あり、壁 底まで泥質土層が堆 積する	A1	図73
066	C ₂ h ₁ g ₁	楕円形	N 54° E	1.89 × 1.27	0.4	SK-065 に接する ヒット1	A1	図73
067	C ₁ f ₁	不整楕円形	N 51° W	2.18 × 1.68	0.24	ヒット4ヶ所あり	A1	図74
068	C ₁ f ₁	円形	N-50°E	0.94 × 0.9	0.63	壁は垂直、覆土上面 は泥質土層である	B'	図73
069	C ₂ c ₁ c ₂ f ₁ f ₂	円形	N-69°E	0.93 × 0.91	0.23	壁底凹凸あり、覆土 より二階出土	A	図73
070	C ₁ c ₁	楕円形	N-0°	1.29 × 1.08	0.19	ヒット4ヶ所	A1	図73
071	C ₁ c ₂	不整楕円形	N-36°E	1.44 × 1.08	0.3	覆土は泥質土層	A	図74
072	C ₁ g ₁	不整楕円形	N-41°E	1.40 × 0.93	0.36	ヒット状の凹みが 2ヶ所ある。泥質土 層を含む	A1	図74

表26 土壌一覽表(7)

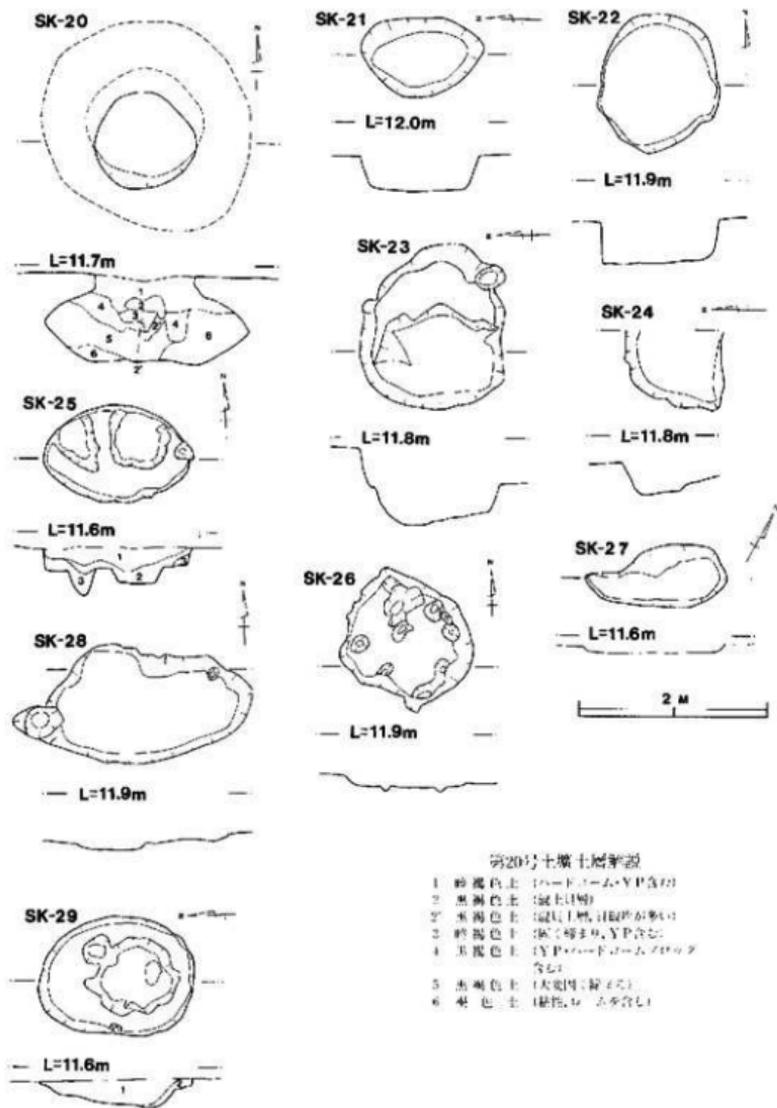
土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径(m)× 短径(m)	深3m	備 考	分類	実測図・写真
073	C _{2f}	円 形	N-82-W	0.69 × 0.62	0.73	段上には段が混入す る	B'	図74
074	C _{2g}	楕円形	N-0'	1.96 × 1.59	0.45	2段毛り込みのピット あり	A1'	図74
075	C _{2g2}	楕円形	N 14' E	1.13 × 0.91	0.76	壁は垂直に立ち上が る	B'	図74
076	C _{2d3}	不整形円形	N 50' W	2.11 × 1.57	0.79	ピット3	A1	図74
077	C _{2c2}	楕円形	N-17' E	1.05 × 0.85	0.63	段上には破片を含む	B'	図74
078	C _{2g}	楕円形	N-4' -W	1.02 × 0.95	0.70	段上上部は混泥土層、 石塊	B'	図74
079	C _{2g}	楕円形	N 69' - E	1.04 × 0.95	0.73	混泥土層あり	B'	図74
080	C _{2h1h2}	隅丸方形	N-61-E	1.74 × 1.41	0.23	壁面にピット2、混 土層あり	D1	図74
081	C ₂ h ₂ i ₂	円 形	N 62' E	1.1 × 1.01	0.12	SK-062と重複	A	図84
082	C _{2i}	不整形円形	N-4'-W	1.1 × 1.02	0.81	壁は垂直に立ち上 がる	B'	図84
083	C _{2h}	楕円形	N-3'-W	1.62 × 1.25	0.12		A	図84
084	C _{2h}	楕円形	N 79' W	1.40 × 1.01	0.17		A	図84



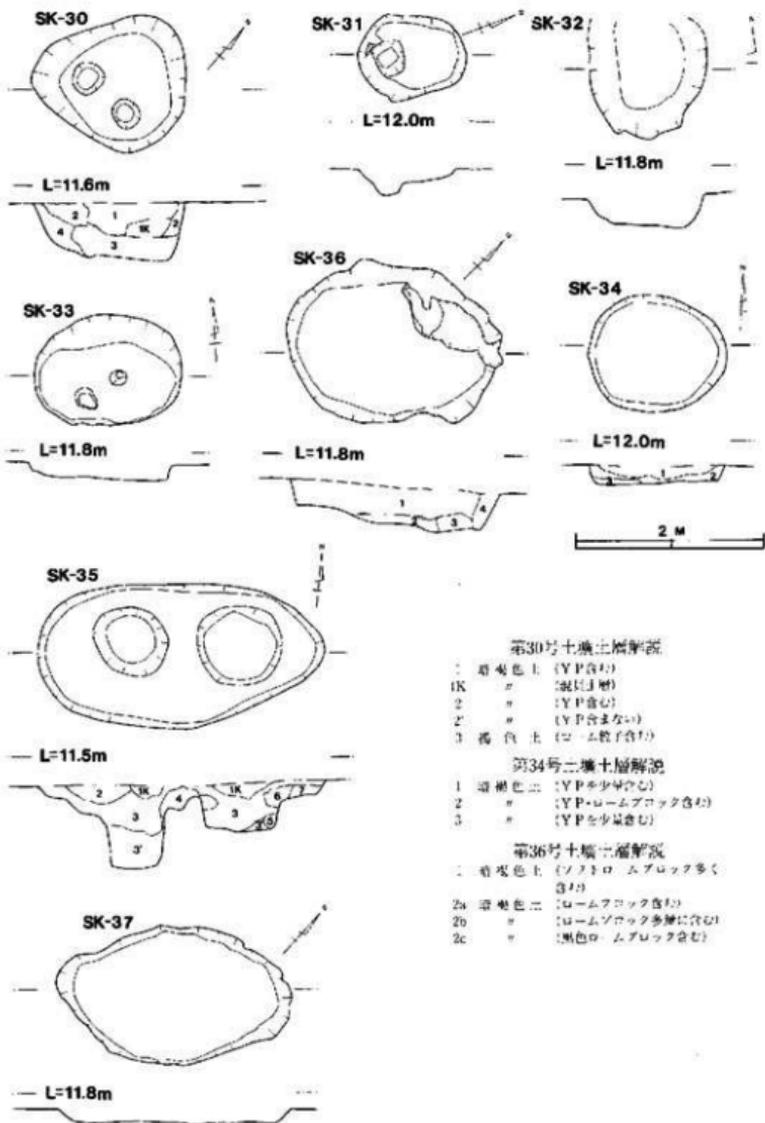
第66図 第1～10号土城



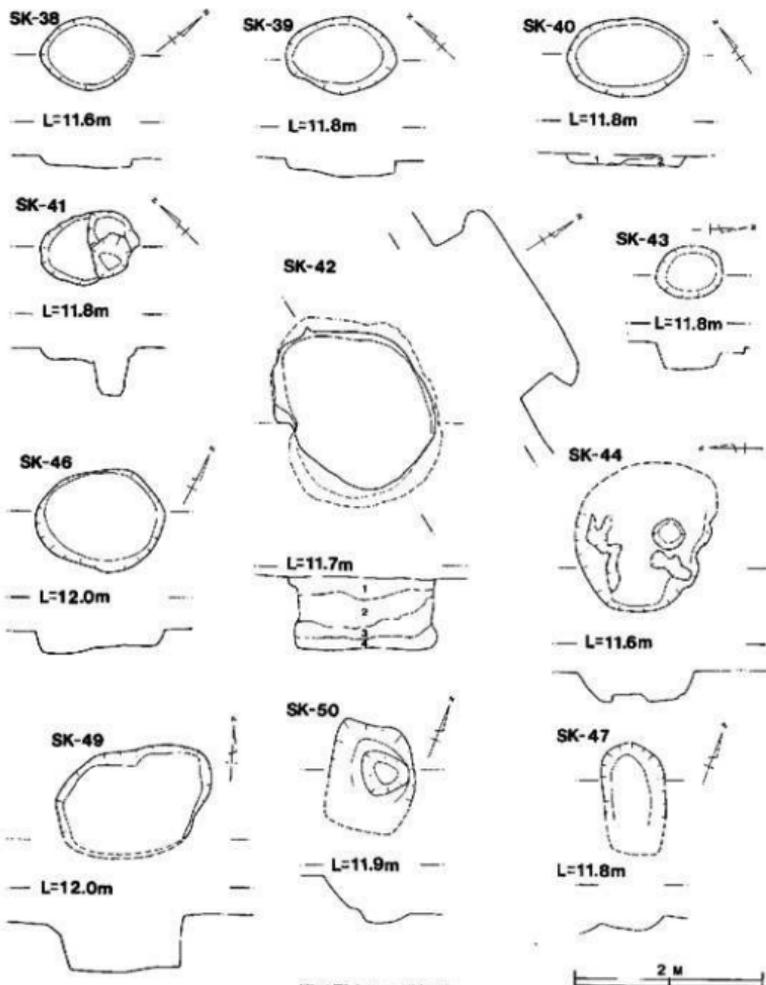
第67図 第11~19号土坑



第68図 第20～29号土層



第69図 第30～39号土壌



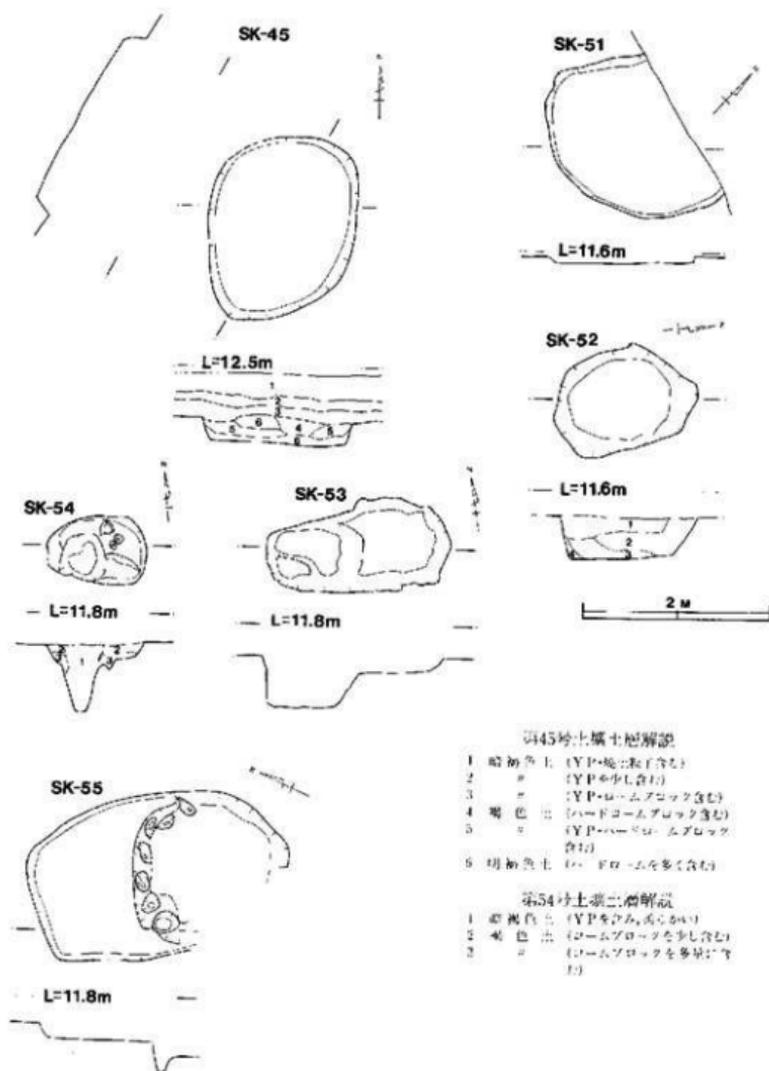
第40号土坑土層解説

- 1 暗褐色土 (YP・少量黒土含む)
 2 褐色土 (コームブロック含む)

第42号土坑土層解説

- 1 暗褐色土 (YPを少量含む)
 2 褐色土 (YP・コームブロック少量含む)
 3 土
 4 灰 (コームブロック少量含む)
 5 灰 (コームブロック少量含む)

第70図 第38～44・46・47・49・50号土坑



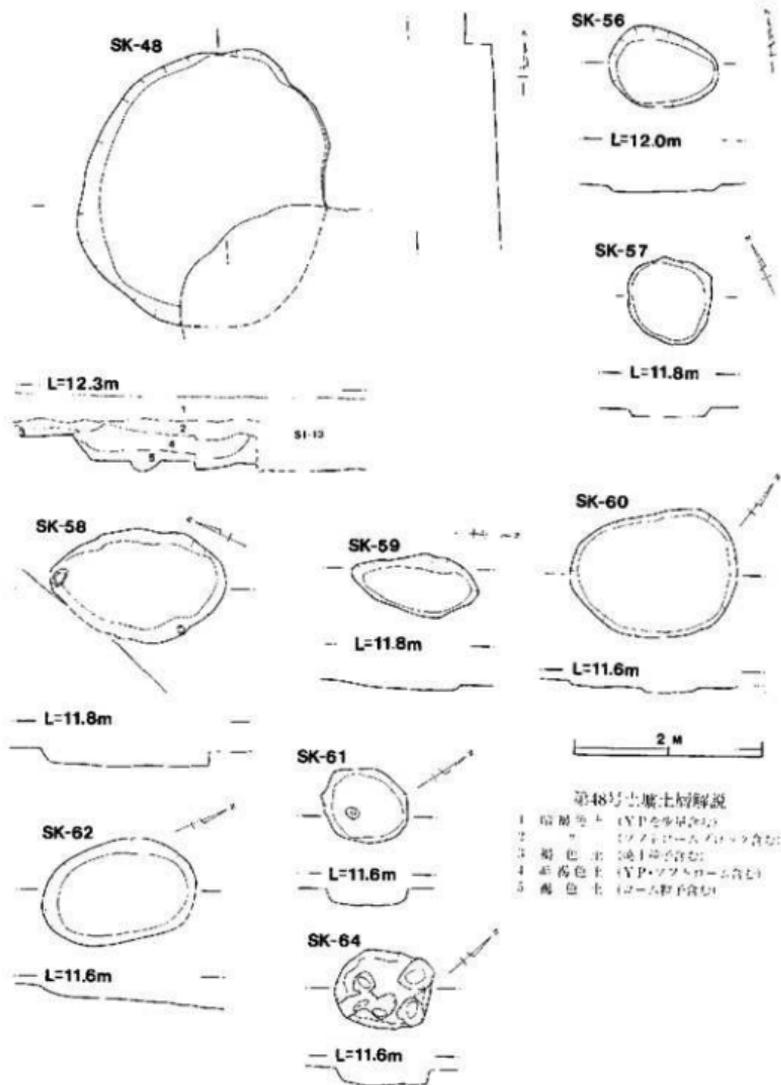
第45号土壌土層解説

- 1 暗褐色土 (YP+地土混じり)
- 2 " (YPを少し含む)
- 3 " (YP+ロームブロック含む)
- 4 褐色土 (ハードロームブロック含む)
- 5 " (YP+ハードロームブロック含む)
- 6 暗褐色土 (ハードロームを多く含む)

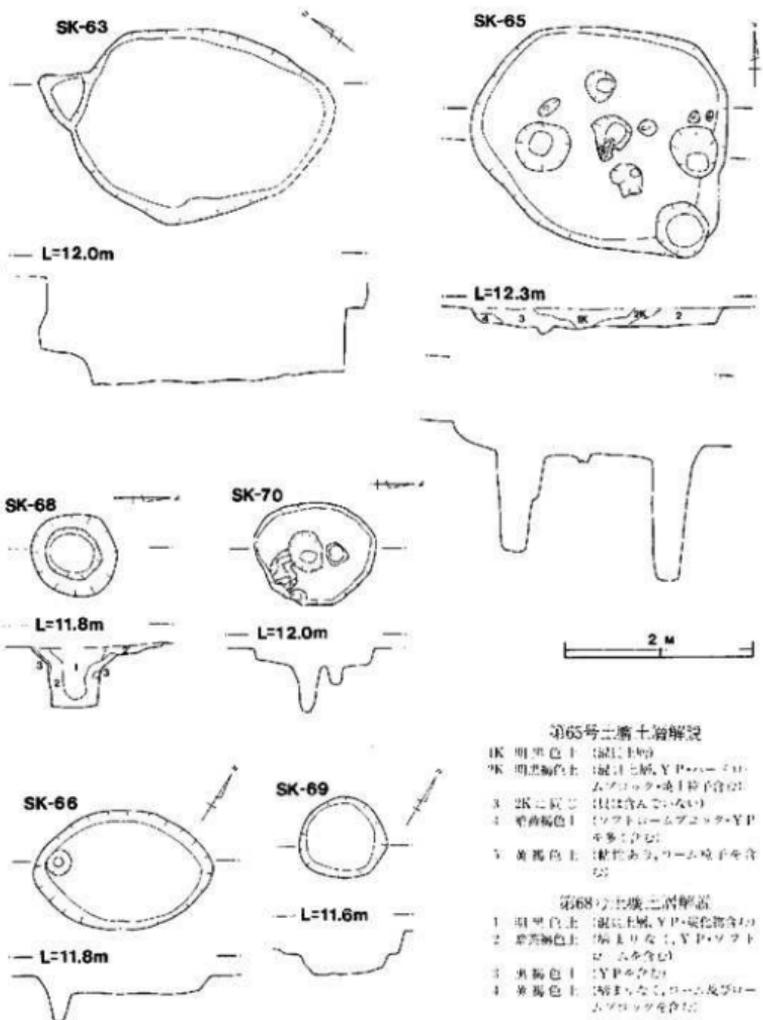
第54号土壌土層解説

- 1 暗褐色土 (YPを少し含む)
- 2 褐色土 (ロームブロックを少し含む)
- 3 " (ロームブロックを多量に含む)

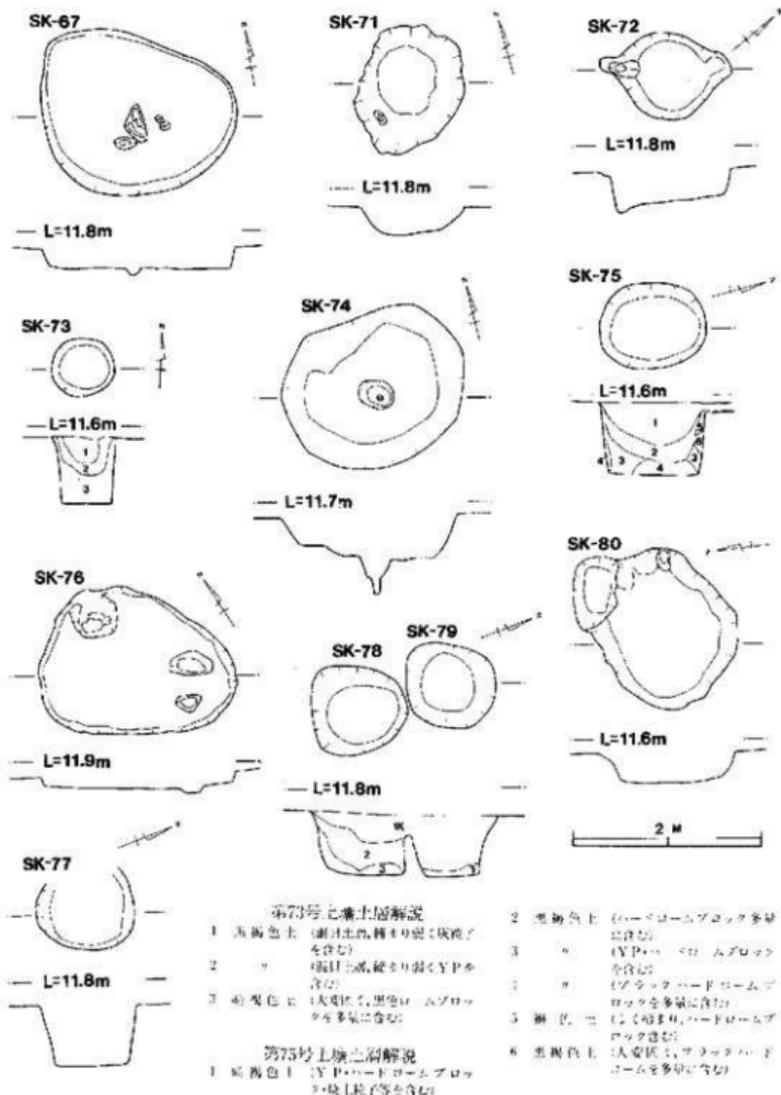
第71図 第45・51～55号土壌



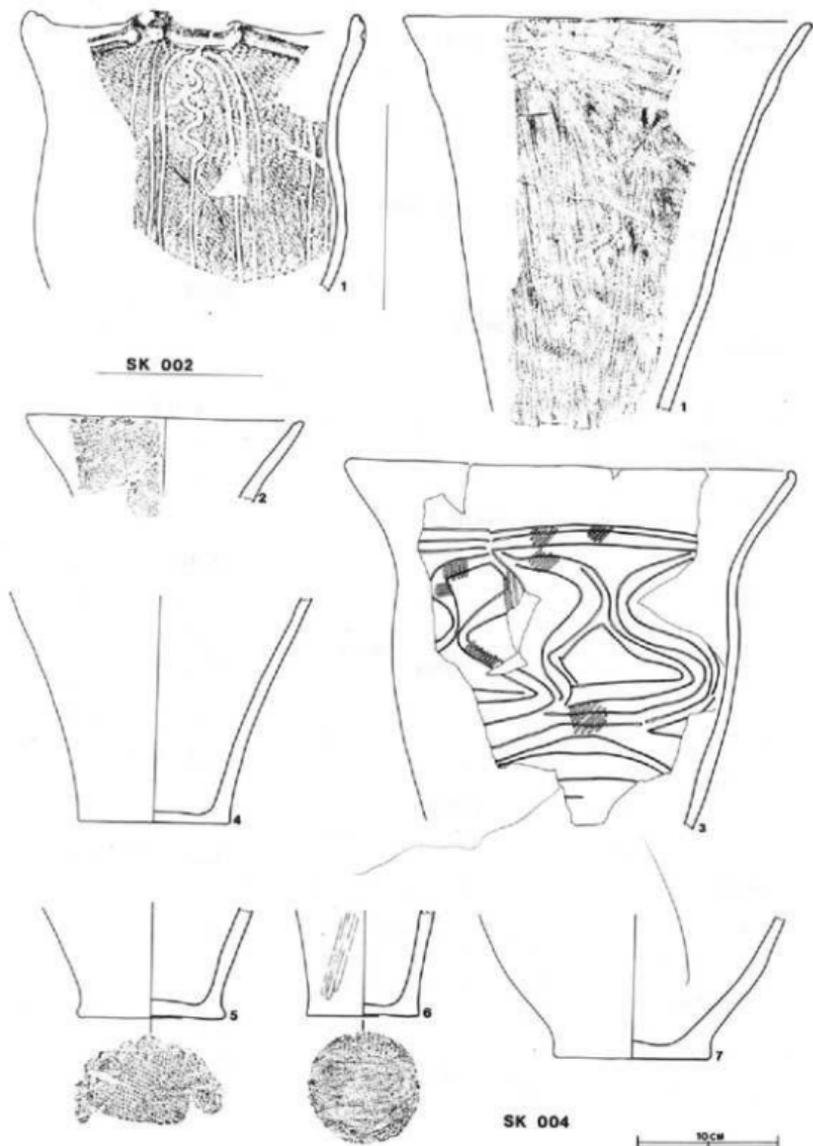
第72図 第48・56～62号土壌



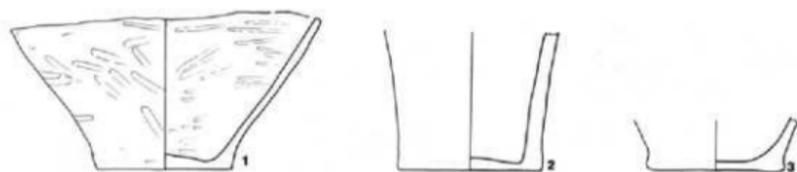
第73図 第63・65・66・68・69・70号土層



第74図 第67・71~80号土壌



第75図 土壤出土遺物



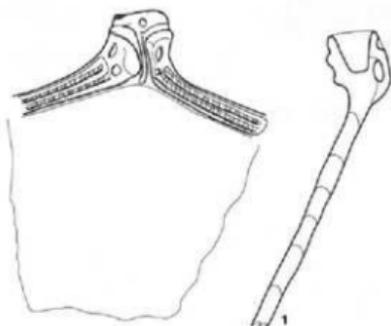
SK 016



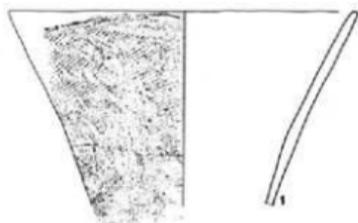
SK 018



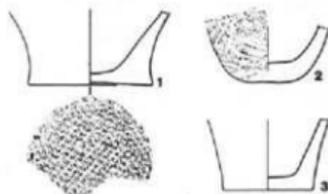
SK 035



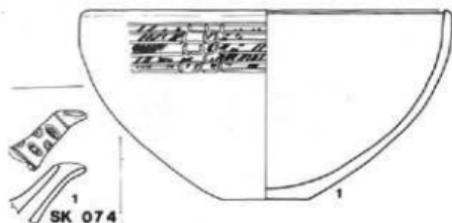
SK 022



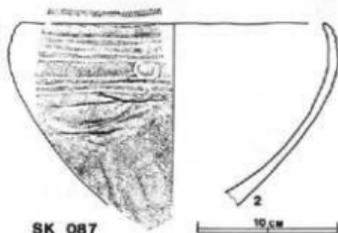
SK 062



SK 083

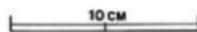
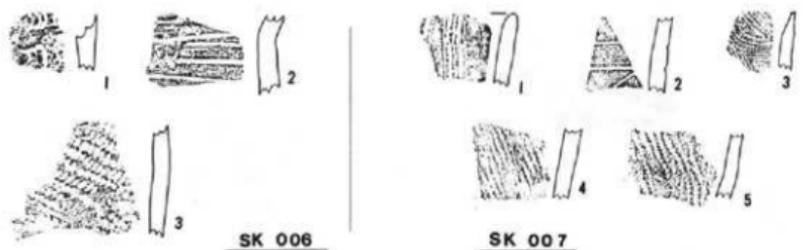
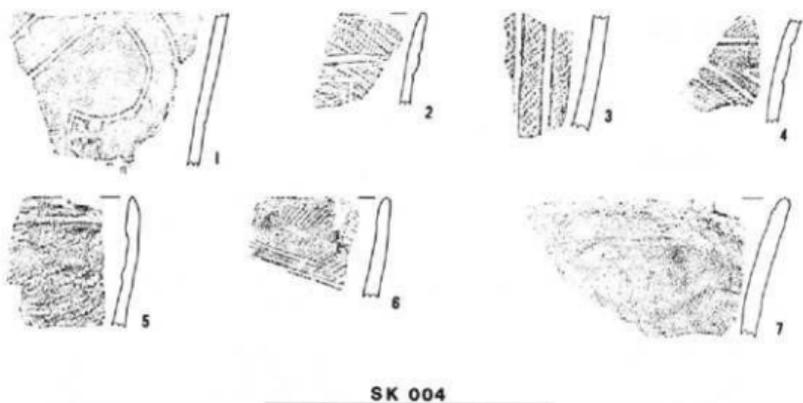
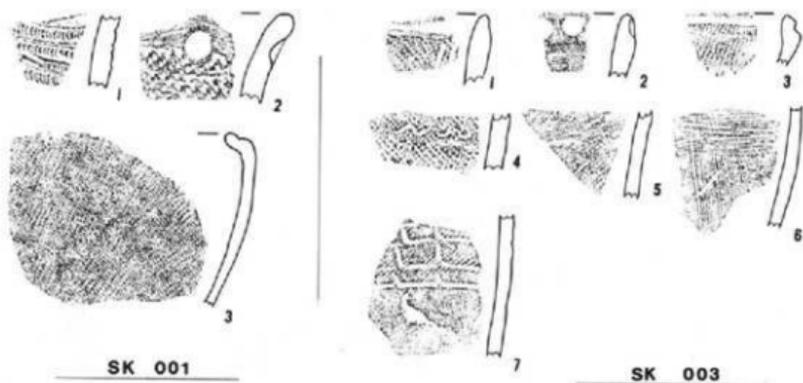


SK 074



SK 087

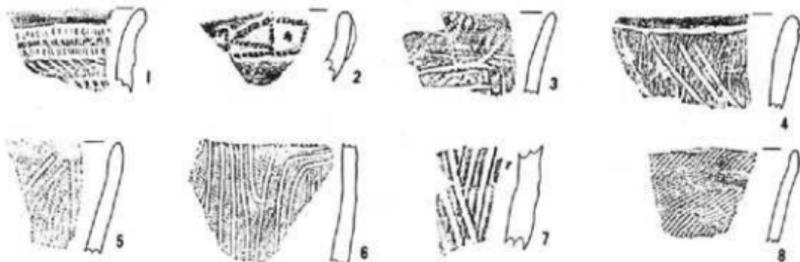
第76図 土壌出土遺物



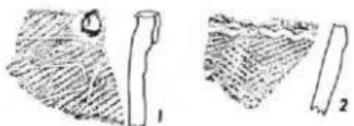
第77回 土壤出土遺物



SK 008



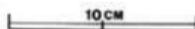
SK 016



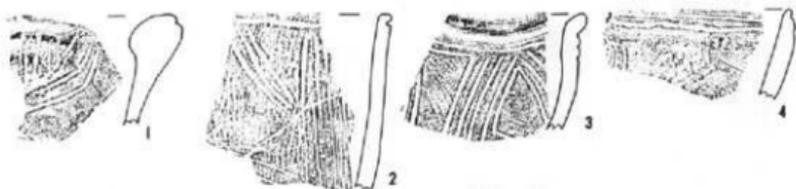
SK 017



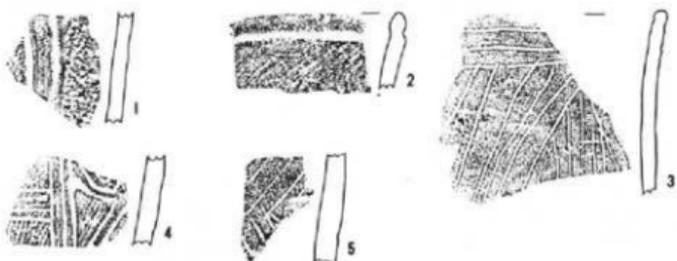
SK 018



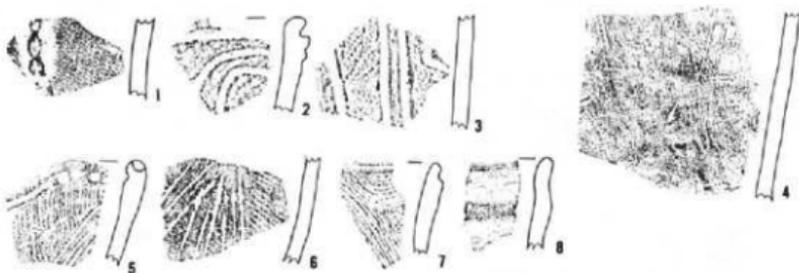
第78図 土壌出土遺物



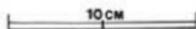
SK 020



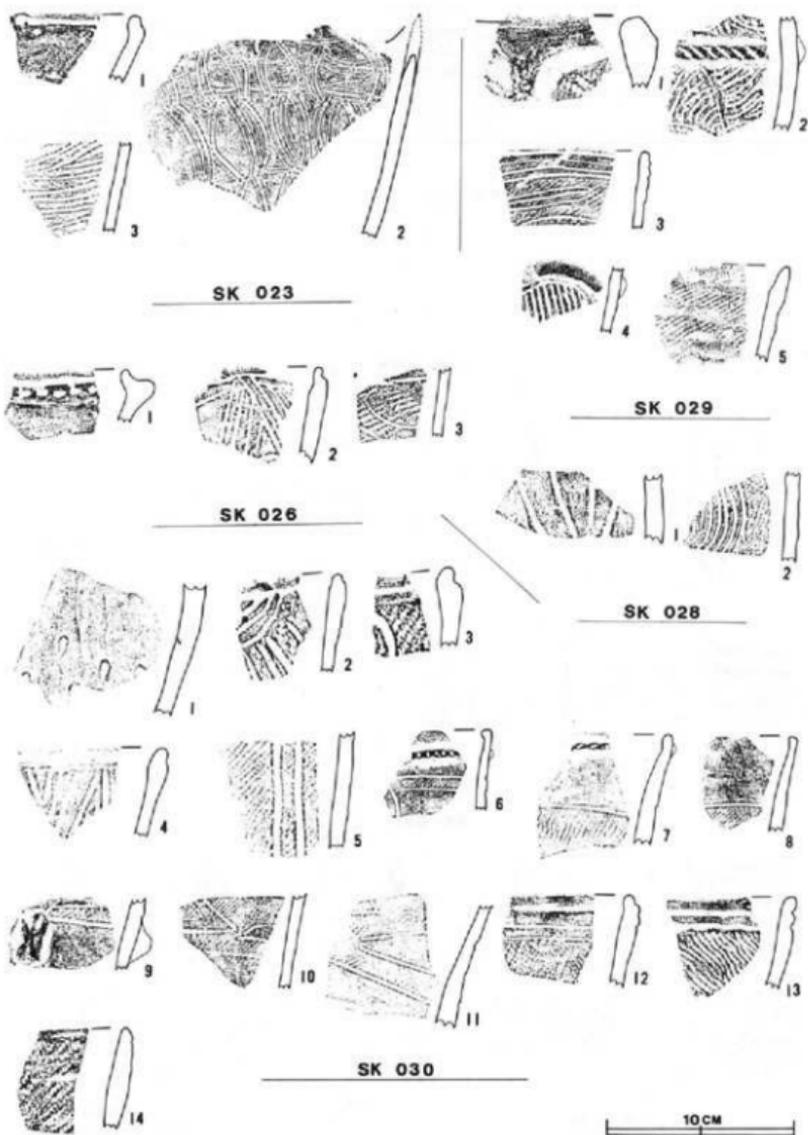
SK 021



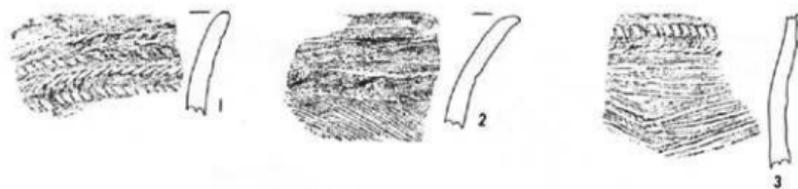
SK 022



第79図 土壤出土遺物



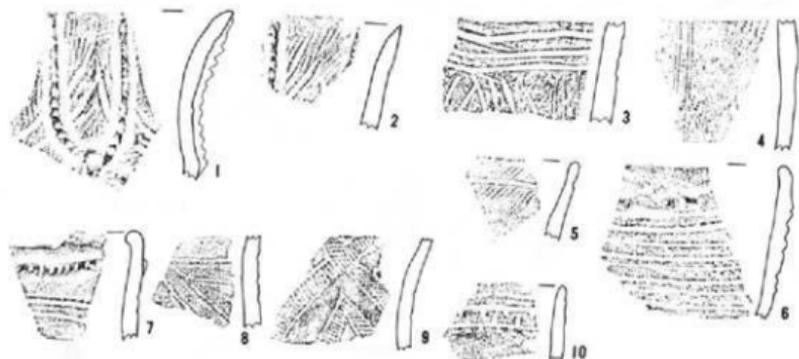
第80図 土壤出土遺物



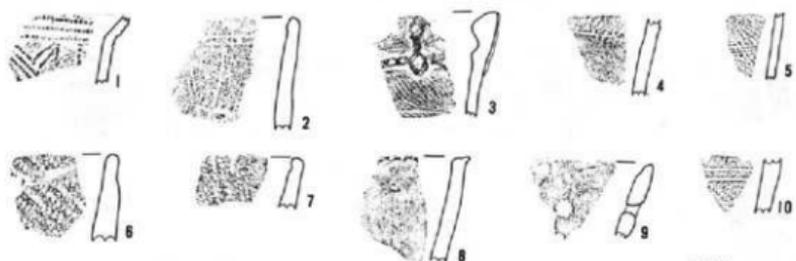
SK 031



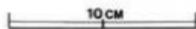
SK 034



SK 035



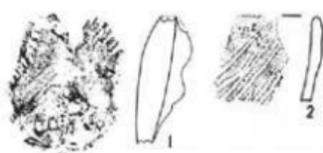
SK 036



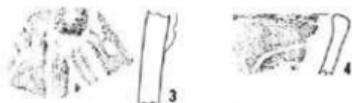
第81図 土壤出土遺物



SK 037



SK 040



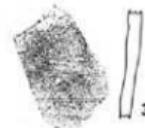
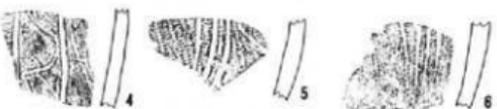
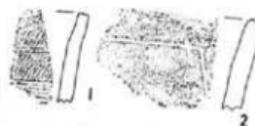
SK 042



SK 043

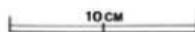


SK 044

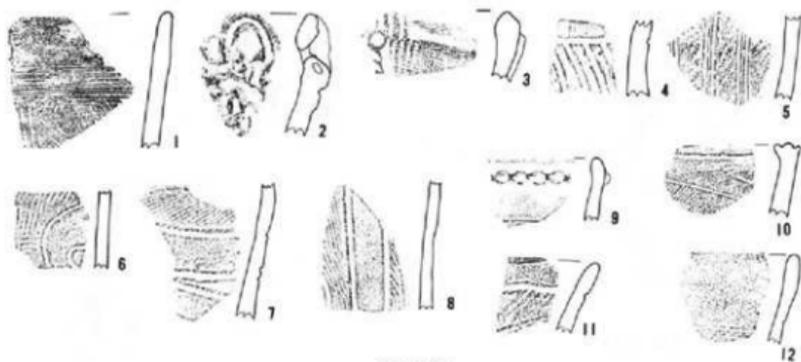


SK 045

SK 046



第82図 土壤出土遺物

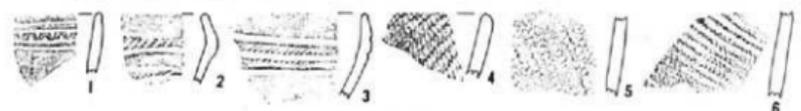


SK 052



SK 054

SK 056



SK 058



SK 063

10CM

第83図 土壤出土遺物

表27 第75図 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SK-002	1	深鉢形	口径	23.2	口内面に小突起を有し、旋回が緩及びそれと 同じ形で波跡がみられる	黒之方式
			現存高	19.6		
SK-004	1	深鉢形	口径	28.6	黒文。表面ともヘラ削り	明赤褐色を呈する
			現存高	28.2		
	2	深鉢口縁部	口径	19.2	内外面とも風化が著しい。外面にはわずかに 縄文を残す	明褐色を呈する
			現存高	5.7		
	3	深鉢形	口径	32	波線で文様を区画する。波線間に部分的に縄 文を残す	細砂粒を含む。精 製されている。明赤 褐色を呈する
			現存高	25.5		
	4	深鉢底部	埋存高	16.2	外面・底部……ヘラ削り 内面……ヘラナデ	褐色を呈する
			底径	10.6		
	5	深鉢底部	埋存高	7.7	外面……ヘラ削り 内面……ヘラナデ、底部部分に波	胎土に、スクリヤ・ 砂粒混入
			底径	8		
6	深鉢底部	埋存高	7.5	外面……部位のヘラナデ 底面……ヘラ削り、一部に家代(瓦)を残す	濃い褐色を呈する	
		底径	8			
7	深鉢底部	埋存高	10	底面……ヘラナデ 内・外面……ヘラ削り	胎土にスクリヤ・砂 粒混入、濃い赤褐 色を呈する	
		底径	10.7			

表28 第76図 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SK-016	1	鉢形	口径	21.6	ヘラによるナデ、削りの整形。黒文	明赤褐色を呈する (写真 1)
			器高	10.9		
			底径	9.4		
			現存高	9.7		
SK-018	1	深鉢底部	埋存高	9.7	内外面・底部ともヘラ削りによる整形	濃い赤褐色を呈す る
			底径	10		
			現存高	3.6		
SK-022	1	深鉢底部	埋存高	9.7	外面はヘラ削り、内面はナデ整形	濃い赤褐色を呈す る
			底径	9.7		
SK-018	1	深鉢底部	埋存高	10	外面はヘラ削り、内面、底面にヘラ削り	濃い赤褐色を呈す る
			底径	9.7		
SK-022	1	波状口縁	埋存高	21	体部は黒文、内面に折れ曲がる二線に波線と 刺突が施される。中型の突起を有し、輪状の 把手が付く。突起頂面と突起の中間に刺突が 見られる	黒灰色を呈する。 黒之内式
			現存高	21		
SK-035	1	手捏土器	埋存高	3.0	内外面ともヘラ削り	濃い褐色を呈す る
			底径	1.8		
SK-062	1	深鉢形	口径	24.2	縄文のみが残される。胎土には細粒のヘラ 削り	濃い赤褐色を呈す る
			現存高	13.7		
SK-063	1	深鉢底部	埋存高	5	大外面としてはいくつかヘラ削り武器は家代前	黒褐色を呈する
			底径	8.8		
	2	底径	埋存高	3.7	地文として縄文を残した後、割れの波線を配 する。内面・底面にヘラ削り	濃い褐色を呈する
			底径	5.5		
	3	深鉢底部	埋存高	4.9	外面はヘラ削り、内面・底面にヘラ削り	明褐色を呈する
			底径	6.3		
SK-074	1	洋鉢	全長	5.5	波線で長筒筒形を画し、内面に刺突文を施す 外面はヘラ削り	黒褐色を呈する
			幅	2.4		
SK-086	1	鉢形	口径	25.3	縄文を残した後波線を配する。胎土は割れ 1本の波線がみられる。大外面ともヘラ削り	黒色を呈する。 加磨群B1式
			器高	13.4		
			底径	6.2		
			埋存高	13.1		
2	鉢形	口径	21.5	波線を残した後、縄文を配する。口縁に刻み 目。内外面ヘラ削り	黒色を呈する 加磨群B1式	
		埋存高	13.1			

表29 第77図 土壌出土遺物

出土遺物・区 遺物No	部形・部名	延長 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SK-001	1	胴 部	平行沈線部に爪形の刺突を充填する		
	2	口 縁 部	口縁の小突起部で円形刺突状の凹みを有する。地文は縄文		
	3	"	口縁部が内気に屈曲する。縄文のみ		
	SK-003	1	口 縁 部	縄文の上に沈線を施す	
		2	"	口縁部に内凹刺突を施す	
		3	"	口縁部に1条の沈線を施す。縄文のみ	
		4	胴 部	縄文のみ	
5	"	横方向の条線。地文はまばらな縄文			
6	"	横方向・縦方向の刺で沈線を施す			
7	"	数本の平行沈線で縦位沈線を動位状に施す。沈線間は縄文を充塞する。下部はへら整形			
SK-004	1	胴 部	沈線で曲線的な文様を区画し、中は磨消し。地文は縄文		
	2	口 縁 部	幾何学的な区画を沈線で施す。地文は縄文		
	3	胴 部	2本の沈線を縦位に施す。地文は縄文。		
	4	"	沈線で幾何学的な文様を区画し、中に地文を充塞する。中は磨消し	胴之内式	
	5	口 縁 部	口縁部はわずかに内凹する。縄文のみ。へら磨り		
	6	"	斜行沈線。縄文		
	7	"	外反する口縁で横位の沈線のあと。縦位の沈線を施す		
SK-006	1	胴 部	爪形文		
	2	"	横位の沈線		
	3	"	縄文のみ		
SK-007	1	口 縁 部	縦位の沈線		
	2	胴 部	沈線で区画し、中に縄文を充塞する		
	3	"	爪状の沈線のみ		
	4	"	縄文のみ		
	5	"	縄文のみ		

表30 第78図 土壇出土遺物

出土近所・区	遺物	器形・部位	沈没 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-008	1	胴部		腹背の沈没。下部で曲がる。地文は縄文	
	2	口縁部		口縁部に平行な沈没	
	3	"		口唇部に太い沈没。胴部は縄文	
SK 016	1	口縁部		平行沈没を数回受らつて、甲を刺突もしくは斜沈没で埋める	
	2	"		細い粘土紐を幾何学的に張り付け、上に割みを入れる	
	3	"		口縁部は外反し、沈没を削文する。地文は縄文	
	4	"		口縁に平行な沈没を施し、右トガりの斜沈没を入れる。地文は縄文	
	5	"		斜沈没のみ、地文は縄文	
	6	腹部		縦向き及び横方向に施す沈没を削文する。地文は縄文	
	7	"		太い斜沈没のみ	
	8	口縁部		縄文のみ	
	9	"		口縁部に横型の沈没を数回施し、胴部には口縁では沈没で削文を削文する	胴之内式
	10	腹部		No.9 と同一個体であろう	"
SK 017	1	口縁部		口唇部から直角に糸の字状の貼り付けを有し、沈没で直線的な文様を構成する	
	2	腹部		縄文のみ	
	3	"		原位の沈没	
SK-018	1	胴部		波状口縁を施し、口縁に平行な沈没があり、腹縁部より斜行沈没が垂下する。地文は縄文	胴之内式

表31 第79図 土壌出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	形状・部位	長さ (cm)	表面・裏面の形状	備考
SK-020	1	口縁部		口縁部が肥厚し、胎部が平坦、数本の沈線を施す	
	2	"		口縁部に平行な沈線を一本引、下部は縦位及び斜行沈線を施す	胎之内式
	3	"		内縁しながら立ち上がってきたに縁が口内面近くの半状に外反する、胎縁で文様を区画し、部分的に縄文を施す	"
	4	"		口縁に平行な2本の沈線を有し、弧状の沈線を垂下させる。胎文は縄文	
	5	胎部		くびれ部に1本の沈線を施し、垂下する沈線を加える	"
	6	口縁部		口縁部内側にS字状を引、沈線で幾何学文を施す。中に縄文を充填する。外は磨削し	"
	7	"		口縁に平行な沈線を施す。縄文	
SK-021	1	胎部		2本の沈線間を磨削す。胎文は縄文	
	2	口縁部		口縁に平行な沈線を施す。縄文	
	3	"		胎縁に外反し、口縁に平行な3本の沈線から、斜位に沈線を施す	
	4	胎部		沈線で幾何学文を引、部分的に縄文を加える。胎文は縄文	
	5	"		沈線で弧状の文様を引く	
SK-022	1	胎部		縦線を胎縁に付す	
	2	口縁部		斜行沈線の胎部であろう。胎文は縄文	
	3	胎部		胎縁の沈線及び斜行沈線を施す	
	4	"		胎縁に近い胎部で、沈線の末端部のみ見える	
	5	弧状口縁		腹直部に凹形刺突3個を有し、両方に沈線がのびる。斜行する沈線を施す	
	6	胎部		斜沈線	
	7	口縁部		口縁部に平行な1本の沈線を有し、下部に弧状及び斜位の沈線を施す	
	8	"		2本の龍首が腹直部に回る	

表32 第80回 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物	器形・部位	沈没 (cm)	表面・裏面の特長	備考
SK-023	1	口縁部		口縁部の内凹部から1条の沈線が出る。燧文のみ	
	2	"		() 状の沈線を数段重ね、接合部は横位の沈線で区画する	
	3	胴部		斜沈線を充満する	
SK-025	1	口縁部		極めて深い沈線の弧状に入る。燧文は燧文	
	2	胴部		弓みを持つ隆帯を横位に貼り付け、上下を弧状の沈線で充満する	
	3	口縁部		口縁に平行な沈線が数条並ぶ。既に沈線で矢形凹形を造く。燧文は燧文	
	4	胴部		隆帯を弧状に貼り付け、それに平行する沈線を生ずる。下部は斜行する沈線で埋める	
	5	口縁部		製作時の欠陥部が残し、燧文をつける	
SK-026	1	口縁部		コ字形の沈線及び列点部突で造る	
	2	"		口縁部先端が丸型とも写む。斜行する沈線を造り	
	3	胴部		沈線で直線文様を造く。燧文は燧文	
SK-028	1	胴部		燧文	
	2	"		沈線で赤褐色を造く。燧文は燧文	
SK-030	1	胴部		ヘラ型彫痕、刺突穴痕す	
	2	口縁部		口縁に平行する沈線を有し、下部に垂状及び斜沈線を造り	瓶之内式
	3	"		口縁に平行する沈線を有し、垂状の沈線を造り	"
	4	"		口縁に平行する沈線を有し、斜位及び縦位の沈線を造り	"
	5	胴部		縦位の平行沈線のみ入る。	"
	6	口縁部		口縁部に縦線を付し、沈線で区画された燧文帯をもつ	
	7	"		口縁部に縦線を付し、沈線で区画された燧文帯をもつ	
	8	"		沈線で区画された燧文帯をもつ。ヘラ型彫	
	9	胴部		沈線で区画された燧文帯に添って、8の字状の隆帯を貼り付ける	瓶之内式
	10	"		沈線で縦斜的な文様を区画し、中に燧文を充満する。外は磨消し	"
	11	"		沈線で直線的な文様を区画し、中に燧文を充満する。外は磨消し	"
	12	口縁部		口縁部及び口縁部に3条の沈線を横帯を造る。燧文は燧文	
	13	"		口縁部に2条の沈線を有する。燧文	
	14	"		燧文のみ、LR	

表33 第81図 土壇出土遺物

出土遺物・区	遺物	形状・部位	法域 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-031	1	II 線部		上縁部に外反し、斜凹状がみられる	
	2	"		上縁部に外反し、斜凹状、右下がりの沈線がある	
	3	胴部		くびれ上部に、楔状の突起を付し、横線及び斜線の沈線を入れる	
SK-034	1	胴部		平行沈線がみられる	
SK-035	1	口縁部		大径状口縁の突起部で、外反しており、七字形に細線を付し、斜沈線も数条付加される	
	2	"		No.1 と同一個体	
	3	胴部		横走する数本の沈線と、縦位の沈線とに二分され、地文は縄文である	
	4	"		1本の平行沈線が通下する。地文は縄文	
	5	口縁部		口縁部が平行沈線がある	
	6	"		8本以上の沈線を、口縁と平行に施す	
	7	"		口縁部に細線を付し、1本の平行沈線が横走する	
	8	胴部		沈線で区画し、中を縄文で充填する。外は磨消し	
	9	"		沈線で区画し、中を縄文で充填する。外は磨消し	
	10	口縁部		3本の平行沈線の間に突起を加える	
SK-036	1	胴部		くびれ部より上は横線、下は山形に細い隆線を施し、突起を加える	
	2	口縁部		浅い沈線を施し、部分的に突起が加わる	
	3	"		波状口縁突起部で、横線及びメダナ状の隆線を付し、胴部に横方向の沈線がある	
	4	胴部		沈線区画内に縄文、外は磨消し	
	5	"		平行沈線の横走。地文は縄文	
	6	口縁部		縄文のみ	
	7	"		縄文のみ	
	8	"		口縁部に列点突起がみられる。縄文	
	9	"		無文。補修孔あり	
	10	胴部		平行沈線の横走。地文は縄文	

表34 第82図 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物No	形状・部位	法尺 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-037	1	口縁部		口縁部に縦線を付し、外縁で幾何学文様を区画し、中に縦文を充てる	堀之内式
SK-040	1	口縁部		波状の縦線、斜交文	
	2	口		左下がりの縦線を施す	
SK-042	1	口縁部		突起部下に縦位の沈線、斜交を加える	
	2	胴部		円形の粘土板を貼り付け、横位・斜位の沈線を施す	
	3	口		円形の依り付から波状の突起し、中に斜交を施す	
	4	口縁部		弧状の沈線	
SK-043	1	口縁部		横位・縦位の沈線文、赤文は縦文	堀之内式
	2	胴部		波状で文様を区画する。地文は縦文	〃
	3	口		横位の沈線。地文は縦文	
	4	口縁部		口唇部内外表面に凹みをし、縦文	〃
SK-044	1	胴部		横位の沈線を3本施し、中に縦文を充てる。外は磨光し	
SK-045	1	胴部		2本の沈線で区画された中に縦文を充てる。外はヘラ磨光	称名寺式
	2	口縁部		口縁部沈線。円形の突起から縦位沈線が垂下する	堀之内式
	3	胴部		縦位の沈線部に右下がりの斜線線を配する	〃
	4	口		縦線・曲線の沈線が垂下する	
	5	口		沈線文、赤文は縦文	
	6	口		底部に近く垂下した沈線の末端のみえる	
	7	口縁部		2本の沈線で区画された縦文帯をもつ。外は磨光し	
SK-046	1	口縁部		波本の沈線が横走する。地文は縦文	
	2	口		沈線のみ	
	3	胴部		横位の細い沈線が施文される	

表35 第83団 土壌出土遺物

遺物番号	形状・部位	長さ (cm)	表面・裏面の装飾	備考	
SK-052	1	口縁部		口縁に平行な8本の沈線が横走り、下部にも斜位・斜位の沈線を施文する	
	2	"		波状口縁の突起部で、口形可変・沈線が施される	
	3	"		ハ波状口縁の突起部で3本の縦位沈線により果帯が横下する。上に刺突が加わる	
	4	胴部		横位の沈線で上部と区画され、下下がりの沈線を施文する	
	5	"		干載竹筥による平行沈線が縦帯につけられる	
	6	"		沈線で区画され、刺突を配す	
	7	"		弧状の沈線で区画され、刺突を定規する	
	8	"		2本の沈線間を削消す	
	9	縁部		刺突文を付す	
	10	"		沈線で区画され、内部は刺突	
	11	"		沈線で区画され、中に刺突を定規する	
	12	"		平行沈線で胴部と区画される	
SK-054	1	胴部		平行沈線段を刺突で施める	
	2	"		沈線文	
	3	"		沈線で区画された中に刺突が定規される。外はへら刺突	
	4	"		沈線の間に刺突を充填する	
	5	"		刺突のみ	
SK-056	1	胴部		弧状の沈線文	
	2	口縁部		口縁に平行な2本の沈線が施される。胴部にかけては刺突	
	3	胴部		5~7本を1単位とする細沈線を縦位に施文する	
	4	"		刺突のみ	
SK-058	1	口縁部		沈線文	
	2	"		くの字状に屈曲する。沈線間を刺突で埋める	
	3	"		内寄する口縁部で、3本の平行沈線間に刺突を充填する	
	4	"		刺突のみ。L R	

品名・規格・寸法	品名	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-058	5	胴部		荒い織文	
	6	"		織文のみ	
SK-063	1	胴部		沈線で内外を区書きし、ヘラ先端にする。側突が複数列を織される	
	2	波状口縁		入波状口縁を呈し、波頂部から口縁に平行な沈線を織文する。L部には側突が加わる。地文は織文	
	3	胴部		沈織文	
	4	口縁部		口縁部は屈曲し、太い沈線が織される	
	5	"		口縁に平行な沈線、縦位の沈線が織文される。地文は織文	
	6	"		側突及び横位の沈線	
	7	"		織文のみ	
	8	"		織文のみ	
	9	"		織文のみ	
	10	"		ゆるい波状口縁を呈し、織文のみ	
11	"		細い縦線を付す		
	12	胴部		織文	

表36 (土壌一覽表 (8))

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径(m)× 短径(m)	深(m)	備 考	分類	実測図・写真
085	C ₂ i _v	楕円形	N-37°-W	1.30 × 1.17	0.56	塘底南側は10cm低くなる。覆土上部は純頁層	B'	図84
086	C ₂ f ₁ f ₂	楕円形	N-37°-W	1.31 × 1.17	0.56	塘底中央部に溝状の落ち込み	A	図84
087	C ₂ d ₁ c ₂	楕円形	N-21°-W	2.63 × 2.07	0.17	ビット3。魚骨多量に出。浅鉢、凹石。	A1	図84 (写18-3)
088	C ₂ f ₁ f ₂ g ₁ g ₂	楕円形	N-60°-W	1.57 × 1.29	0.38	SI 09と重複頁層あり	A	図84
089	C ₂ b ₁ b ₂	楕円形	N 5°-E	1.97 × 1.74	0.77		B'	図85 (写18-4)
090	C ₂ g ₁ g ₂	楕円形	N-61°-E	1.5 × 1.12	0.14	塘底まで頁層あり	A	図85
091	C ₂ f ₂	楕円形	N-70°-E	1.32 × 0.94	0.41	SI 09と重複、石棟	A	図85
092	C ₂ i ₁	円形	N-0°	塘底1.47 × 開口部1.07	1.20	SI-20と重複、泥貝土層あり、深鉢、浅鉢	C	図85 (写18-5)
093	C ₂ i ₁ i ₂	楕円形	N-21°-E	1.4 × 1.11	0.12	ビット1	A1	図85
094	C ₂ i ₂	楕円形	N 0°	1.86 × 1.1	0.13	SK-097と重複、ビット5。	A1	図85
095	C ₂ i ₂	楕円形	N 20° E	1.4 × 0.71	0.09		A	図85
096	C ₂ i ₂	円形	/	1.34	0.41	塘底2段掘り込み	B	図85

表37 (土壌一覽表 (9))

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径側× 短径側m	深さm	備 考	分類	実測区・写真
097	C ₂ i ₁	楕円形	N 0°	1.84 × 1.25	0.15	ビット4	A1	図86
098	C ₂ i ₁	楕円形	N 74° W	1.37 × 1.21	0.16	ビット3	A1	図86 (写18-6)
099	C ₂ i ₁	/	/	(N-S)1.0 (E-W)1.2	0.41	SI-15と重複, 鈍貝 層あり	/	図86 (写19-1)
100	C ₂ h ₁ i ₁	長楕円形	N 31°-W	2.53 × 1.17	0.10	溝底中央部凹む	A1	図86
101	C ₂ g ₁	不整形	N 26°-E	1.09 × 1.06	0.47	第2号人骨を切って 掘り込まれている。 石差	C	図86
102	C ₁ c ₁	ほぼ円形	N 27°-E	2.03 × 1.9	0.35	ビット5, 礫石状石 器	A1	図88
103	C ₂ c ₁ c ₁	不整形	N-60°-E	1.39 × 1.13	0.61	混貝十層あり	B'	区86
104	C ₂ b ₁	円形	/	1.53	0.14	ビット4	A1	図86 (写19-2)
105	C ₂ f ₁	不整形	N-41°-E	1.28 × 1.15	0.47	貝層が厚く堆積す る	A	図86
106	C ₂ a ₁	不整形	N 35° W	3.29 × 2.86	0.83	ビット一, 磨石, 磨 製石斧	B1'	図87 (写19-3)
107	C ₂ a ₁ , a ₁ b ₁ , b ₁	楕円形	N 42°-W	1.61 × 1.34	0.67		B'	図88 (写19-4)
108	C ₂ a ₁ , a ₁ b ₁	溝状	N-20°-E	4.35以上 × 2.23	0.85	北部は通路下, 溝状 を呈す, ビット1, 磨石	E	区88

表38 (土壌一覧表 (Ⅲ))

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径(m)× 短径(m)	深さm	備 考	分類	実測図・写真
109	b_1, b_2 C_2 c_1, c_2	不整形円形	N 13° E	2.59 × 2.41	0.75	環底中央部が落ち込 む	A1	図87
110	C_2, c_1, c_2	楕円形	N 13° E	1.30 × 0.9	0.31	石皿	A	図86 (写19-5)
111	C_2, b_2	楕円形	N-85°-E	0.85 × 0.35	0.29		A	図89
112	C_2, a_2	不整形円形	N-11° W	0.82 × 0.81	0.32		A	図89
113	b_2 C_2 c_1	楕円形	N 9° E	1.11 × 0.77	0.55		A'	図89
114	C_2, d_1	円形	/	1.64	0.07		/	図89
115	C_2, d_1, d_2	円形	N-0°	1.27 × 1.21	0.2		A	図89
116	C_2, e_2	不整形円形	N-35°-W	0.96 × 0.9	0.16	ビット3	A1	図89
117	C_2, e_1, c_1	楕円形	N 51° W	0.87 × 0.77	0.6	勾玉状石製装身具	B'	図89
118	C_2, c_1	楕円形	N-77°-W	1.92 × 1.30	0.38	東壁2段、ビット1、 泥質土層あり	A1	図89
119	C_2, c_1, c_2	楕円形	N-67°-W	1.45 × 1.01	0.35	ビット3、ビット内 まで良層の堆積があ る	A1	図89 (写19-6)
120	C_2, b_2	/	/	(N-S)1.8 (E-W)1.3	0.67	東側通路下	B'	図89

表39 (土壌一覽表 III)

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径m × 短径m	深さm	備 考	分類	天測図・写真
121	C ₁ e ₁ e ₂	不整形	N 81°-E	1.33 × 1.13	0.33	基底中央部が落ち込 む	D	図89
122	C ₁ b ₂ c ₂	町 形	N 90°	1.53 × 1.38	0.34	覆土はすべて目層	A	図90 (写20-1)
123	C ₁ b ₂	楕円形	N-76°-E	1.27 × 1.10	0.65	ビット1, 混土1層 あり	C1	図90 (写20-3)
124	C ₁ a ₂	楕円形	N 50°-W	0.95 × 0.89	0.31		A	図90
125	C ₁ c ₂	楕円形	N 26°-W	0.93 × 0.77	0.22	基底は2段掘り込 み, 混土1層あり	A	図90
126	C ₁ e ₂	不整形	N-75°-W	1.12 × 1.11	0.54	北壁にビット1, 覆 土は混土1層	B1	図90
127	C ₁ b ₁	不整形楕円形	N-5°-E	1.20 × 1.12	0.57	ビット1, 覆土上部 に混土1層あり	C1	図90 (写20-4)
128	C ₁ b ₁ b ₂	町 形	N-57°-E	1.06 × 0.9	1.17		C	図91 (写20-5)
129	C ₁ e ₁	不整形	N 90°	1.03 × 0.96	0.23	ビット4, 混土1層 あり, 平つくお土器	A1	図91
130	C ₁ c ₁ f ₁	不整形楕円形	N-78°-W	1.43 × 1.14	0.62	覆土は混土1層, 石 瓦	C	図91
131	C ₁ c ₁ f ₁	不整形楕円形	N-0°	1.63 × 1.49	0.22	混土1層あり	A1	図91
132	C ₁ f ₁	楕円形	N-66°-E	1.23 × 1.03	0.18	ビット3	A1	図91

表40 (土壌一覧表(12))

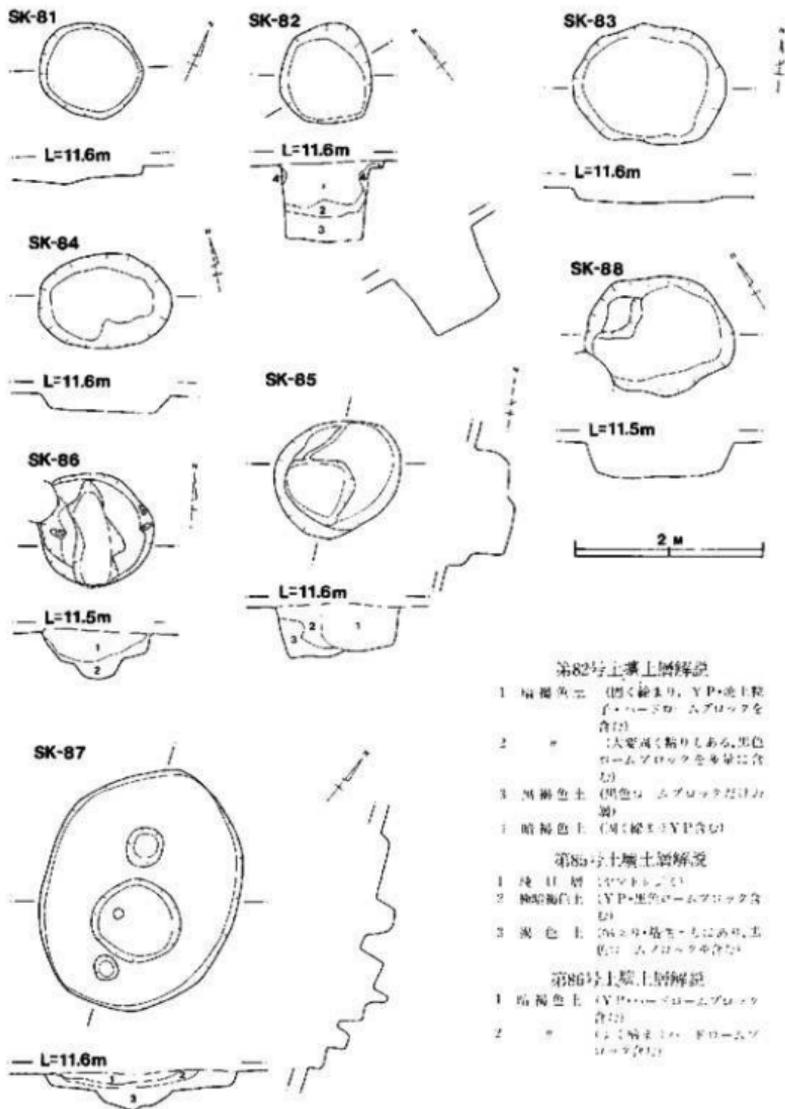
土壌No	地 区	※面形状	長軸方向	長径(m)× 短径(m)	深さm	備 考	分類	実況×写真
133	C ₂ e ₁ e	不整長楕円形	N-83°-W	2.05 × 1.27	0.43	2基の土壌の連続 か、ピット5、貝層 あり	A1	図91
135	C ₂ h ₁ g ₁	楕 円 形	N-63°-W	1.21 × 0.93	0.21	ピット4、混貝土層 あり	A1	図91
136	C ₂ d ₁	楕 円 形	N-56°-W	1.18 × 1.05	0.51	混貝土層あり	B'	図91
137	C ₂ g ₁ h ₁	不整円形	N-15°-W	0.82 × 0.78	0.19	ピット1	A1	図92
138	C ₂ d ₁ d ₂ e ₁ e ₂	楕 円 形	N-20°-W	1.14 × 1.08	0.5	貝層あり、砕石	C	図92 (写20 6)
139	C ₂ b ₁	不整楕円形	N-70°-E	0.95 × 0.85	0.18	SI-24と重複、混貝 土層あり	A	図92
140	C ₂ d ₁ e ₁	不整楕円形	N-4°-E	0.92 × 0.82	0.18		A	図92
141	C ₂ e ₁	楕 円 形	N-88°-E	1.58 × 1.1	0.25	鉄底に段差あり	A1	図92
142	C ₂ e ₁	楕 円 形	N-42°-E	1.42 × 1.09	0.09	ピット1	A1	図92
143	C ₂ e ₁	不整楕円形	N-32°-E	1.47 × 1.07	0.16	ピット4	A1	図92
144	C ₂ e ₁ e ₂	楕 円 形	N-25°-E	1.11 × 0.89	0.16		A	図92
145	C ₂ e ₁	不 安 形	N-38°-E	1.06 × 0.85	0.69	SI 09 に覆する	C	図92

表41 (土壌一覽表 (13))

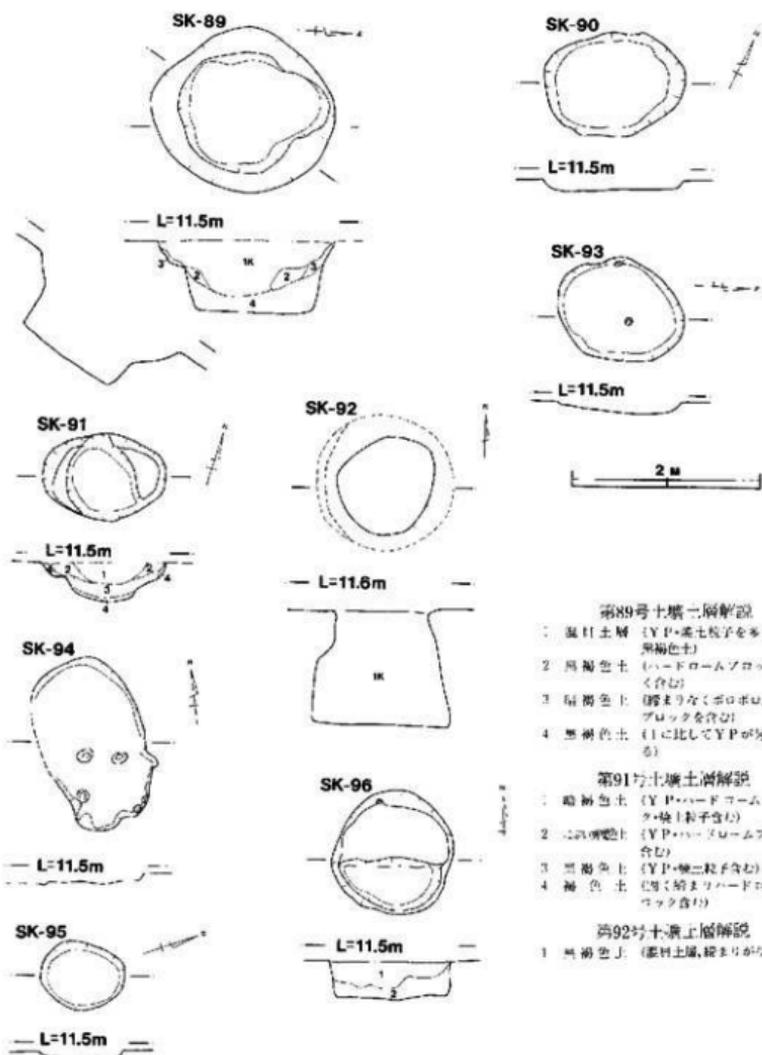
上層No	地区	平面形状	長短方向	長径m× 短径m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
146	C ₂ d ₂	楕円形	N-41-E	1.41 × 1.26	0.31	ビット3	A1	図92
147	C ₂ L	楕円形	N-26-E	1.67 × 1.48	0.52	土質の足部	B'	図93
148	C ₂ e ₂	円形	N-76-E	1.91 × 1.80	0.53	泥貝土層がレンズ状に堆積する。石灰	C	図92 (721 1)
149	C ₂ a ₂	隅丸方形	N-8-E	1.19 × 1.15	0.34	口の堆積あり	D	図92 (721 2)
150	C ₁ a ₁ , a ₂ b ₁ , b ₂	円形	N-36-W	2.21 × 1.97	0.71	底部に純貝層がある。石灰	C	図93 (721 3)
151	B ₁ g ₁ h ₁	楕円形	N 80° E	1.18 × 0.89	0.18		A	図93
152	B ₁ h ₁ b ₁	不整楕円形	N 42° E	2.26 × 1.75	0.2	小ビット17	A1	図93
153	B ₁ g ₁ g ₂	楕円形	N 46° E	2.29 × 1.94	0.36	泥貝土層あり	A1	図94
154	B ₁ h ₁	不定形	N 71° W	1.34 × 0.95	0.44		A	図93
155	B ₁ i ₁	楕円形	N-32-E	0.97 × 0.83	0.97		B'	図93
156	B ₁ e ₁ f ₁	楕円形	N-90°	1.06 × 0.96	0.17	純貝層あり	A	図93
157	C ₁ c ₁	不整楕円形	N-49-W	1.14 × 1.10	0.52	壁は風雨に立ち上がる	B'	図94

表42 土壌一覽表 (4)

土壌No	地区	平面形状	長短方向	長径(m)× 短径(m)	深(m)	備考	分層	実測区・写真
158	C ₁	不整楕円形	N-9°-W	1.01 × 0.93	0.42		B'	図94
159	B ₁ , f ₀	楕円形	N-90°	1.27 × 1.0	0.32	土層あり	A1	図94
160	B, d ₁	不整楕円形	N-54°-W	1.02 × 0.87	0.2	ビット4	A1	図94
161	B ₁ , e, e ₂	楕円形	N-90°	1.17 × 1.07	0.16		A	図94
162	B ₁ , e ₀ B ₂ , e ₁	不整楕円形	N-73°-W	2.15 × 1.72	0.05	ビット1, 混以土層あり	A1	図94
163	B ₂ , f ₁	円形	N 64°-E	0.83 × 0.78	0.83		B'	図94
164	B ₁ , d ₁	不整三角形	N-41°-W	1.14 × 1.11	0.73	混以土層あり	B'	区107 (写21-5)
165	B ₁ , d ₀	/	/	(N-S)0.73 (E-W)0.01	0.15	北側は通路下	/	図94
166	C ₁ , a ₀	楕円形	N-86°-E	1.1 × 0.97	1.18	2段掘り込み, ビット1, 土層あり	B1'	区107
167	B ₁ , g ₀ B ₂ , g ₁	楕円形	N-59° E	1.40 × 0.95	0.35		A	区107
168	C, h ₁	長楕円形	N-67° E	2.23 × 0.93	0.25		A	区107
169	B ₁ , g ₀ , B ₂ B ₁ , B, B, h	不定形	N-11° W	3.89 × 2.17	0.28	ビット7, 混以土層あり	E	区107



第84図 第81～88号土壌



第89号土坑土層解説

- 1 黒目土層 (Y・P・焼土粒子を多く含む、赤褐色土)
- 2 黒褐色土 (ハードロームブロックを多く含む)
- 3 暗褐色土 (膠まりなくボロボロ、ロームブロックを含む)
- 4 黒褐色土 (1)に比してY・Pの発色になる)

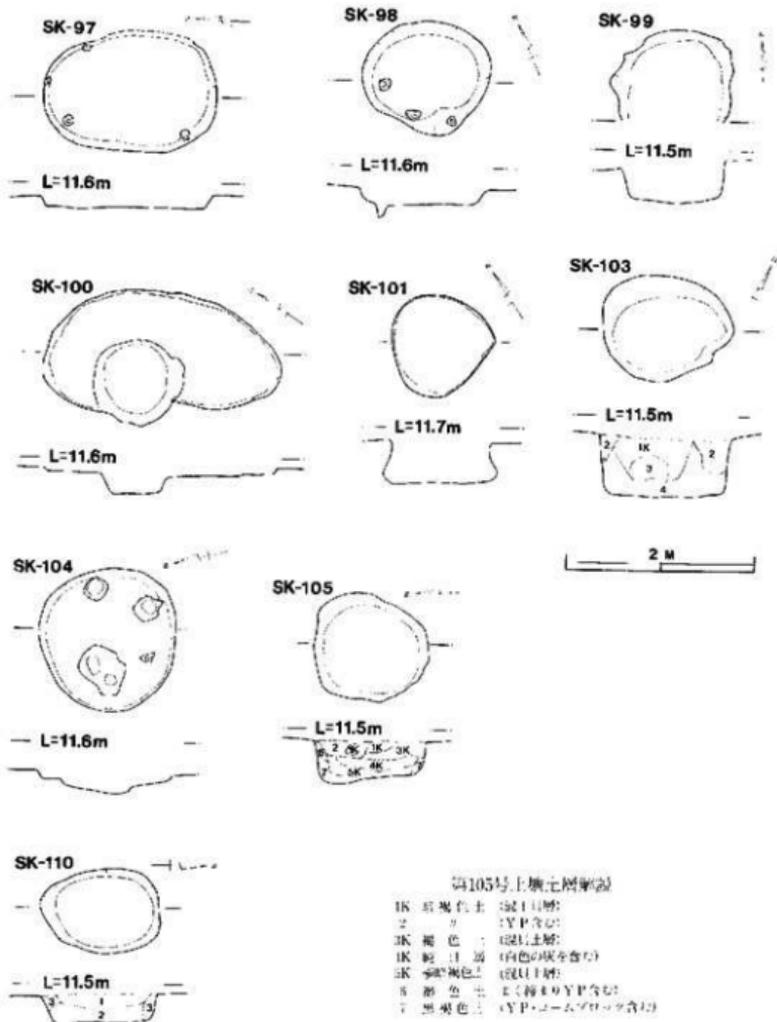
第91号土坑土層解説

- 1 暗褐色土 (Y・P・ハードロームブロック+焼土粒子含む)
- 2 赤褐色土 (Y・P・ハードロームブロック含む)
- 3 黒褐色土 (Y・P・焼土粒子含む)
- 4 褐色土 (焼く前よりハードロームブロック含む)

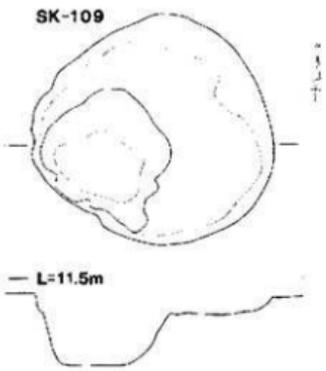
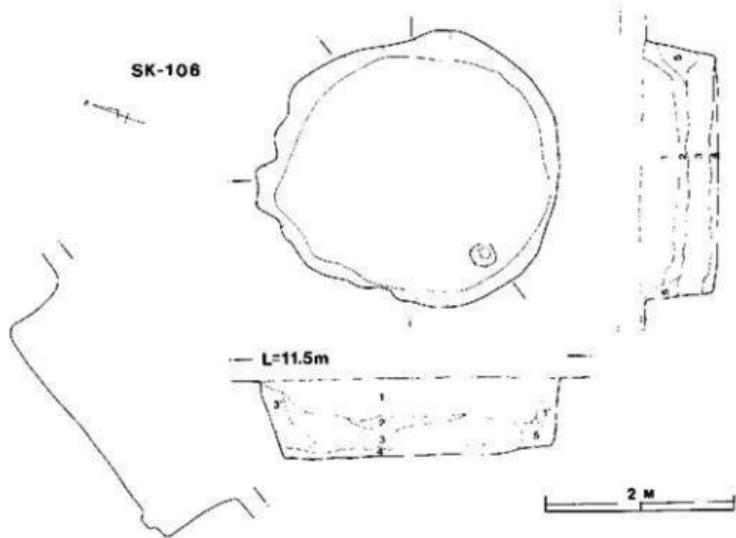
第92号土坑土層解説

- 1 黒褐色土 (赤目土層、膠まりがない)

第85図 第89～96号土坑

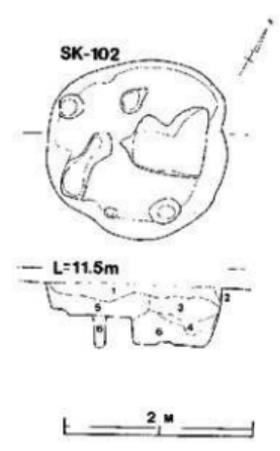
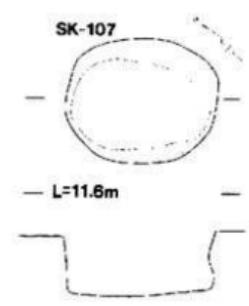
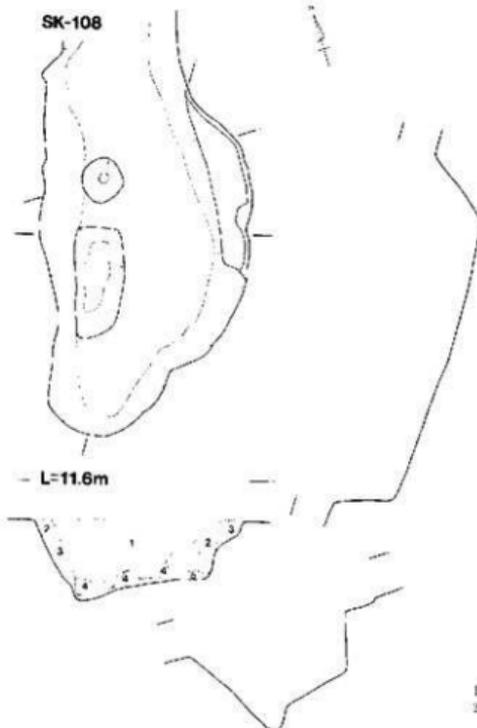


第86図 第97～101・103～105・110号土坑



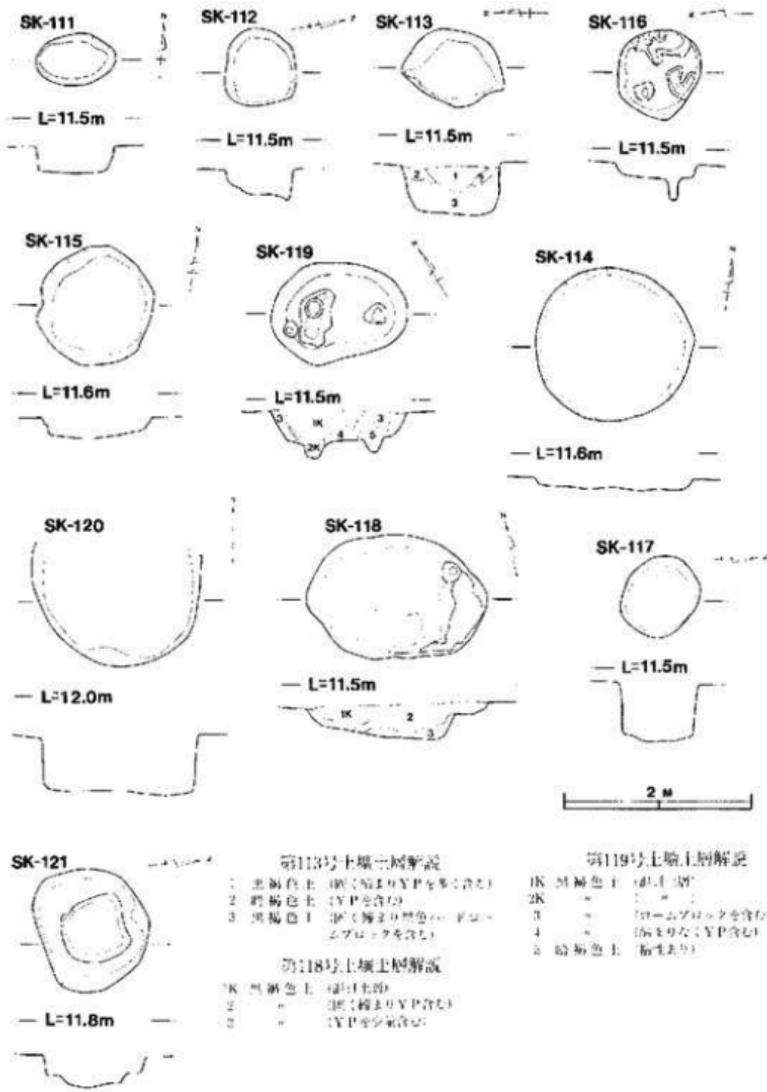
- 第106号土壌土層解説
- 1 肌褐色土 (土に硬まりハートフォーム
ブロックを含む)
 - 2 肌褐色土 (大変厚くハートフォーム
ブロックを含む)
 - 3 暗褐色土 (大変厚く灰色ローム
ブロック含む)
 - 4 肌褐色土 (流石あり、ロームを含む)
 - 5 暗褐色土 (暗くY P+炭化物含む)
 - F 1より明る。流石になる
 - 3に肌褐色土ロームブロックが混入する

第87図 第106・109号土壌

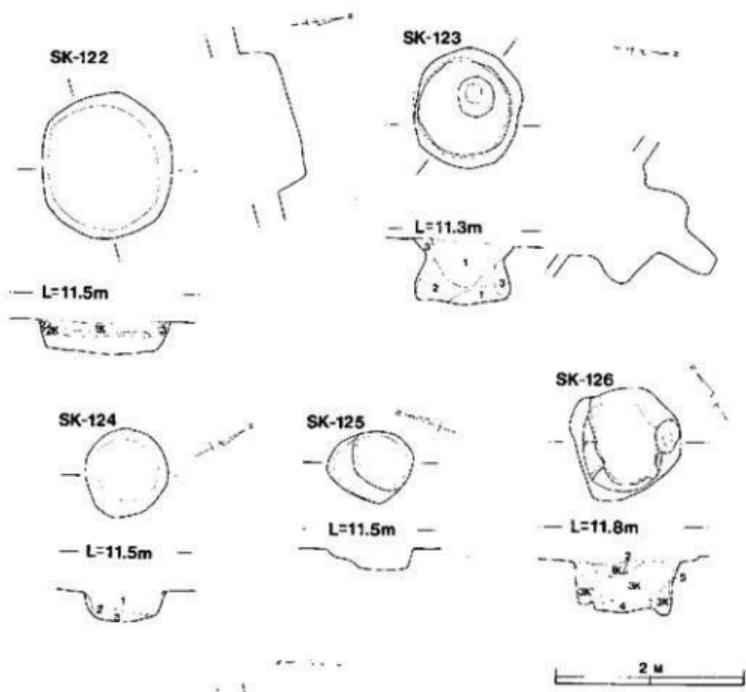


- 第102号土壌層解説
- 1 暗褐色土 (Y P・酸土層を含む)
 - 2 " (ハードロームブロックを含む)
 - 3 暗褐色土 (大穴あり)
 - 4 暗褐色土 (少量のY Pを含む)
 - 5 紫 色 (ハードロームブロックを含む)
 - 6 暗褐色土 (いくらか腐葉土を含む)
- 第108号土壌層解説
- 1 黒褐色土 (Y P・腐葉土・硬石を含む)
 - 2 暗褐色土 (硬石ありなし)
 - 3 " (少量のY Pを含む)
 - 4 " (硬石がなくハードロームブロックを多数含む)
 - 5 " (ハードロームブロックを特に多量を含む)
 - 6 " (ハードロームブロックを特に多量を含む)

第88図 第102・107・108号土壌



第89図 第111～121号土壌



第122号土壌土層解説

- 1K 雑 草
- 2 赤 色 土 (ロームプロック影入)
- 3K 泥 土 層
- 3 暗 栗 色 土 (ロームプロック含む)

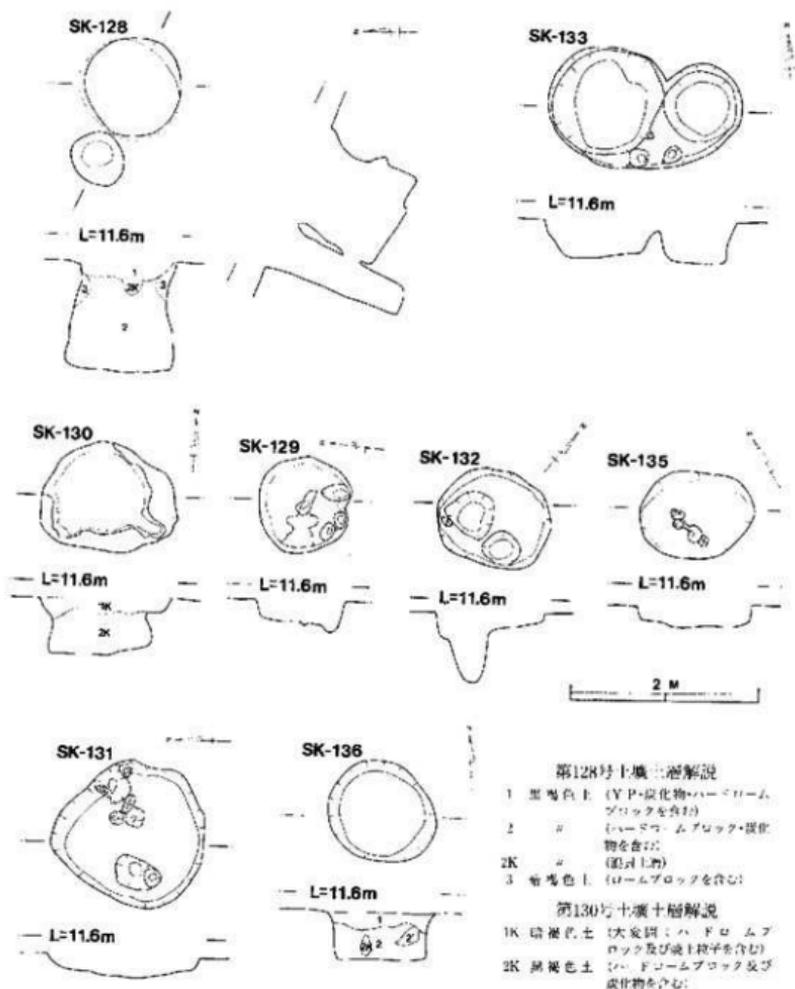
第123号土壌土層解説

- 1 泥 土 層 (炭化物・VPを含む)
- 2 黒 褐色 土 (泥土層)
- 3 赤 色 土 (黒く硬まりハードロームプロック及びVPを含む)

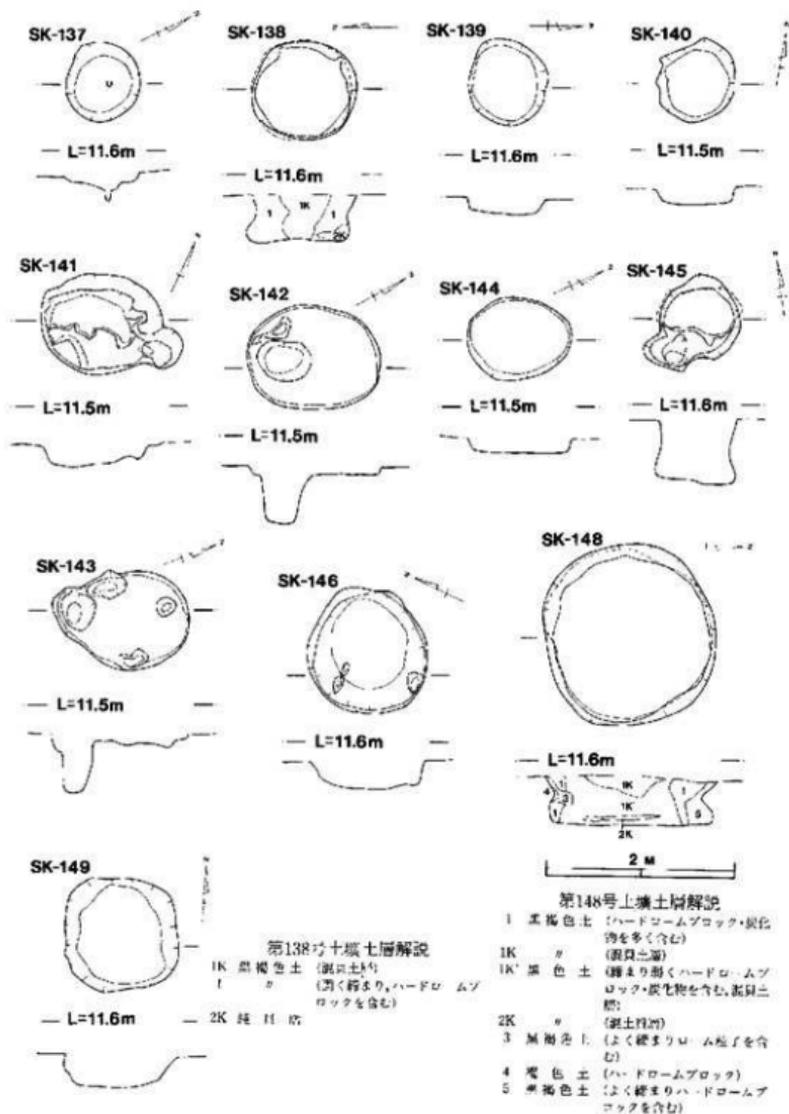
第124号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 土 (暗く硬まりハードロームプロックを多く含む)
- 2 赤 色 土 (暗く硬まりハードロームプロックを多く含む)
- 3 暗 褐色 土 (暗く硬まりロームハードロームプロックを含む)

第90図 第122～127号土壌



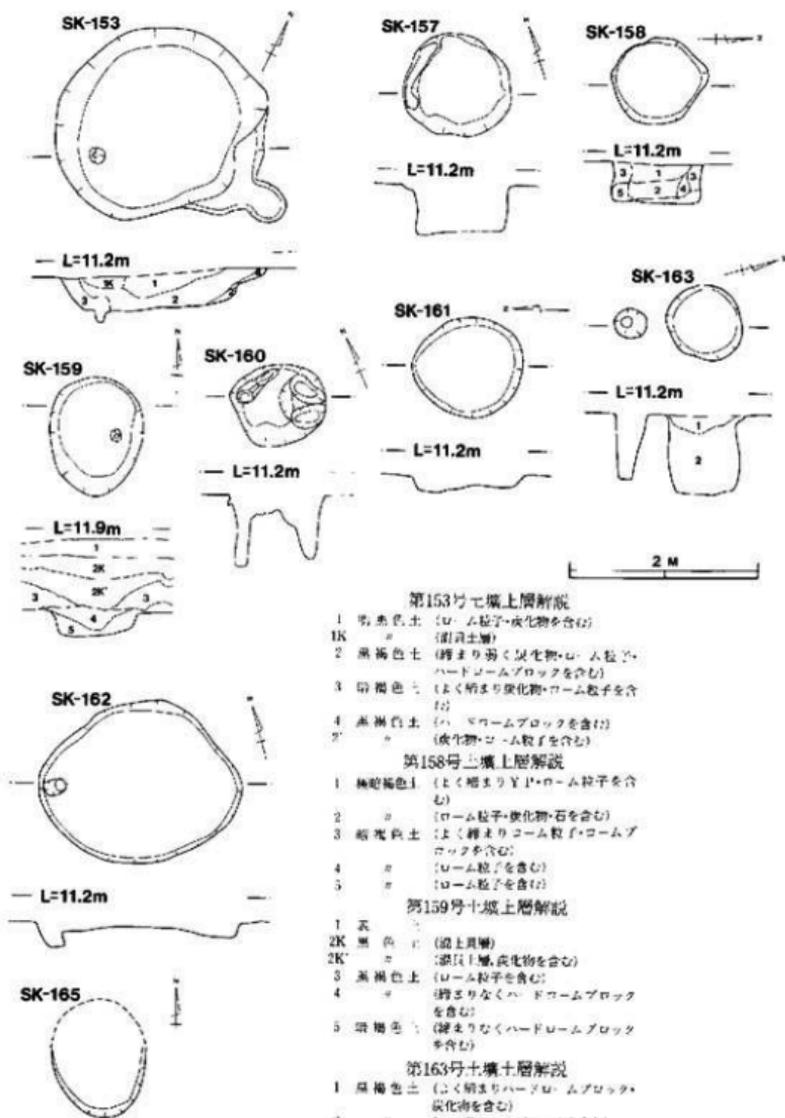
第91図 第128～133・135・136号土壌



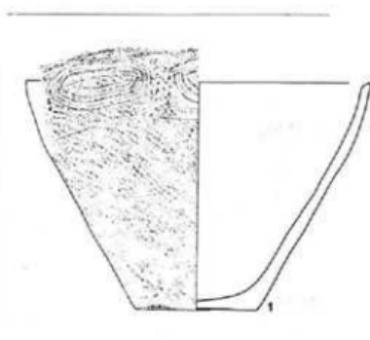
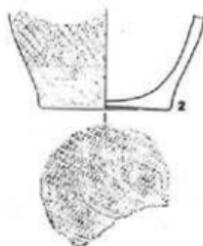
第92図 第137～146・148・149号土層



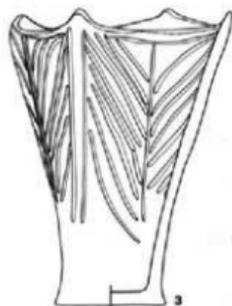
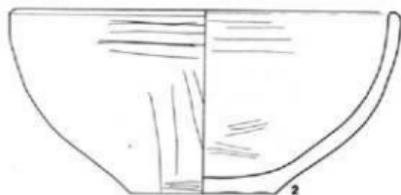
第93図 第147・150・151・152・154・155・156号土壌



第94図 第153・157～163・165号土坑



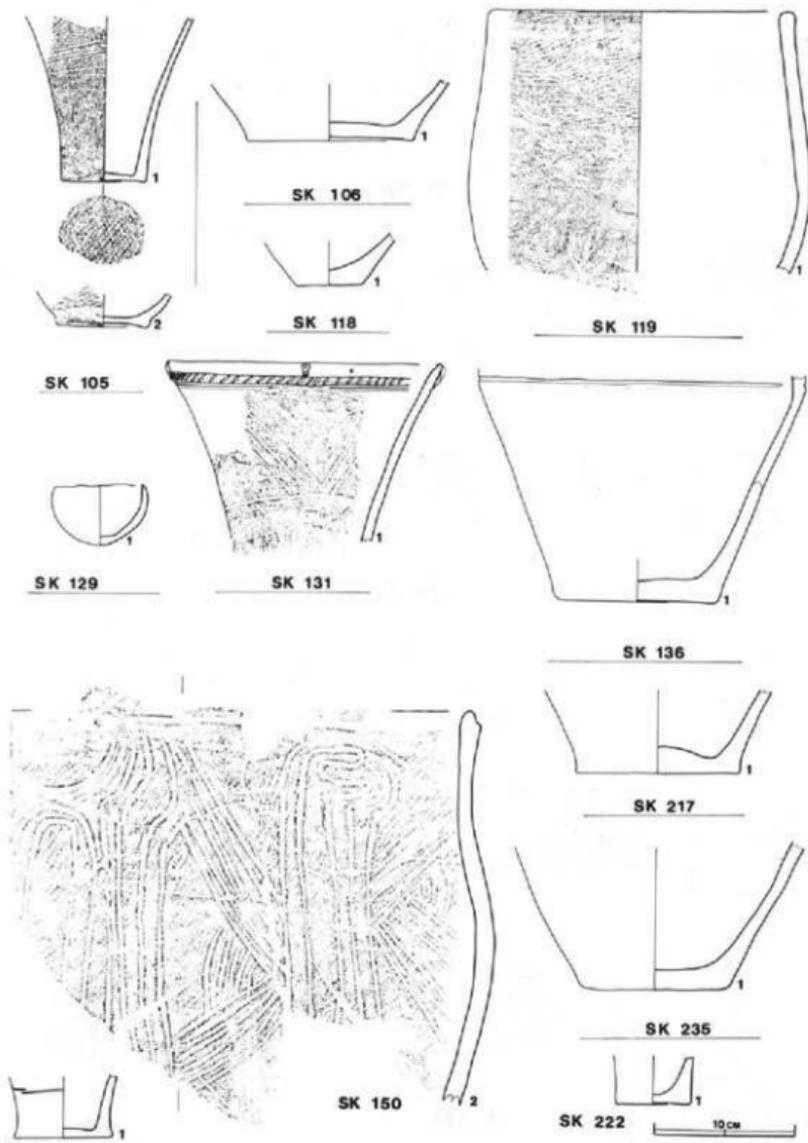
SK 087



SK 092

10 CM

第95図 土壇出土遺物



第96図 土壇出土遺物



SK 080



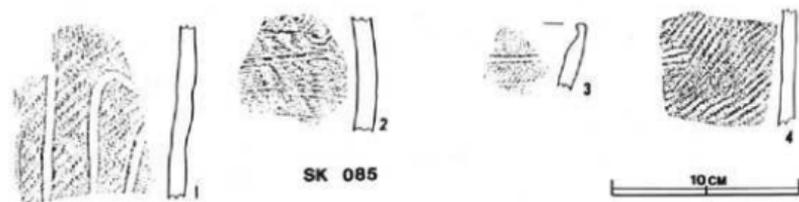
SK 081



SK 082

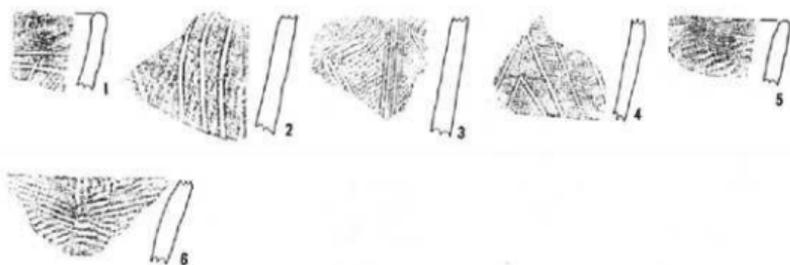


SK 083



SK 085

第97図 土壌出土遺物



SK 086



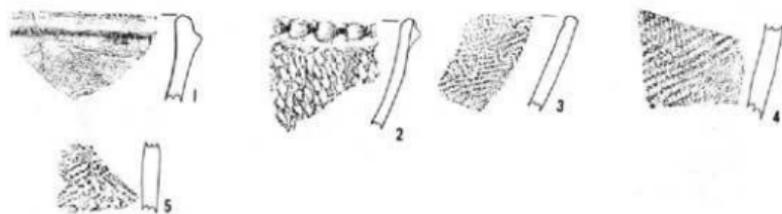
SK 087

10CM

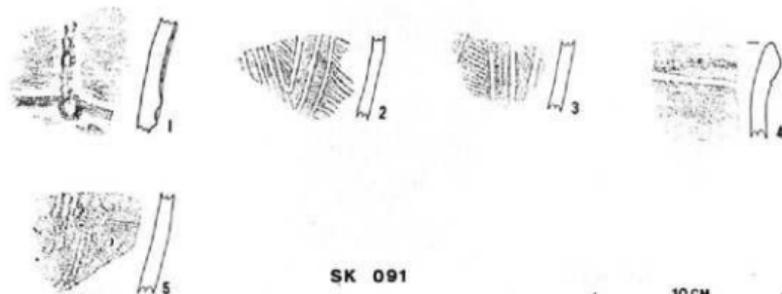
第98図 土壇出土遺物



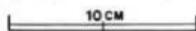
SK 088



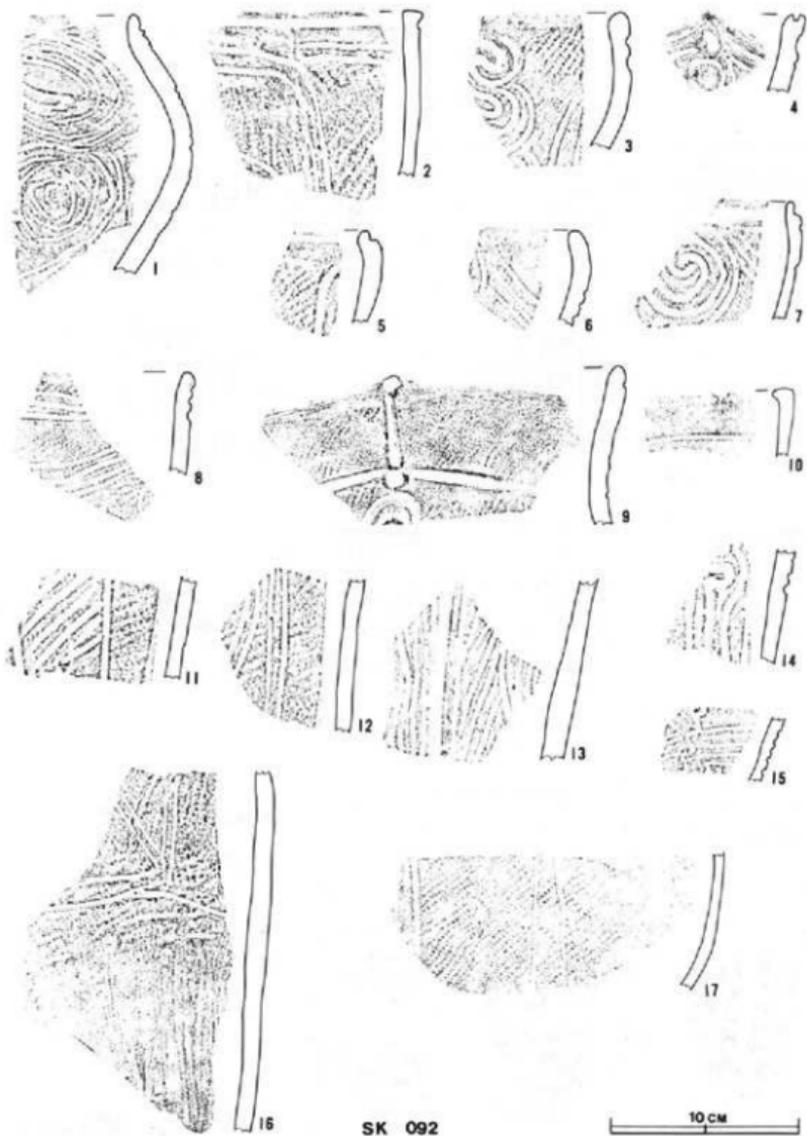
SK 089



SK 091

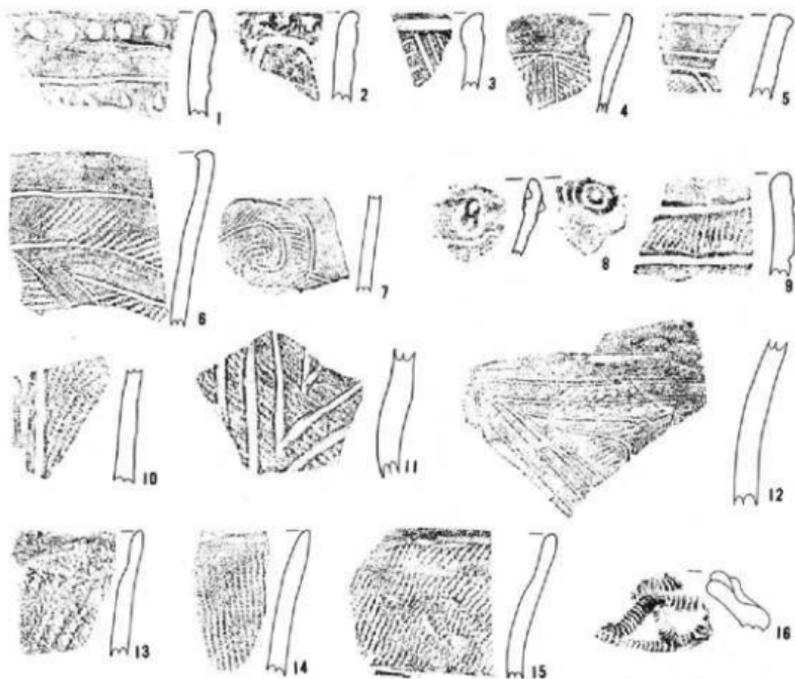


第99図 土壤出土遺物

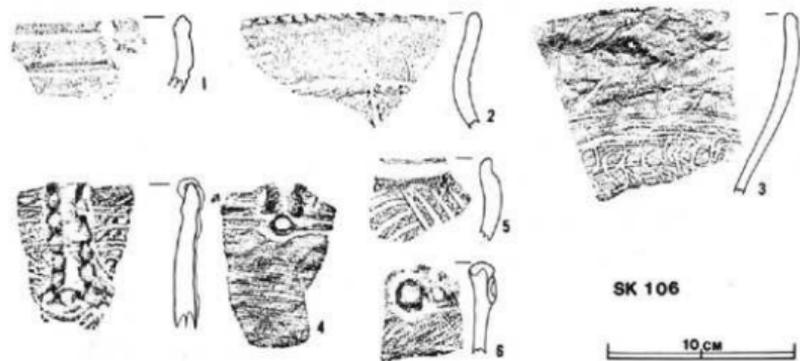


SK 092

第100圖 土壤出土遺物



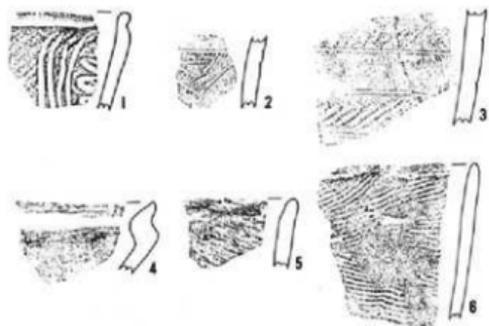
SK 105



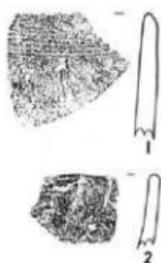
SK 106

10 CM

第101圖 土壤出土遺物



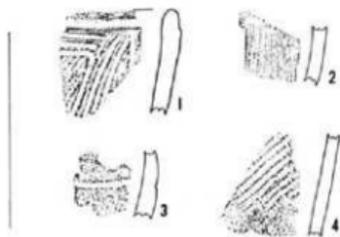
SK 110



SK 117



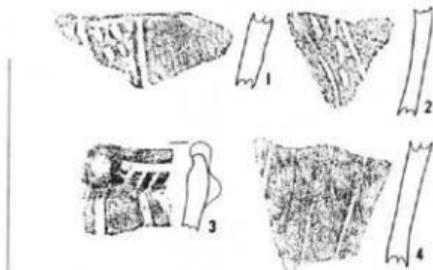
SK 118



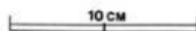
SK 119



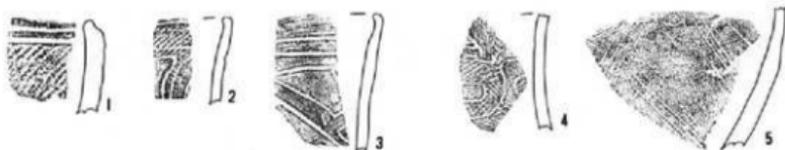
SK 122



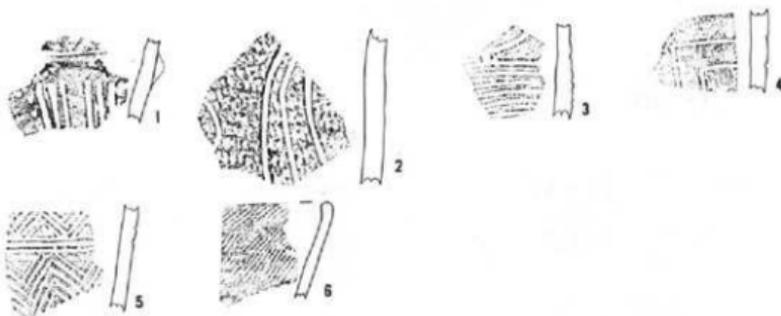
SK 123



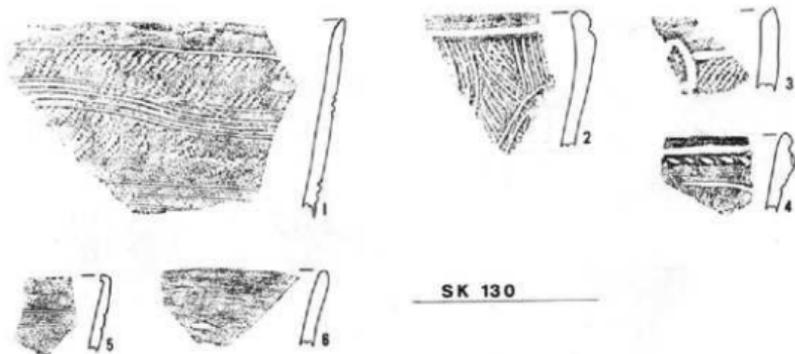
第102図 土壤出土遺物



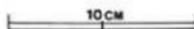
SK 126



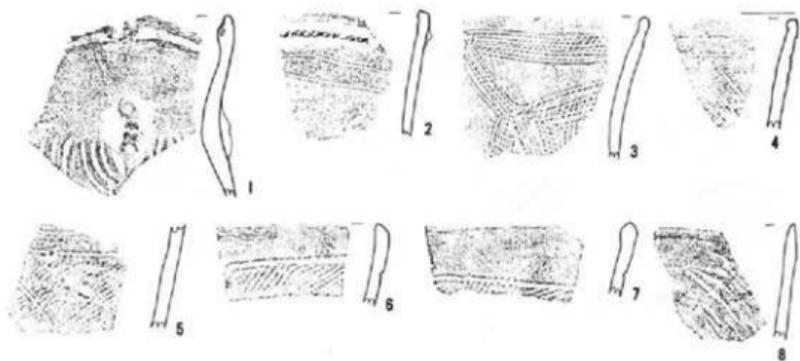
SK 127



SK 130



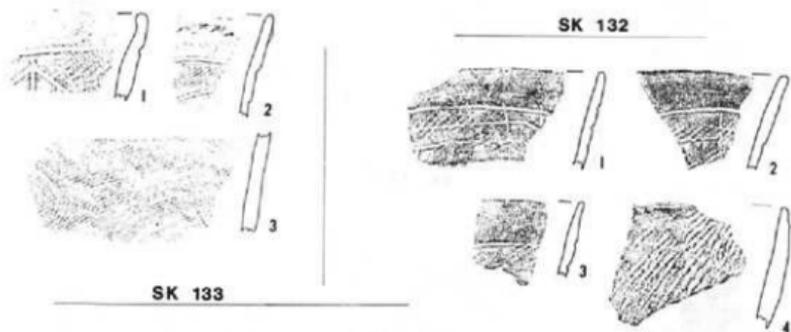
第103圖 土壤出土遺物



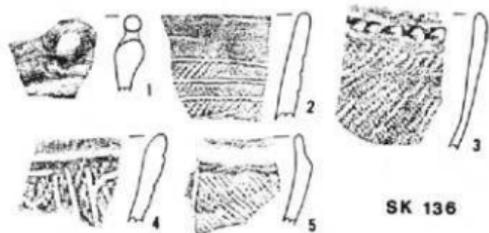
SK 131



SK 132

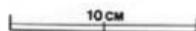


SK 133

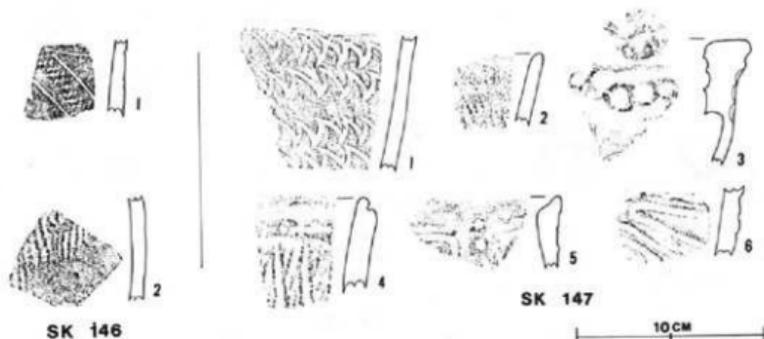
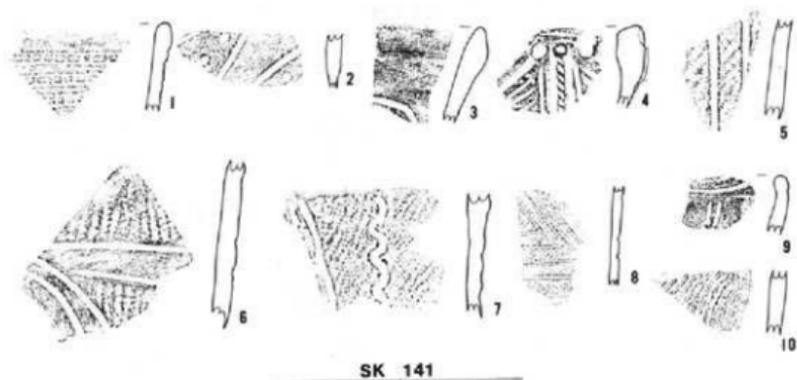
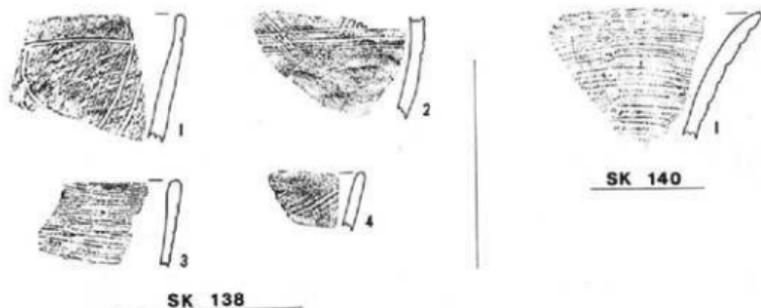


SK 136

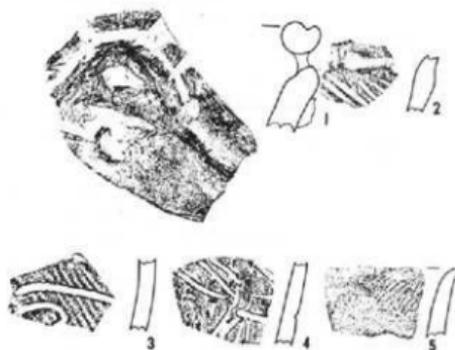
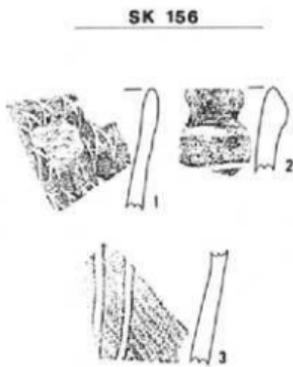
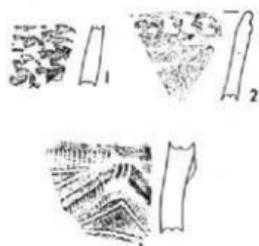
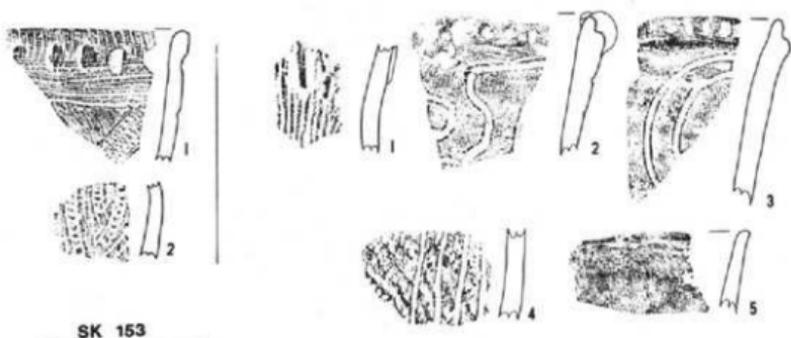
SK 135



第104図 土壤出土遺物



第105図 土壌出土遺物



10cm

第106圖 土壇出土遺物

表43 第95区 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物名	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SK 087	1	斐形 器	口径	20.5	口縁部: 粘土層を貼り付け、指節による刻文を施す。半截竹管文を附す。外面はヘラ磨き	前土にスロリア・砂粒を含む。土は明赤褐色、下半は黒褐色、内底は灰黄褐色を呈する
			現存高	25.2		
	2	深鉢底部	現存高	6.5	体部は粗い織文のみ。内部はヘラ磨き、底面に刻文	粘土に砂粒・スロリアを含む。土は暗褐色を呈する
			底径	9.3		
			底径	9.3		
	3	盤形 器	口径	18.4	口縁部に粘土泥を貼付、指節による刻文を施す。半截竹管による半竹洗線・縦の五刺文を施す。内面に2条の沈線	前土にスロリア・砂粒を含む。土は明赤褐色を呈する
現存高			16			
底径			16			
SK 092	1	鉢形 器	口径	24.0	口縁部に、半截竹管による二重の横長の指節刻文を施し、中間に縦2列の刻文文を施す。土は粗い織文	前土にスロリア・砂粒を含む。土は明赤褐色を呈する
			底径	16		
			底径	8.4		
	2	鉢形 器	口径	27	外・外面ともヘラ磨き	前土にスロリア・砂粒を含む。土は明赤褐色を呈する
			底径	12.6		
			底径	15		
	3	深鉢形 器	口径	14.9	口縁に4ヶ所の沈線を有し、突起下に2条の沈線。中間に1条の沈線を懸垂し、各々の底を3ヶ所を呈す沈線で充てる	前土にスロリア・砂粒を含む。土は明赤褐色を呈する。底の内式(写33-1)
			底径	20.8		
			底径	7.7		

表44 第96区 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物名	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SK 105	1	深鉢底部	現存高	11.6	幾何学形装飾刻文を有する。外底側面下半、外面はヘラ磨き。底部に刷化土痕	黒褐色を呈する。底之内式
			底径	6.0		
	2	鉢形底部	現存高	2.2	沈線並文後に織文を施す。底部近くはヘラ磨き。内面にヘラ磨き	黒褐色を呈する
			底径	6.4		
SK 106	1	鉢形底部	現存高	3.7	外面・底面……ヘラ磨き	灰褐色を呈する
			底径	11.8		
SK 118	1	鉢形底部	現存高	3.0	外面……ヘラ磨き	黒褐色を呈する
			底径	4.6		
SK 119	1	深鉢口縁部	口径	21.2	前部に横文、内・外面ヘラナデ。口縁部ヘラ磨き	赤褐色を呈する (写37-1)
			現存高	24.1		
			底径	18.5		
SK-129	1	平皿上部	口径	6.2	外面……指節の後のナデ	暗灰色を呈する (写40-3)
			現存高	4.2		
SK-131	1	深鉢口縁部	口径	19.1	口縁に8の字形の粘土地の貼付け、隆部に刻み多角する。幾何学形の装飾刻文が見える	暗褐色を呈する。底之内式
			現存高	12.6		
SK 136	1	深鉢底部	現存高	16.4	外面……内面……ヘラナデ	褐色を呈する
			底径	11.0		
SK 156	1	小形深鉢底部	現存高	4.3	外面・底面……ヘラ磨き	明赤褐色を呈する
			底径	6.8		
			口径	40.6		
			底径	44.2		
SK 217	1	深鉢底部	現存高	5.9	外面ヘラ磨き	明赤褐色を呈する
			底径	11.6		
			底径	11.6		
SK-222	1	小形深鉢底部	現存高	3.4	外面……底面……ヘラ磨き	黒褐色を呈する
			底径	5.3		
SK 235	1	深鉢底部	現存高	10.2	外面……ナデ、前部に装飾刻文	褐色……底面黒褐色を呈する
			底径	10.4		

表45 第97図 土壇出土遺物

出土遺物・区	遺物No	形状・部位	法長 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-080	1	口縁部		口唇部に沈線。ヘラ整形	
	2	胴部		横位の平行沈線	
	3	"		沈線で区画し、中に縄文を充塞する。外は磨 消し	
	4	"		沈線で区画し、中に縄文を充塞する。外は磨 消し	
	5	口縁部		ヘラ整形後の沈線	
SK-081	1	口縁部		大きな乳突から左右方向に沈線をのびす	
	2	"		口縁に平行な数条の沈線をめぐらす	
	3	胴部		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	4	"		横位の沈線	
	5	"		縄文のみ	
	6	"		縄文のみ	
SK-082	1	胴部		横位・斜位の沈線を施す	
	2	"		斜位の沈線。地文は縄文	
	3	"		斜位の沈線。地文は縄文	
	4	"		縄文のみ	
SK-083	1	胴部		縦位の沈線文	
	2	"		沈線を無線状に施す	
	3	口縁部		広い横線を付し、横位の沈線を引く	
	4	"		横線を引く。横位の平行沈線を施す	
	5	胴部		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	6	口縁部		口縁に平行な太い沈線	
	7	胴部		縄文のみ	
SK-085	1	胴部		太い沈線で文様を引く。地文は縄文	
	2	"		縄文	
	3	口縁部		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	4	胴部		縄文のみ	

表46 第98図 土域出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法堅 (cm)	表面・裏面の特長	備考
SK-086	1	口縁部		縦位・斜位の沈線文	和之内式
	2	胴部		縦位の沈線文	"
	3	"		縦位及び斜向する平行沈線を施す	"
	4	"		沈線で直線的な文様を区画し、中に縄文を充填する	"
	5	口縁部		縄文のみ	
	6	胴部		縄文のみ	
SK-087	1	胴部		横位及び斜位の沈線を施す。縄文は縄文	
	2	"		縦位の沈線で区画し、中は帯状とし縄文	
	3	口縁部		口縁に平行な沈線。縄文は縄文	
	4	"		口縁部に斜線を付し、沈線で区画された縄文帯をもち	
	5	"		6本以上の平行沈線文で縦位沈線を階段状に施す。沈線間は縄文	加賀半B式
	6	胴部		鉢形土器で、8本の平行沈線文である。沈線間は縄文	
	7	口縁部		縄文	
	8	"		縄文	
	9	"		縄文。RL	
	10	胴部		縄文	
	11	"		縄文	

表47 第99回 土壌出土遺物

出土遺構・区	遺物	形状・部位	法準 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-088	1	刷部		曲線状の沈線文	
	2	口縁部		斜行沈線	
	3	刷部		沈線で区画された中に刷文を充填する	
	4	〃		縦位・斜位の沈線文	
	5	口縁部		L層部に縦線文を付し、1本の沈線が横定する	
	6	〃		縦線を付し、縦位の沈線を貼す	
	7	〃		沈線で区画された縄文帯	
	8	〃		縄文のみ	
	9	〃		No.8と同一個体	
	10	〃		縄文のみ	
	11	〃		縄文。口縁部はU字型	
	12	刷部		縄文	
SK-089	1	口縁部		L層部に段差あり。ヘラ型	
	2	〃		縦線を貼り付ける。縄文	
	3	〃		縄文のみ	
	4	刷部		縄文のみ	
	5	〃		縄文のみ	
SK-091	1	刷部		円形の小突起から上・左右に隆帯がのびる。上方向だけ突起が欠れる	
	2	〃		沈線で文様を区画し内縁は斜沈線で埋める	
	3	〃		No.2と同一個体	
	4	口縁部		口縁に平行な沈線を有する	
	5	刷部		縄文のみ	

表48 第100図 土壌出土遺物

出土遺物・土	遺物	形状・部位	法量 (cm)	表 面 ・ 表 面 の 特 徴	備 考
SK 092	1	口縁部		口縁部はくの字状に内彎し、沈線で横文を施す。器之内式す。	
	2	"		沈線文。地文は横文	"
	3	"		口縁部は内彎し、沈線による曲線文を施す。	"
	4	"		波状口縁を呈し、刺突文から沈線がのびる	"
	5	"		口縁部に内彎し、沈線を施す。地文は横文	"
	6	"		内彎する口縁で、沈線文を主体とする	"
	7	"		沈線で横文を施す。地文は横文	"
	8	"		頸部の沈線を主に施す。地文は横文	"
	9	"		ゆるやかな波状口縁を呈し、刺突文を施す。沈線で横文を施す。下部の刺突文から左右に沈線がのびる。地文は横文	"
	10	"		口縁部の内側に突出し、口縁に平行な沈線が横走する	"
	11	側 部		頸部の沈線を斜沈線で埋める。地文は横文	"
	12	"		頸部の沈線文を主体とする。地文は横文	"
	13	"		側部・頸部の沈線文	"
	14	"		斜行沈線文	"
	15	"		S字状沈線が下降し、左右斜沈線を施す	"
	16	"		沈線で文様を区画する。胴下半部は縦方向のへら整形	"
	17	"		2本で1単位の沈線を縦方向に施す。地文は横文	"

表49 第101図 土壌出土遺物

出土遺構・区	遺物	形状・部分	法量 (cm)	表面・裏面の行装	備考
SK-105	1	口縁部		口縁に沿って内彫刺突文が並ぶ。沈線及び刺突文	
	2	"		口縁に沿って刺突。胴部にかけては沈線	
	3	"		口縁に平行な沈線を有し、斜沈線を放す	
	4	"		直線的な沈線で区画し、中は縄文で充満する	
	5	"		口縁に平行な沈線を3本所し、下部は縄文と沈線	
	6	"		沈線で幾何学的な文様を区画し、中は縄文を埋める。外は彫凹し	
	7	胴部		内縁状の沈線で文様を区画し、内部に縄文を充満する	
	8	口縁部		小波状口縁で、8の字状の貼付文。外側は沈線による凹文を造く	
	9	"		2本の沈線間に縄文を充満する	
	10	胴部		縦位の沈線間に刺突を施す。地文は縄文	
	11	"		直線的な沈線文。地文は縄文	
	12	"		沈線で幾何学的な文様を区画する。内外を縄文で埋める	
	13	口縁部		縄文	
	14	"		口縁部に浅い沈線を有す。縄文	
	15	"		外反して立ち上がる。縄文	
	16	"		鉢形土器の口縁部で、連帯に刺突が加わる	
SK-106	1	口縁部		横位の沈線文	
	2	"		口縁部に刺突を有する。胴部は沈線と刺突	
	3	"		口縁部は木筒し、横位の沈線により胴部と区画される。内側にも彫凹がのび、横位の沈線を放す	
	4	"		沈線を縦に2本貼り付け、両器を沈線で照める。内側にも彫凹がのび、横位の沈線を放す	
	5	"		口縁部に太い沈線、その沈線を縄文する。地文は縄文	
	6	"		弓形の貼付文を施す。縄文	

表50 第102図 土壌出土遺物

出土遺物・X	器物名・器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-116	1	口縁部	口縁に平行な沈線、横位及び蛇行沈線を配す	
	2	胴部	沈線で文様を区画し、中に縄文を充填する	
	3	#	沈線で区画された御文帯	
	4	口縁部	口縁部がくの字状に屈曲し、太い沈線を有する	
	5	#	縄文	
	6	#	縄文	
SK-117	1	口縁部	多くの沈線が横位に施文される	
	2	#	縄文	
SK-118	1	口縁部	2本の沈線間に斜交文が並ぶ	
	2	#	口縁部に縦線を付し、横位の沈線を施す	
	3	胴部	くびれ部に縦線を付し、上下とも帯い沈線を施す	
SK-119	1	口縁部	口縁に平行な沈線を有し、胴部にかけて沈線を施文する	
	2	胴部	糸線文	
	3	#	横位の沈線。地文は縄文。	
	4	#	縄文	
SK-122	1	口縁部	口縁部に縦線を付す。縄文	
	2	#	降線を工字状に貼り付け、上に稜突を加える	
	3	#	縄文	
SK-123	1	胴部	2本の沈線間に米友状の斜交文を配する。ヘラ型形	
	2	#	2本の沈線間に米友状の斜交文を配する	
	3	口縁部	円形斜交から横位・縦位の沈線をのばす	
	4	胴部	ヘラ型形横斜位の沈線を施す	

表51 第103図 土壌出土遺物

出土遺物・X	遺物%	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK 126	1	口縁部		口縁部に平行な2本の沈線をもつ。縄文	
	2	"		沈線で区画された中に縄文を充填する	
	3	"		沈線で区画的な文様を区画し、中に縄文を充填する	
	4	胴部		沈線で区画された文様の中に縄文を充填する	
	5	"		斜位の平行沈線	
SK 127	1	胴部		沈線及び刺突文	
	2	"		弧状の沈線。地文は縄文	
	3	"		沈線文	
	4	"		沈線で区画し、縄文を充填する	
	5	"		斜位の平行沈線の上に口形の平行沈線を配する	
	6	口縁部		縄文のみ	
SK-130	1	口縁部		数本の平行沈線を横位に施す。地文は縄文	
	2	"		口縁部に平行な沈線をもつ。斜沈線を施す	
	3	"		太い沈線を施す。地文は縄文	
	4	"		口縁に平行な沈線及び斜交をもち沈線をもつ	
	5	"		口縁に平行な2本の沈線をもつ	
	6	"		まばらな縄文	

表52 第104図 土壌出土遺物

出土遺物・区	図No.	形状・部分	法尺 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-131	1	口縁部		8の字状の貼付文を有し、半円形の沈線を描文する	器之形式
	2	"		細い沈線を描文し、数条の沈線を横位につける	"
	3	"		口縁は外反し、平行沈線で文様を区画し、中に縄文を施す	
	4	"		横位一帯位の細い沈線を施す	
	5	胴部		沈線文、地文は縄文	
	6	口縁部		沈線で区画された内部に縄文を充填する	
	7	"		No.6と同一体体であろう	
	8	"		細い沈線をよばらんに施文する	
	9	"		口唇部に発汗を有し、ゆるく欠損する。縄文	
SK-132	1	口縁部		口縁に平行な沈線を有し、縦位の沈線を充填する	
	2	"		口縁に平行な沈線を二本有し、その間に斜交を加える	
SK-133	1	口縁部		沈線で区画した中に縄文を充填する	
	2	"		口唇部に平行な沈線を描文し、沈線で区画された縄文帯をもつ	
	3	胴部		細い沈線を縦位に施す。地文は縄文	
SK-135	1	口縁部		口縁に平行な数条の沈線を描文し、中に縄文を充填する。部分的に縦位の沈線を加える	
	2	"		沈線で区画された中に縄文を充填する。縦位の沈線のみみられる	
	3	"		No.2と同一体か	
	4	"		縄文のみ	
SK-136	1	口縁部		衣状口縁の突起部に貫通孔を有する	
	2	"		平行沈線で区画された中に縄文を充填する。外は磨湾し	
	3	"		口縁部に細線を描文し、地文	
	4	"		直線及び曲線の沈線で区画する	
	5	"		口唇部が大きく磨られ、縦位の沈線を施す。地文は縄文	

表53 第105図 土壇出土遺物

出土遺物・区	遺物	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-138	1	口縁部		口縁に平行な沈線から下部に伸びる帯状の沈線が施文される	
	2	胴部		斜沈線のもと、帯状の沈線が施される。	
	3	口縁部		帯状の沈線を施文する	
	4	#		縄文	
SK-140	1	口縁部		横位の平行沈線を施文後、円形の竹管文を刺突する	
SK-141	1	口縁部		平行沈線を3段に施文し、帯を縦の沈線で区切る	
	2	胴部		2本の沈線間に刺突文を施す	帯名古式
	3	口縁部		へら彫り沈線	
	4	#		波状口縁の波状部、3個の刺突文から縦線と沈線が垂下する。蓋縁には刺突が加わる	帯之古式
	5	胴部		帯位の沈線文。地文は縄文	#
	6	#		太目の沈線で区画された内側を磨削す。外は縄文	
	7	#		帯位の沈線で、直線と蛇行がある	帯之古式
	8	#		沈線で幾何学的な文様を区画し、中に縄文を充満する	#
	9	口縁部		沈線文	
	10	胴部		波状の沈線を充満する	
SK-146	1	胴部		沈線で区画された中に縄文を充満する	帯之古式
	2	#		帯位に平行な縄文のみ	
SK-147	1	胴部		刺突状の連続点線文を施す	帯名古式
	2	口縁部		アウダン個の目を付いた波線文がみられる	#
	3	#		波状口縁の突縁部で、太い沈線、円形刺突の手法が用いられる	
	4	#		口縁部に1本の沈線を有し、帯位の沈線を施す。地文は縄文	
	5	#		沈線間に円形刺突を施文する	
	6	胴部		沈線文	

表54 第106図 土壇出土遺物

出土遺物・区	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表置・裏置の特徴	備考
SK-153	1	口縁部		沈線が主で、彫出し手ばみみられる	
	2	胴部		平行沈線間をじ字状の刺突で埋める	
SK-154	1	胴部		粘土沈線に貼付文がみられる	
	2	口縁部		口縁部に刺突が入り、以下は沈線文	
	3	〃		No.2 と同一個体であろう	
	4	胴部		縄文地に隆位の沈線	
	5	口縁部		口縁部に深い沈線が入る	
	6	〃		口縁部に平行な竹管による沈線を嵌文する	
	7	胴部		沈線で平行線か曲線を描きさらに刺突か縄文を加える	
SK-156	1	胴部		三角形の陰刻文列をもつ	浮島式
	2	口縁部		口縁部に陰刻文をもつ	〃
	3	胴部		帯状の隆起に刻みをもつ	
SK-157	1	口縁部		わずかに縄文が残る	
SK-158	1	口縁部		刺突状の目型縞縄文を嵌文する	
	2	〃		口縁に平行な沈線2本	
	3	胴部		隆位の沈線。地文は縄文	
SK-169	1	波状口縁		大波状口縁の波頂部で沈線と刺突を貼す。中央に貝殻孔を有す	
	2	胴部		斜沈線がみられる	
	3	〃		縄文地に沈線文	
	4	〃		沈線文	
	5	口縁部		縄文のみ	

表55 (土壌一覽表 (9))

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径(間)× 短径(間)m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
170	C ₂ a	楕円形	N-18°-E	1.71 × 約1.4	0.14	SK-193と重複	A1	図107
174	B ₂ g ₂	円形	N-0°	1.11 × 1.08	0.09	ピット2	A1	図108 (写21-6)
175	B ₂ i ₂	不整楕円形	N-21°-W	1.21 × 0.98	0.49		B'	図108
176	B ₂ e ₂	楕円形	N-38°-W	0.81 × 0.73	1.5 以上	井戸状を呈す、泥貝 土層あり	B'	図108
177	B ₂ d ₂	不整楕円形	N-3°-W	1.16 × 0.96	0.8	SI-25と重複、碎石	B'	図108 (写22-1)
178	B ₂ d ₂	楕円形	N-61°-E	1.28 × 1.0	1.5 以上	井戸状を呈す、貝層 あり	B'	図108
179	B ₂ C ₂ , C ₂ d ₂ , d ₂	円形	N-75°-W	1.02 × 0.96	1.0 以上	要土は泥貝土層	B'	図108
180	B ₂ f ₂ , f ₂ g ₂ , g ₂	楕円形	N-4°-E	1.29 × 1.08	1.04	ピット1、泥貝土層 あり	C1	図108
181	A ₂ i ₂	/	/	(N S)2.0 (E-W)1.65	0.49	東側は通路	A1'	図109
182	A ₂ i ₂ j ₂	楕円形	N 2° E	1.07 × 0.68	0.65		A'	図108
183	A ₂ i ₂	楕円形	N 85° W	1.71 × 1.0以上	0.19	北側は通路、南側に ピット1	A1	図108
184	B ₂ f ₂ g ₂	円形	N 1° W	1.33 × 1.29	0.26	礫石	A	図108

表56 (土壌一覧表 36)

土壌名	地区	平面形状	式軸方向	長径m× 短径m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
185	B ₁ f ₁	不整形円形	N-31°-E	1.55 × 1.02	0.24	ピット 2	B1	図108
186	B ₂ h ₂ i ₂	楕 円 形	N-20°-W	1.04 × 0.85	0.85	土層は袋状を呈す、 貝殻あり	B'	図109
187	C ₂ d ₂ C ₂ d ₁	円 形	/	1.2	0.37	紙石	A	図109
188	C ₅ d ₁ e ₁	不整形円形	N-47°-W	1.46 × 1.21	0.66	層上に灰殻を含む、 打裂石斧	A'	図109
189	C ₂ f ₂ g ₂	不 定 形	N-27°-E	1.98 × 1.59	0.39	ピット 1	E	図109
190	C ₂ d ₁ d ₂	不 整 円 形	N-50°-E	0.81 × 0.73	0.53	SI 17・18の接点部 に位置する	A'	図109
191	C ₂ b ₂	楕 円 形	N-80°-W	1.31 × 0.99	0.26		A	図109
192	B ₂ b ₂	不整形円形	N-55°-E	0.81 × 0.64	0.25		A	図109
193	C ₂ b ₂	楕 円 形	N 8°-E	約2.5 × 1.64	0.15	SK-170と重板	A1	図110
194	C ₂ d ₂ D ₂ a ₂	不 定 形	N 86°-W	0.95 × 0.75	0.1	ピット 2	E	図109
195	C ₅ e ₁ f ₁	楕 円 形	N-64°-W	1.42 × 1.25	0.15	深形土器	A	図109
196	C ₂ e ₂ C ₂ e ₁	円 形	/	1.33	0.25	ピット 4	A1	図109

表57 (土壌一覽表 37)

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径m × 短径m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
197	C ₁ f ₀	楕円形	N-3-E	1.41 × 0.97	0.23	ビット2	A1	図110
198	C ₁ j ₂	不整楕円形	N-53-W	1.8 × 1.08	0.14	ビット1, 表面土層あり	A1	図110
199	C ₂ i ₂	不整楕円形	N-82-W	1.98 × 1.28	0.27	混じり土層あり	A	図110
200	B ₂ d ₁ d ₂	不整楕円形	N-82-W	0.85 × 0.7	0.99	方形状を呈す, 目が混入する	B'	図109
201	B ₂ c ₁ ,c ₂ d ₁ ,d ₂	不整三角形	N-37-W	1.11 × 1.04	0.58		B'	図110 (写22-2)
202	C ₁ j ₁	楕円形	N-25-E	1.17 × 0.9	0.68		B'	図110
203	C ₂ i ₂ D ₂ a ₅	楕円形	N-82-E	1.29 × 1.0	0.14		A	図110
204	D ₂ a ₁ ,a ₅ b ₇ ,b ₈	不整楕円形	N-29-W	1.76 × 1.42	0.87	張紙2段張り込み, オーバーハンド距離1m	C	図110
205	C ₂ i ₂ j ₂	不整楕円形	N-38-E	1.53 × 1.23	0.76		A'	図111
206	B ₂ g ₅ h ₅	不整長方形	N-37-E	2.58 × 1.54	0.76		D'	図111
207	B ₂ f ₁ f ₂	楕円形	N-14-W	0.86 × 0.76	0.61		B'	図110
208	B ₂ f ₁ f ₂	楕円形	N-14-W	1.74 × 1.1	0.38		A	図111

表58 (土壤一覽表 (8))

土塊No	地区	平面形状	長軸方向	長径(樹)× 短径(m)	深(m)	備 考	分類	実測区・写真
209	B ₂ f, i ₁	楕圓形	N-90°	1.03 × 0.93	0.67	ピット1	B1'	図110
210	B ₂ d, i	不整形	N-35°-W	1.08 × 0.99	0.18		A	図110
211	C ₂ j ₁ , D ₂ e ₂	不整形	N-0°	1.75 × 1.08	0.51	樹根は2段掘り込み、ピット5、混貝土層あり	A1	図111
212	C ₂ j ₂	楕圓形	N-56°-W	1.75 × 1.54	0.43		A'	図112
213	C ₂ i ₁	不整形	N-1°-E	1.7 × 1.0	0.15	ピット6	A1	図111
214	C ₂ i ₂	不整形	N-56° E	0.98 × 0.94	0.48	深鉢形土器	A'	図111
215	C ₂ i ₂ j ₂	楕圓形	N-54°-E	1.23 × 0.91	0.21	ピット2、覆土上部は混土貝層	A1	図111
216	C ₂ h ₁	楕圓形	N-81°-W	1.19 × 1.05	0.54	純貝層・混貝土層あり	C	図111 (写22-3)
217	C ₂ h ₂	不整形	N 52° W	1.08 × 0.86	0.19	ピット1	A1	図111
218	C ₁ h ₂ i ₂	楕圓形	N-78°-E	1.37 × 0.85	0.33		A	図111
219	C ₂ h ₂ i ₂	/	/	2.68	0.43	2基の土痕が連続した形を示す	E	図112
220	B ₂ b ₁	楕圓形	N-12°-W	1.0 × 0.82	0.53		B'	図111

表59 (土壌一覽表 (19))

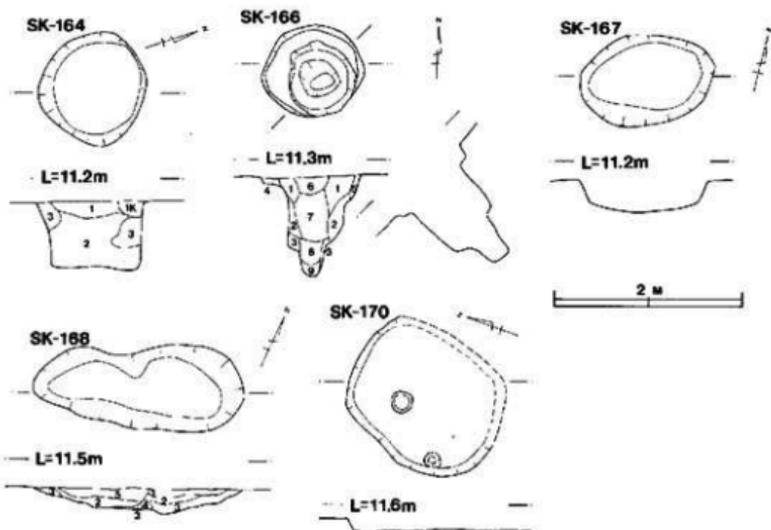
土番No	地 区	平面形状	長短方向	長径90°× 短径45°m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
221	B ₂ i ₂	不整門形	N-58°-W	0.74 × 0.68	0.14		A	図112
222	B ₂ b ₁	円 形	/	1.19	1.38	井戸状を呈する、深鉢形土層	B'	図112
223	B ₂ d ₁	不整角三角形	N-0°	1.24 × 1.0	0.29		A	図112
224	B ₂ b ₂ c ₁	不整楕円形	N-6°-W	2.07 × 1.39	0.71		A'	図112
225	B ₂ c ₁	不整楕円形	N-75°-E	1.41 × 1.23	0.92		A'	図113
226	B ₂ c ₁	不整楕円形	N-10°-W	0.73 × 0.71	0.69	北壁が1部でオーバーハンクする	C	図112
227	B ₂ a ₃	楕 円 形	N-70°-E	0.97 × 0.87	0.57		A'	図112
228	B ₂ b ₁	不整角三角形	N-32°-E	1.32 × 1.14	0.31		A	図112
229	B ₂ a ₃	楕 円 形	N-0°	約0.9 × 0.65	0.42	ピットにより1部を切られている	A1	図112
230	B ₂ a ₃	楕 円 形	N 63° E	1.03 × 0.82	0.18		A	図112
231	A ₂ j ₂	隅丸長方形	N 27° E	1.57 × 0.78	0.55		D'	図113
232	A ₂ i ₂	/	/	0.8 × 0.6	0.45	平面形状不明	E	図113

表60 (土壌一覧表 (20))

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径m × 短径m	深さm	備考	分類	実測図・写真
233	A ₂ i ₂	/	/	(N-S)1.7 (E-W)1.5	0.12	西側通路, ビット1	A1	図113
234	A ₂ i ₂ i ₄ j ₂ j ₄	/	/	3.0 × 1.7	0.17	ビット5, 北側假壁	E	図113
235	B ₂ d ₄	不整密円形	N-12°-W	1.18 × 0.89	0.65		B'	図113 (7/22-4)
237	C ₂ e ₂ e ₄	円形	N-38°-E	0.82 × 0.7	1.02	井戸状を呈する	B'	図113
238	B ₁ b ₁ d ₁	不整密円形	N-22°-E	1.08 × 1.0	0.27	城底北側は2段掘り込み	A1	図113 (7/22-5)
239	B ₁ b ₁ d ₁	不整密円形	N-60°-E	2.08 × 1.92	0.13	混泥土層あり	A1	図113
240	B ₂ i ₁	不整円形	/	1.95	0.95	井戸状を呈す	B'	図114
241	C ₂ d ₁	/	/	1.33	0.78	北側半分は不明	A'	図114
242	B ₂ c ₂	不定形	N-85°-W	1.78 × 1.27	0.75		E	図114
243	B ₂ c ₂	不定形	N-77°-W	1.79 × 0.63	0.72		E	図114
244	B ₁ d ₂	楕円形	N-71°-W	0.87 × 0.78	0.72		B'	図114
245	B ₂ c ₂ d ₂	楕円形	N-22°-W	1.39 × 1.01	0.76	城底部長径1.79m, 両短径1.28m	C	図114 (7/22-6)

表61 (土壤一覽表 (2))

土壌No.	地区	平面形状	長軸方向	長径軸× 短径軸(m)	深さm.	備考	分類	実測図・写真
246	B ₁ d ₀	楕円形	N-30° W	1.1 × 0.98	1.4 以上	井戸状を呈す。混同 土層	B'	図114
247	B ₁ c ₀ d ₀	円形	/	0.98	0.83	SK-248と重複	A'	同114
248	B ₁ c ₀ d ₀ ; B ₂ c ₁ d ₀	不整形	N-61° W	約1.7 × 1.42	0.75	SK 247と重複	D'	同114



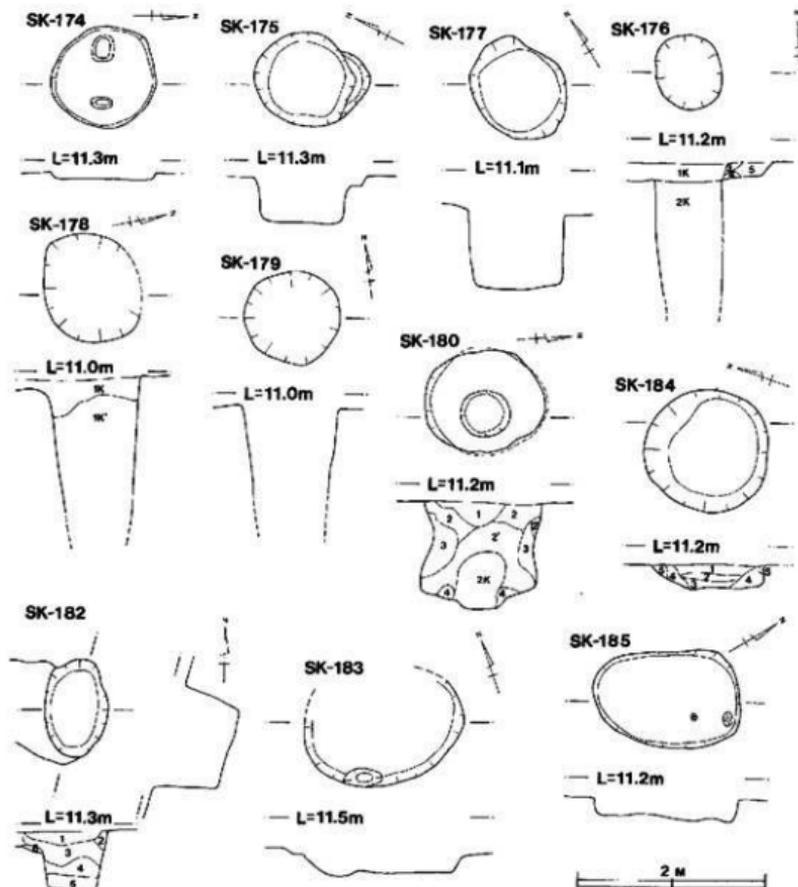
第166号土坑土層解説

- 1 奇褐色土 (Y P・ローム粒子・炭化物を含む)
- 2 " (ロームブロック含む)
- 3 褐色土 (虫渠あり、ロームブロック含む)
- 4 均褐色土 (埴まりあり)
- 5 均褐色土 (埴まり弱くローム粒子を多量含む)
- 6K 黒褐色土 (泥河土層、埴まりあり)
- 7K 均褐色土 (泥河土層、ローム粒子を含む)
- 8K " (泥河土層、埴まり弱くローム粒子を含む)

第168号土坑土層解説

- 1 均褐色土 (ハードロームブロック・Y P・ローム粒子含む)
- 2 均褐色土 (ロームブロック・Y Pを含む)
- 3 " (路地あり、ハードロームブロックを含む)
- 4 " (ハードロームブロックを含む)
- 5 均褐色土 (よく埴まり焼土粒・Y P・ハイス・炭化物を含む)

第107図 第164・166～170号土坑



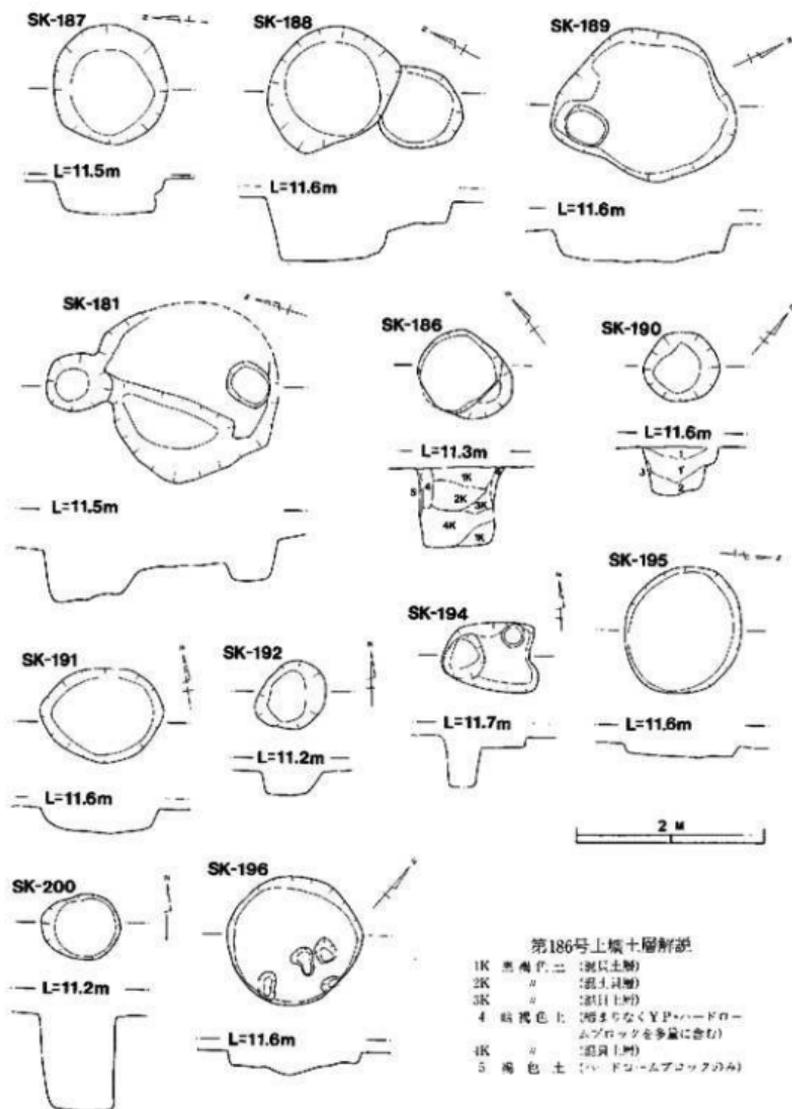
第180号土壌土層解説

- | | |
|----|----------------------------------|
| 1 | 高褐色土 (粘まりなく炭化物・ハードロームブロックを含む) |
| 2 | 高褐色土 (粘まりなくハードロームブロックを多く含む) |
| 2' | 高褐色土 (粘まりなく炭化物・ハードロームブロックを多量に含む) |
| 3K | 黄褐色土 (灰白土層、粘まりなし) |
| 3 | 暗紫色土 (粘性あり、ハードロームブロックを多く含む) |
| 4 | 高褐色土 (粘まりなく炭化物・黒色ハードロームブロックを含む) |

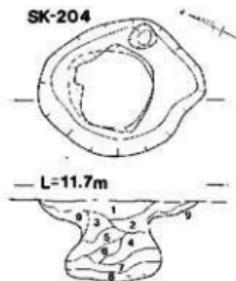
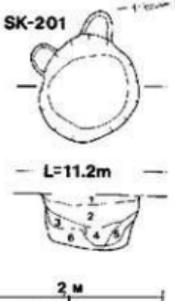
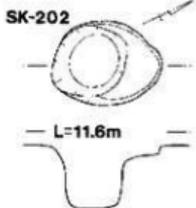
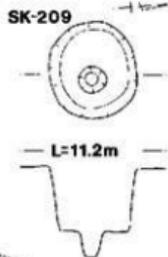
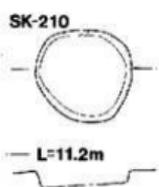
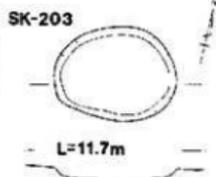
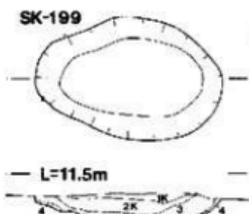
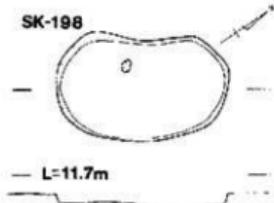
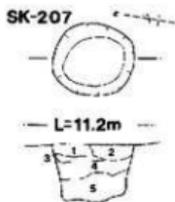
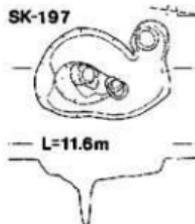
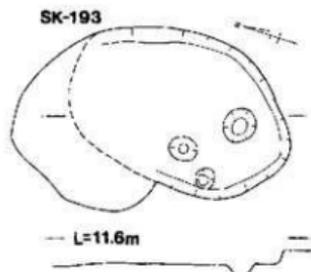
第182号土壌土層解説

- | | |
|---|---------------------------|
| 1 | 暗褐色土 (ハードロームブロック・炭化物を含む) |
| 2 | 高褐色土 (ハードロームブロックを含む) |
| 3 | 暗褐色土 (ハードロームブロック・炭化物を含む) |
| 4 | 高褐色土 (粘まり弱く炭化物粒子を含む) |
| 5 | 暗褐色土 (固く粘まりハードロームブロックを含む) |
| 6 | 高褐色土 (少量のハードロームブロックを含む) |

第108図 第174～180・182～185号土壌



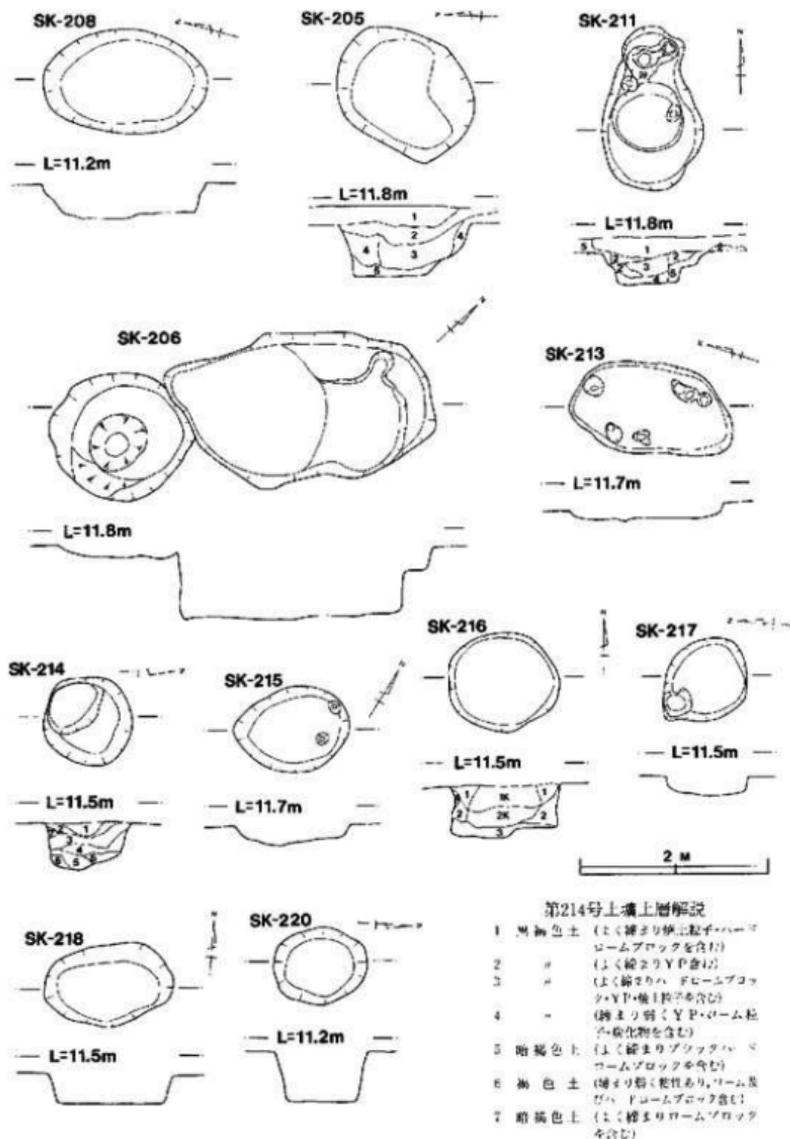
第109図 第181・186～192・194～196・200号土壌



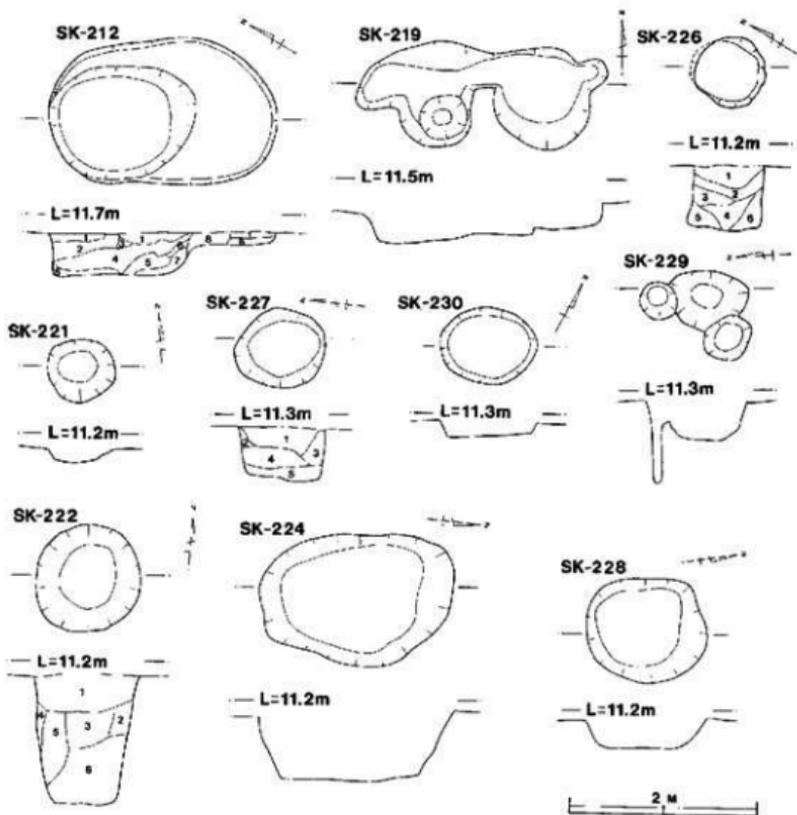
第204号土壌土層解説

- 1 黒褐色土 (表土層)
- 2 暗褐色土 (細まりゆく黄土粒子・Y P・ロームブロックを含む)
- 3 灰褐色土 (よく細まりゆくY P・ロームブロック・炭化物を含む)
- 4 暗褐色土 (細まりゆくY P・ロームブロックを含む)
- 5 " (細まりゆくY P・炭化物・ロームブロックを含む)
- 6 " (細まりなくロームブロックを含む)
- 7 黒褐色土 (細まり弱くロームブロックを少量含む)
- 8 暗褐色土 (細まり強くブラック・ロームブロックを多数含む)
- 9 " (良く細まり、Y P・ロームブロックを含む)

第110図 第193・197~199・201~204・209・210号土壌



第111図 第205・206・208・211・213～218・220号土壌



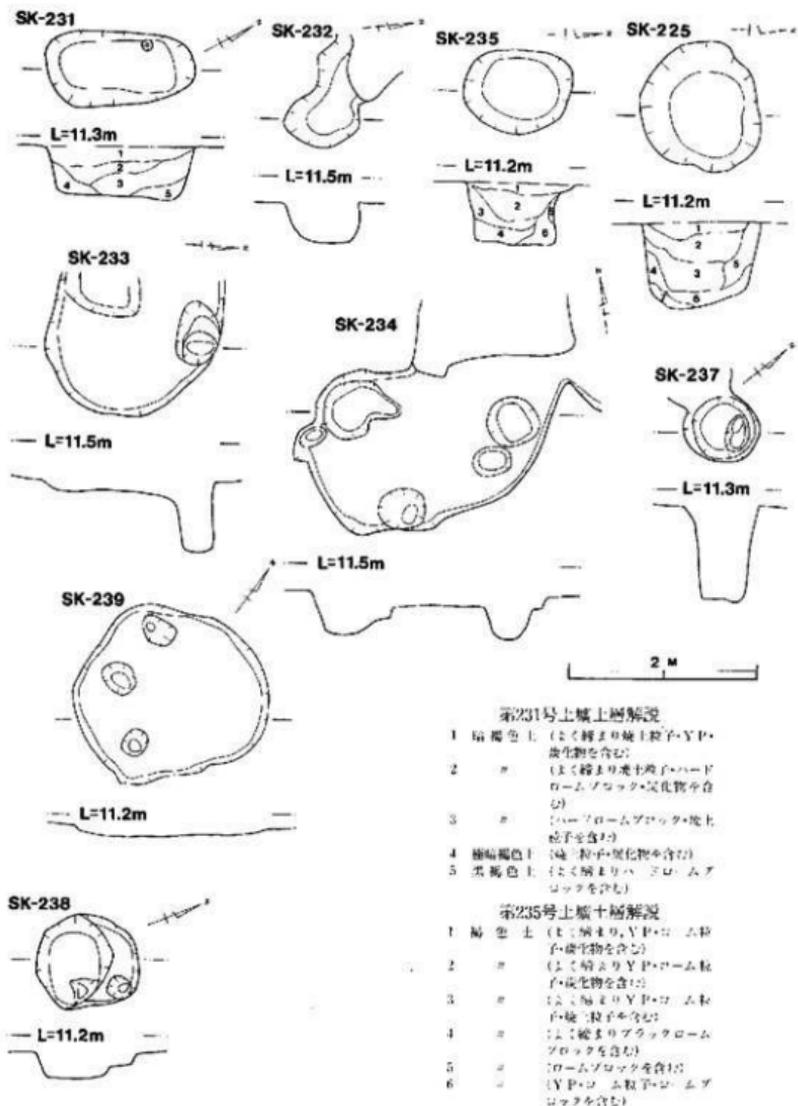
第212号土壌土層解説

- 1 褐色土 (YPを含む)
- 2 暗褐色土 (ハードロームブロック・YPを含む)
- 3 褐色土 (ハードロームブロックのみ)
- 4 暗褐色土 (よく締まりハードロームブロックを含む)
- 5 *
- 6 褐色土 (よく締まり少量のハードロームブロックを含む)
- 7 *
- 8 *

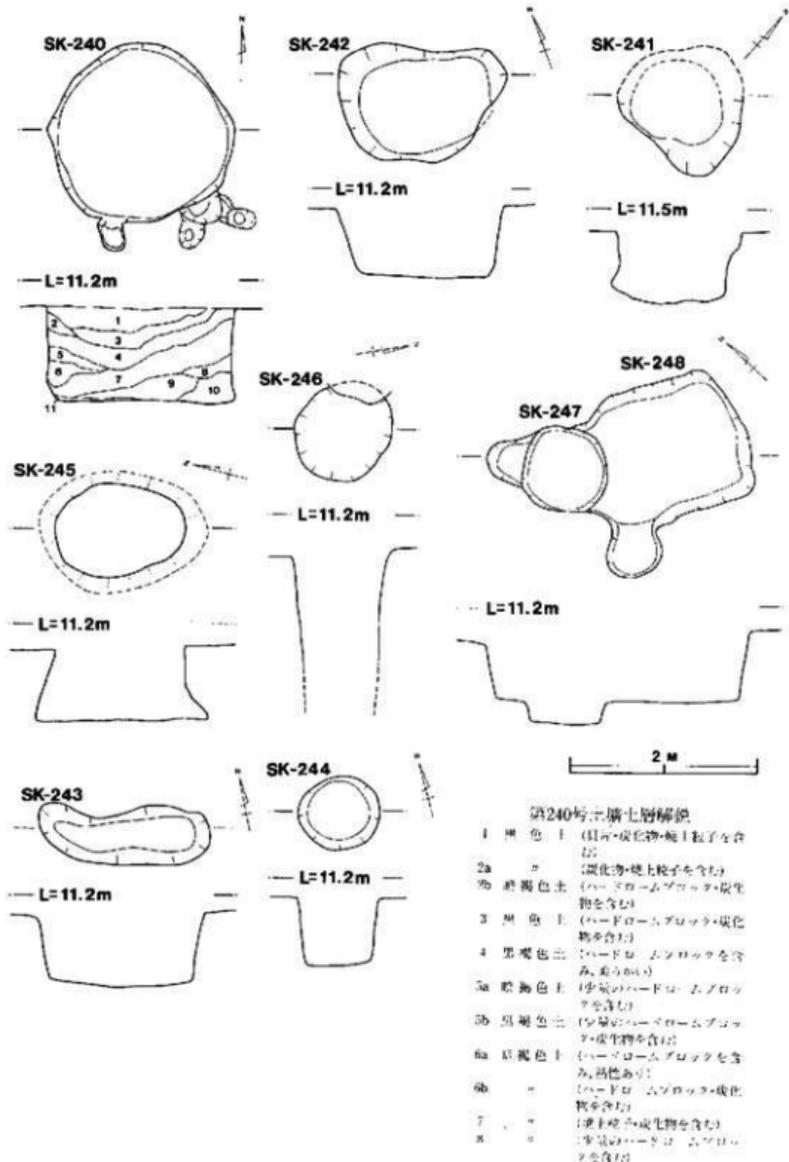
第222号土壌土層解説

- 1 暗褐色土 (よく締まりYP・ローム粒子を含む)
- 2 *
- 3 *
- 4 暗褐色土 (よく締まりローム粒子を含む)
- 5 暗褐色土 (よく締まり；鉄片・硝子粒・硝子灰化物を含む)
- 6 *

第112図 第212・219・221～224・226～230号土壌



第113図 第225・231～235・237～239号土坑



第114図 第240～246・248号土層



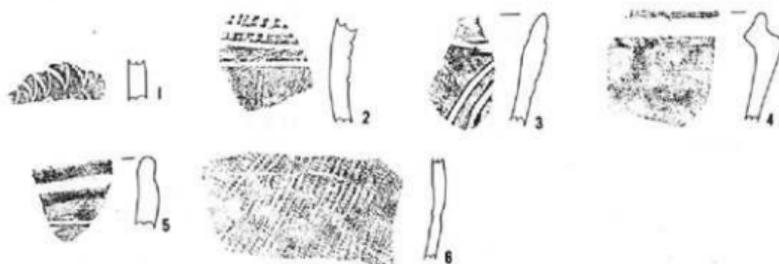
SK 170



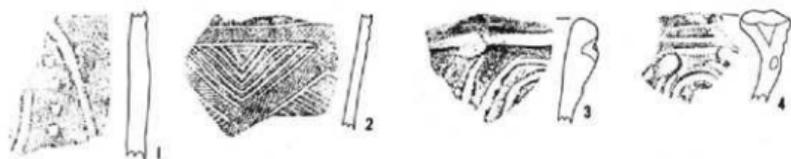
SK 174



SK 173



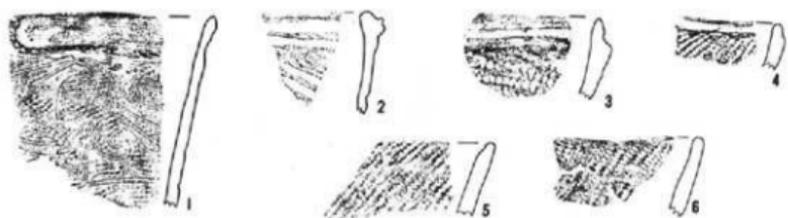
SK 176



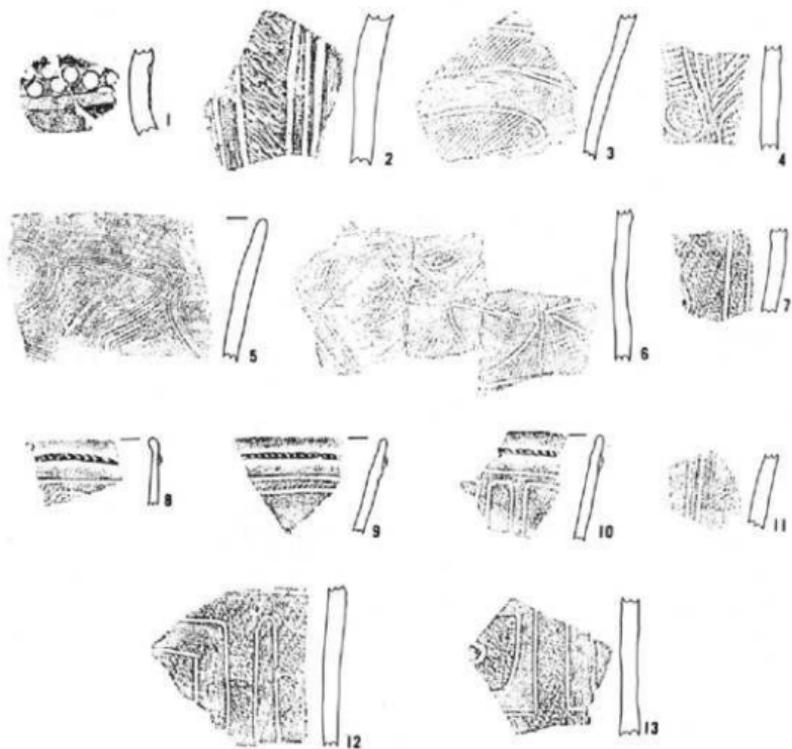
SK 177

10 CM

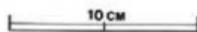
第115図 土壇出土遺物



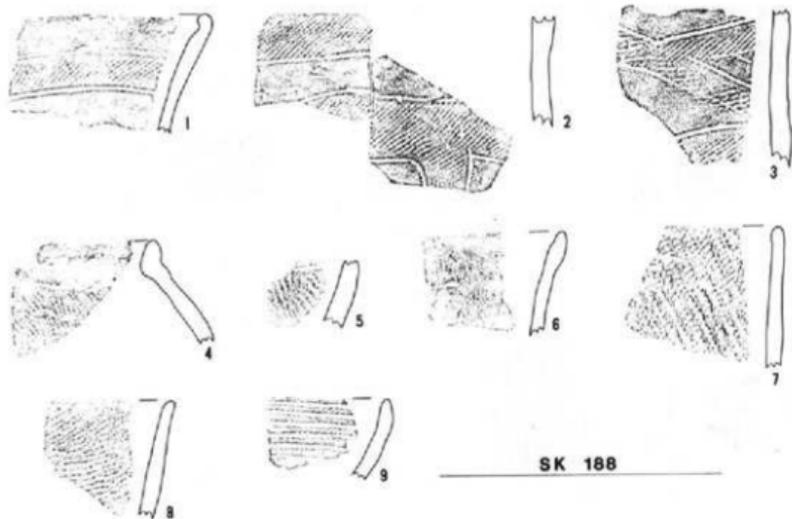
SK 186



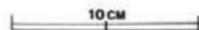
SK 188



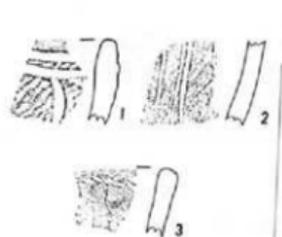
第116図 土壤出土遺物



SK 191



第117図 土壤出土遺物



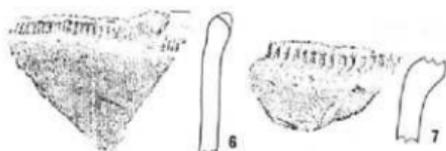
SK 193



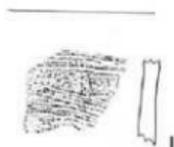
SK 195



SK 198

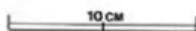


SK 199



SK 200

SK 201



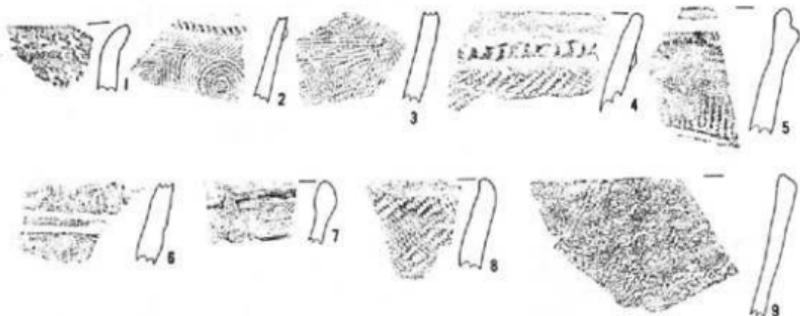
第118図 土壤出土遺物



SK 202



SK 205



SK 206



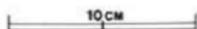
SK 208



SK 209



SK 215



第119圖 土壤出土遺物



SK 216

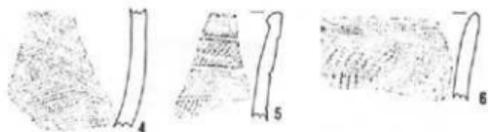


SK 217

SK 218



SK 221

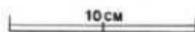


SK 222

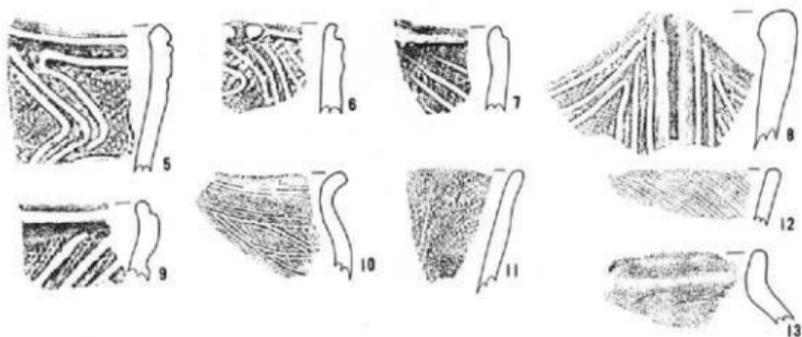


SK 223

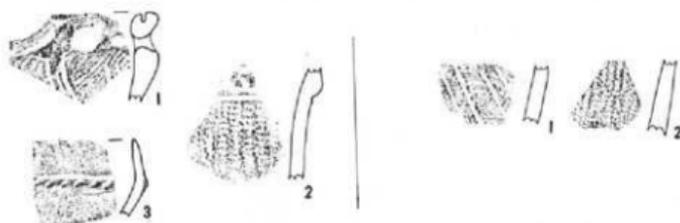
SK 224



第120図 土壌出土遺物

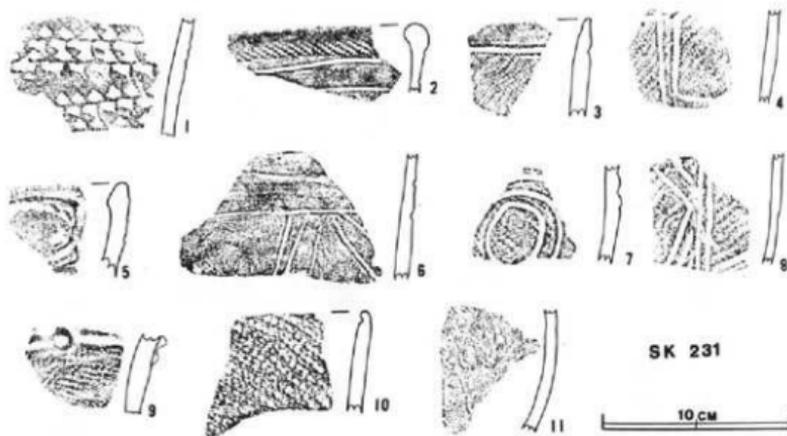


SK 224



SK 225

SK 235



SK 231

10 CM

第121図 土壤出土遺物

表62 第115図 土壇出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	形状・部位	法線 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-170	1	柄部		右下がりの沈線間の凸部に刻みを入れる	
	2	口縁部		口縁に平行な沈線とそれに沿って隆される刻文文から成る	
	3	柄部		横位の沈線、地文は織文	
SK-173	1	口縁部		口縁部に平行な沈線を施し、間に刺突を加える	
	2	胴部		横位の沈線文	
	3	"		斜行沈線の木端部。地文は裏側織文	
SK-174	1	口縁部		内湾する口縁部で、貼付文がみられる	
SK-176	1	胴部		漸降状の弓線状沈線文	浮島式
	2	"		横位の沈線と刺突を施す	
	3	口縁部		沈線文、地文は織文	
	4	"		口縁部がくの字状に屈曲し、太い沈線を施す	
	5	"		横位の沈線文	
	6	別部		織文のみ	
SK-177	1	胴部		沈線で区画された中に棒状工具による刺突を有する	私名寺式
	2	"		沈線で幾何学的文様を区画し、中に隅文を充用する	堀之内式
	3	口縁部		小突起部と思われ、直線及び弧状の沈線を施す	"
	4	"		口唇部断面三角形形状を呈し、刺突と沈線から成る	"
	5	"		弧状口縁を呈し、刺突を加えた沈線を付し、胴部にかけて沈線を施す	"
	6	"		口縁部に平行な沈線を有する	"
	7	"		二本の沈線が口縁に平行に走る	"
	8	"		口縁に平行な沈線と弧状の沈線から成る	"
	9	"		口縁に平行な沈線と横位の沈線から成る	"

表63 第116図 土壇出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法寸 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-186	1	口縁部		口縁部に刺突のある隆線を貼り付け、曲線状の沈線で飾る	
	2	"		口唇部に太い沈線。斜位の沈線を施す	
	3	"		口唇部に沈線。縄文	
	4	"		口唇部に沈線。縄文	
	5	"		縄文	
	6	"		縄文	
SK-188	1	胴部		円形刺突文	
	2	"		腹位の沈線の間に右下がりの斜沈線	
	3	"		沈線で区画された中に縄文を充填。外は磨治し	
	4	"		沈線文	
	5	口縁部		沈線による帯線文	
	6	胴部		沈線で文様を区画し、中に縄文を充填する。外は磨治し	
	7	"		斜位の沈線	
	8	口縁部		口縁部に隆線を付し、沈線で文様を区画する。地文は縄文	
	9	"		口縁部に刺突を有す隆線を付し、腹位の沈線2本を施す	
	10	"		口縁部に刺突を有す隆線を付し、沈線で文様を区画する	
	11	胴部		斜位の沈線	
	12	"		沈線で文様を区画し、中を磨治す。外は縄文	
	13	"		No.1? と同一個体	

表64 第117図 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物	器形・部位	法厚 (cm)	表刻・裏面の特徴	備考
SK-188	1	口縁部		口縁に平行な縄文帯	
	2	胴部		沈線で文様を区画し内部に縄文を充填する	
	3	〃		No.2 と同一個体	
	4	口縁部		内傾する口縁部で、1条の沈線と縄文	
	5	胴部		横位の沈線と縄文	
	6	口縁部		外反する口縁部で縄文	
	7	〃		縄文	
	8	〃		縄文	
	9	〃		内傾する口縁部で、鉢形上面とみられる。口縁に平行な沈線を施し、方厚に刻みを加える	
SK-191	1	口縁部		平行沈線+刺突	
	2	胴部		斜位→縦位の帯で沈線を施す	
	3	〃		沈線文	
	4	口縁部		無文	
	5	〃		口縁に平行な沈線と垂直する斜行沈線を施す	器之内式
	6	〃		口縁部がくの字状に屈曲し、横位及び斜位の沈線を施す	〃
	7	胴部		沈線文。表文は縄文	〃
	8	〃		縦位の沈線文。地文は縄文	〃
	9	〃		弧状の沈線文	〃
	10	〃		沈線文。地文は縄文	〃

表65 第118図 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-193	1	口縁部		口縁に平行に2本の沈線を描し中に刺突で埋める	
	2	胴部		縦位の沈線。地文は織文	
	3	口縁部		織文	
SK-195	1	胴部		くびれ部に3本の沈線を横位に施し、上下に斜行及び弧状の沈線を描する	器之内式
SK-198	1	胴部		平行沈線間に刺突を加える。ボタに粘土貼付けが舞される	
	2	口縁部		ゆるやかな弧状口縁で、縦位の沈線を中心に施文する。地文は織文	
	3	"		口縁部に刺突を有し、沈線で文様を区画する	
	4	"		波状口縁を有し、横位・縦位の沈線を施文する。地文は織文	
	5	"		口縁に及ぶ沈線及び右下がりの斜沈線を有する	
	6	"		口縁部に低い隆起を有し、上に刺突を施す。全周に縦位の沈線を施文する	
	7	"		八角形の刺突を有する	
SK-199	1	胴部		横位の沈線	
SK-200	1	口縁部		口縁に平行な沈線を有し、途中で刺突がみられる。斜行沈線を施文する	
	2	胴部		蛇行沈線。地文は織文	
	3	口縁部		縞線貼り付け	
SK-201	1	胴部		沈線で「張文を描く	

表66 第119回 土壇出土遺物

出土遺物・区	遺物: 器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特長	備 考
SK 202	1 口縁部		口縁に刺突のある隆線を付し、沈線でご面き れた刷文等をもつ	器之形式
SK 205	1 口縁部		口縁に平行な沈線を4本有する、拍摺りあり	
	2 胴部		横位の沈線の下下に斜沈線を配す	
	3 口縁部		刷文	
SK 206	1 口縁部		口縁部は外反し、フタグラ柄の目取刷文を しつ	浮高式
	2 胴部		刺突のある器帯を付し、沈線による渦巻文を 有する	器之内式
	3 "		直線状の沈線文。地文は刷文	"
	4 口縁部		口縁部に屈折を付す。刷文	"
	5 "		口唇部に沈線を有する。刷文巻に沈線を強文 する	"
	6 胴部		横位の平行沈線	
	7 口縁部		無文	
	8 "		刷文。L R	
	9 "		刷文	
SK-208	1 口縁部		口縁に平行な2本の沈線を有する。地文	
	2 "		横位・弧状の沈線を有する	
SK 209	1 口縁部		ゆるく内灣する口縁部で、沈線文	
	2 胴部		縦位の沈線	
SK 215	1 口縁部		刷文	
	2 胴部		沈線による内傾文	
	3 "		沈線で十字形を区画し、中央部に刺突を有す る。内帯に斜沈線	
	4 "		刷文	

表67 第120図 土壇出土遺物

出土遺物・区	遺物No	器形・部位	法号 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-216	1	口縁部		弧状の沈線が数本走る	
	2	胴部		横位・円弧文を施す。胎文は縄文	
	3	"		横位の沈線を胎文する。胎文は縄文	
	4	口縁部		縄文	
SK-217	1	胴部		沈線で二角文を施き胎文を充塞する。	
SK-218	1	口縁部		斜位の沈線を施す	
	2	"		無文。ヘリ部斜	
	3	胴部		縄文	
SK-221	1	口縁部		平行沈線を横位に施し、下部は縦位の沈線を施す	
SK-222	1	胴部		横位・縦位の沈線を施す	
	2	"		縦位の沈線の未施部	
	3	"		沈線。胎文も残る	
	4	"		斜行沈線で文様を区画する	
	5	口縁部		沈線で区画された縄文付をもつ	
	6	"		縄文	
SK-223	1	胴部		沈線で区画された縄文付をもつ	
	2	口縁部		口縁部に紐線を付す	
	3	"		無文	
SK-224	1	胴部		アナダク編の目型菱縄文を有す	厚品式
	2	口縁部		口縁部に縷線を付し、上に刺突を加える	編之内式
	3	胴部		沈線	
	4	"		横位の沈線。胎文は縄文	"

表68 第121図 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物No	形状・部位	沈み (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SK-224	5	口縁部		波状口縁を呈し、蛇行沈線を施文する	惣之内式	
	6	"		2個の割突から左右に沈線を伸ばし、割部にかぎっては凹線文を施す	"	
	7	"		口縁に平行な沈線。割部へは斜行沈線を施文する	"	
	8	"		波状口縁を呈し、割部より裂位の沈線を幸下させる	"	
	9	"		沈線文。地文は縄文	"	
	10	"		口縁部はS字状を見し、平行沈線を横位・斜位に施文する	"	
	11	"		縄文		
	12	"		右下がりの沈線文		
	13	"		口縁部はくの字状を呈し、裂部に波いびみを有する		
	SK-225	1	口縁部		波状口縁を呈し、波状部に有底直を有する	
		2	裂部		割位の沈線。地文は縄文	
		3	口縁部		口縁部はくの字に凸出し、口縁に平行な沈線と凹線を施す	
	SK-235	1	割部		斜沈線	
2		"		縄文		
SK-231	1	割部		三角形の隆起文列をもつ	浮島式	
	2	口縁部		横位の沈線で区画し、間に懸折し線と縄文を、横線を施す		
	3	"		口縁に平行な沈線を有する。縄文		
	4	裂部		沈線により文様を区画する。地文は縄文		
	5	口縁部		沈線・斜文		
	6	割部		横位及び斜位の沈線で文様を区画する		
	7	"		沈線で文様を描く。地文は縄文		
	8	"		縦位及び斜位の沈線文。地文は縄文		
	9	"		沈線の上に貼り付けを有する。地文は縄文		
	10	口縁部		口縁部内側に沈線を有する。縄文		
	11	割部		縄文のみ		

第7号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (ハードロームブロックを少量含む)
- 2 暗 褐 色 土 (ハードロームブロックが少ない)
- 3 黒 褐 色 土 (粘り強く、炭化物含む)
- 4 暗 褐 色 土 (Y P・硬土塊・ハードロームブロック含む)
- 5 暗 赤 色 土 (硬土塊多く含む)
- 6 褐 色 土 (ハードロームブロック含む)

第25号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (ハードロームブロック・炭化物・硬土塊含む)
- 2 暗 褐 色 土 (ブラックハードロームブロック含む)
- 3 * (ブラックハードロームブロックを含み、よく締まる)

第35号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (泥状土層)
- 2 * (ハードロームブロックを含む)
- 3 * (ハードロームブロックを多量に含む)
- 3* * (* 土層を含む)
- 4 暗 褐 色 土 (炭化物含む)
- 5 褐 色 土 (ハードロームブロック含む)
- 6 暗 褐色 土 (ローム及び硬土塊を含む)
- 7 褐 色 土 (ロームを含む)

第78・79号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (泥状土層)
- 2 暗 褐 色 土 (Y Pを含む)
- 3 黒 褐 色 土 (ブラックハードロームブロックを多量に含む、大変固い)

第96号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (Y P・ハードロームブロック含む)
- 2 暗 褐 色 土 (ロームが多い)
- 3 黒 褐 色 土 (Y P・ブラックハードロームブロック含む)

第22号土壌土層解説

- 1 純 日 層 (頁の他に、炭骨を多く含む)
- 2 暗 褐 色 土 (Y P・硬土塊子含む)
- 2* * (Y P・ロームブロック含む)
- 3 褐 色 土 (ロームブロック多量に含む)
- 4 暗 褐 色 土 (ロームブロックのみ)

第29号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (Y Pを多く含む)
- 2 暗 褐 色 土 (ローム塊子含む)

第32号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (炭化物・硬土塊を多含む)
- 2 暗 褐色 土 (ブラックハードロームブロック含む)
- 3 褐 色 土 (よく締り、ブラックハードロームブロックを含む)
- 4 暗 褐 色 土 (ブラックハードロームのみ)

第87号土壌土層解説

- 1 純 日 層
- 2 黒 色 土 層 (泥状土層、炭化物・硬土を含む)
- 3 暗 褐色 土 (よく締まりハードロームブロック・硬土塊子を含む)

第103号土壌土層解説

- 1K 暗 褐色 土 (泥状土層)
- 2 * (ハードロームブロックを含む)
- 3 暗 褐色 土 (灰白色粘土子含む)
- 4 暗 褐色 土 (よく締まりをおびている)

第110号土壤層解説

- 1 黒色土 (YP・炭化物を含む)
- 2 # (1)と同じ、或土粒子が多くなる)
- 3 暗褐色土 (よく練まりYPを含む)

第127号土壤層解説

- 1K 黒褐色土 (泥状土層)
- 2 # (練まり弱くハードロームブロックを含む)
- 3 # (ロームブロック・炭化物含む)
- 3# (3)より多少練まりあり)
- 4 暗褐色土 (ロームを多く含む)
- 5 黒褐色土 (練まりなくハードロームブロック・炭化物を含む)
- 6 # (ロームブロック含む)
- 7 ハードローム層

第155号土壤層解説

- 1 暗褐色土 (YP含む)
- 2 暗褐色土 (粘土あり、塊土粒子含む)
- 3 黒褐色土 (少量のハードローム粒子を含む)
- 1 暗褐色土 (少量のハードローム・塊土粒子を含む)
- 5 # (塊土粒子を含む)

第176号土壤層解説

- 1K 黒褐色土 (泥状土層、炭・炭化物を含む)
- 2K # (泥状土層、炭化物を多く含む)
- 3 # (練まりなく粘土あり)
- 4 暗褐色土 (ハードロームブロックのみ)
- 5 暗褐色土 (よく練まりハードロームブロックを含む)

第184号土壤層解説

- 1 黒褐色土 (練まり弱く炭・塊土粒子を含む)
- 2 # (よく練まり塊土粒子・炭化物・ハードロームブロックを含む)
- 3 # (練まり弱く炭化物・塊土粒子・ハードロームブロック含む)
- 4 暗褐色土 (よく練まり塊土粒子・炭・炭化物・ハードロームブロックを含む)
- 5 褐色土 (ハードロームブロックのみ)

第126号土壤層解説

- 1K 暗褐色土 (泥状土層)
- 2 褐色土 (6)とし、熱を受けサケサケしている)
- 3K 黒褐色土 (泥状土層、塊土ブロックを含む)
- 3K# (3K)と同じ、塊土ブロックがない)
- 4 暗褐色土 (大まかに黒色ハードロームブロックを多く含む)
- 5 褐色土 (ハードロームブロックのみ)

第136号土壤層解説

- 1 暗褐色土 (極めて固くハードロームブロックを多く含む)
- 2 # (ハードロームブロック・炭化物を含む)
- 2# (2)より練入部がより多くなる)
- 2K # (泥状土層)

第161号土壤層解説

- 1 暗褐色土 (よく練まりハードロームブロックを含む)
- 1K # (泥状土層)
- 2 黒褐色土 (ハードロームブロックを含む)
- 3 暗褐色土 (よく練まりハードロームブロックを含む)

第178号土壤層解説

- 1K 黒褐色土 (泥状土層、よく練まりハードロームブロックを含む)
- 1K# (泥状土層、練まりなし)

第190号土壤層解説

- 1 暗褐色土 (よく練まりハミス・YP・ハードロームブロックを含む)
- 1# (1)より黄色味を帯びる)
- 2 黒褐色土 (よく練まりハードロームブロックを含む)
- 3 暗褐色土 (ハードロームブロックのみ)

第199号土壌土層解説

- 1K 暗 褐 色 土 (掘削土層、焼土粒子を含む)
 2K 〃 (掘削土層、1Kより口が浅い)
 3 〃 赤 黄 褐色土 (近く締まり炭化物・ハードロームブ
 ロック・貝殻片を含む)
 4 灰 褐 色 土 (ハードロームブロックのみ)

第207号土壌土層解説

- 1 褐 色 土 (Y P・ローム粒子・焼土粒子などを
 含む)
 2 〃 (Y P・ローム粒子・焼土粒子・炭化物
 を含む)
 3 〃 (Y P・ローム粒子・ロームブロック
 を含む)
 4 〃 (ローム粒子・ブラックハードローム
 ブロックを含む)
 5 暗 褐 色 土 (ブラックハードロームブロックを
 含む)

第211号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (掘削土層)
 2 暗 褐 色 土 (よく締まりロームブロック・Y Pを
 多く含む)
 3 〃 (2よりロームブロックが少なくなる)
 4 黒 褐 色 土 (締まり弱くY P・ハードロームブ
 ロックを少量含む)
 5 〃 (締まり弱くブラックハードローム
 ブロックを含む)
 6 褐 色 土 (ローム)

第225号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (よく締まりハードローム粒子及び
 焼土粒子を含む)
 2 〃 (よく締まり焼土粒子・炭化物を含
 む)
 3 暗 褐 色 土 (よく締まり炭化物を含む)
 4 暗 褐 色 土 (ハードロームブロックを含む)
 5 褐 色 土 (よく締まりハードロームブロック・
 炭化物を含む)
 6 暗 褐 色 土 (よく締まりハードロームブ
 ロックを含む)
 7 〃 (よく締まりハードロームブ
 ロックを含む)

第227号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (よく締まりY P・炭化物を含む)
 2 暗 褐 色 土 (少量のハードローム粒子を含む)
 3 〃 (締まりを弱くハードローム粒子を
 含む)
 4 暗 褐 色 土 (よく締まりハードロームブ
 ロック・焼土粒子を含む)

第201号土壌土層解説

- 1 暗 褐 色 土 (よく締まり少量のY Pを含む)
 2 黒 褐 色 土 (Y P・炭化物を含む)
 3 〃 (Y P・炭化物・焼土粒子を含む)
 4 〃 (Y P・炭化物を含む)
 5 暗 褐 色 土 (Y Pを含む)
 6 黒 褐 色 土 (Y P・ハードロームブ
 ロックを含む)

第205号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (よく締まりパミス・Y P・焼土粒
 子を含む)
 2 暗 褐 色 土 (よく締まりロームブロックを
 含む)
 3 〃 (よく締まりハードロームブ
 ロック・パミスを含む)
 4 褐 色 土 (よく締まり炭化あり、ブ
 ラックハードロームブロックを
 含む)
 5 暗 褐 色 土 (よく締まりブラックハ
 ードローム
 ブロックを多量に含む)

第216号土壌土層解説

- 1 黒 褐 色 土 (よく締まり焼土粒子・炭化物・ハ
 ードロームブロックを含む)

- 1K 純 白 河
 2 暗 褐 色 土 (締まり弱くY P・ハードロームブ
 ロックを含む)
 2K 〃 (掘削土層)
 3 〃 (極めて近くブラックハードローム
 ブロックを含む)
 4 〃 (近く締まりハードロームブ
 ロック・
 Y Pを含む)

第226号土壌土層解説

- 1 暗 褐 色 土 (よく締まり焼土粒子を含む)
 2 暗 褐 色 土 (少量のハードローム粒子を含む)
 3 〃 (Y Pを含む)
 4 黒 褐 色 土 (少量のハードロームブ
 ロック・炭
 化物を含む)
 5 暗 褐 色 土 (締まり弱くY P・炭化物を
 含む)
 6 黒 褐 色 土 (少量のY Pを含む)

- 5 暗 褐 色 土 (よく締まり多量のハ
 ードロームブ
 ロックを含む)

3. 溝

本遺跡では住居址・土壌の他に、溝が2条検出された。以下その概要を記す。

第1号溝（実測図 図122、遺物 図123・124・125）

本址は調査区東端に位置し、D2区よりC3区にかけて縦断する形で検出された。確認された範囲の南端はD2e₂であり、N-19°Eの方向で北北東に一直線に伸び、C3a₂地区まで確認できた。これ以北については建物のコンクリート基礎などが残り、調査不可能であった。いずれにしても調査区内で切れてしまうことはないと思われるので、多分遺跡北側の陸田まで延びていると考えられる。

溝断面は逆台形を呈し、土幅1.08~1.75m、深さ0.67~0.78m、底幅0.25~0.55mを渡る。壁及び底部は極めて硬いロームから成り、掘られた当初は、表上下第2層にあたる黒色土層の最上面から掘り込まれていたものと思われる。

覆土は場所により多少の差異はあるが、基本的には3層に分けられる。暗褐色土及び棕褐色土が主で、C3区のみ層堆積地区においては、表面はもちろん溝内部まで貝の堆積がみられた。この貝層はC3区に広がる大きな貝層を本址が分断して掘られ、その後、両側から貝が流れ込んで形成された状態を示している。したがってC3区の貝層が形成された後に本址が造られたことが推測できる。

本址底部のレベルをみると、D2b₂内で10.66mを示し、C2i₂で9.93m、C3d₂で10.92m、C3a₂で10.15mである。確認された範囲内でのレベル差は最高0.98mである。この結果をみると必ずしも一方に傾斜を有しているわけではないことがわかる。むしろ確認された範囲では中央部が最も低く、両端部が高くなり、水などは流れるよりも溜まってしまうことになる。

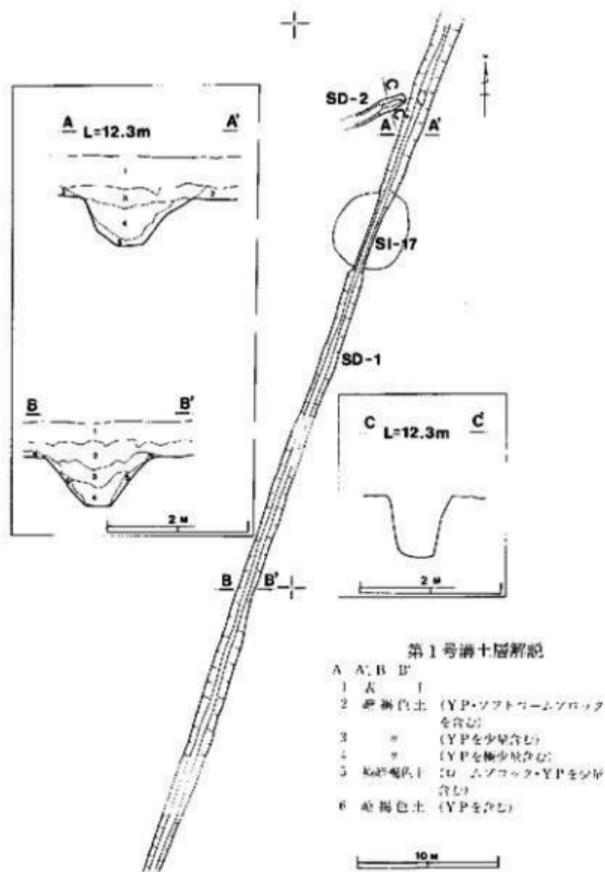
出土遺物はすべて縄文後期に属するとみられるものだけで、完形品は1点もなく土器片のみである。この土器片の断面形状をみると、摩滅して丸くなっており、覆土とともに流れ込んだ遺物と考えられ、溝が掘られた当時の遺物とみることは無理である。前述の貝の堆積状況、そして本址が加曽利B期の住居址や土壌を切って走っていることなどから考えると、古くても縄文後期中葉以降に掘られた溝であると判断したい。

第2号溝（実測図 図122、遺物 図125）

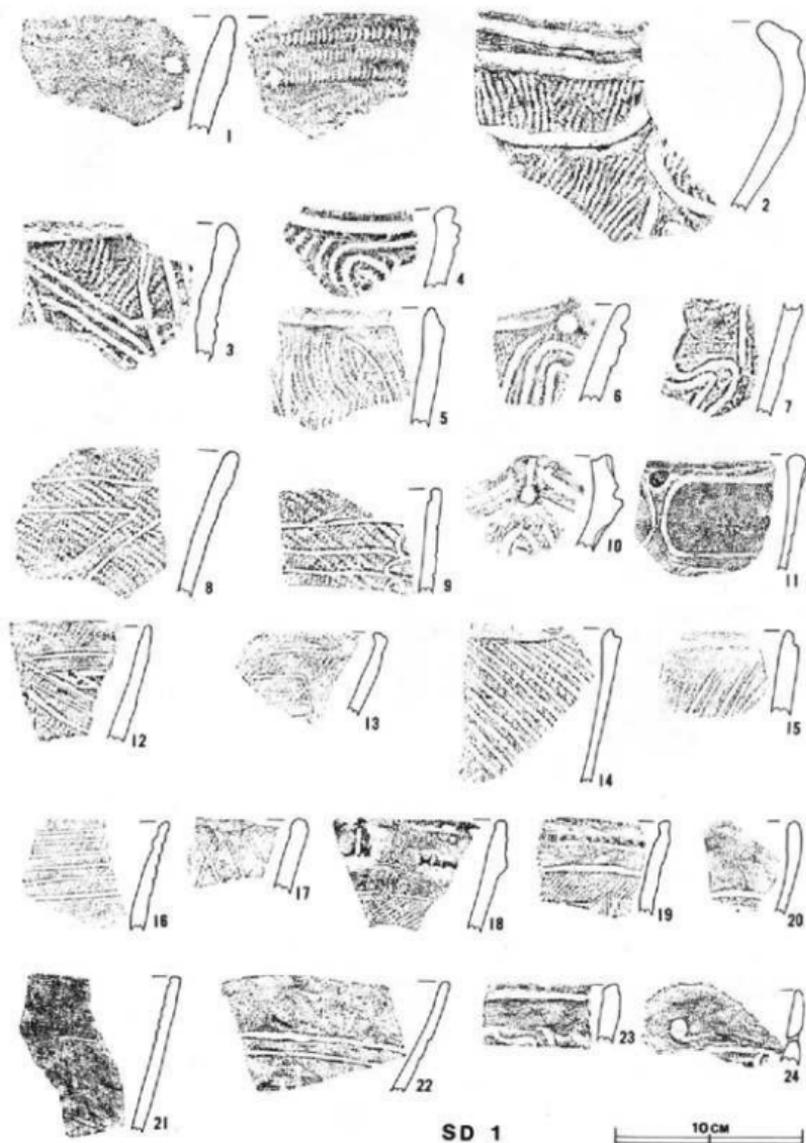
本址はC3b₂区において検出された溝状遺構である。第1号溝に合流していると思われたが、調査の結果、単独の溝状遺構であることが判明した。西側は道路になっているため確認できなかったが、C2区には本址に続く遺構は検出されていないためそれほど長くはないと判断される。

確認全長は約 3.8m、走行方向 N-63-E で、幅 0.77~0.92m、深さ 0.87~0.94 m、底幅は 0.38~0.65 m である。壁は急角度で外反して立ち上がっており、底部は中央部がやや低くなり、東側は 1 段落ち込んでいる。全体的に底部は第 1 号溝の方向にゆるい傾斜を有しているが、合流することなく手前で切れてしまっている。

出土遺物は縄文後期に属すると思われる土器片多数と他に磨石がある。覆土から土溝の上半身部が出土した。この土偶は後に C2a、地区から出土した下半身部と接合することができた。



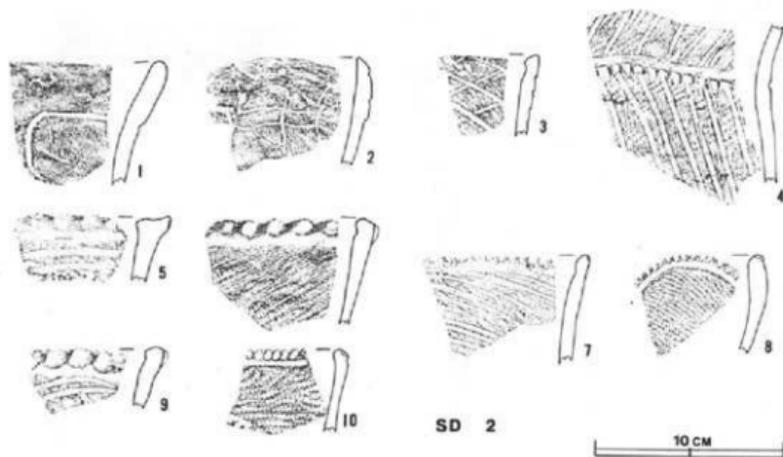
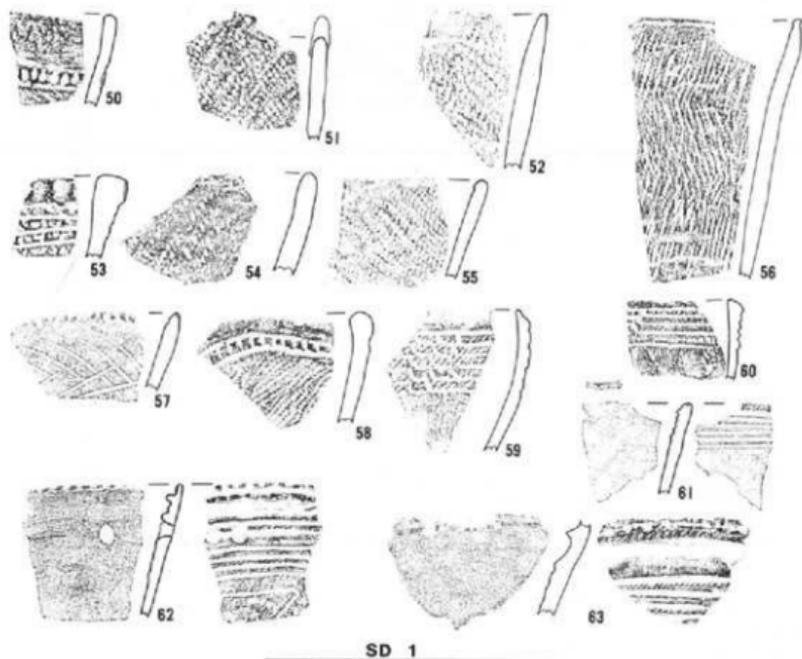
第122図 第1・2号溝



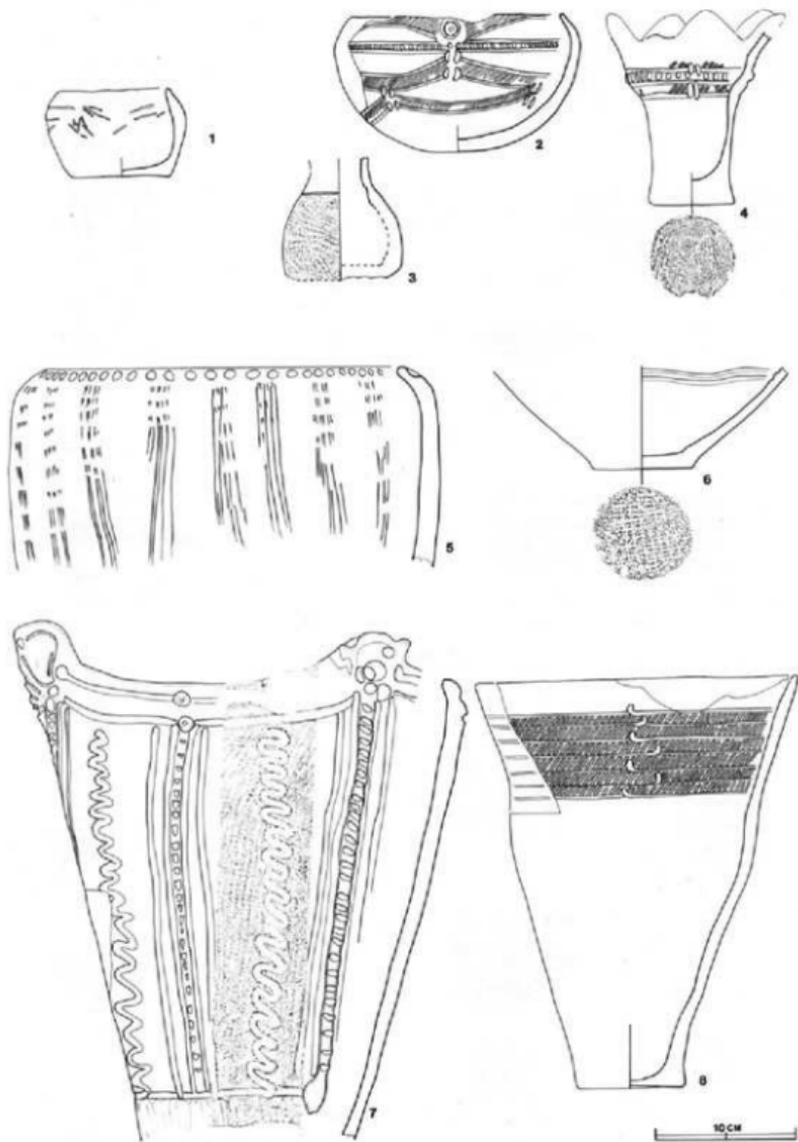
第123図 海出土遺物



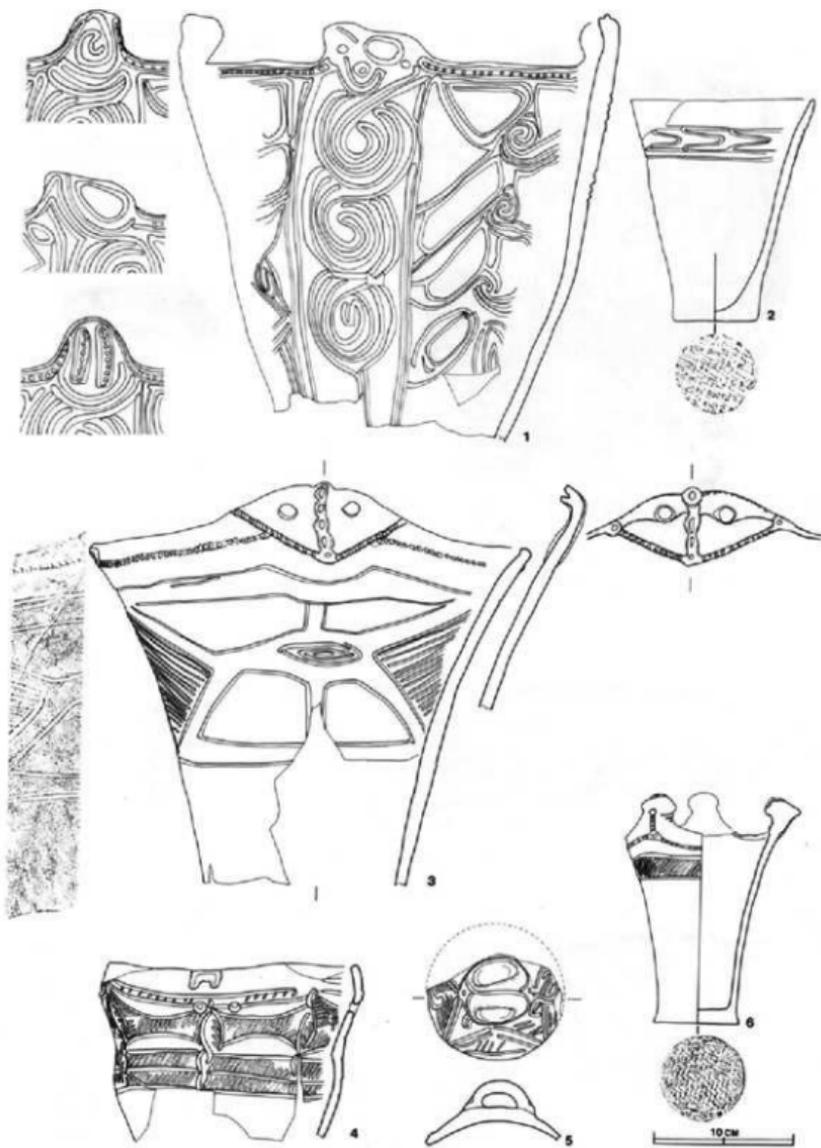
第124图 清出土遺物



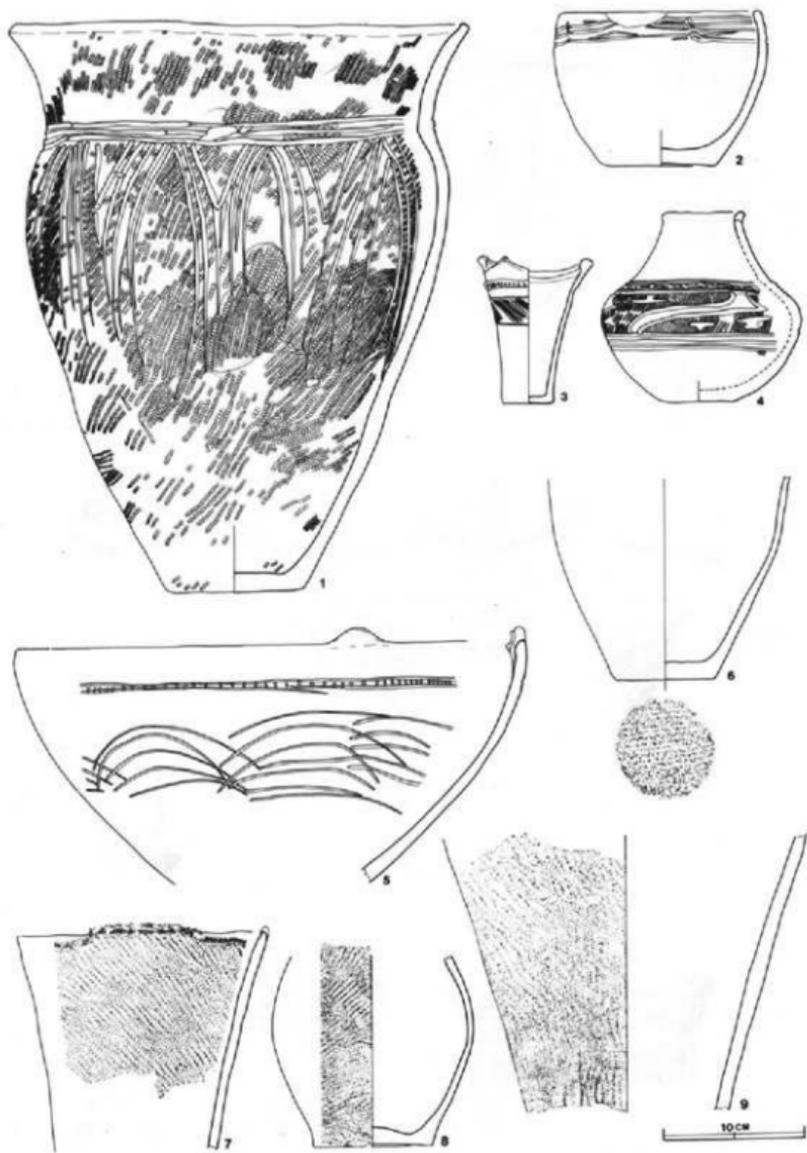
第125图 清出土遺物



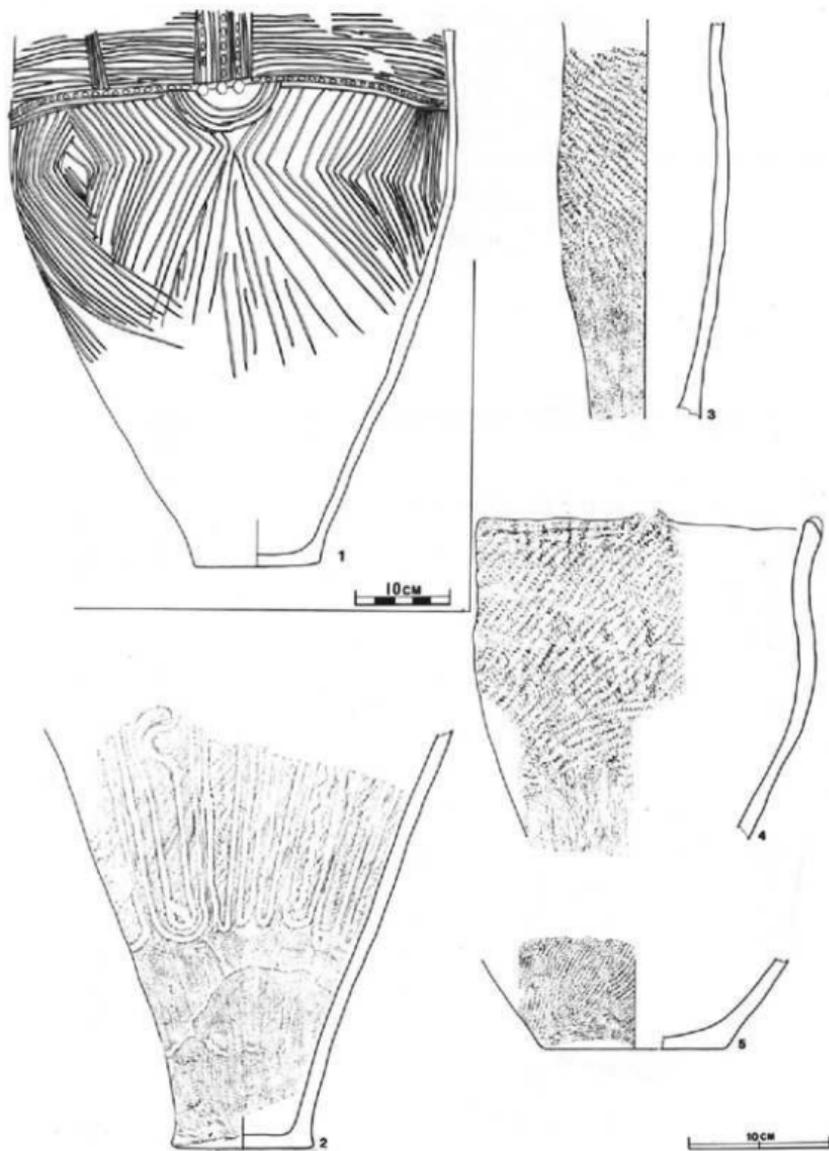
第126図 グリッド出土遺物



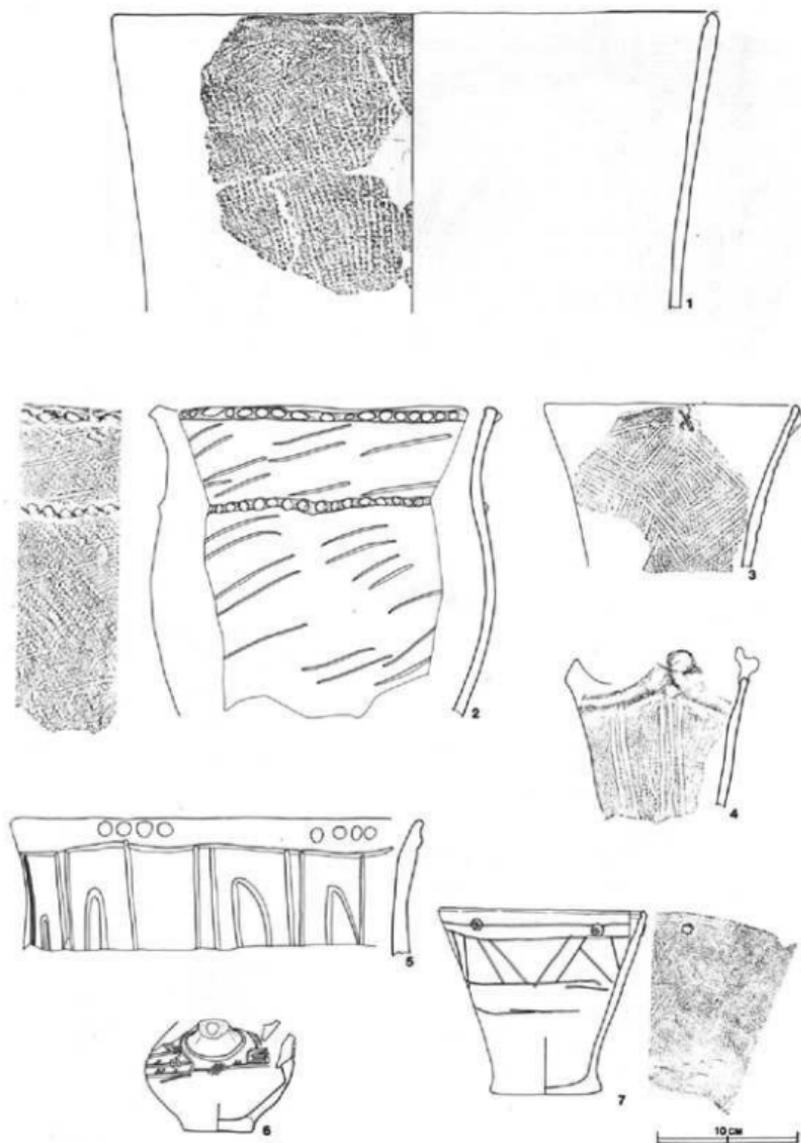
第127図 グリッド出土遺物



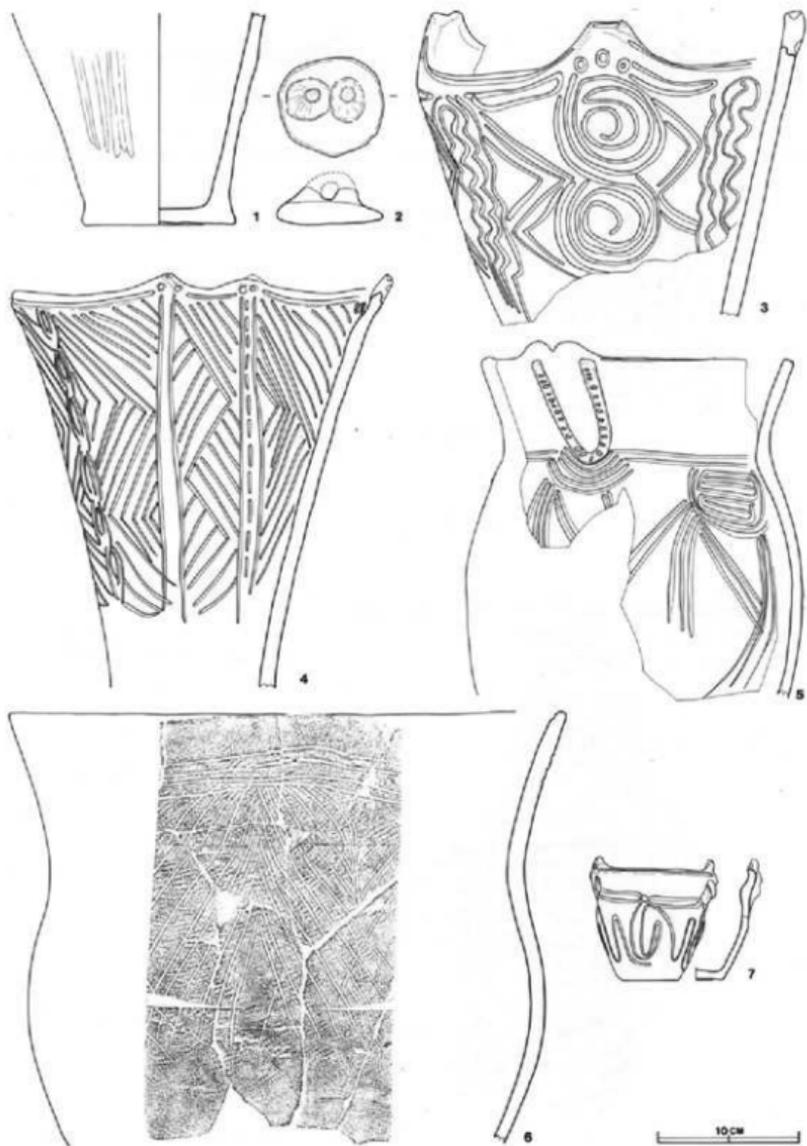
第128図 グリッド出土遺物



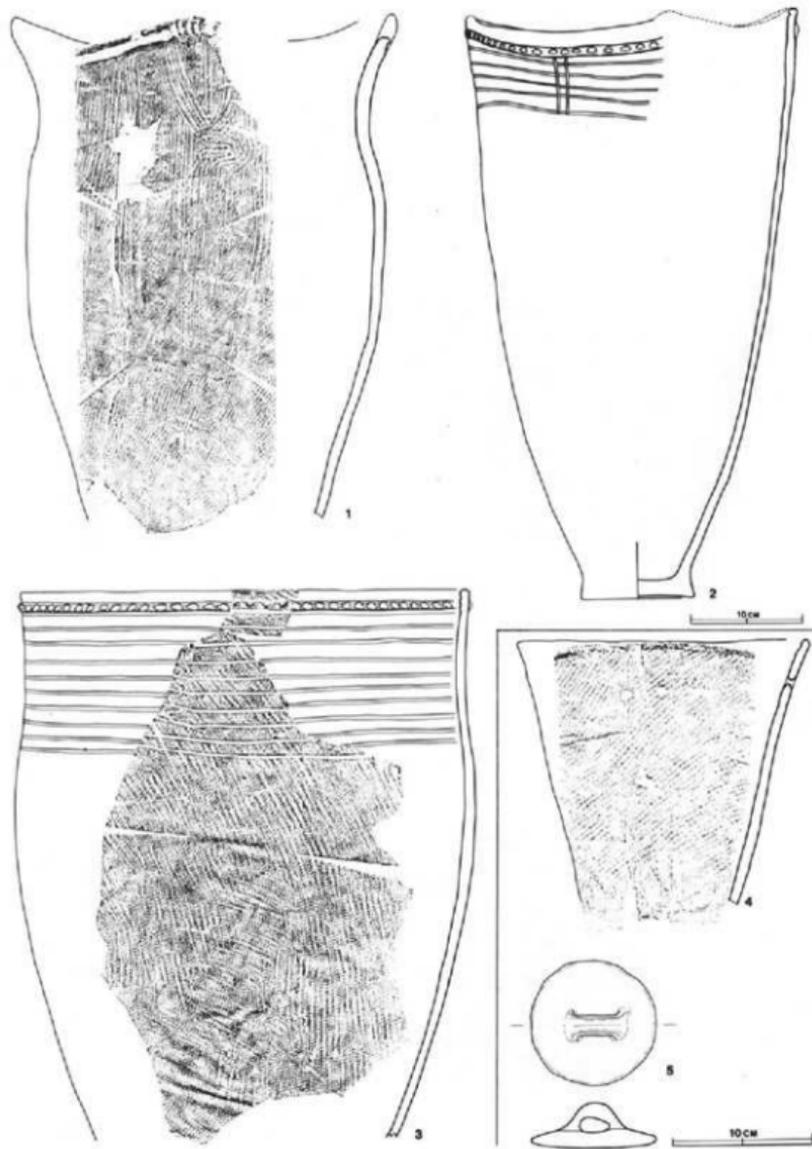
第129図 グリッド出土遺物 (5-SK150)



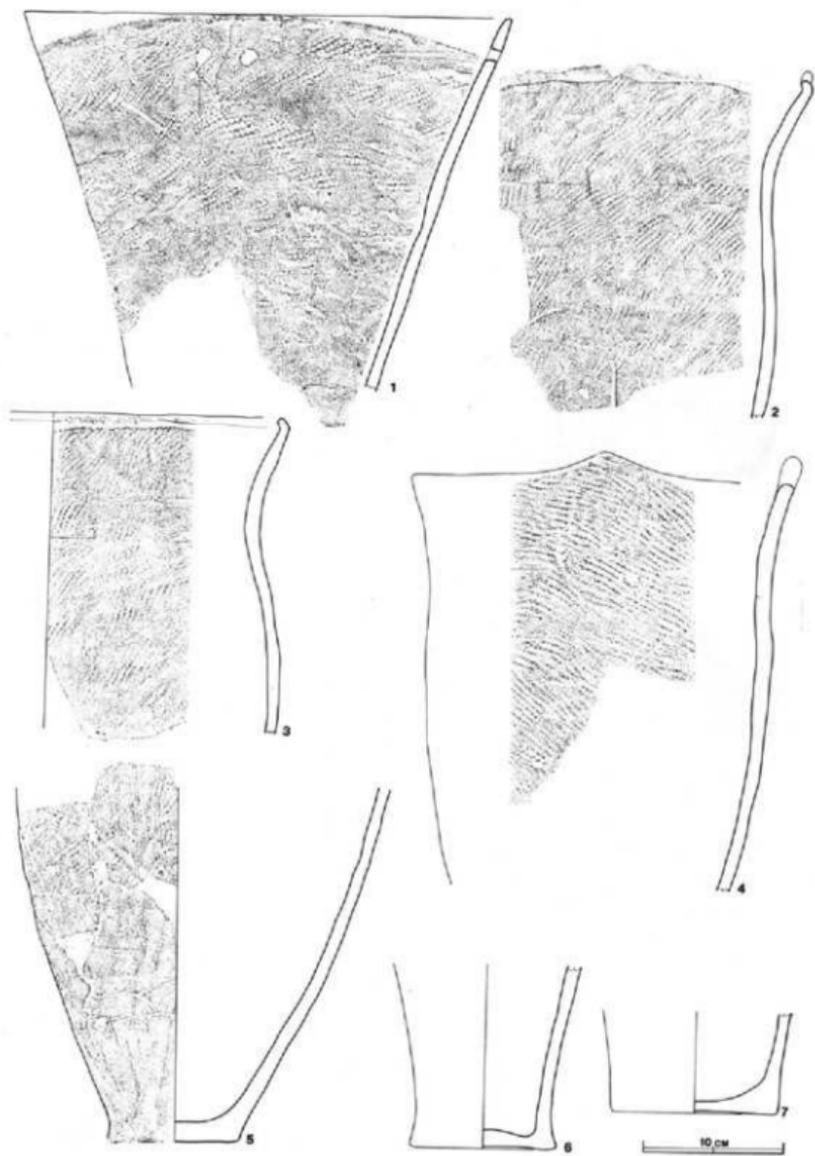
第130図 グリッド出土遺物



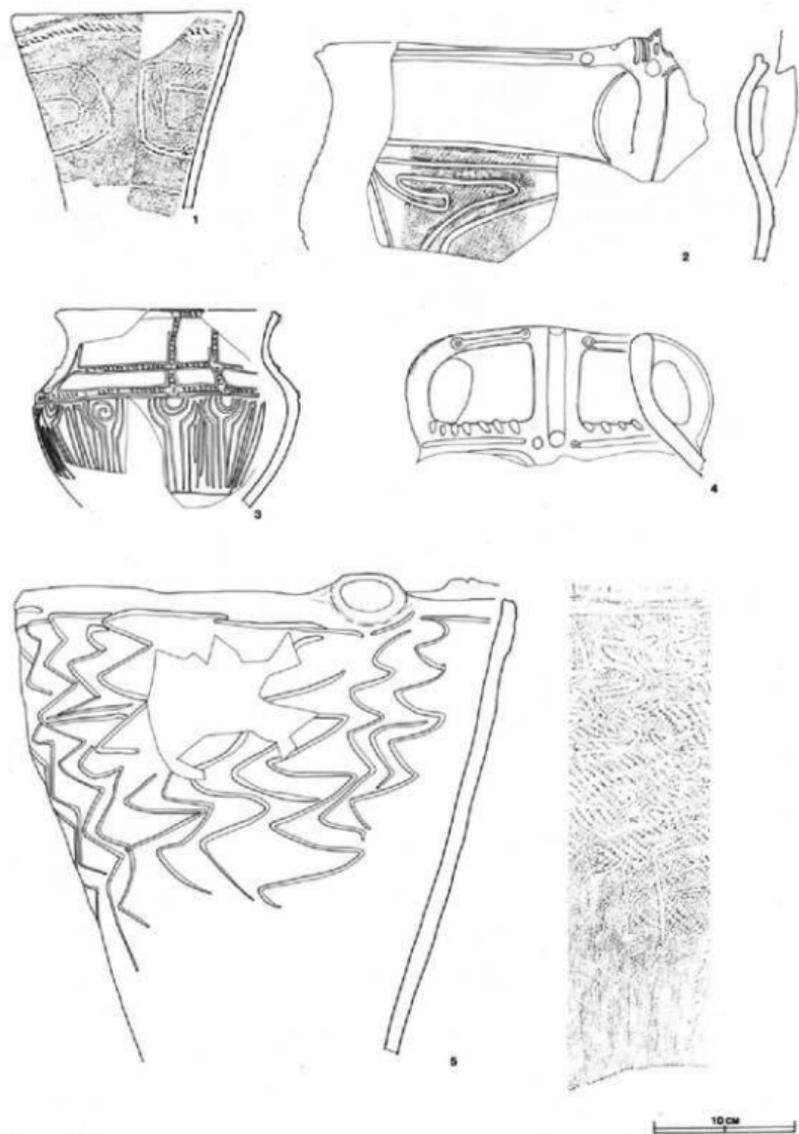
第131図 グリッド出土遺物



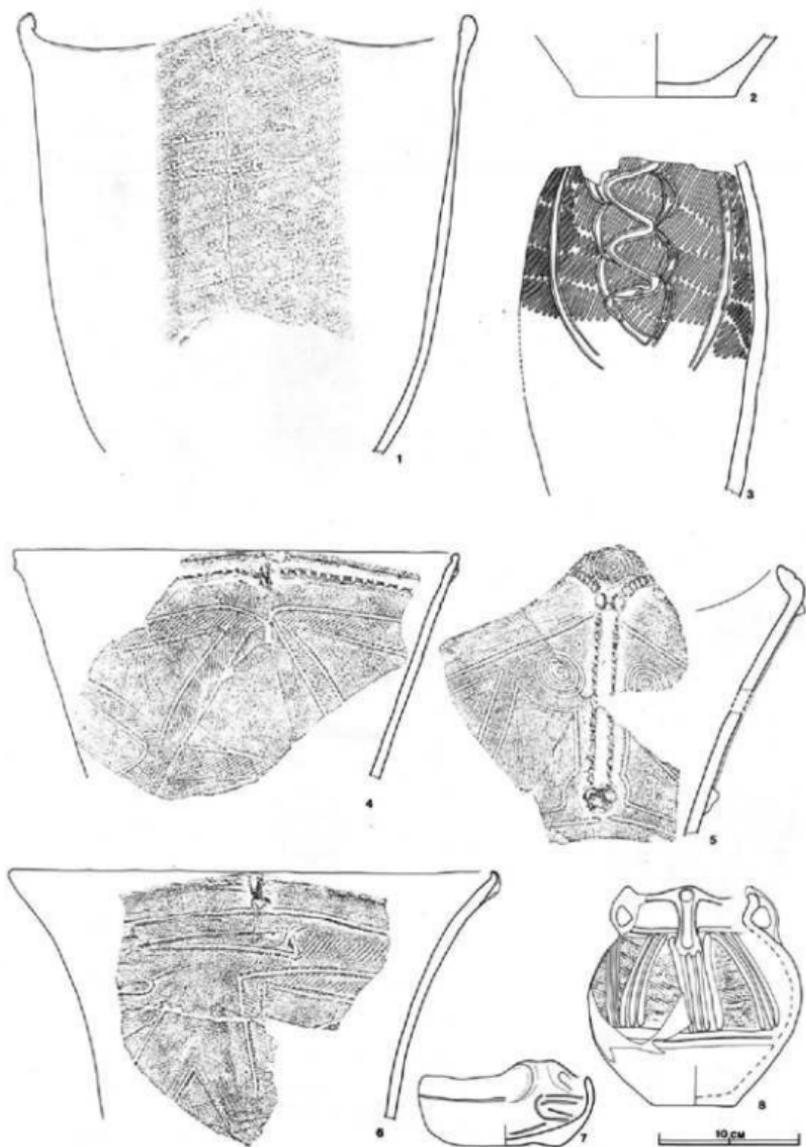
第132図 グリッド出土遺物



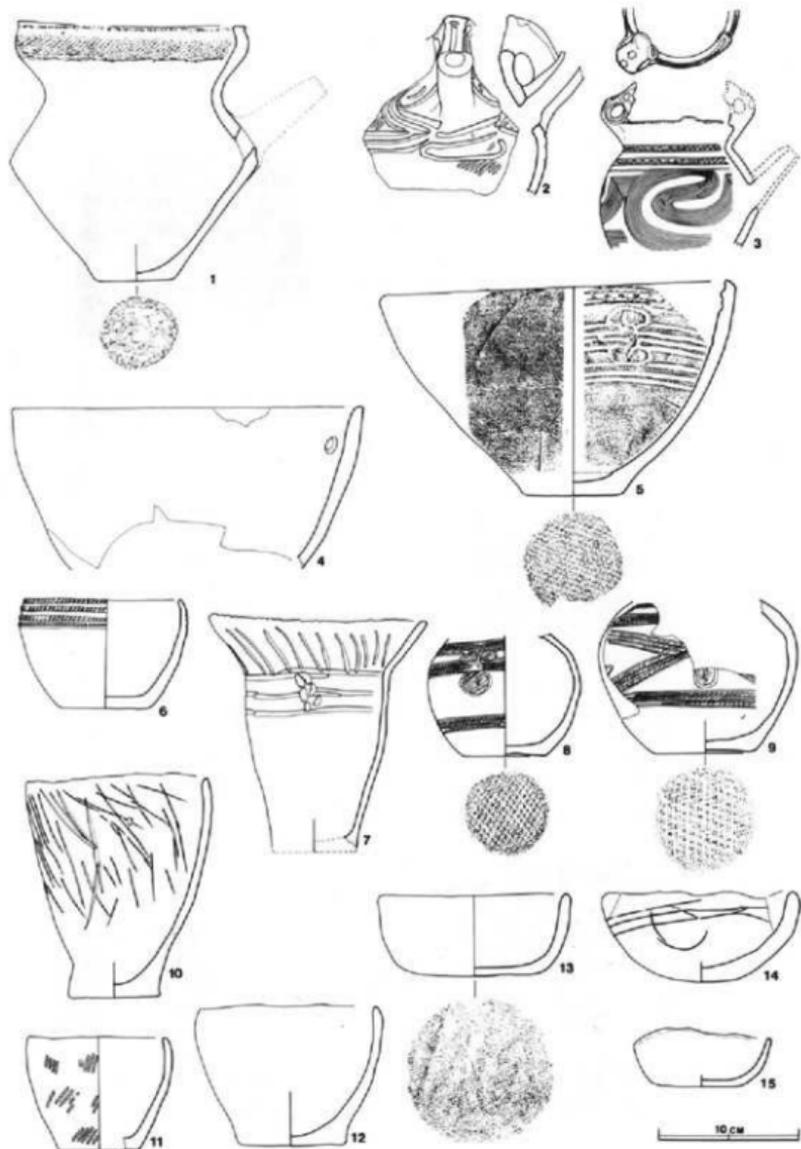
第133図 グリッド出土遺物



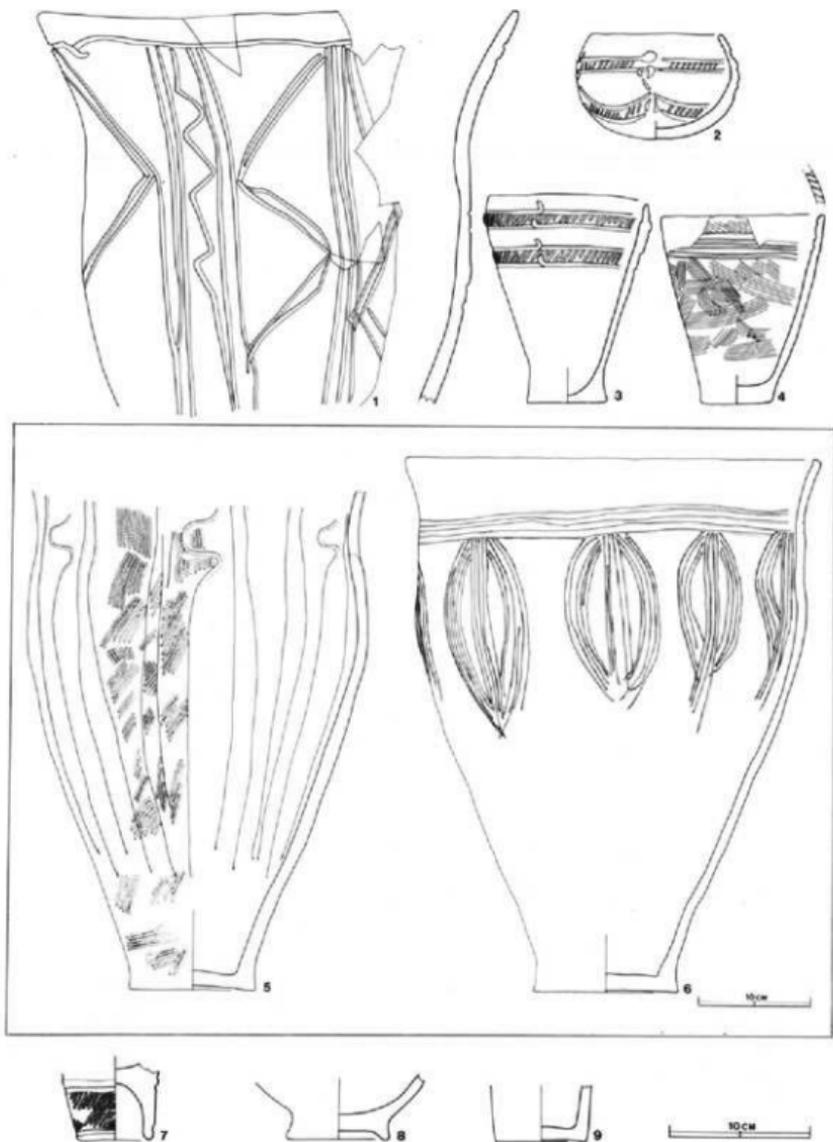
第134図 グリッド出土遺物



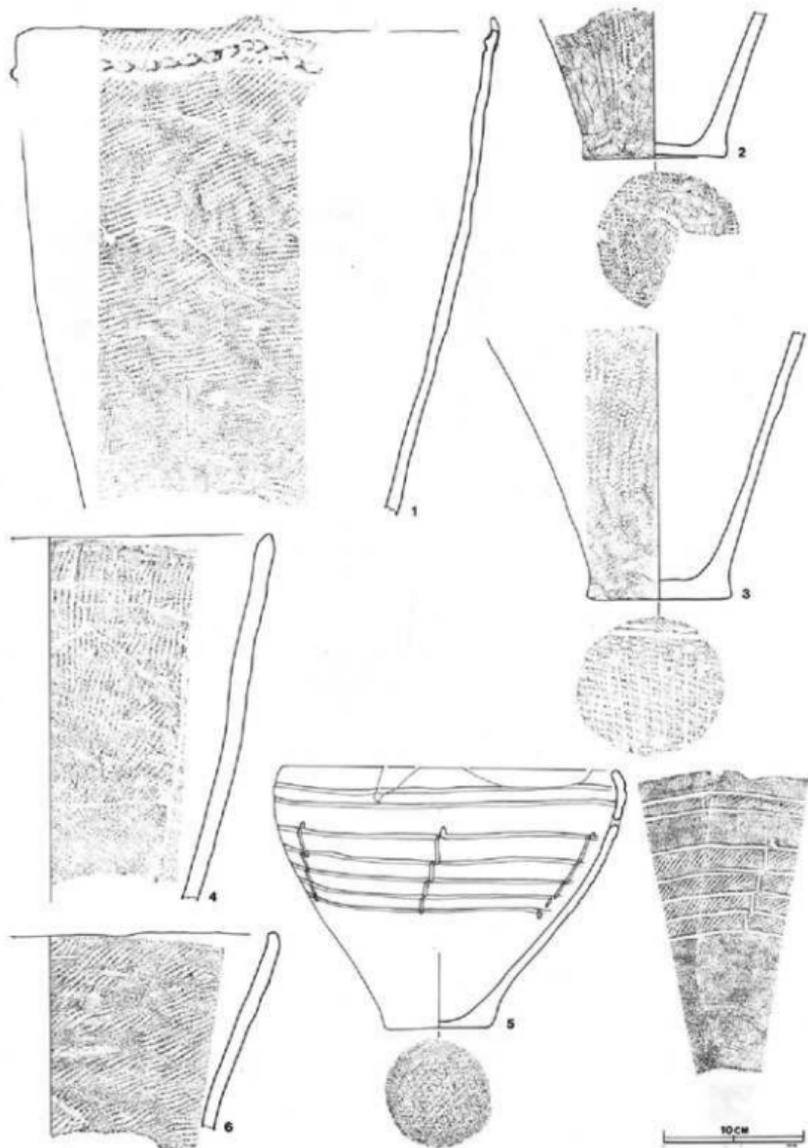
第135図 グリッド出土遺物



第136図 グリッド出土遺物



第137図 グリッド出土遺物



第138図 グリッド出土遺物



第139図 グリッド出土遺物

表69 第123図 溝出土遺物

出土遺物・区	遺物No.	形状・部位	法量 (cm)	表面・表面の特徴	備考
SD 1	1	口縁部		外側は細文、内側に斜交文を3段に施す。補修孔あり	中 同
	2	キリハコ型		キリハコ型を呈し、欠け沈線で区画される。地文は縄文	"
	3	口縁部		沈線文。地文は縄文	
	4	"		口縁に平行な沈線を有し、内弧文を施す	
	5	"		低伏の沈線が縦向きに施文される	
	6	"		低伏口縁を呈し、口縁斜交文から蛇行沈線が垂下する	
	7	胴部		蛇行沈線が垂下する	
	8	口縁部		沈線により幾何学的な文様を構成する。地文は縄文	
	9	"		横位の沈線を数条施し、縦位の蛇行沈線を加える	
	10	"		低伏口縁の尖部で斜交文を有す	
	11	"		口縁部に若干粒を施す。沈線で角形の文様を施す	
	12	"		沈線で幾何学的文様を施す。地文は縄文	
	13	"		沈線で四角文を施す	
	14	"		斜沈線が区画される	
	15	"		左下がりの斜沈線を施文する	
	16	"		口縁に平行な沈線が6本施文される。地文は縄文	
	17	"		若干沈線が左下がり・右下がりの順で施文される	
	18	"		隆線を有し、沈線で区画された縄文帯を施す	
	19	"		隆線の上に叩突を施し、沈線で区画した縄文帯をもつ	
	20	"		波状口縁を呈し、沈線と叩突がみられる	
	21	"		縄文へつ整形痕が残る。古製にはる木のびり沈線がみられる	
	22	"		口縁に平行な2本の沈線を有する	
	23	"		沈線文	
	24	"		波状口縁を呈し、口縁孔をもつ	

表70 第124回 溝出土遺物

出土遺物・区	数量	名称・部位	法量 (cm)	表面・断面の特徴	備考
SD-1	25	割 部		沈線で区画された内側に細文を施す	
	26	口縁部		口縁に平行な沈線を配し、下部に刺突文を加える	
	27	"		外反して立ち上がる口縁部で沈線で区画された縄文帯を有する	
	28	"		内側なる口縁で沈線で区画された縄文帯を有する	
	29	"		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	30	"		No.27と同。個体。8の字状の貼り付けが加わる	
	31	"		口縁に沿って深いスリットのある縄目を有し、それに沿った沈線を敷き施す	
	32	"		横位の沈線間に斜線帯を施す	
	33	割 部		沈線による入組文の施文される	
	34	口縁部		横位の沈線を施し、口縁部に刺突がみられる	
	35	割 部		横位の沈線を主に施す。地文は細文	
	36	口縁部		ゆるやかな波状口縁を呈し、口縁に刺突の貼り付けを施す。口縁部には沈線を付し、横位の沈線をめぐらす	
	37	"		No.36と同。個体。縦位に屈曲する沈線が加わる	
	38	"		口縁部に細線を付し、横位及び縦位の沈線を施文する	
	39	"		口縁部に細線を付す。胴部は刺突	
	40	"		口縁部に細線を付し、部分的に沈線を加える	
	41	割 部		屈曲する沈線がみられる	
	42	口縁部		口縁部に外反し、細線を付す	
	43	"		細線を付し、斜文沈線を施文する竹管刺突がみられる	
44	"		口縁部に内側の刺突を連続に施し、横位及び縦位の沈線を施文する		
45	"		口縁に平行な沈線を有する。地文は縄文		
46	"		ヘタ整形後沈線を施す		
47	"		刺突		
48	"		刺突		
49	割 部		縦位の沈線間を施す。地文は刺突		

表71 第125図 溝出土遺物

出土遺物・寸	通径%	形状・部位	法尺 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SD-1	50	11 鉢 部		2本の沈線間に刺突を充てる	
	51	"		縄文	
	52	"		縄文	
	53	"		口唇部に浅い凹線を持ち、平行沈線間に刺突を施す	
	54	"		よばらな縄文	
	55	"		口唇部内側に沈線を有する。縄文	
	56	"		口唇部内外面に沈線を施す。縄文	
	57	"		口唇部に刺突列を有し、右下がりだが、凹溝部B式の凹に斜位の沈線を施文する	
	58	"		口唇沈線間に刺突を加える。縄文	"
	59	"		多角形器で6本の平行沈線間を縦位の沈線で閉鎖状に区画する	"
	60	"		口縁は直立無縁で、5本の平行沈線文を有し、縦位の沈線を閉鎖状に施す	"
	61	"		口唇部に刺突を有し、内側に5本の平行沈線を施文する	"
	62	"		表は横方向のヘラ彫形。裏は引りにしる段差をもち6本の平行沈線を施文する。沈線間に燻文あり	"
63	割 部		表は悪文。裏は横りによる段差を有し、数本の平行沈線を施文する。沈線間に刺突がはいる	"	
SD-2	1	11 鉢 部		沈線文	
	2	"		沈線で文様を描く	
	3	"		斜位沈線を施す	
	4	割 部		くびれ部に横位の沈線と刺突列を有し、上縁は右下がり、下縁は右下がりの沈線を施す	
	5	11 鉢 部		口唇部に浅い凹線がみられ、平行沈線が数条横走る	
	6	"		口唇部に悪文を有する。縄文	
	7	"		口唇部に列点刺突を有し、右下がりの斜沈線を施す	
	8	"		凹状口縁で、口唇部に列点刺突及び沈線を有する	
	9	"		口唇部に刺突を付す	
	10	"		口唇部に刺突が加わり、1本の沈線が横走る。地文は縄文	

表72 第126図 グリッド出土遺物

出土遺物・区画	遺物番号	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
A _{1a}	1	椀形	口径	7.6	口縁部の内押し、沈線文が張られる。ヘク造り	砂粒を含み焼成は良好。にぶい褐色を呈す
			器高	6.3		
			底径	6.7		
A _{1b}	2	浅鉢形	口径 器高	14.8 9.6	口縁部に刺突文列を有し、上下に沈線で区画された幾次の縄文帯を有する	砂粒を含み焼成は良好。灰褐色を呈す (541-1)
A _{2b}	3	壺形	現存高	8.5	胴部に1本の沈線を有し、他は縄文を充ちる	口縁部及び底部の一部が欠ける
A _{3b}	4	小型深鉢形	現存高 底径	11.6 5.7	3本の沈線をめぐらし、間に刺突文及び縄文を埋める。底部は極めて深い	口縁部は欠けが、波状口縁を呈すと思われる。(543-3)
B _{1a}	5	深鉢形	口径	25	口唇部に指先で押した刺突文列を有し、口内に突起のあるヘラ状工具で刺突及び沈線を底位に彫文する	口縁部内押し、褐色を呈する
			現存高	14.3		
B _{1b}	6	鉢形	現存高 底径	6.6 7	太目の平行沈線をまわす。内・外面ともヘナ磨き手法	スコリア・砂粒を含み、灰褐色を呈す
B _{1c}	7	深鉢形	口径 現存高	13.1 35.5	波頂部から、平行沈線を垂下させ、間に刺突を加える。波頂部間にも同様の飾文を彫し、蛇行沈線を垂下する	瓶之内式。波状口縁を呈し、突起は3ヶ所 (541-2)
B _{2b}	8	深鉢形	口径	22.6	口縁部に7本の沈線を彫文し、中にL・Rの飾文を充ちる。なお沈線の一部ははね上がる。下部はヘナナデ	加曾川B式。にぶい黄褐色を呈す。 (548-2)
			器高	29		
			底径	7.3		

表73 第127図 グリッド出土遺物

出土遺物・区画	遺物番号	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
B _{1a}	1	深鉢形	口径 現存高	30.5 30	口唇部に刺突文列を有し、突起部下に巻帯を3段に彫文する。これが4単位くり返され、高巻帯は同様の沈線文を充ちる	瓶之内式。突起部の文様は4ヶ所とも異なっている (541-3)
B _{1b}	2	小型深鉢形	口径 器高 底径	12.8 15.6 5.7	口縁部に3本の平行沈線を引き、上2本の間にS字状の蛇行沈線を彫文する。内面へク磨き	焼成後。焼成は良好で褐色を呈す
B _{1c}	3	深鉢形 波状口縁	口径 現存高	30.5 24	口縁部に刺突のある細い隆線を有し、以下沈線で幾何学的な文様を区画する	2ヶ所の波頂を有し、木筒する。
B _{2b}	4	深鉢形	口径 現存高	(17.2) 12.2	横位及び幾次の沈線で区画した中に縄文を充ち、飾文帯を()状の沈線で区切る	2個の挿付子を有する。砂粒を含み、褐色を呈す
B _{2c}	5	壺形	底径	9.7	沈線及び縄文を埋す。表面ともヘラ磨り	瓶之内式。スコリア・細砂粒を含み焼成は良好。褐色を呈す (541-6)
B _{2d}	6	小型深鉢形	口径	11.0	口縁部に3個の突起を有し、刻みを持つ巻帯と巻帯文が口縁に沿って一周する	瓶之内式。黄褐色 (544-2)
			器高	16.2		
			底径	6.0		

表74 第128図 グリッド出土遺物

出土遺物・区	遺物No	形状・部位	法寸 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
B ₁ e ₁	1	深鉢形	口径 31.5 器高 39.9 底径 9.5	くびれ部に3本の沈線を行し、長状の沈線を縦位に施す。地文はL.Rの縄文	甕之内式(732 1)
B ₁ d ₁	2	鉢形	口径 13.5 器高 11 底径 7.7	口縁部に数本の沈線を階段状に施す。内外面ともヘラ削り	川貝割B式。上部は褐色を呈す(写39-4)
B ₁ b ₁	3	小型深鉢形	口径 7.6 器高 10.2 底径 3.5	段状口縁を呈し、器手は3ヶ所、口縁部に刻みのある降帯を付し、下部に沈線で区画された縄文帯をもち	甕之内式。底成は極めて良好で明褐色を呈す(734 4)
B ₁ d ₁	4	壺形	口径 5.5 器高 13.4 底径 5.1	肩部及び腹部に、平行沈線を横文中中を、Z字状の漆消縄文で区画する	胴部最大径 4.2cm 底成は良好で、黒褐色を呈す(写39-8)
B ₁ g ₁	5	鉢形口縁	口径 35.5 現高 17.9	口縁に平行な沈線間に刺突を加え割部に遊び字形の沈線を充てる	口縁部に刺突を1ヶ所有する
B ₁ d ₁	6	深鉢底部	現高 14.2 底径 7.0	外壁は、光いヘラ削り、内壁はヘラ削りの型形を呈し、底部は刺突痕	胎土に砂粒、黒炭粉を含み、上部は褐色を呈す
B ₁ b ₁	7	深鉢口縁	口径 15.7 現高 15.8	口縁部に刺突文を施し、他はR.Lの縄文を充てる	砂粒、スゴリアを含み灰褐色を呈す
B ₁ g ₁	8	鉢形	現高 13.2 底径 8.4	胴中央部に最大径を測り縄文のみ	砂粒を含み、明褐色を呈す。胴部最大径 4.2cm
B ₁ e ₁	9	深鉢形	現高 19.6	縄文のみ。底部は縦方向のヘラ削り	底成は普通で、赤褐色を呈す

表75 第129図 グリッド出土遺物

出土遺物・区	遺物No	形状・部位	法寸 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
B ₂ b ₂	1	深鉢形	胴部径 46.0 現高 61.0 底径 13.2	1条の縦帯を付し、上段は横位の沈線下部は内証文とくの字状の沈線を充てる	底成は普通で、暗褐色を呈す(写36-3)
C ₁ a ₂	2	深鉢形	現高 29.5 式径 10.0	底行沈線及び縦位の沈線を施す。下部は切れずに剥離する	甕之内式(731 6)
C ₁ a ₂	3	円筒形	現高 29.0 胴部最大径 11.9	全面にR.Lの縄文が施され、同下半部にヘラ削りがみられる	砂粒を含み底成は良好である。灰黄褐色を呈す(写37-4)
C ₁ a ₂	4	深鉢形	口径 23.8 現高 22.4	L.Rの縄文を充てる。下部はヘラ削りである	口縁部に小突起を有する(735 6)
SK-150	5	鉢形	現高 6.3 式径 12.6	縄文のみ。横方向のヘラ削りが底部にみられる	

表76 (第130図 グリッド出土遺物)

出土遺物・区	遺物%	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
B ₁ b ₁	1	深鉢形	口徑 現存高	42.2 21.0	縄文のみ	焼成は悪く、におい褐色を呈す
B ₂ a ₂	2	深鉢口縁部	口徑 現存高	23.5 21.8	縄線を口縁部と頸部の2ヶ所に付し、左下がりの沈線を施す。地文は縄文	焼成は良好、スコリア、肥粒粒を含有し、磨製されている。におい赤褐色
B ₃ c ₃	3	深鉢形	口徑 現存高	(17.8)	口縁部に8の字状の盛り付はみられ沈線で幾何学文様を施文する	堀之内式
C ₁ c ₁	4	深鉢形	口徑 現存高		波状口縁を呈し、口は3ヶ所、縦位の沈線文が施される	堀之内式
C ₁ a ₁	5	深鉢形	口徑 現存高	28.7 9.4	口唇部に4個で1単位の円形刺突文を配し、横位及び縦位の沈線で文様を区画する	焼成は普通で明褐色を呈す
C ₁ a ₁	6	注に上基	胴部最大径 現存高 底径	(10.4) 7.7 4.8	横位の沈線及び縦位の沈線を引き、中にまげらな縄文を施す。胴下部はへう巻き	胎土は、砂粒が多く、におい褐色を呈す。堀之内式
C ₁ a ₁	7	小型深鉢	口徑 器高 底径	14.4 13.0 7.9	沈線で幾何学的な文様を区画し、中に縄文を施す。上部の沈線部にボタン状の粘土を貼り付ける。胴下部はへう巻き	堀之内式、焼成は良好で明赤褐色を呈す (写33-2)

表77 (第131図 グリッド出土遺物)

出土遺物・区	遺物%	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
C ₁ a ₁	1	深鉢口縁部	現存高 底径	14.0 10.5	無文。縦方向のへう巻き	焼成は良好で、におい赤褐色を呈す
C ₁ c ₁	2	蓋	直径	7.5	無文	スコリア、細粒粒を含有し、焼成は良好、におい褐色(写41-7)
C ₁ b ₁	3	深鉢形	口徑 現存高	29.6 21.5	波状口縁下に幾何学文を施し、その間に平行沈線及び山形文を縦位に施文する	堀之内式、波状口縁で突起は3ヶ所 (写31-4)
C ₁ c ₁	4	深鉢形	口徑 現存高	26.3 29	2箇所での突起が3単位みられ、平行沈線を施下し、間に刺突を加える。突起間には波状、山形状の沈線文を施文する	堀之内式、赤褐色を呈す
C ₁ a ₁	5	深鉢形	口徑 現存高	22 24.2	頸部を2本の平行沈線で区切り、上部には、刺突のあるり字形の横帯を付す。上部は沈線で文様を区画する	堀之内式、明赤褐色を呈す
C ₁ e ₁	6	深鉢形	口徑 現存高	38.9 30.6	口縁部に平行な沈線をめぐらし、下部に逆V字状の沈線文を施文する	堀之内式、砂粒を含まず褐色を呈す
C ₁ g ₁	7	小型深鉢	口徑 器高 底径	11.2 8.6 4.0	口唇部が2個付き円形刺突文から左右に弧状の沈線を引き胴部は沈線で幾何学文を施文する	完形、明赤褐色を呈す (写34-1)

表78 (第132図) グリッド出土遺物)

出土遺物・区	遺物名	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C _{2a}	1	深鉢形	口径 33.1	波状口縁を呈し肩部がくびれる。口内に沿って太い沈線を施し、該底部に円形及び三日月状の刺突を有する。縦位の沈線文を施す。	堀之内式。焼成は良好で灰褐色を呈す。
			現存高 44.1		
C _{2b}	2	深鉢形	口径 29.4	小波状口縁を呈し、口縁部に横線を引す。木の皮で沈線を施文し、縦位の平行沈線で区画する。地文は縄文。	スコリア、砂粒を含み、褐色を呈す。 (?38 1)
			現存高 51.9		
C _{2b}	3	深鉢形	口径 (39.7) 胴部最大径(40.7) 現存高 48.5	口縁部に縦線及び10本の平行沈線を施す。沈線部に蛇行沈線を加える。	スコリアを含み、褐色を呈す。
C _{2c}	4	深鉢形	口径 20.7	口縁部内側にくびむ。文様は縄文のみ。トコは縦方向のヘラ割り。	砂粒・スコリアを含み、焼成は良好である。にぶい赤褐色を呈す。
			現存高 18.7		
C _{2c}	5	蓋	直径 8.9	表・裏ともヘラ整形。高さ2cmの把手がつく。	砂粒を含み、焼成は良好。にぶい褐色を呈す。(?41 2)

表79 (第133図) グリッド出土遺物)

出土遺物・区	遺物名	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C _{2c}	1	深鉢形	口径 (34.1) 現存高 26.3	えぼらな縄文を施文する。	砂粒を含みにぶい褐色を呈す。 (?35-1)
C _{2b}	2	深鉢形	現存高 23.9	縄文。口唇部にスリットのある小突起がつく。	砂粒、スコリアを含みにぶい黄褐色を呈す。
C _{2a}	3	深鉢形	口径 (32.0) 現存高 22.3	大きく外反する口縁部で、縄文のみ。	砂粒を含みにぶい黄褐色を呈す。
C _{2d}	4	深鉢形	口径 26.5	波状口縁を呈し、文様は縄文のみ。	砂粒・スコリアを含みにぶい黄褐色を呈す。 (?35 5)
			現存高 29.0		
C _{2d}	5	深鉢底部	現存高 25.0	6〜7本で一帯位の平行沈線を縦位に施文する。底部はヘラ整形。	砂粒・スコリアを含み褐色を呈す。
			底径 9.2		
C _{2j}	6	深鉢底部	現存高 13.0	ヘラ整形。	砂粒を含みにぶい褐色を呈す。
			底径 10.4		
C _{2c}	7	深鉢底部	現存高 7.3	ヘラ整形。	砂粒・スコリアを含み褐色を呈す。
			底径 11.7		

表80 (第134図) グリッド出土遺物)

出土遺物・区	遺物名	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C _{2c}	1	深鉢形	口径 (16.4)	口縁部に、きざみのある隆帯をつけ、胴部に沈線で凹角形をかく。中は縄文。	砂粒を含み、焼成は粗悪。堀之内式。
			現存高 13.9		
C _{2b}	2	鉢形口縁部	現存高 15.1	口縁部に把手がつき胴部は沈線で区画し中に縄文をほどこす。	灰石、スコリアを含み、褐色を呈す。
C _{2e}	3	壺形	口径 14.8	割突のある隆帯を口縁部に貼り付ける。胴部に沈線をほどこす。	砂粒を含み、にぶい褐色を呈す。 (?37 5)
			胴部最大径 18.8		
			現存高 24.0		
C _{2d}	4	"	口径 9.9	把手が4ヶ所につき、胴部に割突及び隆帯の沈線を施文する。	砂粒を含み、焼成は良好。にぶい褐色を呈す。
C _{2b}	5	深鉢形	口径 34.5	口唇部に3ヶ所の刺突をもち、Z字状の口内する沈線を垂下させる。地文は縄文。	黄褐色。砂粒、スコリアを含み、褐色を呈す。 (?36-1)
			現存高 33.7		

表81 (第135図 グリッド出土遺物)

出土遺構・区	遺物%	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C _{5b}	1	深鉢形	口径 (30.7) 現存高 30.9	地文は縄文。波状・線をなし、口縁部内側に沈線が1本入り	砂粒・スコリアを白濁を含み灰褐色を呈す
C _{5b}	2	鉢形蓋部	現存高 4.2 底径 11.2	ヘラ柄及びヘラ磨きの手段による	表面は青褐色に近い黄褐色を呈す
C _{5d}	3	円筒形	胴部最大径 17.6 現存高 23.6	()状の沈線間に2本の平行沈線を垂下させる。平行沈線の外に縄文の波状文を配する。地文はL状の縄文	砂粒を含み濃い棕色を呈す (写37-3)
C _{5e}	4	深鉢形	口径 (31.1) 現存高 16.0	口縁部に割裂のある波状及び8の字状の磨り付けを有し、沈線で幾何学文を区画し、中に縄文を充填する。外は滑消し	砂粒を少し含み灰褐色は良好、灰褐色を呈す。波状文
C _{5e}	5	深鉢形	現存高 19.0	波状口縁。波状部に同心円文を産し、縄文のある線部を垂下させる。胴部に幾何学文及び同心円文を施す	砂粒を含み、灰黄褐色を呈す。波状文
C _{5e}	6	深鉢形	口径 (34.5) 底径 17.4	口縁部に8の字状の磨り付け文。沈線で幾何学文を産し、中に縄文を充填する	砂粒、砂粒を含み灰褐色は良好、濃い棕色を呈す
C _{5e}	7	浅鉢形	口径 11.6 底径 6.1	内・外面ともヘラ磨し。横位及び弧状の沈線を施す	焼成は良好で褐色を呈す
C _{5e}	8	鉢形	胴部最大径 15.0 底径 13.6 底径 5.6	4つの転手を持ち、胴部及び頸部をL状の線で区画し、中に幾何の沈線を施す	砂粒を多く含み、黄褐色を呈す。波状文 (写38-8)

表82 (第136図 グリッド出土遺物)

出土遺構・区	遺物%	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C _{6a}	1	注口土器	口径 16.1 底径 18.2 底径 5.3	胴部は縦線状を呈し、口縁部に縄文帯を産す。底が割代良	砂粒を含み焼成は良好。濃い赤褐色を呈す (写39-5)
C _{6b}	2	注口土器	現存高 12.7	沈線で文様を区画する。地文は縄文	波状文
C _{6b}	3	注口土器	胴部最大径 11.2 現存高 11.8	口縁部は磨みがみられる。胴部にL状の沈線を産し、中に波状文を充填する。胴部は10数本の目をもち波状口縁により区画される	砂粒を含み黄褐色を呈す。石炭、長石を含み、灰色を呈す (写39-6)
C _{6b}	4	鉢形	口径 (24.7) 現存高 11.2	縄文。ヘラ磨形	スコリア、砂粒を含み、灰黄褐色を呈す
C _{6c}	5	鉢形	口径 (24.0) 底径 14.8 底径 6.8	外面はヘラ磨形。表面は列吉縄文及び7本の平行沈線を配し、沈線間は極めて細い磨みを加える	加厚利B式
C _{6c}	6	鉢形	口径 (20.9) 底径 7.6 底径 6.4	口縁部に3本の平行沈線を産す。中に縄文を充填する。胴部へラ磨形	白濁時、砂粒を含み、焼成は良好
C _{6b}	7	深鉢形	口径 15.2 (16.4) 底径 (6.9)	口縁部に厚位の沈線。胴部は3本の平行沈線を産す。平行沈線間には割代文を施す	砂粒を含み焼成は良好、灰褐色を呈す (写33-4)
C _{6c}	8	鉢形	胴部最大径 10.8 現存高 8.4 底径 5.8	4本で1単位の平行沈線を3段に産し、沈線間に縄文を充填する。2段目の沈線を3本の「カ」の字状の沈線で文様を加える	砂粒を含み黒色を呈す。加厚利B式 (写39-3)
C _{6c}	9	鉢形	胴部最大径 11.1 現存高 10.7 底径 6.9	4本の平行沈線で幾何学的な文様を区画する。中に縄文を充填する	石英・砂粒を含み、黄褐色を呈す。加厚利B式
C _{6d}	10	深鉢形	口径 12.6 底径 15.8 底径 6.4	単位の沈線を産す	砂粒・スコリアを含み、焼成は良好。濃い黄色を呈す (写33-3)
C _{6e}	11	鉢形	口径 9.6 底径 8.0 底径 (5.7)	文様は縄文のみ。内面に、濃いヘラ磨きを産す	白濁時・スコリアを含み、濃い黄褐色を呈す

出土遺構・ID	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
Cd1	12	鉢	口径 11.5 底径 10.0 残径 7.2	無文、ヘラ彫	内底を含む成成は良好、赤褐色を呈す
Cd1	13	鉢	口径 13.1 底径 5.7	無文、ヘラの彫、底面に本品の沈没がみられる	内底を多く含む時赤褐色を呈す (240-2)
Cd1	14	深鉢形	口径 13.1 底径 6.1	横線及び弧状の沈没を無文とする	内底・スコリアを含む、赤褐色を呈す
Cd1	15	鉢	口径 9.6 底径 4.1	無文、ヘラ彫	内底・スコリアを含む、成成は良好、赤褐色を呈す

表83 (第137図) グリッド出土遺物

出土遺構・ID	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
Cd1	1	深鉢形	口径 33.4 残存高 25.9	縦行及び平行沈没を幾段に無文とし、その間に斜線の沈没をつける	地底内式、内底部は外反り
Cd1	2	鉢	口径 9 底径 7 作品最大径 11.4	116部に平行な横線を有し、残下部には弧状の縦文を有する。4ヶ所に縦線の沈没が加わる	116部は口縁部、残は2段である (240-4)
Cd1	3	小も深鉢	口径 11.2 底径 11 残径 5.7	116部に平行沈没が4回された横文帯が2段に無文され、沈没の1帯は上にはね上がる。横文はLR	外面は縦方向のヘラミダキ。成成は良好で赤褐色を呈す (233-2)
Cd1	4	小も深鉢	口径 11.4 底径 15.3 残径 5.1	表・裏とも116部に平行な沈没のみで成る。表6本、裏4本。胴部は2〜3本で1単位の細い沈没を充てる	116部に横みあり
Cd1	5	深鉢形	口径 44 底径 11	縦行の横線及び左右の2本ずつの沈没が1単位として、計6単位を無文とする。沈没部にはLRの縦文を施す	地底内式。成成は善式で、赤褐色を呈す (232-3)
Cd1	6	深鉢形	口径 36.0 底径 47.3 残径 12.8	5本の沈没を胴部に無文とし、4〜6本の沈没を腹面に引く。この沈没部を弧状の沈没で充てる	地底内式。成成は良好で、赤褐色を呈す (232-2)
Cd1	7	台付土器	残存高 4.8 底径 8.1	胴部が2本、胴部部に1本の沈没を有し、中にLRの横文を充てる	台付B式。有蓋鉢としても異形土器の担当ではないからうか
Cd1	8	台付鉢形	残存高 4.1 底径 7.4	内・外面ともヘラミダキによる彫りがみられる	胎土は母粒を多く含む、赤褐色を呈す
Cd1	9	深鉢形	残存高 4.0 底径 6.4	外面はヘラミダキ、内面はヘラ彫りの彫り筋を有す	スコリア・母粒を含む赤褐色を呈す

表84 (第138図) グリッド出土遺物

出土遺構・ID	遺物	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
Cd1	1	深鉢形	口径 33.6 残存高 35.4	116部に遺物を付し、116部に小突起を有する。無文	成成は良好で、赤褐色を呈す (236-2)
Cd1	2	深鉢形	残存高 10.1 底径 10.1	無文。胴部は縦方向のヘラ削り	横文がみられる。スコリア・母粒を含む褐色を呈す
Cd1	3	深鉢形	残存高 18.6 底径 10.2	無文のみ。底部にヘラの彫。横文帯を有する	成成は不良で、赤褐色を呈す (237-2)
Cd1	4	深鉢形	口径 30.1 残存高 26.1	無文のみ	胎土に母粒を多く含む。赤褐色を呈す (235-2)
Cd1	5	鉢	口径 23.5 底径 18.1 残径 7.4	7本のヘラ沈没を有し、5本には弧状の沈没を有する。沈没部には無文を充てる	台付B式。母粒・スコリアを含む。赤褐色を呈す(238-3)
Cd1	6	深鉢形	口径 31.6 残存高 13.6	無文のみ	内底・スコリアを含む、赤褐色を呈す

表85 (第139図 グリッド出土遺物)

出土遺物・X・Y座標	遺物・部位	形状	数量	長さ (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
C _{6c}	1	鉢	形	現存高 破 径	15.9 8.3	半行波線を2段に施し、沈線間に縦文を施す	黒曹利B式。砂粒・スクリアを少し含み、地色は良好、灰褐色を呈す
C _{6d}	2	鉢	形	11 径 器 高 破 径	20.9 11.6 5.9	1.縁に半行な4本の沈線を施し、沈線間は縦文。内・外面ともヘラ磨き	黒曹利B式。砂粒を含み程度は良好、黒褐色を呈す
C _{6e}	3	鉢	形	11 径 器 高 破 径	15.1 9.8 6.2	1.縁に半行な6本の沈線を施し、沈線間に縦文を施す	黒曹利B式。スクリア・砂粒を含み、地色は良好、黒褐色を呈す (写真 1)
C _{6f}	4	埴形(?)		現存高	6.0	底部は半球形を呈し、横位の沈線を施す	器之内式。細砂粒を含み、精美なものである。土色は黄色を呈す
C _{6g}	5	盃	直 径		7.5	表・裏ともヘラ整形、高さ 1.3 cm の厚みがある	長石・スクリアを含み、灰黄褐色を呈す
D _{6c}	6	注 工上器				注工跡のみ、沈線の施文3ある	器之内式。砂粒・砂鉄・スクリアを含み、地色はやや生い、褐色を呈す
B _{6c}	7	鉢	形	11 径 器 高 現存高	23.3 (29.9) 20.6	1.縁部は内磨し、口内面に用野の磨子痕を付す。断面にかけて蛇行及び斜位の沈線を施文する	器之内式。砂粒を含み程度は良好、土色は黄褐色を呈す
C _{6a}	8	手捏土器	11 径 器 高	3.9 5.1	3口の深鉢(口縁を呈し、外面はヘラ磨き、内面は指ナデによる整形を施す。底に横代痕が現る	スクリアを含み、地色は良好、黄褐色を呈す (写真 2)	
C _{6b}	9	手捏土器	11 径 器 高	2.0 2.8	ヘラ整形	砂粒を多く含み、土色・黄褐色を呈す (写真 3)	
C _{6d}	10	手捏土器	11 径 器 高	3.5 3.3	表・裏とも指痕が現る	長石・スクリアを含み、灰黄褐色を呈す (写真 4)	
C _{6e}	11	手捏土器	11 径 器 高	4.1 3.9	横文、ヘラ整形	石英・長石を含み、土色・褐色を呈す (写真 5)	
C _{6c}	12	土 玉	最大径 高 さ	1.2 3.3	ナデ整形	灰黄褐色を呈す	
C _{6d}	13	土 玉	最大径 高 さ	2.2 1.5	ナデ整形	砂粒を多く含み、褐色を呈す	
C _{6e}	14	土 玉	最大径 高 さ	(1.8) 2.0	ナデ整形	砂粒を含み、土色・黄褐色を呈す	
C _{6d}	15	土 玉	最大径 高 さ	1.4 2.4	表面はヘラ整形	砂粒を含み、土色・褐色を呈す	
C _{6e}	16	土 玉	最大径 高 さ	1.6 2.0	内径は約 4 mm で、ナデ整形	砂粒を含み、灰黄褐色を呈す	

第3節 ま と め

冬木A貝塚における調査の結果、29軒の住居址、243基の土塚、2条の溝が確認された。住居址の時期は、出土遺物の大半が埋土からの検出ということもあり確実なことは言えないが、ある程度の推測は可能である。推定するに29軒の住居址のうち、縄文時代前期のものが1軒、後期前葉と思われるものが最も多くて19軒、後期中葉が5軒、時期不明が3軒となる。土塚は詳細については後述するが、大きく5種の形態に分類できる。数的に多数の割合を占めているのは平面形が円形もしくは楕円形を呈し、深さの浅い土塚である。いわゆる袋状土塚も20基ほど確認されている。溝は明確な遺構としては1条だけで、排水溝ではないかとみられるものである。

上記各遺構からは大量の土器片と石器類、そして自然遺物が出土している。土器類は前期・中期・後期に編年されるもので、極めて多量に出土しているのが後期前葉に位置する櫛之内式土器である。これは全体の8割以上を占めている。石器類では打製・磨製石斧、石刀、磨石などが比較的多く出土した。他に石鏃、石棒もみられた。自然遺物も多量に出土し、貝類、魚骨・獣骨類が検出され、釣針も確認された。なお、人骨が18体発見されている。

1. 貝層と人骨の埋葬ゾーンについて

冬木A貝塚の貝層は、その平面的な広がりを見ると、ブロック状に貝殻が密集する部分とやや貝の密集の度合いが希薄である部分がある。断面を観察することによってもブロック状の純貝層が認められ、20～40cmの堆積を示している。各ブロックに多くの場合遺構を伴う。これは、本貝塚の貝層の形成過程を、「遺構廃棄→貝殻投棄→埋没→投棄絶縁の拡大→ブロックの連続」としてとらえることが可能であることを示している。

貝層が重なり合っている部分は認められなかった。これは地点毎に形成時期が異なることを示すものと思われる。しかし貝層だけを見た場合、層位・広がりはいずれを見ても、形成時期を明確に区別することは困難であった。エリア西側の土採り・木工所建設の際の削平等によって破壊され、貝層の残った部分が、今回調査した区域であったと思われる。

本貝塚における人骨の埋葬ゾーンは、著しい偏在性を示し、貝層堆積区の周縁部に位置している。埋葬した場所は「ブミ捨て場」そのものではなく、堆積しつつある貝層の周辺だったのである。これは、人骨の上に堆積した貝層がいずれも薄く、貝殻を投棄した場所の中心と見なすことができないからである（注1）。

人骨が二話した場所に集中していることは、保存の問題を考慮しても、埋葬が意図的に貝層周辺に行なわれたと考えてはつつかえないと思われる。当時死体を「ブミ」と同様と考えたか否かは不明であるが、意図的に「場所」を定めて埋葬が行なわれたということは、とりもなおさず当

時「埋葬する場所」(「墓」と同視することは疑問である)の概念が存在したものと見てきしつかえないであろう。

人骨の頸位は大部分が南から東の間にある。これは出土頸位・埋葬姿勢の如何にかかわらず、極めて顕著な傾向と言える。埋葬姿勢に関しても、仰臥伸展葬と右膝位仰臥屈葬が大部分を占める。以上の2点から、埋葬に際して頸位及び埋葬姿勢に関する「種」の「形式」が存在したことを考えることが可能である。

「形式」は、時期及び埋葬者の所属集団によって異なる可能性が考えられる。この問題は、他の貝塚の発掘が「なわれ、より多くの資料が集められた時に初めて明らかにされる性質のものである。従ってここでは可能性を指摘するにとどめたい。

2. 住居址について

本遺跡で確認された住居址は29軒である。遺跡内での位置をみると、北側を除く3方向で検出された。北側の一部が調査できなかったためもあるが、いずれにしても、C2区中央部より北側一帯における遺構の分布密度は他の部分よりも薄くなっている。住居址もこの一帯からは検出されておらず、広場的性格が考えられよう。

平面形状をみると、方形・隅丸方形・円形・楕円形などがみられ、いずれかの形状に片寄る傾向はみられない。これは時期別にみても同様である。各住居址の時期は縄文後期の堀之内期～加曾利B期に属するものが大部分である。しかし堀之内期・加曾利B期とも明確な形状差は認めがたく、平面規模もほとんど差はないといえよう。

これら各住居址の確認面は表土下50～80cmのローム層上面である。最初は一層上面にあたる暗褐色土層で遺構をとらえようと努力したが、確実にとらえることができず、止むなく前述のようにローム面での確認となったわけである。

この結果、畑が単独で暗褐色土中に残ってしまったり、ピット列で検出した床面の上部に畑が浮いてしまった住居址が若干あったことは誠に残念である。

以上のことに加えて、冬木A貝塚は元来もっと高低差のあった土地であったと言われるが、木下所の建設等がかなり土地削平と掘削を受けており、これも遺構確認が困難であったひとつの理由であろうと思われる。

ところで今回調査された住居址の特徴及び問題点等について若干ふれておきたい。

まず、畑を持たない住居址が全体の4分の3を占めていることである。ちなみにがけのあるいは地上の確認された住居址は、第9号・10号・11号・13号・21号・22号・24号・27号の8住居址に過ぎず、他はその痕跡は全く認められなかった。このがけをもたない住居址は床の軟かなものも多く、ピットもそれほど良好でないことなどを考えると、長期間にわたって生活が営まれた遺

場ではなかったと考えてよいかもしれない。

が灶そのものは、全て地穴灶である。住居址床面を鍋底状に掘り下げた上で火を使用したものである。炉に作り練や埋設土器は検出されなかったが、第11号住居址と第21号住居址で検出された炉址は極めて良好な状態であり、灰白色の灰層と赤褐色の焼土層が鮮明なコントラストを成して観察された。

埋設土器に関しては、前述のように遺構内からの検出はなかったが、C1区及びC3区において単独で確認された。いずれも縄文式の深鉢形土器で、2個並列に並んでおり、内部には灰が充填されていた。ただこの土器は暗褐色土中に検出されたもので、関連する遺構は確認されていない。この事象から考えると黒色土及び暗褐色土中に営まれた住居址があったのではないかと思われる。しかし前述のように黒色土層での遺構確認は極めて困難であるため確認できなかったものであろう。

今回の調査では第16号・27号住居址の2遺構だけが黒色土中に検出された遺構である。第27号住居址については最初に焼土が確認され、この焼土を追っていったところ本遺構が確認されたわけである。床面は軟かたで、焼土がなければ覆土との区別は困難であった。

住居址の出入口部が確認できたのは第21号住居址のみであった。一周してきた壁溝が南西コーナー部で分断され、ここが出入口部であると考えられる。この幅は数10cmで向側にはピット列が溝状に検出された。これとよく似た遺構が第22号住居址でも確認されている。位置的にも第21号住居址と同様に南西コーナー部である。ただそれほど良好な検出状態ではないため断定はできないが、恐らく出入口部であろうと思われる。

調査された29軒の住居址群のなかで、第26号住居址と第29号住居址は他の住居址と比較して若干その形態を異にするものであった。平面形状は楕円形で、長径3.52~3.94m、短径3.31~3.52mを計り、竪穴を有し、床中央部に向けて锅底状に傾斜を有し、竪穴の一部が2段掘り込みになっている。覆土から出土した遺物を見ると、共に縄文内期に属することがわかる。この住居址に似た形態を有する住居址は他に確認されておらず、その性格等についてはさらに追求していきたい。

3. 土壌について

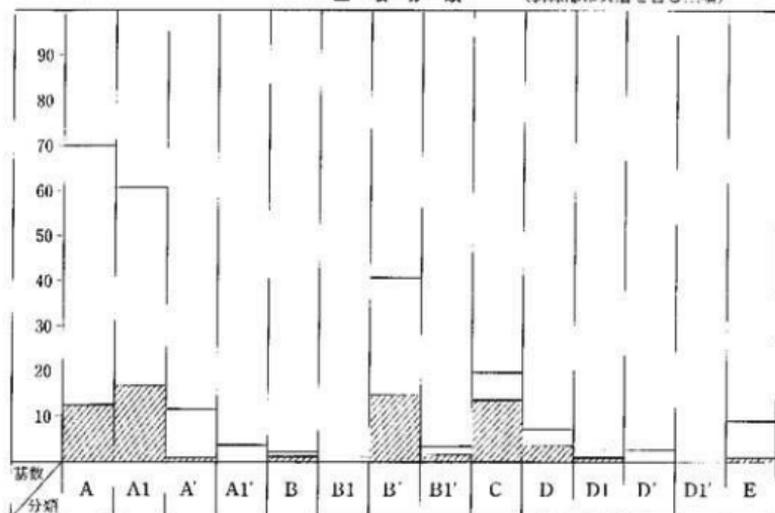
本遺跡で確認された土壌は243基である。ナンバーは248までついているが、134・171~173・236の5基が欠番となるため実数は上記の通りである。

さて整理の都合上いくつかのグループに分類したわけであるが、まずその結果をまとめておきたい。

実数243基のうち全体の調査ができず分類不可能な土壌を除く237基を対象とした。

数域的に最も多かったのはAグループで、147基あり、次にBグループの48基、Cグループの

土 壌 分 類 (斜線部は目層を含む土壌)



土 壌 分 類 及 び 基 数

グループ	土 壌 分 類	基 数	表基数に対する割合 (%)	目層を認めた土壌数 (目層はフル・プロット%)	備 考	
A	A	70	29.5	12	深さが浅くピットを持つ土壌が多い	
	A1	61	25.7	17		
	A'	12	5.1	1		
	A1'	4	1.7	0		(20.4%)
				Aグループ計 62.0%		
B	B	2	0.8	1	深くピットのない土壌が多い	
	B1	1	0.4	0		
	B'	41	17.3	15		
	B1'	4	1.7	2		(37.5%)
				Bグループ計 20.2%		
C	C	20	8.4	14	(70.0%)	目層を含む例が多い
D	D	7	3.0	4		
	D1	3	1.3	1		
	D'	3	1.3	0		
	D1'	0	0.0	0		(38.5%)
				Dグループ計 3.6%		
E	E	9	3.8	1	(11.1%)	
計		237 基	100%	72 基	(30.4%)	

20基、Dグループの13基、Eグループの9基と続く。以上のようにAグループに属する土壌が圧倒的に多く全体の62%を占めることがわかる。ちなみにBグループは20.2%である。

Aグループについてみると、A及びA1類の土壌が極めて多く全体の89%を占めている。これに対してより深くなるA'・A1'類は極めて少量になっていることがわかる。

Bグループでは、B・B1類は少なく、B'・B1'類が多くなり93.8%を占めている。Aグループではピットを持つものが半数近くあったのであるが、Bグループにおいては10.4%しか存在しない。

Cグループはいわゆる袋状土壌であり、それほど多くは検出されなかった。全体の8.4%ほどであり、他のグループとはその性格に違いのあることがうかがえる。

DグループはAグループに似かよっているが、平面形状だけが異なるものであり、大局的にはAグループと同類とみてもよいと考える。全体の5.5%とこれも少数である。

A～Dグループのどれにも属さない土壌をEグループとしてまとめたわけである。平面形状が不定形を呈する土壌で、検出率は少なく全体の3.8%程度である。

ところでAグループとBグループを比較してみると興味ある事実が出てくる。Aグループは塘底までの深さが浅く、かつピットを持つものが極めて多いのに対し、Bグループはまったく反対に深さ40～50cm以上でしかもピットを持たないものが大部分を占めているのである。これだけの相異がみられるからには両グループの用途にもはっきりした違いがあったものと思われる。しかし現状では明確な使用目的・方法等は不明である。ただ両者とも「貯蔵穴として利用されたもの」と仮定することが許されるならば、次のようなことが言えるのではないだろうか。すなわちAグループの土壌群は、簡単な上屋を設け、毎Fの食料あるいはそのまま保管しても悪くならない食物などの倉庫として使用され、Bグループの土壌群は何らかの手段を講じないで保管できない物、もしくは木の穴などを長期間保存する票などに屋根は特に設けず土などをかぶせ、その上に目印でも置いておくというような使われ方が考えられる。ただBグループに属していても、調査途中で出水のため塘底の確認ができなかった土壌が数基あり、これなどは明らかに井戸としての利用を考えてもよいと思われる。

今回の調査で内部に貝の堆積が認められた土壌は237基中72基であった。これは全体の30.4%に当たっている。この割合も各グループ間で比較すると興味あるデータが浮かび上がってくる。A・B・D・Eの各グループは11.1%～38.5%程度であるが、Cグループだけ70.0%と極端に高い比率を示すのである。この数字から判断すると、Cグループいわゆる袋状土壌が他の土壌よりも貝捨て場として利用される機会の多かったことが考えられよう。しかし当然ながらこの事実が袋状土壌本来の使用目的を意味しているのではないことは明らかである。Cグループに属する残り30%は貝の堆積は認められないし、また認められた土壌にしても、塘底から堆積している例

は少なく、覆土途中あるいは上面での堆積例がかなり認められるからである。

それにしては各種土壌の中で、頁をはじめとするゴミ捨て場として最も多く利用されたのがCグループの袋状土壌であったことは確かなことである。この土壌は比較的硬度の大きいものも多く、開口部が崩れても他の土壌よりは長期間埋まらずに固んでいたことが予想される。そしてこの凹みを当時の人々が再利用したのかもしれない。

最後になったが、B類の土壌の中で恐らく井戸であろうとみられる数基の土壌は、遺跡の中でもB1区のc・d・e列付近に集中して検出されている。第246号土壌は深さ1.4mまで確認でき、その後出水のため調査不可能となってしまったが、ボーリングしてみるとさらに1mは楽に掘ることができる状態であり、尤もは少なくとも2m以上の深さがあったようである。この種の土壌の時期がいつのものかは不明であるが、出土遺物はすべて縄文土器片であった。

結局多くの土壌の中でその利用目的あるいは性格等の推定できるのは上述の井戸とみられる土壌ぐらいであった。大多数の土壌については不明としか言えない。土壌の性格については従来から多くの説が言われてきた。最も一般的な考えは貯蔵穴説であろう。ただ袋状土壌については最近になって、土器の原料である粘土を収めるための採掘場ではなかったかという考えも出てきている。極めて興味のある考えであるが、冬木A貝塚で調査された袋状土壌に関してはこの考えは当てはまりそうにもない。土壌内部からは粘土の検出は全然なく、塘底及び壁ともにローム、あるいはハードロームから成り、粘土層らしきものは一切認められなかったからである。覆土の状態をみると、大部分が自然堆積であることを示しており、若干壁部の崩れがわかるぐらいで、採掘場らしき痕跡は検出されなかった。他の土壌も同じような傾向をみせており、本遺跡で調査された土壌は貯蔵穴として利用された可能性が強かったのではないだろうか。一部の土壌で塘底直上に純貝層が存在していた例があり、これなどは最初から貝捨て場として掘られたものであるかもしれない。しかし覆土上部には貝の混入はなく、まるで貝殻を捨てた後土をかぶせてしまったかの如き様相を呈しており、必ずしも貝捨て場として掘られたものであったかは疑問である。貝捨て場としての使われ方は、あくまでも土壌本文の使用目的を失った後の再利用という形が多かったと考えられる。

4. 溝について

本遺跡で検出された溝は2条である。第2号溝は短かく不完全なものであるが、第1号溝は遺跡東側を南北に徒断する形で伸びている。

断面形状をみると、逆台形を呈しており、底部までの深さは70cm前後である。底部のレベルは両端が狭く、中央部が比較的低くなっている。出土遺物はすべて縄文土器片であり、完形品は1点も出土していない。なお詳細は溝の項を参照されたい。

きて本址の性格及び用途であるが確実な結果はでていない。恐らく排水溝であろうと思われるが、関連するとみられる遺構も確認されておらず、現段階では不明とせざるを得ない。

時期については、上限は推定できると考える。すなわち本址は加曾利B期の住居址及び土壌を切って掘られていることから、少なくとも加曾利B期以前までさかのぼることはあり得ないことである。貝層では溝中にも貝の産痕があったが、これは溝の閉みに直接堆積したわけではなく両側の貝層から流れ込んだものと思われ、純貝層はなく、混貝層・混貝土層である。また土器片の断面も摩滅しているものが多くみられる。さらに覆土の様子などから判断しても、弥生時代以降に掘られたのではないかと想像されるのであるが、下限の時期を決定する資料がないため断定しきれないところである。

5. 出土遺物について

冬穴A貝塚の出土遺物はその種類・量とも極めて豊富であった。土器類、石器類、自然遺物類、と三大引される。土器類については型式分類をするまでに到っておらず、ここではその概略を記すにとどめ今後の研究の参考としたい。

(土器類)

本遺跡からは縄文前期・中期・後期の各時期に編年される土器が出土した。前期では浮島式、竊穴式に属するものであり、数は少ない。文様としては貝殻製縄文、波状貝殻文、半截竹管文、爪形文などである。少数ながらも目立つのは集合沈線にボタン状貼付文を施された磨光C式の土器片である。中期に編年される土器群としては、五領方台式、加曾利E式に属するもののみられる。文様は山形の連続する陰刻文が五領方台式にみられ、加曾利E式では磨光縄文が施されている。後期に編年される土器群としては、称名寺式、堀之内I・II式、加曾利B1・2式に属するものである。本遺跡ではこの時期の遺物が最も多く出土しており、全体の90%以上を占めている。称名寺式はそのほとんどが深鉢の胴部片と思われ、沈線によって渦巻文あるいは曲線文が描かれ、沈線間には縄文や棒状工具による米粒状の刺突文が充填される。

本遺跡を代表するのは堀之内式である。器形としては深鉢形が多く、胴部に張りや有する大型深鉢、胴部から口縁部にかけて外反もしくは直線的に立ち上がる小型深鉢があり、他に鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器等がみられ、少数ではあるが変形土器、ミニチュア土器なども出土している。文様は沈線文系と磨光縄文系とに大別できる。沈線文系では口縁部が無文のものが多く、胴部以下に曲線文、直線文、同心円文、蛇行沈線文が施文される。地文はそのほとんどが縄文である。磨光縄文系では沈線によって三角形や四角形などの幾何学的な文様を区画し、なかに縄文を充填するものが多い。この土器群には8の字状の貼付文や平行沈線文、さらに短い隙線を口縁に平行あるいは縦位に付し、その上に刺突を加える手法も多く使われている。前者は堀之内I式に、

後者は壺之内Ⅱ式に編年されるものと考えらる。

加曾利B式になると器形的には鉢形および浅鉢形土器が多くなり、小型深鉢や大型深鉢、そして注工土器等もみられる。陶製品は、磨消縄文の手法が多く、器壁は付念にヘラ磨きされ、黒色を呈するものが目立つ。大塚の深鉢では粗製土器が多くなり、いわゆる組線文系の土器である。文様はほとんど散されず、口縁部の組線以外では荒い縄文の上に条線がみられるぐらいである。

土器以外の遺物としては土偶や耳栓が出土している。土偶は10体ほど発見され、壺之内Ⅱ～加曾利B期に位置づけられるものが多いと思われる。このなかでも第2号溝とC2a地区から出土したものが接合できた点は興味深い(図170-3)。この土偶は頭部に輿状の突起を有し、顔は鼻が隆起し、まゆは沈線、目は竹管刺突で表現され、口の面下から腹部にかけて1条の沈線が垂下する。胸部には豊かな乳房が付けられ、背後は左肩より腰部まで2条の沈線がカーブを描いて施されている。第2号溝とC2a地区とは約30m離れている。このように遠く離れた2地点から出土したものが接合できるという例は土偶などではさまあることだと言われているが、今回の例も土偶の性格などを考える上でひとつの資料となるであろう。耳栓は直径1.7cmの小型のもので、上面に2本の沈線が施文されている。

(七) 器類

△遺跡で最も多く出土したのは凹石、磨石である。これらは比較的小型のものが多く、石質は火山岩系のものである。その使用痕をみると、両者の機能が明確に区別できるのは少なく、磨石であっても凹みを有するものも多く見られ、使用目的によって1個の石を使い分けていた場合が多々あったと考えられる。石斧は磨製と打製の2種があり、打製石斧が極めて多い。磨製石斧のなかには長さ数cm程のミニチュア的なものも出土している。刃先に使用痕のみられるものが多い。石質は大部分が安山岩であり、硬砂岩・緑泥片岩が少数まじっている。石鏃は有茎と無茎とに大別される。さらに有茎石鏃については、決込みを有するものと有しないものに分類できる。数的には決込みを有する無茎石鏃が大多数を占めている。第177区-20, 22, 23などは比較的少数のタイプである。石質は黒曜石、チャート、硬質砂岩などである。石皿は完形品はなく、すべて破片である。これは形として残る限度まで使用されたためと考えられ、出土した破片のなかには厚さ数mmのものも認められた。火山岩系の岩石が利用されている。なお石皿にも凹みを有するものが多く凹石の機能をも合わせ持っていたことが考えられる。以上の他に石棒、石錘、装身具、淨子等が出土している。第172区-5は先端部に沈線状の彫り込みがみられ、明らかに刃根を表現しているものであろう。石錘は4点出土している。円板状が3点(図178-12, 13, 14)、棒状のもの1点(図178-15)である。装身具は2点(図178-9, 10)出土した。9は短長い刀子状を呈し、両方向からの磨削り手法がみられる。10の石質は翡翠である。淨子はすべて燧石が利用されていた。形状の確認できるものはほとんどなく、小破片である。一端に子を有す

るものが確認された。

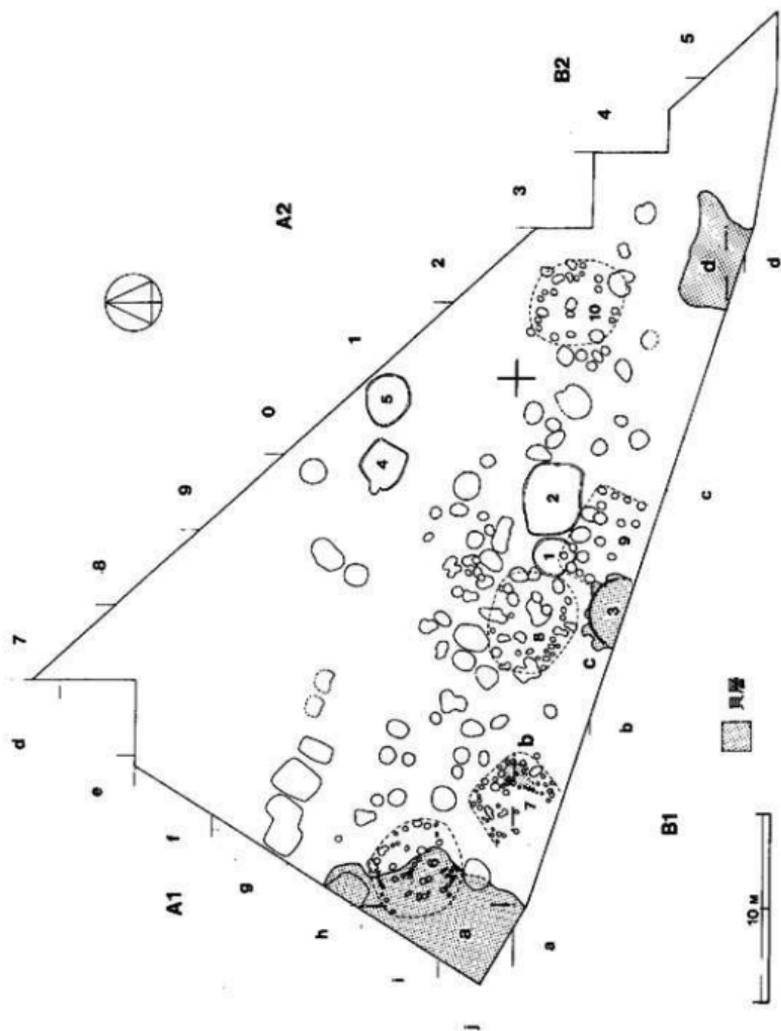
(その他の遺物)

本遺跡では18体の人骨、多数の自然遺物類が発見されている。人骨と獣骨・魚骨の一部については東京大学理学部人類学教室に鑑定を依頼していることもあり、詳細については別項を参照されたい。

只輪は破片も含めると数10点検出されたが、写63-貝輪はC3e₂グリッドから小型の深鉢に入れられた状態のまま一括して発見されたものである(写24-6)。他にいわゆる浮袋の口といわれるものや、刺突具、垂飾、針などが出土している。骨鏃は3点だけ確認された(写64-12, 13, 写65-13)。獣骨や鹿角のなかには切新痕や擦痕の認められるものがある(写66)。これらは解体する時についた傷や、製品化する時の加工痕であろうと推察できる。

注1 「埋葬ゾーン」については、「加曾利南貝塚」(杉原荘介編 中央公論美術出版)において後藤和民氏が同様のことを指摘している。

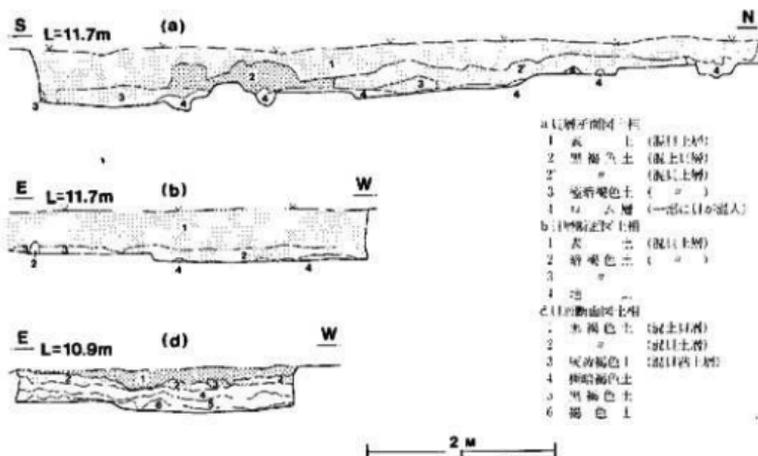
第4章 冬木B貝塚



第140図 冬木B貝塚グリッド及び遺構配置図

第1節 自然遺物

1. 貝 層



第141図 冬木B貝塚貝層断面図

冬木B貝塚における貝層の堆積は、第140・141図に示すように4ヶ所に確認された。それぞれの堆積区とも小規模であり、地点貝塚状である。説明の都合上、西側から順にa～dの番号を付した。

a 堆積区は、本貝塚の中心であるエリア西側の住宅地から東へ広がる大きな堆積区の末端部にあたるものと思われる。耕作等により混貝土層の上面が攪乱されているため、堆積の厚さは不明であるが、残存部で最大30cmを要する。周辺は貝殻が少なく、混貝土層となっている。20cm内外の堆積である。貝層下からは、第1号・6号土城及び第6号住居址が検出されている。

b 堆積区の貝層は、暗褐色土中にわずかに貝殻を混ざる混貝土層である。堆積の厚さは7～15cmを計り、ピット状に落ち込む部分があることが認められる。本来はもっと厚い堆積であったものが、耕作等により攪乱を受けたものであろう。貝層下からは第7号住居址のピット群が検出されており、同住居址の廃棄後に投棄された貝殻によって形成されたものと見られる。

c 堆積区は、第3号住居址が廃棄された後に投棄された貝殻により形成されたものである。断面図(第3号住居址の項)の第1層からは縄文時代晩期中葉に属する土器片が出土し、第2層からは同前葉の土器片が出土している。

d 堆積区では、遺構を確認することはできなかった。あるいは自然の凹池に投棄された貝殻に

よって形成されたものかも知れない。高岡には投棄された貝殻が小ブロック状に散在している。貝層は 20~25 cm の厚さを有するが、貝殻の密度は比較的小さい。

以上の 4 堆積区の貝の種類はほとんど同じである。シジミが圧倒的に多く、極く少量のタニシ・カワニナを混ざる。A 貝塚と同様に、ほとんど単一種から成っていると見える。ハマグリ 2 点・オキシジミ 2 点(同 1 個体)を検出したが、本貝塚では珍らしい。(写 67)

2. 獣骨・魚骨

本貝塚において出土した魚骨・獣骨は、写 68・69 に示した通りである。種類は、A 貝塚のそれと類似しているが、量的に極めて少量である。保存状態も冬木 A 貝塚と比較すると劣悪であった。

第 2 節 遺構と遺物

1. 住居址

第 1 号住居址 (図 142, 152, 写 28-1)

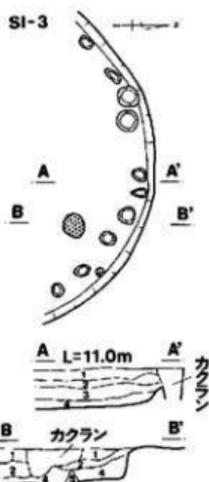
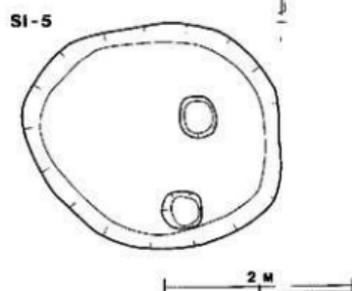
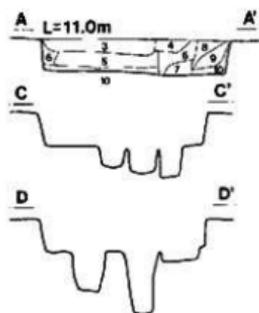
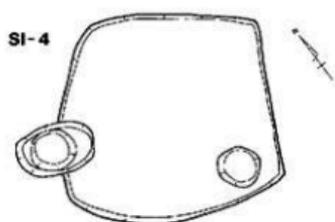
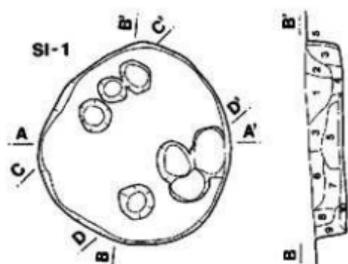
本址は B1a₈ にあり、第 9 号住居址と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形状で、主軸は N-42° W を示し、長軸は 2.1 m、短軸は 2.05 m である。壁高は約 0.35 m で、80° 内外の傾斜をもって立ち上がっている。床面は平坦で軟かい。ピットは 6 ヶ所あり、その大きさは径 35~50 cm・深さ 20~60 cm である。炉址は検出されなかった。出土遺物は、縄文晩期に属する多量の土器片、石皿片、磨石片、耳筒片等である。

第 2 号住居址 (図 143, 153, 写 28-2)

本址は第 1 号住居址の東側に位置し、B1a₈・a₉ にまたがっている。平面形は隅丸長方形状で、主軸は N-88° W を示し、長軸は 3.59 m、短軸は 3.0 m である。壁高は約 0.25 m で壁は約 70° 傾斜で立ち上がっている。床面は平坦で軟かい。ピットは 17 ヶ所あり、東側と西側の壁に沿った状態で径 40 cm 内外のピットが並び北側の壁に沿った状態で径 70 cm 内外のピットが並んでいる。深さは 30~60 cm である。遺物は、縄文後期に属する土器片及び同晩期に属する土器片が多量に出土した。住居址内に土壌が検出されたが、本住居址に伴うものかどうか不明である。

第 3 号住居址 (図 142, 154)

本址は B1b₇・b₈ にまたがっており、第 1 号住居址の南西約 2m に位置している。南側半分はエリア外である。平面形はほぼ円形状を呈するものと思われ、径 3m 以上に及ぶものと推測される。壁高は 0.35 m 内外で、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁に沿った状態で 11 ヶ所のピットが検出された。大きさは径 17~25 cm であるが、1 ヶ所だけは径 9 cm と小さかった。床面から焼土塊が検出され、炉址と思われるが判断としない。遺物は縄文後期~晩期の土器片が多数出土し



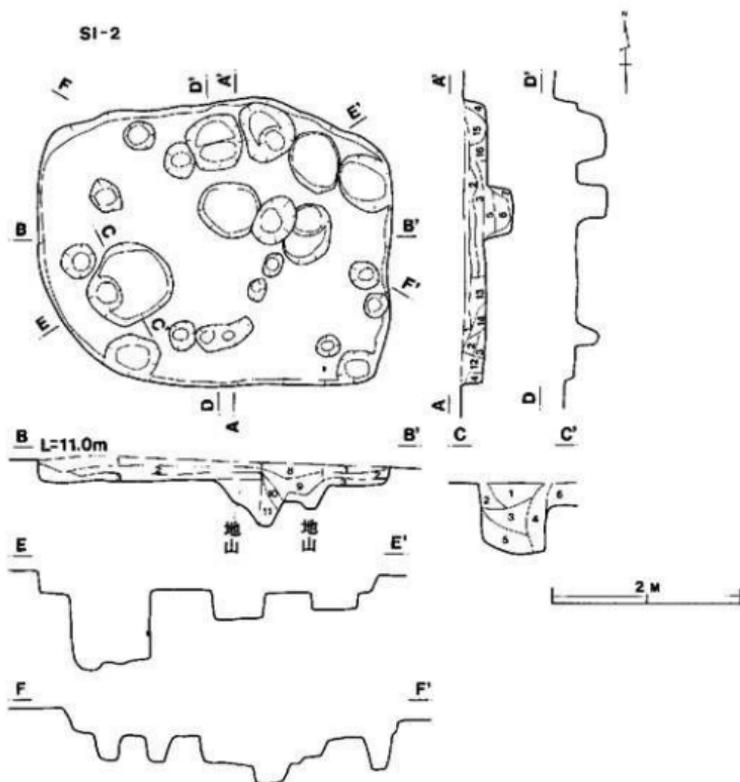
第1号住居址土層解説

- 1 黄褐色土 (炭化物・焼土粒・Y P・粉土を含む)
- 2 暗褐色土 (炭化物・焼土粒・Y Pを含む)
- 3 黄褐色土 (Y P・ロームブロック・炭化物・焼土粒を含む)
- 4 粘着褐色土 (Y P・ロームブロック・炭化物・焼土粒を含む)
- 5 褐色土 (土よりなし)
- 6 黄褐色土 (Y P・炭化物・焼土粒を含む)
- 7 黄褐色土 (Y P・ローム粉土を含む)
- 8 黄褐色土 (Y P・ローム粉土・焼土粒を含む)
- 9 黄褐色土 (ロームブロックを含む)
- 10 黄褐色土 (ロームブロックを含む)

第3号住居址土層解説

- 1 粘着褐色土 (団土状)
- 2 黄褐色土 (団土状)
- 3 暗褐色土 ()
- 4 黄褐色土 ()
- 5 暗褐色土 (焼土)

第142図 第1・3～5号住居址



第2号住居上層解説

- 1 褐色土 (土壌・炭化物を含む)
 2 # (ロームブロックを含む)
 3 # (ロームブロックを多数に含む)
 4 # (ロームブロックを少量含む)
 5 暗褐色土 (ローム粒・炭土粒を含む)
 6 # (ローム粒を含む)
 7 # (ロームブロックを含む)
 8 # (炭化物・土粒・ローム粒を含む)
 9 黒褐色土 (ローム粒・炭化物を含む)
 10 暗褐色土 (ロームブロック・炭化物を含む)
 11 褐色土 (ロームブロックを含む)
 12 暗褐色土 (ローム粒・ブロックを含む)
 13 褐色土 (ローム粒・炭土粒を含む)

- 11 暗褐色土 (ローム粒を含む)
 15 # (ローム粒・土粒・炭化物を含む)
 16 黒褐色土 (ローム粒・炭土粒・炭化物を含む)

第2号住居内土層解説

- 1 暗褐色土 (Y・P・ローム粒・炭化物・炭土粒を含む、硬りあり)
 2 # (Y・P・ローム粒・炭化物・炭土粒を含む)
 3 # (Y・P・ローム粒・炭化物・炭土粒を含む、次第あり)
 4 # (Y・P・ローム粒・炭化物・炭土粒を含む)
 5 # (Y・P・ローム粒・炭化物・炭土粒を含む、粘りあり)
 6 褐色土 (ローム)

第143図 第2号住居址

た。住居社が廃棄された後、貝殻が投棄されている。

第4号住居址 (図142)

本址は $A1i_1 \cdot i_2$ にまたがっており、一部が h_2 にかかっている。平面形は隅丸方形状で、主軸は $N-59-W$ を示し、長軸 2.33 m・短軸 2.25 m である。壁高は 0.45 m で壁は垂面に近い立ち上がりを見せているが、西側に傾斜を受けている。床は軟かい。ピットは南東隅に1ヶ所のみを確認した。大きさは径 40 cm・深さ 42 cm である。

第5号住居址 (図142)

本址は $A1i_1 \cdot A2i_1$ にまたがっており、第4号住居社の東側 0.7 m に位置している。平面形は楕円形状で、主軸は $N-75-W$ を示し、長径 2.85 m・短径 2.43 m である。壁高は 0.49 m で約 70° の傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦で軟かい。ピットは2ヶ所あり径 45 cm 深さ 20~30 cm である。

第6号住居址 (区143)

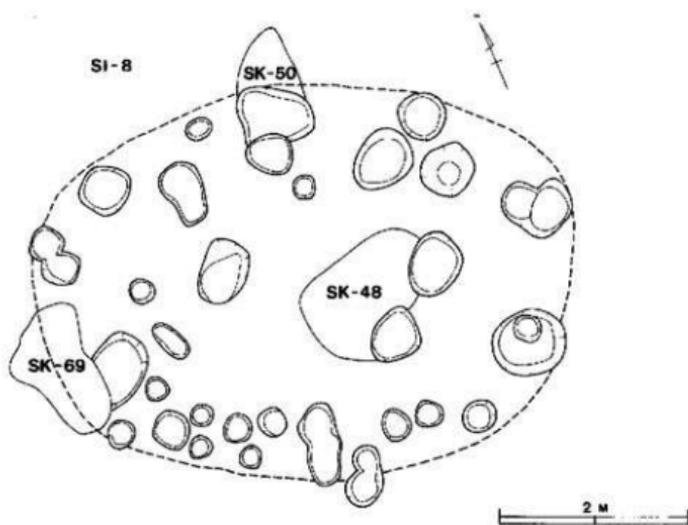
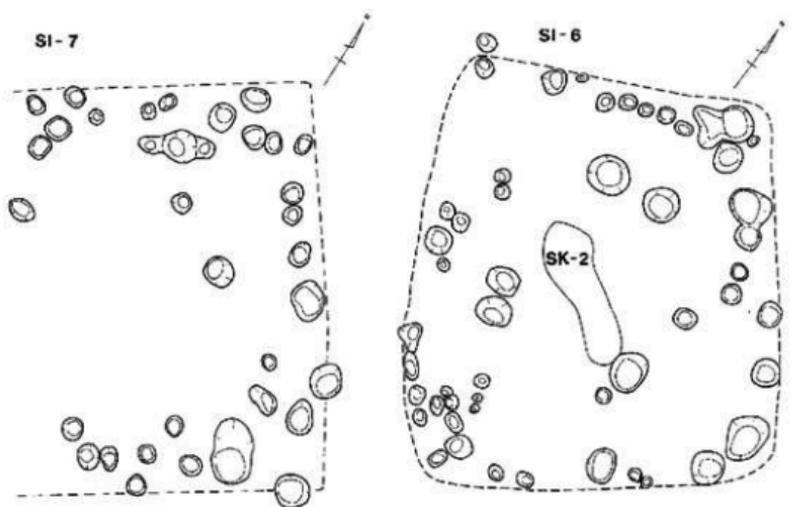
本址は $A1i_1 \cdot i_2 \cdot i_3 \cdot j_1 \cdot j_2$ にまたがったピット群の検出によって確認されたもので、貝層下にある。調査エリアの西側に位置し、中央部付近で第2号土塚と重複するが、新旧関係は不明である。壁・周溝は確認できなかった。ピットの配列状態から、平面形は長方形状を呈し、主軸は $N-33-W$ ・長軸約 4.55 m・短軸約 3.9 m あったと思われる。ピット群は壁柱穴群と思われるグループと主柱穴群と思われるグループに分けられる。前者は径 10~40 cm、深さ 15~60 cm を掘り、後者は径 25~40 cm、深さ 15~80 cm を掘る。住居址廃棄後、貝殻の投棄が行なわれたものと思われる。

第7号住居址 (図144)

本址は $A1j_1 \cdot j_2 \cdot B1a_1 \cdot a_2$ にまたがるピット群の検出によって確認されたものである。第6号住居址の西東 2.4 m に位置し、西西部はエリア外である。壁・周溝等の確認はできなかった。ピットの配列状態から、平面形は方形状を呈し、主軸は $N-34-W$ 、長軸約 4.3 m・短軸 3 m 以上と思われる。ピット群は径 20~40 cm・深さ 15~20 cm で、壁と壁または壁から若干離れた位置に並んでいたものと思われる。

第8号住居址 (図144)

本址は $A1j_1 \cdot j_2 \cdot B1a_1 \cdot a_2$ にまたがるピット群の検出によって確認されたもので、第1号住居址の西側に隣接している。壁・周溝の確認はできなかった。中央で第48号土塚、北側で第50号土塚、西側で第69号土塚とそれぞれ重複するが、新旧関係は不明である。ピットの配列状態から、平面形は扇形形状を呈し、主軸は $N-71-W$ 、長径 5.7 m 内外・短径 4.2 m 内外を測るものと思われる。ピットは両側に径約 30 cm・深さ 30~110 cm を測るものが並び、他の側には径 50~70 cm、深さ 40~90 cm を測るものがある。



第144図 第6号・7号・8号住居址

第9号住居址 (図145)

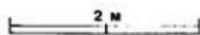
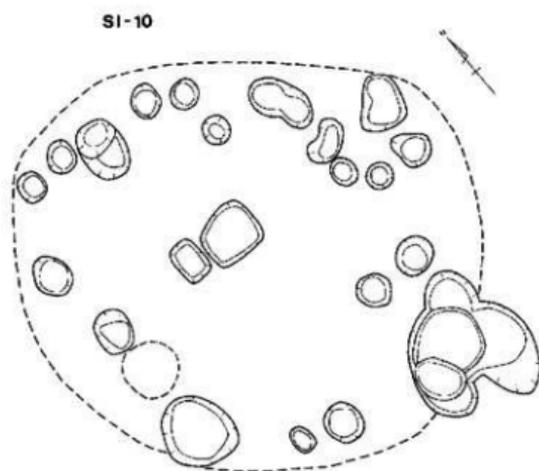
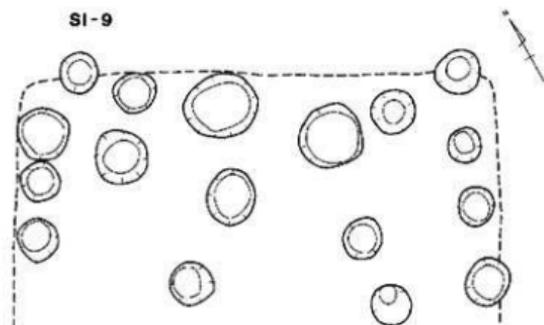
本址は $B1a_1 \cdot a_2 \cdot b_1 \cdot b_2$ にまたがるピット群の検出によって確認されたもので北西隅が第1号住居址、北東部が第63号土壇・第64号土壇とそれぞれ重複しているが、新旧関係は不明である。塼・溝等の確認はできなかった。ピットの配列状態から、平面状は方形を呈し、長軸約 5.2m・短軸 2.7m 以上と思われる。ピットは、中央部付近に径 40~55 cm・深さ 20~60 cm を測る一群があり、壁に沿って径 40~50 cm・深さ 20~60 cm を測る一群があったと思われる。ただし、北東部付近は重複のため判然としていない。

第10号住居址 (図145)

本址は $H2a_1 \cdot a_2 \cdot b_1 \cdot b_2$ にまたがるピット群の検出によって確認されたもので、北東隅で第59号土壇と重複している。壁・溝等は確認できなかった。ピットの配列状態から、平面形は楕円形状を呈し、主軸は $N-30^{\circ}-W$ を指し、長径約 5.2m・短径約 4.4m を測るものと思われる。ピットは南西隅で径 90 cm・深さ 36 cm を測るものがあり、他は径 30~50 cm・深さ 25~60 cm である。それぞれ、壁に沿って一周したものと思われる。

表86 住居址一覧表

住居址No	地 区	主軸方向	長径 × 短径 (m)	壁高 (m)	材 質	備 考
1	$B1a_1$	$N-42^{\circ}-W$	2.1 × 2.05	0.35	なし	隅丸方形 土器片・石器、瓦能
2	$B1a_1, a_2$	$N-88^{\circ}-W$	3.59 × 3.0 (3)	0.25	なし	隅丸長方形 土器片
3	$B1b_1, b_2$			0.35	地床材 (?)	方 形 (?) 土器片
4	$A1i_1, i_2$	$N-59^{\circ}-W$	2.33 × 2.25	0.45	なし	隅丸方形
5	$A1j_1$ $A1j_2$	$N-75^{\circ}-W$	2.85 × 2.43	0.49	なし	楕円形
6	$A1i_1, i_2$ i_1, j_2	$N-33^{\circ}-W$	4.55 × 3.9		なし	長方形 ピットのみ
7	$A1j_1, j_2$ $B1a_1, a_2$	$N-34^{\circ}-W$	4.3 × (3)		なし	方 形 (?) ピットのみ
8	$A1j_1, j_2$ $B1a_1, a_2$	$N-71^{\circ}-W$	5.7 × 4.2		なし	楕円形 ピットのみ
9	$B1$ b_1, b_2		5.2 × (2.7)		なし	方 形 (?) ピットのみ
10	$B2$ b_1, b_2	$N-30^{\circ}-W$	5.2 × 4.4		なし	楕円形 ピットのみ



第145図 第9号・10号住居址

2. 土 壤

本貝塚における土壌は、以下に一覧表として示したとおりである。

表87 (土壌一覧表 (1))

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径側×短径側m	深さm	備 考	実測区・写真
01	A _{1j}	不整楕円形	N-63°-E	1.81 × 1.42	0.29	ビット2	図146
02	A _{1i}	不整長楕円形	N-60°-W	1.55 × 0.9	0.17	ビット4、縄文土器片(少)	図146
03	A ₁ i ₁ j ₁	楕円形	N-61°-E	1.47 × 1.31	0.48	床はローム、平坦、縄文土器片(少)	図146 (写29 1)
04	A _{1i}	楕円形	N-16°-W	0.99 × 0.88	0.63	ビット2	図146 (写29 2)
05	A _{1i}	不整円形	N-0°-S	0.66 × 0.65	0.38	スリパチ状、縄文土器片(数点)	図146 (写29 3)
06	A ₁ h ₁ i ₁	長方形	N 28° E	1.87 × 1.15以上	0.9	床はローム、平坦、縄文土器片(少)	図146
07	A _{1i}	不整楕円形	N-11° E	1.23 × 0.9	0.58	室割が深い、縄文土器片(少)	図146 (写29 4)
08	A ₁ h ₁ i ₁	不整方形	N-90°-E	0.87 × 0.7	0.25	ビットに切られる、縄文土器片(数点)	図146
09	A _{1i}	不整楕円形	N 65° E	0.73 × 0.61	0.57	床はローム、平坦	図146
10	A _{1j}	不整円形	N-59°-E	0.94 × 0.91	0.59	縄文土器片(数点)	図146
11	A _{1j}	楕円形	N-81°-W	0.76 × 0.55	0.58	縄文土器片(数点)	図147 (写29-5)
12	A _{1j}	不整双円形	N-6°-E	1.36 × 1.24		縄文土器片(多)	図147

表88 (土壌一覽表 (2))

土層No	地区	断面形状	長軸方向	長径m × 短径m		深さm	備 考	実測図・写真
				長径	短径			
13	A _g h ₂	長方形	N-27-E	1.85 ×	1.24		断面は凸凹、後世に掘られたもの	図147
14	A ₁ h ₃	長方形	N-32'-E	2.16 ×	1.72		後世に掘られたもの	図147
15	A ₁ h ₂	楕円形	N-29'-E	1.0 ×	0.67	0.3	縄文土器片(数点)	図147 (写29 6)
16	A ₁ h ₁	楕円形	N-11'-E	0.38 ×	0.31			図147
17	A ₁ i ₁	楕円形	N-12'-E	1.31 ×	0.87	0.41		図147
18	A ₁ h ₁ e	円形		0.72 ×	0.72	0.58		図147
19	A ₁ i ₁	楕円形	N-6'-W	0.68 ×	0.63			図147
20	B ₁ a ₁ a ₀	不整楕円形	N-30'-E	1.32 ×	0.88		ビット1, 縄文土器片(少)	図147
21	B ₁ a ₀	楕円形	N-86'-W	1.2 ×	1.02	0.94	中央部スリパチ状の落ち込み, 縄文土器片(多)	図148
22	B ₁ a ₀	不整楕円形	N-46'-W	1.19 ×	0.79	0.41	断面はスリパチ状, 縄文土器片(少)	図148
23	A ₁ j ₁	楕円形	N-4'-W	0.79 ×	0.75		ビット1, 縄文土器片(多)	図148
24	A ₁ i ₁	円形		1.6 ×	1.6	0.5	断面はスリパチ状, ビット1, 縄文土器片(多), 礫石(1)	図148

表89 (土壌一覽表 (3))

土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径m× 短径m	深さm	備 考	実測図・写真
25	A ₁ ₁	楕円形	N-52'-W	0.69 × 0.62	0.62	底底はスリパチ状、縄文土器片(多)、破石(1)	図148
26	A ₁ ₁	不整楕円形	N-16'-W	0.92 × 0.75	0.15		図148
27	A ₁ ₁	不整楕円形	N-14'-W	1.06 × 0.93	0.26	2ヶ所でピットに切りられる、縄文土器片(多)	図148
28	A ₁ ₁	円形		0.47 × 0.47			図148
29	A ₁ ₁	楕円形	N-17'-W	0.88 × 0.76		ピットと重複、縄文土器片(多)	図148
30	A ₁ ₁	楕円形	N-82'-E	約0.5 × 0.43		ピットと重複、縄文土器片(多)	図148
31	A ₁ ₁	楕円形	N 0'-S	0.55 × 0.53			図148
32	A ₁ ₁	不整形		0.44 × 0.44		縄文土器片(多)	図148
33	A ₁ ₁	楕円形	N-56'-W	0.59 × 0.43		縄文土器片(多)	図148
34	A ₁ ₁	不整楕円形	N-40'-W	1.07 × 0.66		縄文土器片(数点)	図148
35	A ₁ ₁	双楕円形	N-35'-E	0.86 × 0.4		ピット2ヶ所の切り合いか? 縄文土器片(数点)	図148
36	A ₁ ₁	不整楕円形	N-13'-E	0.8 × 0.64		縄文土器片(数点)	図148

表90 (土壌一覽表 (4))

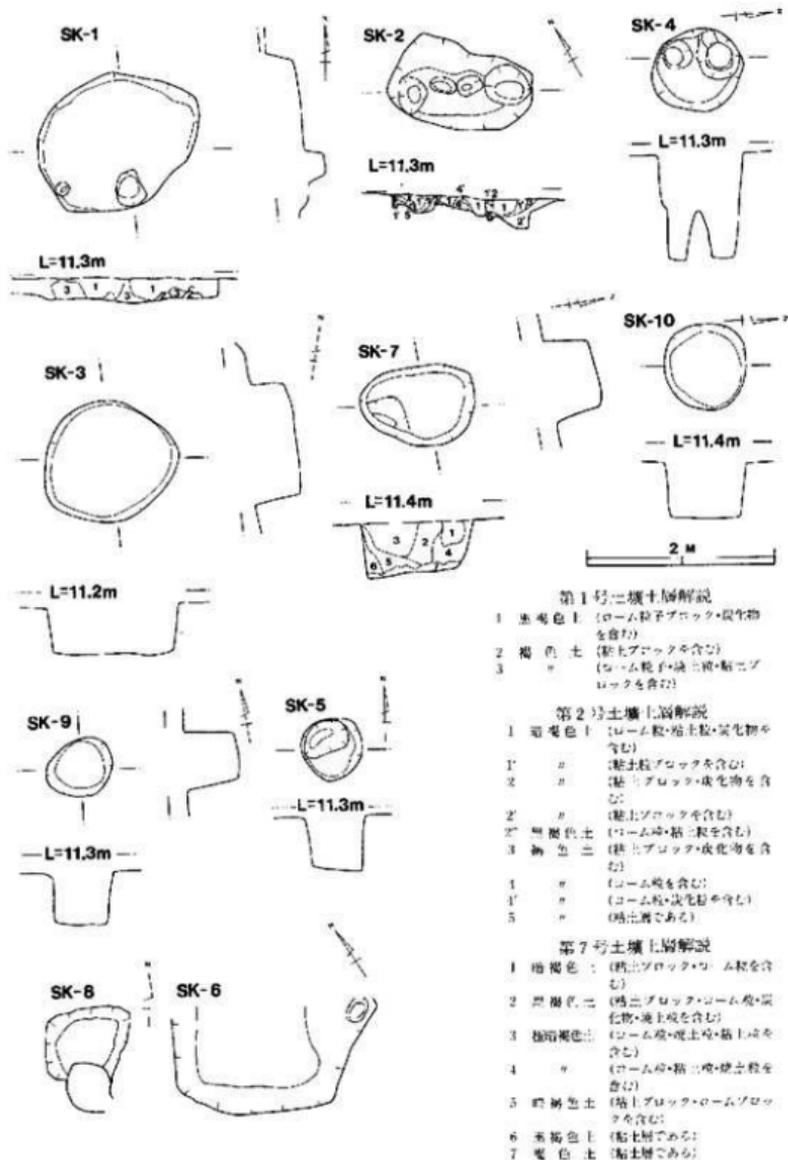
土壌No	地区	平面形状	長軸方向	長径m× 短径m	深さm	備 考	実測図・写真
37	A _{1j}	円形		0.34 × 0.34			図148
38	A _{1j}	不整楕円形	N-22°-W	0.55 × 0.49			図149
39	B _{1a}	楕円形	N-44°-E	0.87 × 0.68		縄文土器片(少)	図149
40	A _{1j}	不整円形		0.57 × 0.57		縄文土器片(少)	図149
41	B _{1a}	不整楕円形	N-48°-E	2.45 × 1.6		ピット4	図149
42	B _{1a}	円形		0.72 × 0.72		縄文土器片(数点)	図149
43	A _{1j}	不整長方形	N-75°-W	1.89 × 0.83		縄文土器片(多)	図149
44	B _{2a}	楕円形	N-79°-E	1.01 × 0.9	0.72	溝底はスリパチ状、縄文土器片(1点)	図149
45	B _{2b}	不整楕円形	N-74°-E	0.89 × 0.55		ピット1、縄文土器片(少)、磨石片1	図149
46	B _{2b}	不明		NS0.39 × EW0.97		ピット1、縄文土器片(数点)	図149
47	B _{2b}	不整楕円形	N-79°-E	0.93 × 0.71		ピット1、縄文土器片(少)	図149
48	B _{2a}	不整楕円形	N-66°-E	1.53 × 0.84	0.43	溝底はスリパチ状、縄文土器片(少)	図149

表91 (土壌一覽表 (5))

土層No.	地 名	平面形状	長相方向	長さ幅× 幅深m	深3m	備 考	実測図・写真
49	A ₁	楕円形	N-19-E	1.93 × 1.39	0.58	縄文土器片(多)	図149
50	A ₁	不整楕円形	N-19-E	0.65以上 × 0.7		縄文土器2) 縄文土器片(少)	図149
51	A ₁ , b ₁	不整方形	N-56-E	1.36 × 1.11		縄文土器片(多)	図149
52	A ₁	隅丸方形	N-26-E	1.15 × 1.07		縄文土器片(少) 独見石(1)	図150
53	A ₁ , b ₁ , b ₂	不 明		EW1.25 × NS0.4		一部エリア外、縄文土器片 (数点)	図150
54	A ₁ , b ₁	不 明		EW1.0 × 0.25		一部エリア外、縄文土器片 (数点)	図150
55	A ₁ ^{h₁} _{i₁}	円 形	N-3-E	1.28 × 1.22		縄文土器片(少)	図150
56	A ₁ , h ₁	長楕円形	N-43-E	1.96 × 1.29		ピット1、縄文土器片(少)	図150
57	A ₁ , h ₁	不整楕円形		1.34 × 1.34		ピット1、縄文土器片(少)	図150
58	B ₁ , b ₁ B ₂ , b ₂	不整楕円形	N-67 E	1.21 × 0.86			図149
59	B ₂ , a ₂	不整楕円形	N-9 E	0.77 × 0.51		ピット1、縄文土器片(少)	図149
60	B ₁ , b ₁ , b ₂	隅丸方形	N-42-W	0.83 × 0.81		縄文土器片(少)	図150

表92 (土壌一覽表 (6))

土壌No	地区	平面形状	長短方向	長径m × 短径m	深さm	備 考	大郡小写点
61	B ₁ b ₁	長楕円形	N-0°-S	1.04 × 0.58		縄文土器片(少)	図150
62	B ₁ b ₁	不整楕円形	N-52°-W	1.35 × 0.99		ピット1, 縄文土器片(多)	図150
63	B ₁ a ₁ b ₁	楕円形	N-21°-E	0.75以上 × 0.8		縄文土器片(少), 貝類1	図150
64	B ₁ a ₁ a ₁	不 明		EW0.92 × 0.92		一部エリア外, 縄文土器片(少)	図150
65	A ₁ j ₁	不整楕円形	N-47°-E	1.32 × 0.94		縄文土器片(多)	図150
66	A ₁ i ₁	不整楕円形	N-10°-W	1.04 × 0.78		縄文土器片(数点)	図150
67	A ₁ i ₁ i ₁	楕円形	N-69°-E	0.96 × 0.92		縄文土器片(数点)	図150
68	A ₁ i ₁ j ₁	双 円 形	N-75°-W	0.98 × 0.59		ピット2ヶの切り合いか, 縄文土器片(数点)	図150
69	B ₁ a ₁ a ₁	長楕円形	N-23°-W	1.23 × 0.6		SI-8 ピットに切られる, 縄文土器片(少)	図150
70	A ₁ h ₁ h ₁	長 方 形	N-30°-E	1.48 × 0.78		後世に掘られたもの	図150
71	A ₁ K ₁ R ₁ h ₁ h ₁	長 方 形	N-29°-E	1.9 × 1.7		後世に掘られたもの	図147



第1号土壌層解説

- 1 赤褐色土 (ローム粒子ブロック・炭化物を含む)
- 2 褐色土 (粘土ブロックを含む)
- 3 " (ローム粒子・粘土質・粘土ブロックを含む)

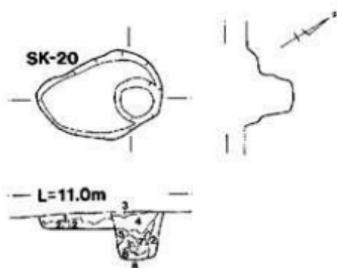
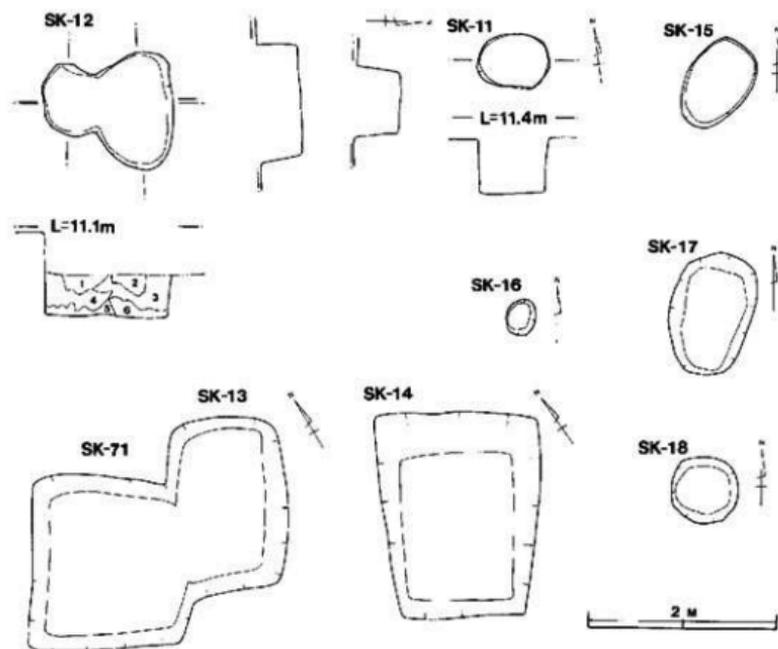
第2号土壌層解説

- 1 暗褐色土 (ローム粒・粘土粒・炭化物を含む)
- 1' " (粘土ブロックを含む)
- 2 " (粘土ブロック・炭化物を含む)
- 2' " (粘土ブロックを含む)
- 2'' 暗褐色土 (ローム粒・粘土粒を含む)
- 3 暗褐色土 (粘土ブロック・炭化物を含む)
- 1 " (ローム粒を含む)
- 1' " (ローム粒・炭化物を含む)
- 5 " (暗土層である)

第7号土壌層解説

- 1 暗褐色土 (粘土ブロック・ローム粒を含む)
- 2 暗褐色土 (粘土ブロック・ローム粒・炭化物・炭土を含む)
- 3 暗褐色土 (ローム粒・炭土・粘土粒を含む)
- 4 " (ローム粒・粘土粒・炭土を含む)
- 5 暗褐色土 (粘土ブロック・ロームブロックを含む)
- 6 赤褐色土 (粘土層である)
- 7 赤褐色土 (粘土層である)

第146図 第1～10号土壌



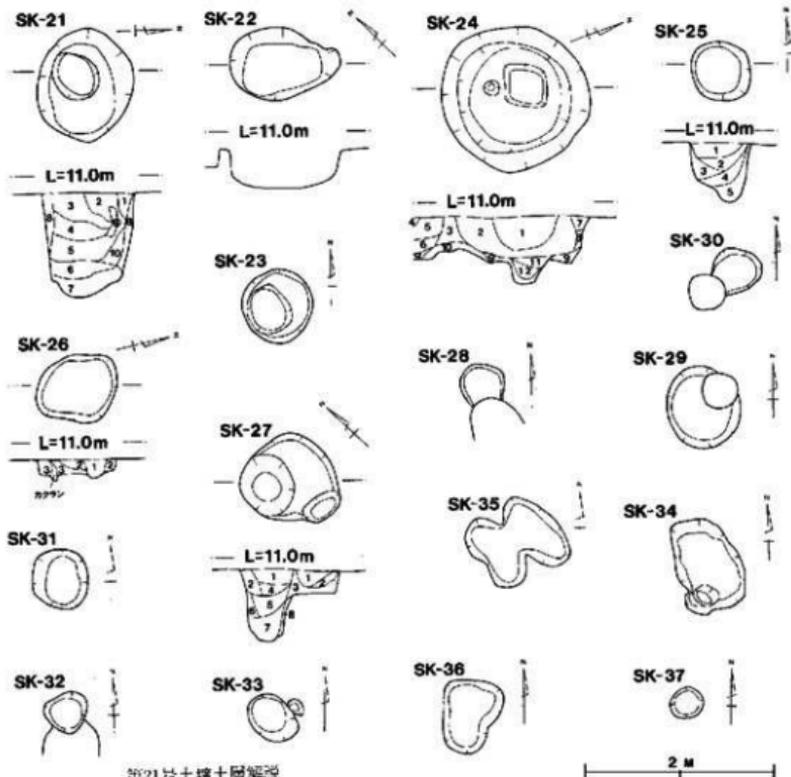
第12号土壌土層解説

- 1 黒色褐色土 (ローム粒・粘土ブロック・炭土粒・炭化物を含む)
- 2 褐色土 (ローム粒・粘土ブロックを含む)
- 3 若褐色土 (ローム粒・粘土ブロック・炭土ブロックを含む)
- 4 〃 (ローム粒・粘土ブロック・炭化物を含む)
- 5 〃 (ローム粒・粘土ブロックを含む)
- 6 〃 (ローム粒・粘土ブロックを含む)

第20号土壌土層解説

- 1 黒褐色土 (粘りあり)
- 2 褐色土 (粘性あり、やや粘りあり)
- 3 〃 (かなり粘りあり)
- 4 〃 (粘りあり)
- 5 〃 (粘性あり)
- 6 暗褐色土 (粘り・粘性あり)
- 7 〃 (粘り・粘性あり)
- 8 〃 (粘性あり、炭粒を含む)

第147図 第11～20・71号土壌



第21号土壌層解説

- 1 黒 色 土 (Y中層にあり)
- 2 暗 褐色 土 (ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 3 暗 褐色 土 (中層にあり)
- 4 〃 (粘性あり)
- 5 〃 (ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 6 〃 (粘性あり、ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 7 暗 褐色 土 (炭化物・ローム粒を含む)
- 8 褐色 土 (腐り・粘りあり)
- 9 黒 褐色 土 (腐りなし)
- 10 暗 褐色 土

第24号土壌層解説

- 1 黒 褐色 土 (ローム粒・炭化物・灰土粒を含む、腐りあり)
- 2 暗 褐色 土 (Y・ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 3 暗 褐色 土 (Y・ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 4 〃 (Y・ローム粒・炭化物・灰土粒を含む、腐りあり)
- 5 〃 (Y・ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 6 〃 (Y・ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 7 褐色 土 (Y・ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 8 〃 (Y・ローム粒・炭化物・灰土粒を含む)
- 9 〃 (ロームブロックを多量に含む)
- 10 〃 (ロームブロックを含む)
- 11 暗 褐色 土 (Y・炭化物を含む、粘性あり)
- 12 褐色 土 (炭化物・Y・Pを含む、粘性あり)

第25号土壌層解説

- 1 褐色 土 (Y・P・ローム粒・灰土粒・炭化物を含む)
- 2 〃 (Y・P・ローム粒・灰土粒・炭化物を含む)
- 3 〃 (Y・P・ローム粒・灰土粒・炭化物を含む)
- 4 〃 (Y・P・ローム粒・灰土粒・炭化物を含む、粘性あり)
- 5 〃 (Y・P・ローム粒を含む)

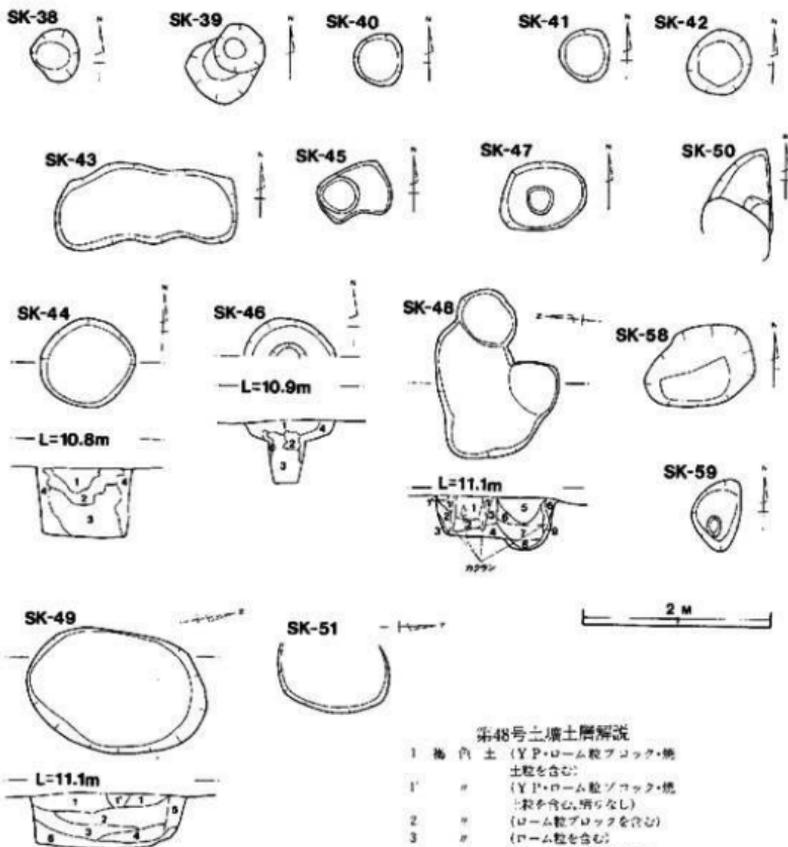
第26号土壌層解説

- 1 褐色 土 (Y・Pを含む、腐りあり)
- 2 〃 (Y・Pを含む、腐りあり)
- 3 〃 (Y・Pを含む、腐りあり)

第49号土壌層解説

- 1 褐色 土 (Y・P・灰土粒・炭化物を含む、腐りあり)
- 2 〃 (Y・P・灰土粒・炭化物を含む)
- 3 〃 (Y・P・灰土粒・炭化物を含む、腐りあり)
- 4 〃 (Y・P・ローム粒・炭化物を含む)
- 5 暗 褐色 土 (Y・P・灰土粒・炭化物を含む)
- 6 〃 (Y・Pを含む)
- 7 褐色 土 (Y・Pを含む、粘性あり)
- 8 褐色 土 (Y・Pを含む、粘性あり)

第148図 第21～37号土壌



第44号土壌土層解説

- 1 灰褐色土 (ローム粒を多量に含む)
- 2 # (ローム粒・底土石を含む)
- 3 # (ロームブロックを含む)
- 4 # (ローム粒を含む)

第46号土壌土層解説

- 1 暗褐色土 (ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
- 2 # (ローム粒を含む)
- 3 # (ローム粒を多量に含む)
- 4 灰褐色土 (硬りあり)

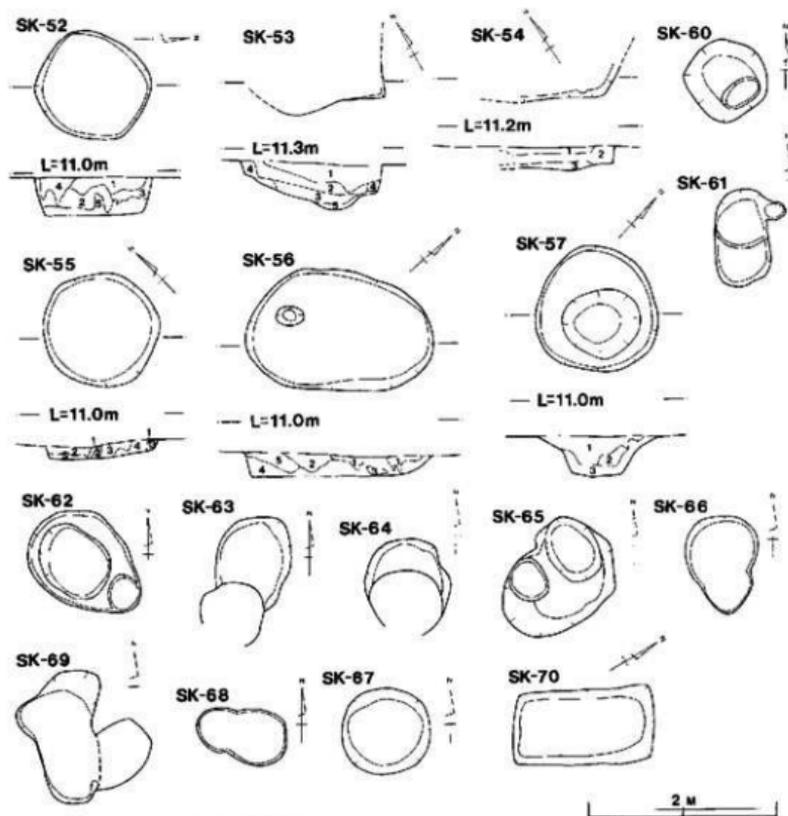
第48号土壌土層解説

- 1 褐色土 (YP・ローム粒ブロック・焼土粒を含む)
- 1' # (YP・ローム粒ブロック・焼土粒を含む、所りなし)
- 2 # (ローム粒ブロックを含む)
- 3 # (ローム粒を含む)
- 4 # (ロームブロックを含む)
- 5 # (YP・ローム粒ブロック・炭化物・焼土粒を含む)
- 6 # (YP・ローム粒ブロック・炭化物・焼土粒を含む)
- 7 # (ローム粒を含む)
- 8 # (軟下あり)
- 9 # (硬りあり)

第49号土壌土層解説

- 1 褐色土 (ローム粒ブロック・炭化物・焼土粒を含む)
- 2 # (多量のローム粒ブロックを含む)
- 3 暗褐色土 (ローム粒ブロックを含む)
- 4 # (YP・ローム粒を含む)
- 5 褐色土 (YP・ローム粒を含む)
- 6 明褐色土 (ローム粒である)

第149図 第38～51・58・59号土壌



第52号土壌上層解説

- 1 灰褐色土 (炭化物を含む)
- 2 " (ローム殻ブロックを含む)
- 3 " (ローム殻を含む)
- 4 " (ローム殻ブロック・炭化物・粘土粒を含む)
- 5 黄褐色土 (硬りあり)

第53号土壌上層解説

- 1 灰褐色土 (粘土粒・ローム殻を含む)
- 2 暗灰色土 (粘土粒・ローム殻を多量に含む)
- 3 暗色土 (ローム殻ブロックが多量に含む)
- 4 " (ローム殻ブロック・粘土粒を多量に含む)

第54号土壌上層解説

- 1 灰褐色土 (ロームブロック・炭ニブロックを多量に含む)
- 2 暗褐色土 (粘土・硬りあり)
- 3 褐色土 (粘土・硬りあり)

第55号土壌上層解説

- 1 暗褐色土 (ローム殻を含む)
- 2 " (ローム殻・炭化物を含む)
- 3 " (ローム殻・黒褐色ニブロックを含む)
- 4 " (ローム殻ブロックを含む)
- 5 " (ローム殻が多量に含む)

第56号土壌上層解説

- 1 暗褐色土 (ローム殻を含む)
- 2 " (ローム殻ブロックを含む)
- 3 暗褐色土 (ローム殻を含む)
- 4 暗色土 (硬りあり)
- 5 " (ロームブロックを含む)

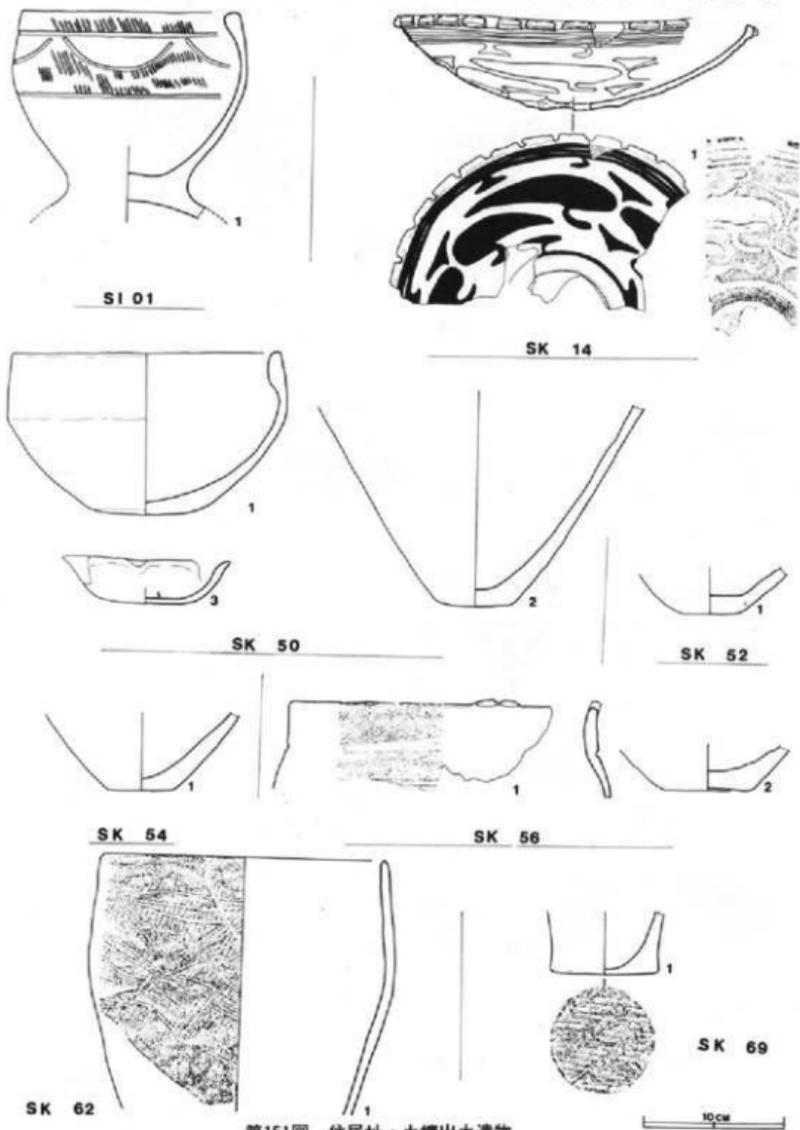
第57号土壌上層解説

- 1 暗褐色土 (ローム殻を含む)
- 2 " (ロームブロックを含む)
- 3 暗色土 (硬りあり)

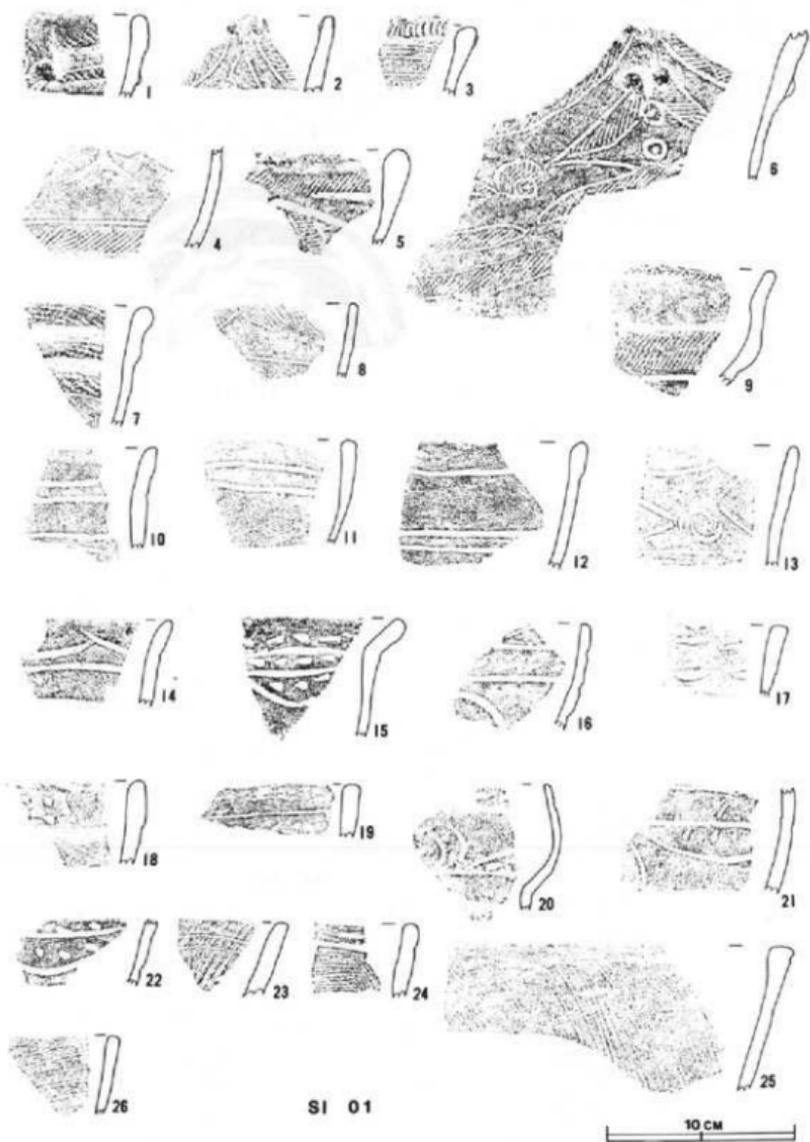
第150図 第52～57・60～70号土壌

3. 遺物

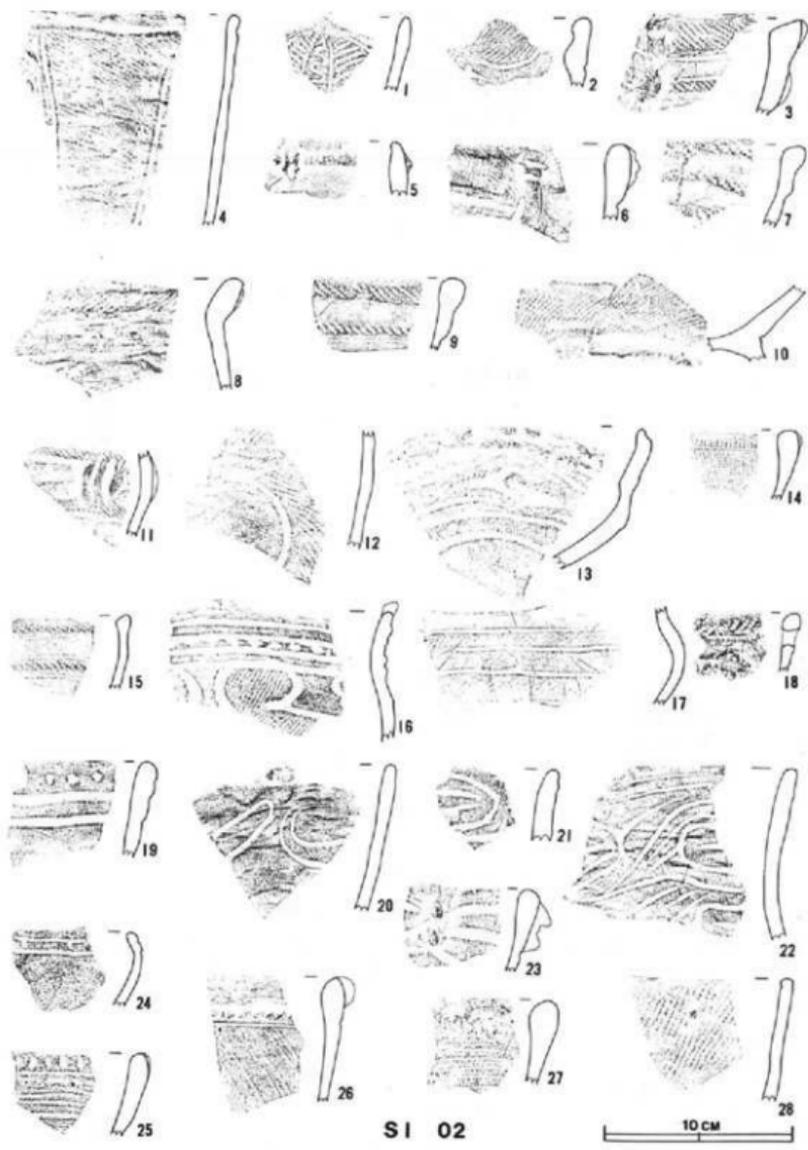
遺構出土遺物（実測図・拓影図）・グリッド出土遺物（実測図）に分類し、以下に掲載した。



第151図 住居址・土壇出土遺物



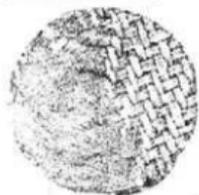
第152図 住居址出土遺物



第153図 住居址出土遺物



SI 03



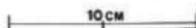
SK 01



SK 04



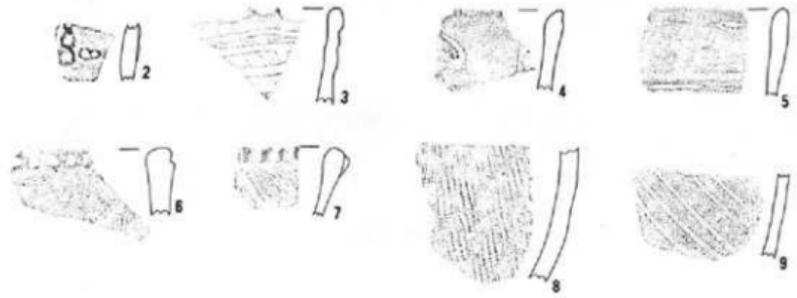
SK 07



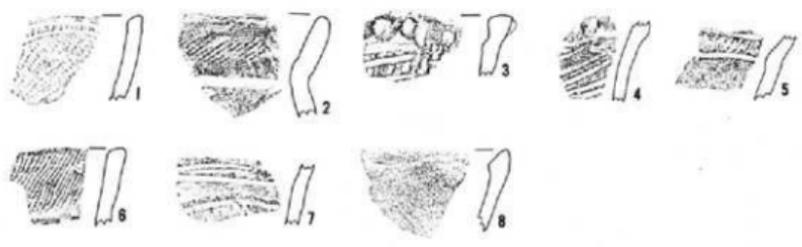
第154图 住居址土境出土遺物



SK 10



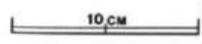
SK 12



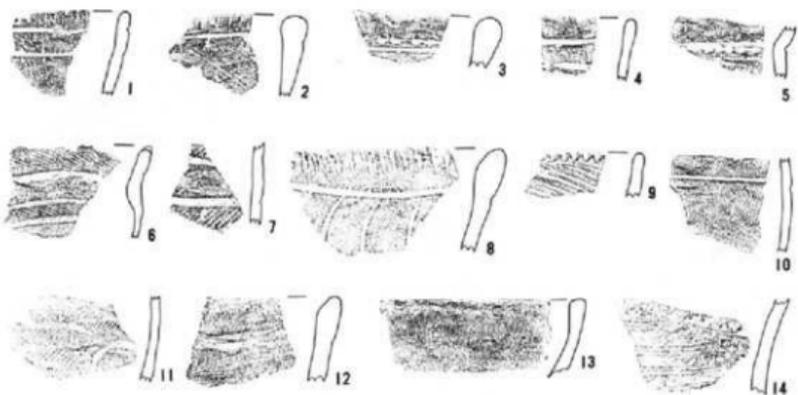
SK 13



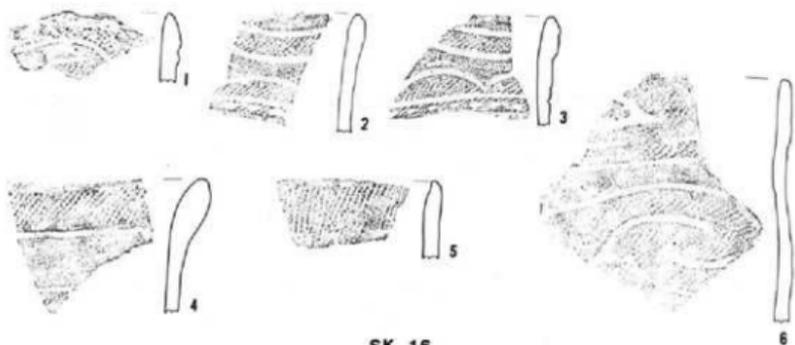
SK 14



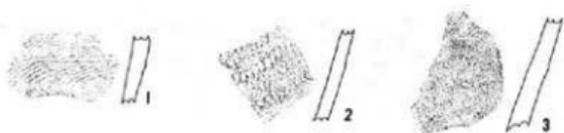
第155圖 土壤出土遺物



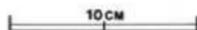
SK 14



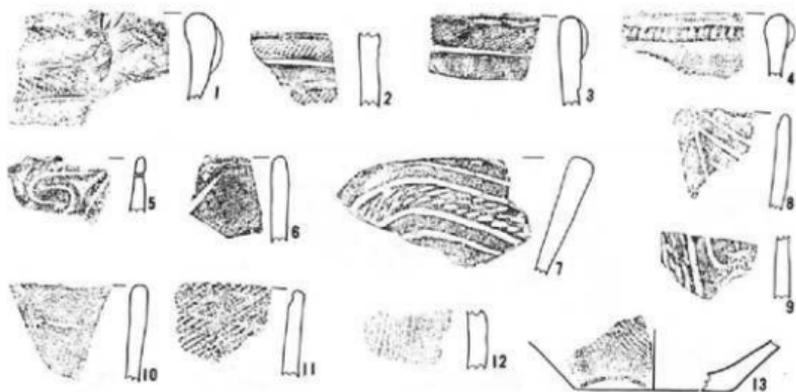
SK 16



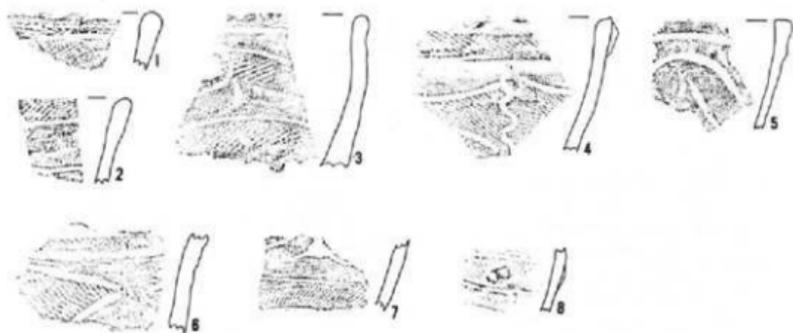
SK 20



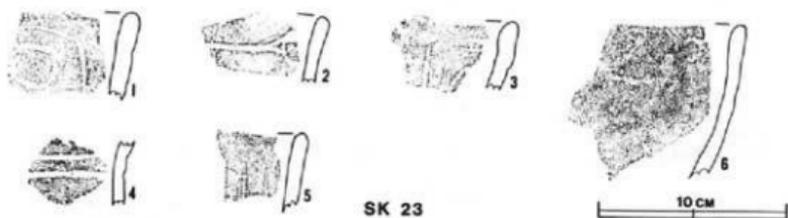
第156図 土壤出土遺物



SK 21

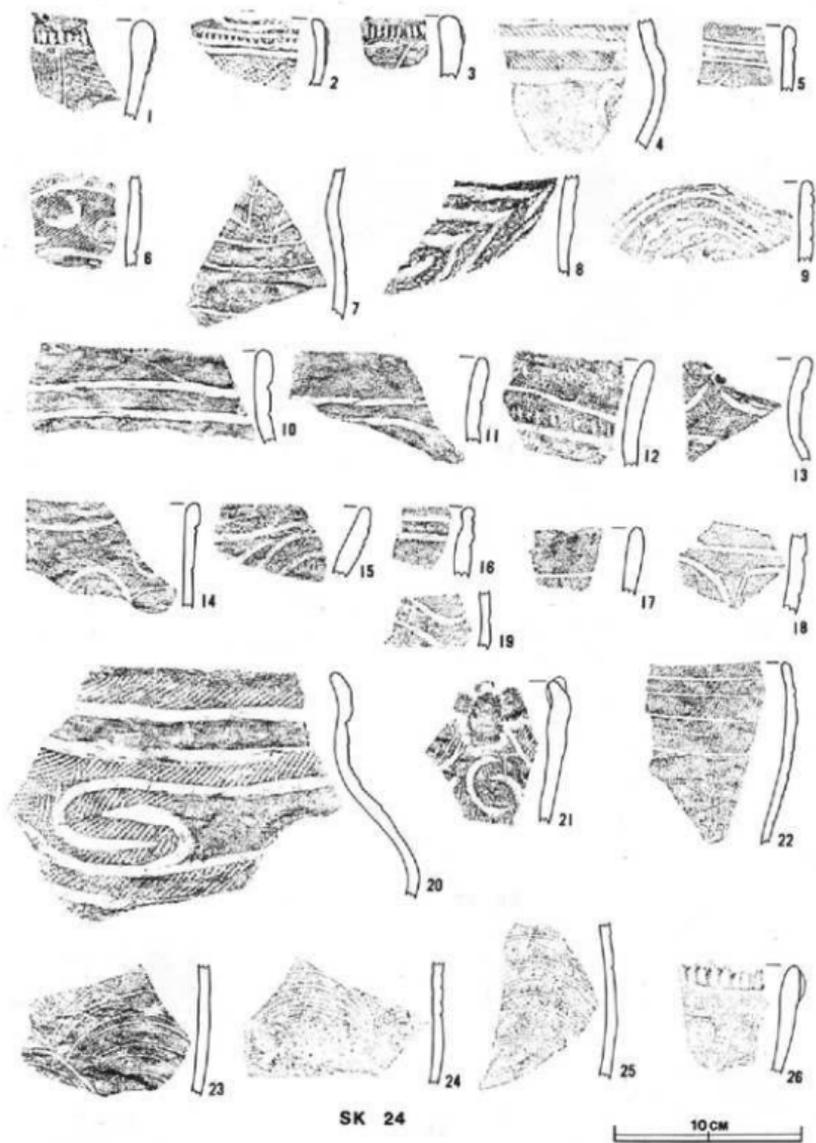


SK 22



SK 23

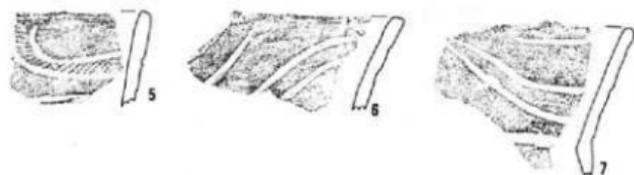
第157圖 土壤出土遺物



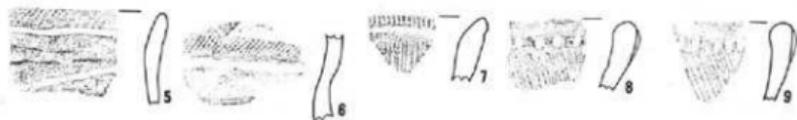
第158圖 土壤出土遺物



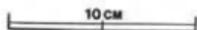
SK 24



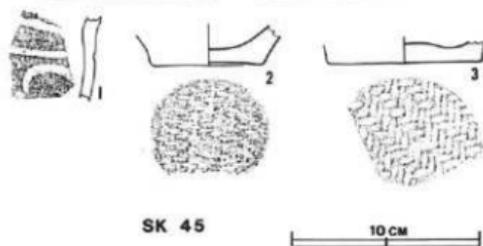
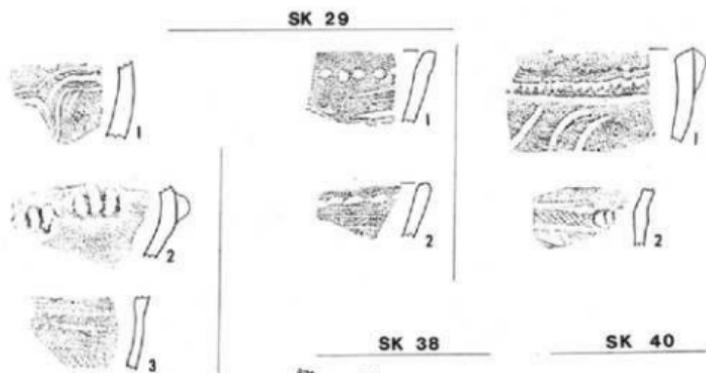
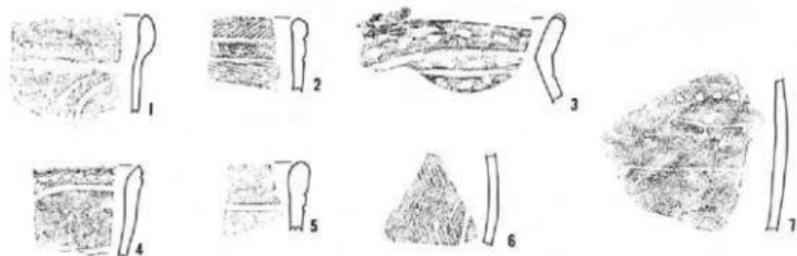
SK 27



SK 28



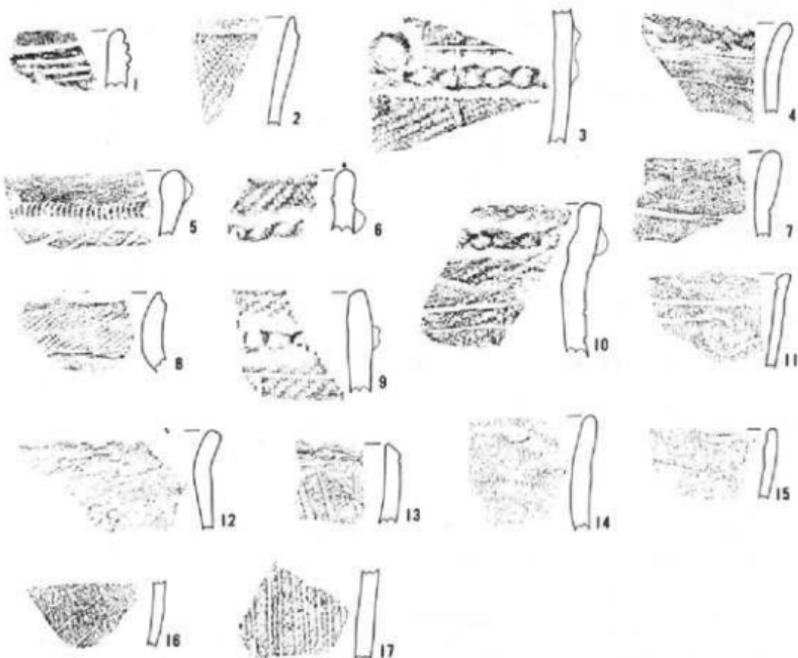
第159図 土壤出土遺物



第160図 土壤出土遺物



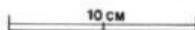
SK 46



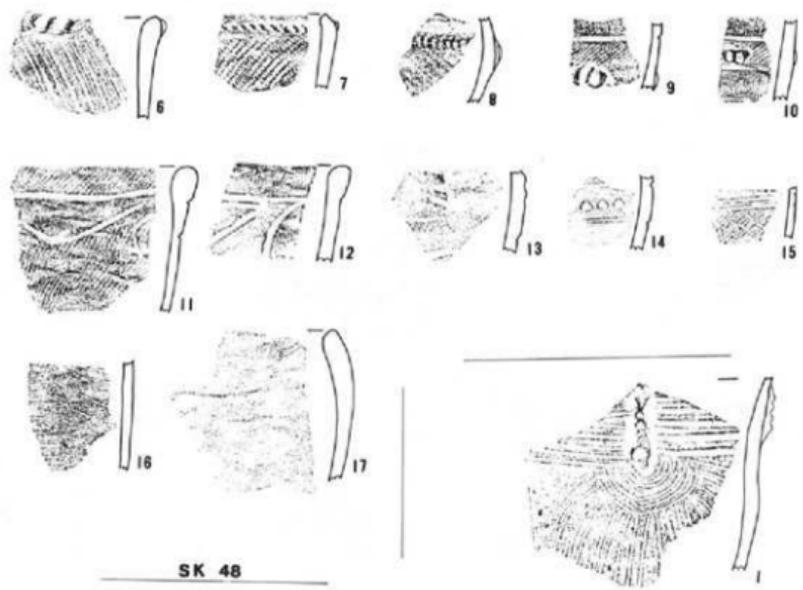
SK 47



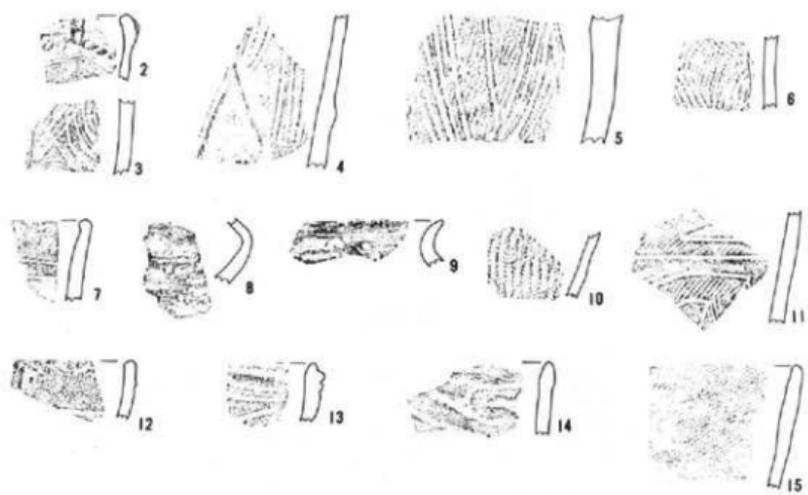
SK 48



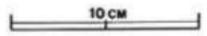
第161図 土壤出土遺物



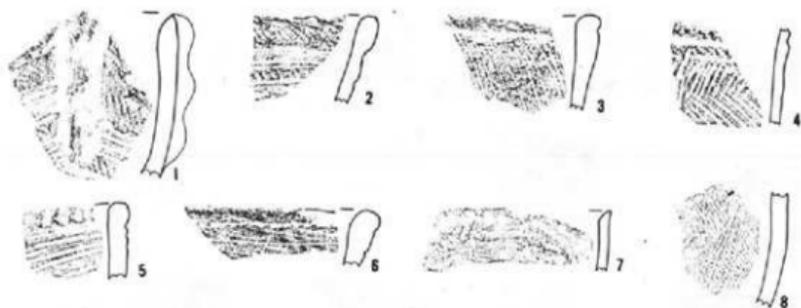
SK 48



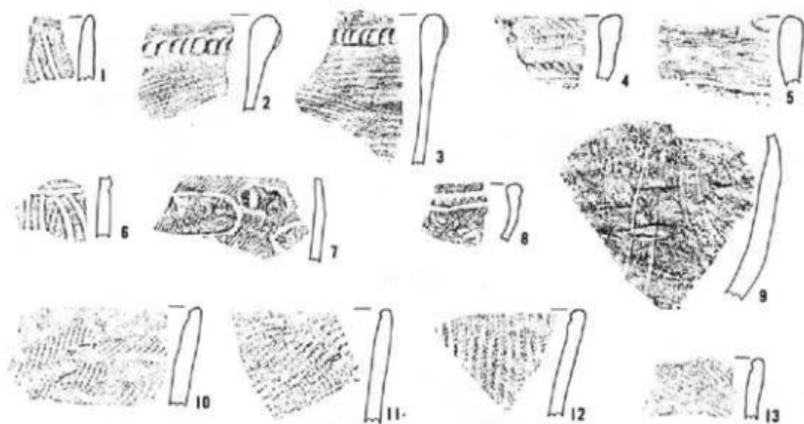
SK 49



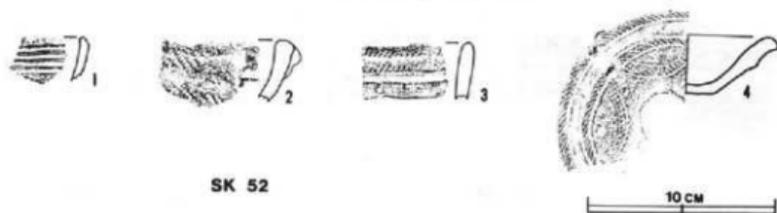
第162回 土坑出土遺物



SK 50



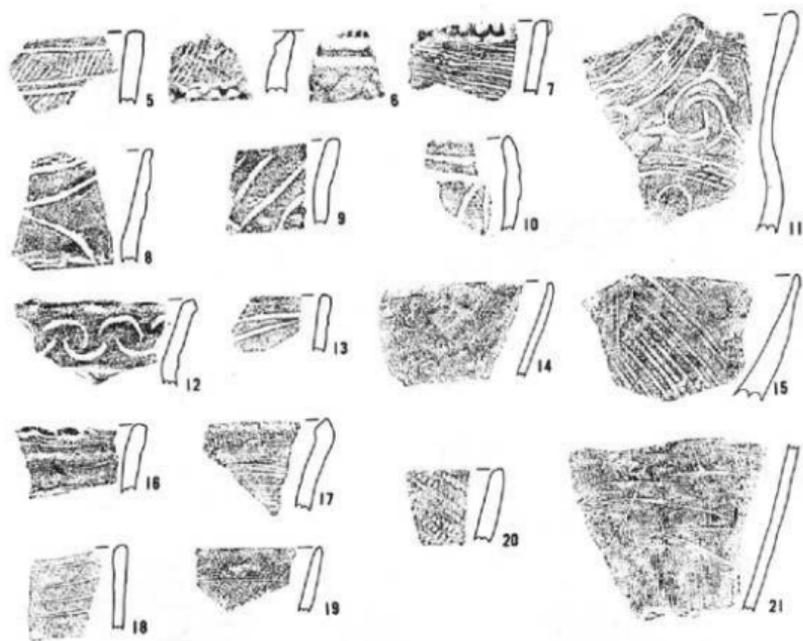
SK 51



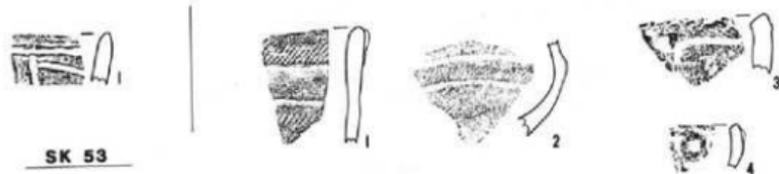
SK 52

10 CM

第163圖 土壤出土遺物



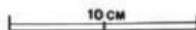
SK 52



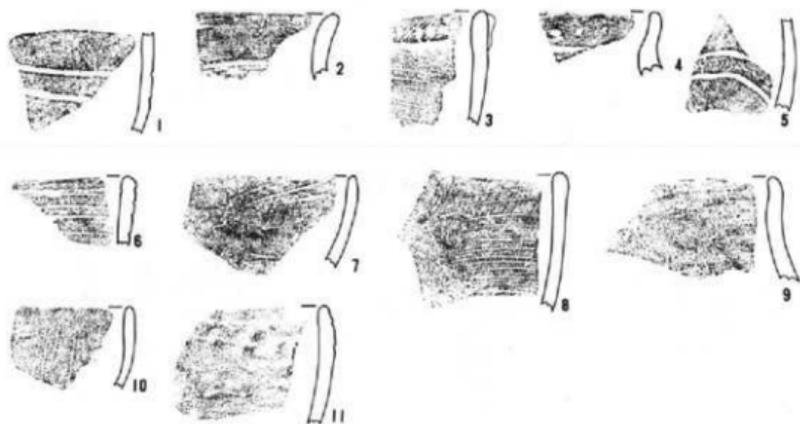
SK 53



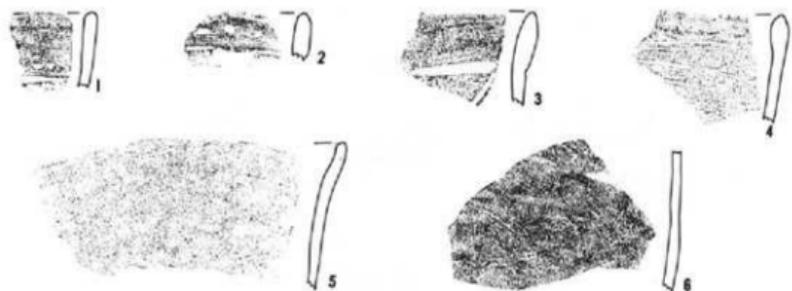
SK 54



第164図 土壇出土遺物



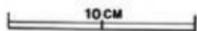
SK 55



SK 56



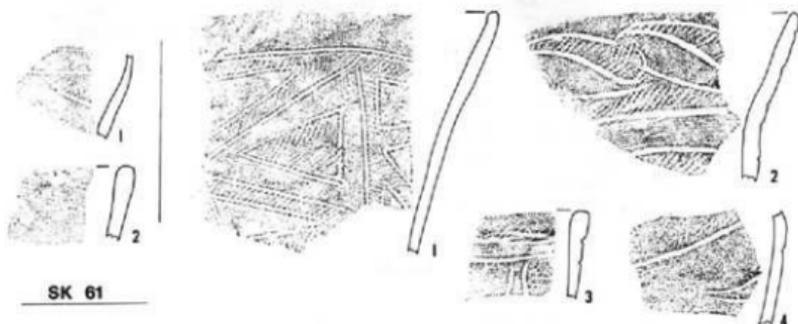
SK 57



第165図 土壤出土遺物



SK 57

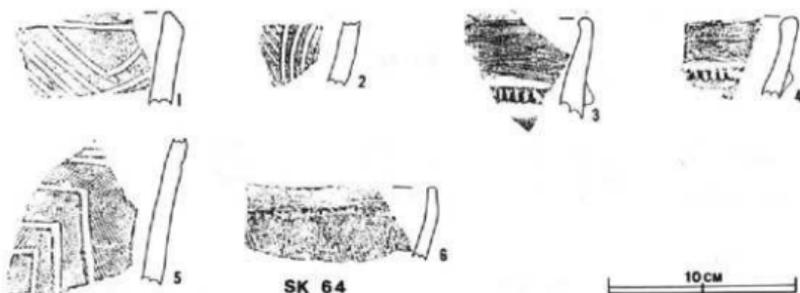


SK 61

SK 62



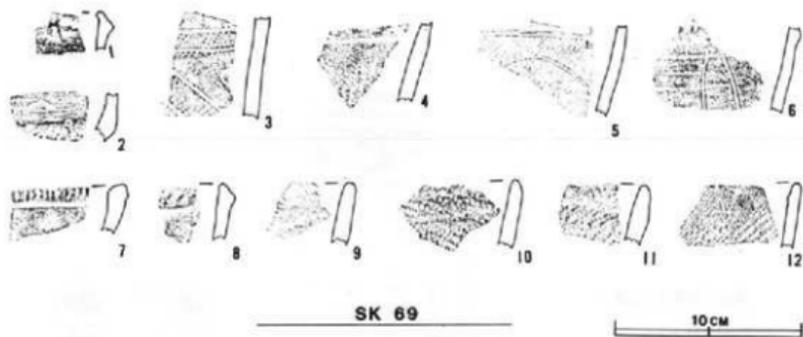
SK 63



SK 64

10CM

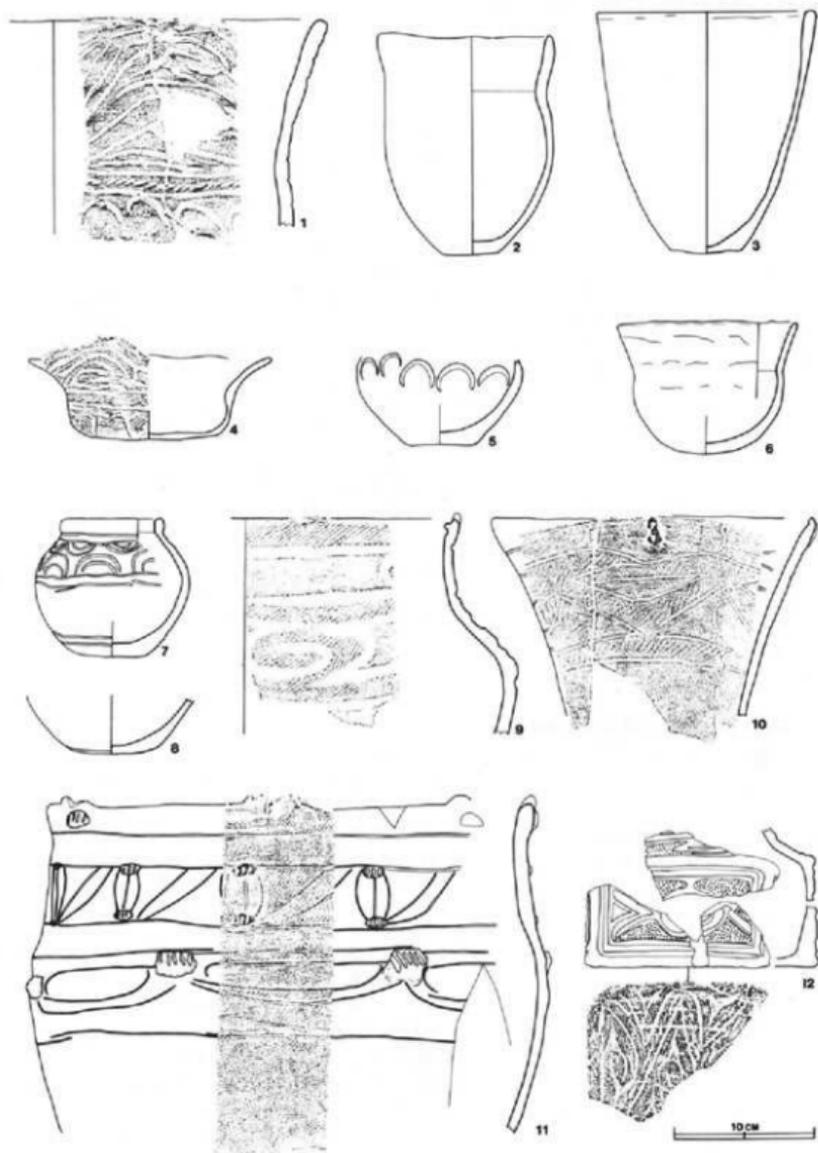
第166図 土壇出土遺物



第167回 土壤出土遺物



第168図 グリッド出土遺物



第169図 グリッド出土遺物

表93 第151図 住居址・土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SI-01	1	片鉢形	口径	15.3	沈線で区画された口縁部及び弧状沈線と横走する沈線の間には縄文 (RL) が施されている。内面はヘラ磨き	明赤褐色を呈する。安行1式
			底径	14.6		
SK-14	1	浅鉢形	口径	24.8	外面はヘラ磨りによる雲形文、内面はヘラ磨き、口内に深い凹み	内面に褐色を呈する。大淵C1式
			底径	6.1		
SK-50	1	鉢形	口径	18.7	内・外面ともヘラによるナデ・磨りによる雲形。外底裏部に炭化物付着	全体に薄く鈍小厚4mm。内面に黄褐色を呈する
			胎高	11.4		
			底径	5.4		
SK-52	2	深鉢形	現存高	15.8	外面はヘラ磨り、内面はヘラナデ一部(下半)に炭化物付着	内面に褐色を呈する
			底径	5		
			胎高	11.8		
SK-52	3	浅鉢形	口径	11.8	外面はヘラ磨り後縁なヘラ磨き、内面はナデ、底筋は一部ヘラ磨り	内面は褐色。外面に内面に黄褐色及び炭黄褐色を呈する
			胎高	3.3		
			底径	5		
SK-52	1	深鉢形	現存高	3	外面はヘラナデ、内面はヘラ磨り	内面に褐色を呈する
			底径	3.6		
SK-54	1	深鉢形	現存高	5.3	外面はヘラナデ、内面はヘラ磨り	内面に褐色を呈する
			底径	1.4		
SK-56	1	深鉢形	口径	20	口縁に粘土貼付による二筋の隆起深い沈線と区画し、口縁部縄文帯と下位縄文帯	暗褐色を呈する。前淵式
			胎高	2.8		
SK-62	1	浅鉢形	口径	20	口縁部無文帯、縄文(シR) 横文後、深い沈線による雲形文	褐色を呈する
			胎高	20.8		
SK-69	1	深鉢形	現存高	4.3	外面ヘラ磨き、内面はナデ、唇部は割付状	褐色を呈する
			底径	7.6		

表94 第152図 住居址出土遺物

出土遺物・区	遺物	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SI-01	1	口縁部	口縁部		隆起帯状文 (RL文) とそれをつなぐ縦状突起がある。隆起帯間は横方向の筋	安行1式
			波状部		波状部に粘土を巻く。隆起帯縄文	
	3	口縁部	口縁部		口縁に1条の粘土紐を巻き、指頭による刺状、指頭以下は半截竹管による横方向の沈線	安行2式
			胴部		横方向の沈線によって上下を区画。上は無文、ヘラ状工具により三叉文、下は縄文(横)	
	5	口縁部	口縁部		みみを有するに類と、太めの沈線による区画内に施された縄文	晩期
			口縁部		ボタンの文様と、沈線による区画内の縄文及び雲形の無文帯	
	7	口縁部	口縁部		二筋の隆起帯状縄文と隆起帯間の横方向の筋	晩期
			口縁部		隆起帯の沈線と沈線によって区画された無文帯	
	9	口縁部	口縁部		指先のやや広い基文帯と、胴部と区画する帯状文	晩期
口縁部						

山土遺物・X	遺物No	形状・部位	法目 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-01	10	#		横方向の沈線	
	11	#		やや厚手の口縁部と横方向の沈線	
	12	#		厚手の口縁部と横方向の沈線	
	13	#		沈線による2段の区画、下段は沈線間に刺突	晩期
	14	#		頸部の隆起状沈線とその下の横方向の沈線	晩期
	15	#		横方向の2本の沈線と、その下の弧状沈線、沈線は交叉	安行3C式
	16	#		横方向の2本の沈線と弧状沈線、沈線間に刺突を施す	安行3C式
	17	#		刺突及び横方向の沈線	安行3C式
	18	#		やや厚味をおびる口縁と広く浅い沈線、刺突を2段に配する	
	19	#		肥い沈線とその上下に刺突を施す	
	20	#		竹筒する頸部、沈線による区画内の刺突	安行3C式
	21	割部		沈線による区画内に刺突を施す	安行3C式
	22	#		弧状の沈線による区画と、その内部の刺突	安行3C式
	23	口縁部		柱文として縄文(L, R)、平紋竹管による横方向の平行沈線	
24	#		口縁部に横方向の太い沈線、割部は平紋竹管による横及び斜の垂線		
25	#		やや厚手の口縁に横の沈線を施し、斜方向に条線		
26	#		条線		

表95 第153区 住居址出土遺物

山土遺物・X	遺物No	形状・部位	法目 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-02	1	口縁隆起部		波道下の蛇行沈線による懸垂文、口縁の沈線と懸垂文の間に充填される沈線	
	2	#		縦直線を沈線で囲出し、縄文(R, L)を施す、内面は、くびれの所で大きくふくらむ	
	3	口縁部		2帯の隆起帯状縄文とそれをつなぐ帯状突起がある。横方向の筋帯が見られる	安行1式
	4	#		口縁部の沈線と、沈線による懸垂文、地文は無彫縄文	
	5	#		口縁部外側に白い染成を施し、刺突を施す。8の字状貼付、口縁部内帯に1条の沈線	
	6	#		縄文の帯状突起に刻み目、隆起帯状縄文	安行2式
	7	#		3帯の隆起帯状縄文(R, L)、隆起帯間は横方向の筋帯	安行1式
	8	#		7(1)の字に折れ曲がり、外収する口縁、くびれの所で、よく研削された帯状の部分	
	9	#		2帯の隆起帯状縄文と突起部分	
	10	表部		無彫縄文(L, R)	割部と縁より右にかけての部分

出土遺物・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-02	11	口縁部		2帯の隆起帯状縄文とそれをつなぐ瘤状突起に既製の糸み目。隆起帯間は横方向の研磨が見られる	安行2式
	12	"		やや太目の記線によって区画された縄文	
	13	口縁部		沈線及び三叉文	安行3b式
	14	"		厚手の「 \cap 」状と刻みヒ1条の沈線	
	15	"		2帯の隆起帯状縄文 (R.L.)、噴力での牙野	安行1式
	16	"		口縁に粘土瘤、横方向の研磨が良好	人形系
	17	胴部		傾位の磨消縄文	
	18	口縁部		1.縁部外側の縄文及びその下の横方向の研磨	補修孔(?)あり
	19	"		傾位の太い沈線と刺突	
	20	"		沈線による入組文で区画された中に縄文を嵌す	安行3b式
	21	"		沈線による入組文	安行3c式
	22	"		沈線による入組文	安行3c式
	23	"		2つの隆起を有する瘤状突起と、突起を中心に横走る太い沈線	
	24	"		口縁部に2条の沈線がめぐる	
25	"		口縁部に1条の沈線がめぐり、上に刺突、下に横走る条線がある		
26	"		厚手の「 \cap 」縁部下に三角形の刺突があり、下に横走る沈線と斜の条線がある		
27	"		厚手の口縁に連続爪形文を施し、胴部には横方向の条線が走る		
28	"		外面は縄文のみ。口縁部内側に1条の沈線がめぐる		

表96 第154図 住居址・土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-03	1	口縁部		瘤状突起に、縦長の刻み目、2帯の隆起帯状縄文と横方向の研磨	安行3a式
	2	"		口縁をめぐる帯状縄文と、沈線による三叉状入組文	安行3b式
	3	"		口縁部下の三角形刺突と条線	
	4	"		弧状沈線	
	5	"		弧状沈線	
	6	胴部		沈線による入組文で区画、弧状沈線	安行3c式
	7	口縁部		縦方向の沈線	
	8	胴部		網代痕	
SK-01	1	胴部		縄文のみ	
	2	口縁部		狭く口縁の腹頂部で瘤状突起と貫通孔を有する	安行1式
SK-04	1	胴部		横走る2条の沈線の間に弧状沈線と縄文	
	2	口縁部		口縁に粘土瘤を有し付け指環による刺突を嵌す。胴部は横方向の条線	

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-04	3	口縁部		外縁は3条の沈線、内面は彫りによる段を有し、3条の沈線を遡す。上段沈線間に夾み目	加賀利B1式
SK-07	1	"		2帯の隆帯状縄文とそれをつなぐ彫りによる透線。横方向の研削	
	2	"		3帯の隆帯に爪形文を配し、下位の隆帯間に加爪状の条線	
	3	"		口縁はやや肥厚し、横走する沈線で区別された間に縄文 (R1)	
	4	"		口縁に粘上紐をめぐらせ、指跡による割裂文を配する	
	5	胴部		区別与縄文を三角形に配し、内部を条線で充塞する	板之内B1式
	6	口縁部		肥厚した口縁下に連続割裂文と縦位の条線	
	7	"		口縁に粘上紐をめぐらせ、連続割裂文を配する	

表97 第155区 土壌出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-10	1	口縁部		2帯の隆帯状縄文、横方向の研削	
	2	胴部		輪状の小突起をつなぐ隆帯と刻み目	
SK-12	1	口縁部		口縁と平行に横走する沈線と、胴部の沈線による区別	
	2	胴部		粘や粘上の割裂	
	3	口縁部		横走する沈線	
	4	"		沈線文	
	5	"		口縁部無文帯と横走する沈線	
	6	"		口縁に段を有し、割裂文を配する。左下へ沈線が走り、縄文がわずかに残る	
	7	"		口縁に粘上紐を配り、指跡による割裂を配する。胴部は右下へ条線が走る	
	8	胴部		縄文のみである	
	9	"		条線のみである	
SK-13	1	口縁部		口縁に沿って沈線を配し、点刻を加える。胴部は縄文を遡す	加賀利B2式
	2	"		外反する口縁に縄文を配し、胴部にやや深い沈線を配する	
	3	"		口縁に粘上紐を配り、下位に沈線、刻み目を配する	
	4	胴部		文を配する条線を有する	
	5	"		沈線で器蓋を区別し、縄文を配する	
	6	口縁部		透文を配し、下位に横走する沈線を配する	
	7	胴部		沈線が横走する	
	8	口縁部		内面に段を有し、外面は右下へ条線が走る	

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徵	備考
SK-11	1	〃		隆帯状縄文をつなく部分に隆帯状起を有し、刻み目、刺突を記する	安行2式
	2	〃		波状口縁の突起、隆帯突起に隆帯状の刺突を配する	安行2式
	3	〃		隆帯状縄文に隆帯突起を配する	安行2式
	4	〃		口縁部無文帯を有し、下位に沈線と刺突を有する	

表98 第156図 土壌出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徵	備考
SK-14	1	11 縁部		横走する2本の沈線	
	2	〃		1本の沈線で上下を区別し、上位にのみ口下空に右下への条線を記する	
	3	〃		口縁と平行に刺突・沈線を配し、下位に斜の沈線を施す	
	4	〃		横走する2本の沈線	
	5	胴部		横走する沈線と平行に配された刺突	
	6	11 縁部		1内部に粘土の凸突起をもち、2帯の隆帯状縄文が記される	
	7	胴部		2帯の隆帯状縄文を有する。横方向の研磨が見られる	
	8	11 縁部		口縁に爪形文を有し、口縁をめぐって1本の沈線と隆帯状の沈線が見られる	
	9	〃		口縁に刻み目を有し、口下へ走る条線がある	
	10	胴部		横走する1本の沈線のみである	
	11	〃		弧状の沈線と刺突が見られる	
	12	11 縁部		爪文	
	13	〃		爪文	
	14	胴部		横走する条線とまばらな刺突	
SK-16	1	11 縁部		沈線による人形文で区別された中に刺突が散在される	
	2	〃		沈線・隆帯状沈線により区別され、内部に刺突が散在される	
	3	〃		横走する沈線・凹文により区別され、内部に刺突・刻み文が散在される	
	4	〃		口縁に刺突を有し、下位の刺突帯との間にやや広い無文帯を有する	
	5	〃		刺突のみである	
	6	〃		沈線による人形文による×割内に刺突を施し、一部に刺突帯を残す	
SK-20	1	14 底		刺突が散在された中に沈線が横走する	
	2	〃		刺突(L.R)のみ	
	3	〃		上部に刺突が見られ、以下は刺突	

表99 第157図 土壌出土遺物

出土遺物・X 遺物名	形状・部位	法号 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SK 22	1	J 線 部		2帯の隆起状線文と歯状突起	
	2	底 部		2帯の隆起状線文。横方向の研磨	
	3	口 縁 部		肥厚した口縁に斜の高線を有する	
	4	"		口縁をめぐる筋に凹凸が現される	
	5	"		沈線による人形文と三叉文。貫通孔が見られ、安行3c式	
	6	"		筋の沈線	
	7	"		口縁に沿って数条の沈線が穿され、三段の丸	安行3c式
	8	"		筋及び斜の沈線	
	9	腹 部		縦及び弧状の沈線と列点文	安行3c式
	10	口 縁 部		無文	
	11	"		網文のみ	
	12	胴 部		条線のみ	
	13	底 部		網文のみ	
SK 22	1	口 縁 部		口縁に沿って列点文・沈線が施される	
	2	"		2帯の隆起状線文	
	3	"		沈線による人形文・三叉文	
	4	"		口縁に沿って網文帯を有する。弧線文によっ	
	5	"		て帯文付・縦文帯に分けられ、蛇行沈線の表	
	6	"		に施文される	
	7	"		弧線による人形文	
	8	胴 部		横位の沈線と弧状沈線による区帯の内部に網	
9	"		文が施される		
10	"		沈線による区帯と三叉文		
11	"		沈線による区帯と隆起状突起		
SK 23	1	J 線 部		沈線による円形文	
	2	"		口縁に沿った沈線	
	3	"		縦・横の沈線	
	4	胴 部		横走る2条の沈線	
	5	口 縁 部		筋位の条線	
	6	"		無文	

表100 第158図 土壌出土遺物

出土遺物・区	遺物の 器形・部位	法采 (cm)	裏面・裏面の 特徴	備考	
SK 24	1	口縁部		口縁部に粘土粒を貼り付け、割裂を施す。縦方への沈線と横の条線が見られる	
	2	"		口縁に沿って沈線がめぐり、割れ目が刻される	
	3	"		口縁部に粘土粒を貼り付け、割裂を施す	
	4	胴部		横走する2条の太い沈線によって区別された帯線文と平位の縦線文	
	5	口縁部		口縁に沿って2条の沈線を配し、縦線文によって区別し、条線を施す	
	6	胴部		横走する2条の沈線と縦線文	
	7	"		横走する沈線と縦方への沈線が施され、列点文が彫られる	
	8	"		縦線文が斜垂にも折み合わされて木葉状を呈し、乳点文が配される	
	9	口縁部		波状口縁に沿って数条の沈線が施される。帯文に似た編文である	
	10	"		口縁に沿った2条の沈線	
	11	"		口縁に沿った2条の沈線	
	12	"		2条の沈線間に爪形文が配される	
	13	"		波状口縁に沿った波状沈線と横走する1条の沈線	
	14	"		口縁に沿った沈線と波状沈線	
	15	"		波状沈線による人組文	
	16	"		口縁に沿った2条の沈線と列点文	
	17	"		口縁部無文帯下に沈線と区別された条線文	
	18	胴部		沈線による人組文	
	19	"		沈線による人組文で区別された中に列点文が配される	安付30式
	20	口縁部		太い沈線による人組文で区別された下に縦文が施される	前式式
	21	"		口縁部頂部のハチを粘土粒と沈線による人組文	同
	22	"		横走する条線	
	23	胴部		縦長の条線	
	24	"		縦長の条線	
	25	"		縦長の条線	
	26	口縁部		口縁部粘土粒の割裂文と横走する条線	

表101 第159図 土壌出土遺物

出土遺物・	図号	形状・部位	法長 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK 24	27	1 鉢 底		口縁に平行な沈線が数本残存する。地文は胡文	
	28	"		腹位の沈線を残す。地文は胡文	
	29	"		斜行沈線文	
	30	"		腹位の沈線	
	31	"		胡文	
	32	"		とぼけた沈線	
	33	鉢 蓋		胡文	
SK 27	1	1 鉢 底		口縁に平行な沈線が2本あり、胡文	
	2	"		2本の沈線間に円形の胡文文を配する	
	3	"		口唇部に胡文を有し、下部に斜行沈線を残す	
	4	"		口唇部に沈線文	
	5	"		沈線で区画された中に胡文を配置する。外は磨面し	
	6	"		外反する口縁部に沈線を残す	安行34式
	7	"		No.6と同一器体と思われ、腹部での文様は屈曲する	"
SK 28	1	1 鉢 底		腹の胡文をもつ縦状突起を有し、器地文のみられる	安行24式
	2	"		縦状突起・沈線を有し、地文は胡文	"
	3	"		口唇部に斜行突起を有し、下部に斜行沈線を残す	
	4	"		斜行胡文のみられ、腹位の沈線が胡文される	
	5	"		口唇部に胡文帯を有し、沈線の胡文される	
	6	鉢 蓋		沈線で区画された胡文帯を有する	
	7	1 鉢 底		口唇部にスリットを配し、沈線又胡文した下部に腹位の沈線を残す	
	8	"		口唇部に胡文文を有し、下部に斜行沈線を残す	
	9	"		No.8と同 器体であろう	

表102 第160図 土壌出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・断面の特徴	備考
SK-28	10	口縁部		太い沈線文	
	11	"		横文	
	12	"		斜方向に細い沈線を施す	
	13	"		内側に立ち上がる口縁部、横文	
SK-29	1	口縁部		太い沈線で、口唇部と区画し、上部は刺突文、下部は沈線文を施す	
	2	"		口縁部に横位の沈線を施し、それに刺突を加える	
	3	"		口唇部に突起を有し、沈線と刺突文が施される	
	4	"		口唇部に刺突文列を有し、沈線で文様を区画する	
	5	"		横位の沈線と刺突文を有する	
	6	胴部		斜行沈線	
	7	"		沈線で区画し中に刺突を加える	
SK-32	1	胴部		沈線文、地文は横文	
	2	"		傾方向の瘤状突起を有する	
	3	"		横位の沈線間に刺突を加える。地文は横文	
SK-38	1	口縁部		口縁に沿って刺突文を施し、下部は横位の沈線	
	2	"		口唇部の刺突と横位の沈線文がわかる	
SK-40	1	口縁部		横位の沈線間に刺突を加え、太目の沈線を施す	
	2	胴部		細い傾斜文中に小瘤状突起を有する。	
SK-44	1	口縁部		口縁部に平行な沈線を施し、間に刺突を加える	
SK-45	1	胴部		沈線文のみで、連低文の1部のみ見える	
	2	底面		網代板	
	3	"		網代板	

表103 第161図 土壇出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-46	1	口縁部		沈線のみ	
	2	胴部		縄文	
	3	〃		縄文	
SK-47	1	口縁部		横位の沈線	
	2	〃		口唇部に段差をもつ。縄文	
	3	胴部		横位の紐線を有し、地文は縄文	
	4	口縁部		口唇部に割突を有し、細い沈線を施す	
	5	〃		口縁部に爪形の割突文列を有し、斜沈線を施す	
	6	〃		口唇部は縄文。紐線を有する	
	7	〃		横位の沈線文がみられる	
	8	〃		帯縄文を有する	
	9	〃		口縁に平行な紐線及び沈線を施す。地文は縄文	
	10	〃		口縁部に紐線を付し、横位の沈線を施す。地文は縄文	
	11	〃		沈線文及び入組文を有する	
	12	〃		数条の沈線を施す	
	13	〃		横位及び縦位の沈線で区画する	
	14	〃		縄文	
	15	〃		縄文地に沈線を施す	
SK-48	16	胴部		縄文地に斜沈線を施す	
	17	〃		縦位の平行沈線を施す	
SK-48	1	胴部		沈線文、地文は縄文	
	2	〃		瘤状突起を縦方向に貼り付け、斜位の平行沈線を施す。地文は縄文	
	3	口縁部		2段の縄縄文がみられる	
	4	〃		瘤状であるが縄縄文を2段に施す	
	5	〃		口唇部に突起を有し、沈線で区画された縄縄文をもつ	

表104 第162図 土壌出土遺物

出土遺物・× 遺物№	形状・部位	法口 (cm)	表型・裏面の装飾	備考		
SK-48	6	口縁部		口縁部に屈折を付し、斜位の沈線を施す		
	7	"		刺突を有す隆線をめぐらす。縄文		
	8	胴部		刺突を有す隆線をめぐらす		
	9	"		縄文帯をもち、玉粒き文が施される	安行2式	
	10	"		帯縄文の中に帯状突起をつける	"	
	11	口縁部		沈線で文様を区画する。地文は縄文		
	12	"		横位及び弧状の沈線文を有する	安行3C式	
	13	胴部		弧状の沈線を主に施文する	"	
	14	"		平行沈線間に刺突文を有する		
	15	"		縄文地に平行沈線を施す		
	16	"		横位及び斜位の沈線を施す		
	17	口縁部		内側する口縁部で、縄文である		
	SK-49	1	胴部		刺突のある突起を縦につけ、沈線を横位に施す。突起下に円弧文を配する	堀之内式
		2	口縁部		8の字状の回り付け文及び刺突を加えた隆線を施し、下部は横い沈線を配する	"
		3	胴部		沈線文を施す。地文は縄文	
		4	"		斜位の沈線を施文する。地文は縄文	
		5	"		斜位の沈線が多くみられる。地文は縄文	
6		"		弧状の沈線を施す		
7		口縁部		口縁に平行的な沈線を2本横走させる		
8		"		大きく屈曲し、刺突文を施す		
9		"		外反する口縁で、平行沈線及び刺突文を有する		
10		胴部		縄文		
11		"		沈線で文様を区画し、中に縄文を施す。外は磨光し		
12		"		口縁に平行的な沈線を有する。地文は縄文		
13		"		沈線文を施す		
14		"		三叉状刺突文が施される		
15		"		縄文		

表105 第163図 土壇出土遺物

出土遺構・X	遺物	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-50	1	波状口縁		波頂部から縦位に波状突起が3刺つけられ、平行沈線が施文される	実行1式
	2	口縁部		沈線で区画された帯織文を有する	
	3	"		口唇部に1条の沈線をめぐらし、右どがりの斜沈線を施す	
	4	胴部		横位の沈線により下部に屈曲する沈線を縦位に施文する	
	5	口縁部		口唇部に正幅あり。横位の沈線を施文する。地文は縄文	
	6	"		研突及び沈線文がみられる	
	7	"		縄文	
	8	胴部		斜行沈線。地文は縄文	
SK-51	1	口縁部		沈線文	形之内式
	2	"		近縁を付し胴部は縄文	
	3	"		紐帯を付し斜位の沈線を施す	
	4	"		2段以上の帯織文をめぐらす	
	5	"		横位の沈線を施し、ヘラ整形がみられる	
	6	胴部		横位及び縦位の沈線文	形之内式
	7	"		沈線で楕円形を描く。地文は縄文	
	8	口縁部		口縁に平行な沈線を2本施文する	
	9	胴部		乱状の沈線文。地文は縄文	
	10	口縁部		縄文	
	11	"		縄文	
	12	"		縄文	
	13	"		縄文	
SK-52	1	口縁部		横位の平行沈線	
	2	"		帯織文を施し、波状突起をつける	
	3	"		口唇部に帯織文を有する	
	4	小型浅鉢		口縁に平行な帯織文を2段に施文し下段の縄文帯に接して半円形の縄文帯を施文する	

表106 (第164図 土壇出土遺物)

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考	
SK-32	5	口縁部		沈線で区画された帯縄文を有する		
	6	口		波状口縁を呈すと思われ、磁層を有する。内外は横位の沈線を施す		
	7	口		口唇部に縦線を付し、右下がりの斜め線を施す		
	8	口		沈線文	安行3c式	
	9	口		沈線文で、入紐文が施されると思われる	口	
	10	口		沈線文。部分的に条線が施される	口	
	11	口		入紐文と沈線で区画された中に斜め文が施される	口	
	12	口		沈線で造形文が施される	口	
	13	口		沈線文	口	
	14	口		条線文が部分的に施される		
	15	口		口唇部が窄めてうすくなり、浅い沈線が斜位及び横位に施される		
	16	口		不明瞭な横位の沈線が残る		
	17	口		口唇部に刻みを入れ、条線を施す		
	18	口		横位の沈線文		
	19	口		横位の沈線を1条めぐらす。地文は横文		
	20	口		縄文		
	21	胴部		斜位の沈線文		
	SK-33	1	口縁部		太い沈線が施される	
	SK-34	1	口縁部		帯縄文を直段にわたって施す	安行1式
		2	胴部		屈曲部に帯縄文を施す	口
		3	口縁部		斜文及び沈線文	
4		口		斜突及び沈線文		
5		口		1本の沈線で口唇部と区別し、上部に斜突文、下部に横位の沈線を施す		
6		口		口縁部に2本の沈線を行い、口を別点斜突文で囲める		
7		口		口縁部に斜突を加えた横位の磁層を施す		
8		口		沈線間を斜突文で埋める		
9		胴部		細い縄文		

表107 (第165図 土壇出土遺物)

出土遺物・区	遺物%	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-55	1	刷 部		口縁沈線を施す	
	2	口 縁 部		口縁に平行な沈線を有する	
	3	"		口縁部に帯状文を有し、それに刺突文が加わ る	
	4	"		沈線及び刺突文	安行3c式
	5	刷 部		沈線間に刺突文を施文する	"
	6	口 縁 部		口縁に平行な沈線を施文する	
	7	"		まばらな斜沈線	
	8	"		横位・斜位の条線文	
	9	"		無文	
	10	"		斜位の条線	
	11	"		刺突文を施す	
SK-56	1	口 縁 部		沈線及び刺突文	
	2	"		平行沈線間に刺突を有する	
	3	"		沈線文。ヘラ整形	
	4	"		斜位の沈線文を施す	
	5	"		口縁部は外反し、無文	
	6	刷 部		条線文がみられる	
SK-57	1	口 縁 部		口縁部はS字状に屈曲し、沈線及び刺突文を 施す	
	2	刷 部		平行沈線間に刺突を加える	
	3	口 縁 部		沈線及び刺突文がみられる	安行3c式
	4	"		斜位の沈線を有する	"
	5	刷 部		横位の沈線を施文し、上部には刺突文が加わ る	"

表108 (第166図 土壌出土遺物)

出土遺物・区	品名	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK 57	6	口縁部		沈線による入線文を施す	安行3C式
	7	"		沈線による入線文が施されていると思われる	"
	8	"		沈線で円及び長方形を施文する	
	9	胴部		No.8の下部に相当すると思われる	
SK 61	1	胴部		平行沈線及び弧状の沈線を施文し、弧状の沈線間には縄文を充塞する	
	2	口縁部		わずかに条線文がみられる	
SK 62	1	口縁部		沈線で三角形の文様を区画し、中に縄文を充塞する。外は磨消し	堀之内式
	2	"		横位及び弧状の沈線で文様を区画し中には縄文を施す。外はヘラ磨消し	
	3	"		横位及び弧状の沈線で区画し中に斜い平行沈線を充塞する	
	4	胴部		沈線文で入線文を立していたと思われる	安行3C式
SK 63	1	胴部		沈線で文様を区画し、中に縄文を充塞する。外は磨消し	
	2	"		沈線及び縄文が施される	
	3	"		縦位の沈線が施される	
SK 64	1	口縁部		沈線文	
	2	胴部		弧状及び斜位の沈線が施される。地文は縄文	
	3	口縁部		波状口縁の波節部で、虫みのある装帯が付けられている	
	4	"		口縁に平行な刻みのある装帯を付す	
	5	胴部		沈線で方形の文様を区画し中に縄文を埋める。外は磨消し	堀之内式
	6	口縁部		口縁部に平行な細い沈線を施文し、胴部は条線を埋める	

表109 (第167図 土壌出土遺物)

出土遺物・区	品名	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK 69	1	口縁部		8の字状の貼り付けを有する	
	2	"		口唇部突から隆帯のみ、下部に斜沈線を施す	
	3	胴部		沈線で区画された中に縄文を充塞する。外は磨消し	
	4	"		横位の沈線文がみられる。地文は縄文	堀之内式
	5	"		沈線で区画された中に縄文を充塞する。外は磨消し	
	6	"		上部に車突のある隆線を配し、横位及び縦位の沈線を施文する	安行2式
	7	口縁部		口縁に平行な沈線及び斜突文を施す	
	8	"		口唇部に斜突文がみられる	
	9	"		沈線文?	
	10	"		縄文	
	11	"		縄文	
	12	"		縄文	

表110 (第168図 グリッド出土遺物)

品名・形式	数量	形状・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
A.1a	1	台付鉢形	現存高 14.1	外面はヘラ磨き、内面は細かいなヘラツグ、横走する2段の縄文密 (R1) を有する	黒褐色を呈する 写45-1
A.1b	2	注口土器	器高 5.8 底径 7.8	沈線・横線に縄文が配され、口縁部は割み付、研突が施される。口縁部左右に1対の貫通孔がある	外面は灰褐色、内面は灰白色を呈する。晩期 写48-3
A.1c	3	深鉢形	口径 10 器高 10.2 底径 2.3	外面はヘラ磨り、内面は上部横ナデ、下部はヘラ磨り	にぶい褐色を呈する。晩期 写47-3
A.1d	4	深鉢形	口径 10.3 器高 13 底径 2	外面はヘラ磨り後沈線及び細密縄。 深底化初物器、上面はヘラ磨り	明赤褐色を呈する。晩期 写41-4
A.1e	5	浅鉢形	口径 12 器高 15.3 底径 2.8	ヘラ磨り後斜め方向の浅い横線を施し、支線を描き、縦方向の1単位文様は全周11・5度である	黒褐色を呈する。晩期 写47-3
A.1f	6	深鉢形	口径 12.7 器高 15.3 底径 5	ヘラ沈線文目により、全面に沈線を描する。胴部上段は平行法線間に羽状を呈する沈線、中段は横走、下段は縦長の沈線。口内に横土紐による3ヶ所の小突起	灰褐色を呈する。晩期 写47-2
A.1g	7	浅鉢形	口径 16.4 器高 5.8	口縁に横土紐左付による4ヶ所の突起を有する。平行沈線間に羽状文を描する。内外面ともヘラツグ	にぶい褐色を呈し、底部は褐色を呈する。安行3c式 写46-2
A.1h	8	鉢形	口径 10 器高 8.3 底径 4.6	胴部・胴部縄文様帯ともに沈線による区割りに研突。中央にヘラツグ、外面式部付足はヘラ磨り	茶褐色及び黒褐色を呈する。安行3c式 写45-4
A.1i	9	浅鉢形	口径 15.7 器高 5.3 底径 10.6	角の深い方形を呈する。胴部・底部とも沈線による人眼文。口縁下に2ヶ所の貫通孔を有する	灰褐色を呈する。安行3c式 写46-1
A.1j	10	浅鉢形	口径 13.5 器高 4.6	沈線・横線による区割りに研突が施される。口縁部に貫通孔あり	黒色を呈する。安行3c式 写49-6
A.1k	11	鉢形	口径 16.6 器高 9.3	口縁及び平行・傾斜沈線間に羽状文を描す。近状沈線間に沈線による人眼文が施される	褐色を呈する。安行3c式 写45-1
A.1l	12	深鉢形	口径 11.7 器高 15.1 底径 4.2	外面はヘラ磨り後、沈線・支線を描する。内面はヘラ磨り	暗褐色及土褐色を呈する。安行3c式 写47-6
A.1m	13	高鉢形	口径 10.7 器高 11.8 底径 4.2	全面縦方向ヘラツグ。内面下部のみ縦方向ヘラツグ。沈線は丸ノミ状のもの及びヘラ先により縦突又は棒状の物の先端を名に研突する	暗赤褐色を呈する。安行3c式
A.1n	14	鉢形	口径 12.5 器高 6.8	口縁に大小1対の突起が3ヶ所、横線・平行沈線・点彩文を組合せて上下2段に配列する	褐色を呈する。安行3c式 写45-2

表111 (第169図 グリッド出土遺物)

出土遺物・区	遺物名	器形・部立	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
A ₁ b ₁	1	深鉢形	口径 37.8 現存高 14.5	縁部に割突を有する平行沈線を通し、上部には二又状入組文、下部に連続文を施文する	灰石・スコリアを含み焼成は普通、にぶい褐色を呈す。安行3C式 写49-1
A ₁ b ₂	2	深鉢形	口径 12.0 器高 15.3 器径 3.9	表・裏面ともヘラ削り手法がみられ、口縁部から胴部にかけて灰化物が付着する	灰石を含み、物陰褐色を呈す 写47-1
A ₁ b ₃	3	深鉢形	口径 15.0 器高 16.8 底径 4.9	表・裏面ともヘラ削り後ナグによる整形。割文	砂粒・雲母を含み、にぶい赤褐色を呈す
A ₁ b ₄	4	浅鉢形	口径 16.9 器高 6.8 底径 9.5	ゆるやかな波状口縁を呈し、二又状入組文・連続文が施文される	スコリア・砂粒を含み灰黄褐色を呈す。安行3C式写45-3
A ₁ b ₅	5	鉢形	口径 4.3 現存高 6.2	湧り字形の沈線が横方向に1周する。器外面ともヘラ削り後ヘラナグ	スコリア・砂粒を含み、にぶい褐色を呈す。安行3C式
A ₁ b ₆	6	小形丸底土器	口径 12.6 器高 9.1	ヘラ削り後ヘラナグによる整形、外壁は輪積痕が残る	スコリア・砂粒・砂礫を含み、にぶい赤褐色を呈す 写49-2
A ₁ b ₇	7	浅鉢形	口径 7.0 器高 9.9	平行沈線が中段に施され、上段の空間に向き合った弧状沈線が交互に配される	スコリア・砂粒を含む。安行3C式 写50-1
A ₁ b ₈	8	鉢形底部	現存径 3.8 底径 6.5	内外面ともヘラ削きが見られる	スコリア・砂粒を含み、赤褐色を呈す
A ₁ b ₉	9	浅鉢形	口径 (29.2) 胴部最大径 (19.2) 現存高 (15.0)	外壁は太い沈線による入組文と縄文、内壁は口縁に沈線がめぐり胴部はヘラナグ	スコリア・砂粒を含み褐色を呈す。前浦式
B ₂ c ₁	10	深鉢形	口径 22.6 現存高 14.2	口縁部に8の字形の粘土紐を貼り付け、下部には三角形の磨面施文が1周する	砂粒を含み灰褐色を呈す。堀之内式
B ₂ b ₁	11	深鉢形	口径 23.8 現存高 23.2	口唇に粘土紐を貼り付けた小突起を有する。横方向の磨面施文をつなぐ線状突起に縦長の割みを有する	砂粒・スコリアを多く含み、灰黄褐色で部分により褐色を呈する
A ₁ b ₇	12	浅鉢形	口径 13.0 現存高 5.9	胴部の沈線による区割内の小割突を有する。底面は沈線による入組文内に斜点文と三又文	砂粒・砂礫を含み、にぶい赤褐色を呈す。安行3C式

第3節 ま と め

本貝塚においては、純貝層の堆積をみることはできなかった。4ヶ所の小規模な堆積区は全て貝殻の密集の度合いが小さく、冬木A貝塚の貝層の様相と異なっている。これは、調査エリアが冬木B貝塚の中心を大きくはずれていたためであると思われる。各地積区の周辺には、ブロック状の貝殻の小堆積が見られる。これは、「貝殻を捨てる場所」へ正確に投棄されたとはかぎらないこと、言い換えれば、「貝殻を捨てる場所」の「あたり」へ「適当に」投棄が行われた可能性がある

ることを思わせる。そのまま投棄が続けられれば、中央には貝殻が厚く堆積して純貝層を形成して周囲に広がり、周辺に捨てられた貝殻（ブロック状の小堆積）と連続して混土貝層・混貝土層を形成したであろうことが予想される。今回調査した各堆積区は、貝層の形成過程の観点から考えるならば、冬木A貝塚において見られた堆積区の前段階と考えることができる。

住居址は、その大半がエリアの南縁にあたる台地の縁辺部の線とほぼ平行に並び、特に中央部に集中している。北部は第4号・5号住居址を除き検出されていない。平面形は楕円形状を呈するものと隅丸方形・長方形を呈するものである。ピット群の検出によって確認された住居址は、楕円形状を呈する1群が北寄りに並び、長方形を呈する1群が南寄りに並んでいる。構築時期は不明であるが、その位置から二期に分けることが可能である。なお、これらの住居址の床はロームであるが、木炭はもっと上の面にあった可能性が高い。床が確認された住居址の構築時期については、不明である。加址と断定できる遺構を確認することもできなかった。出土遺物についてみると、第1号住居址は縄文晩期に属する土器片が多く、第2号住居址は同後期に属する土器片が多い。

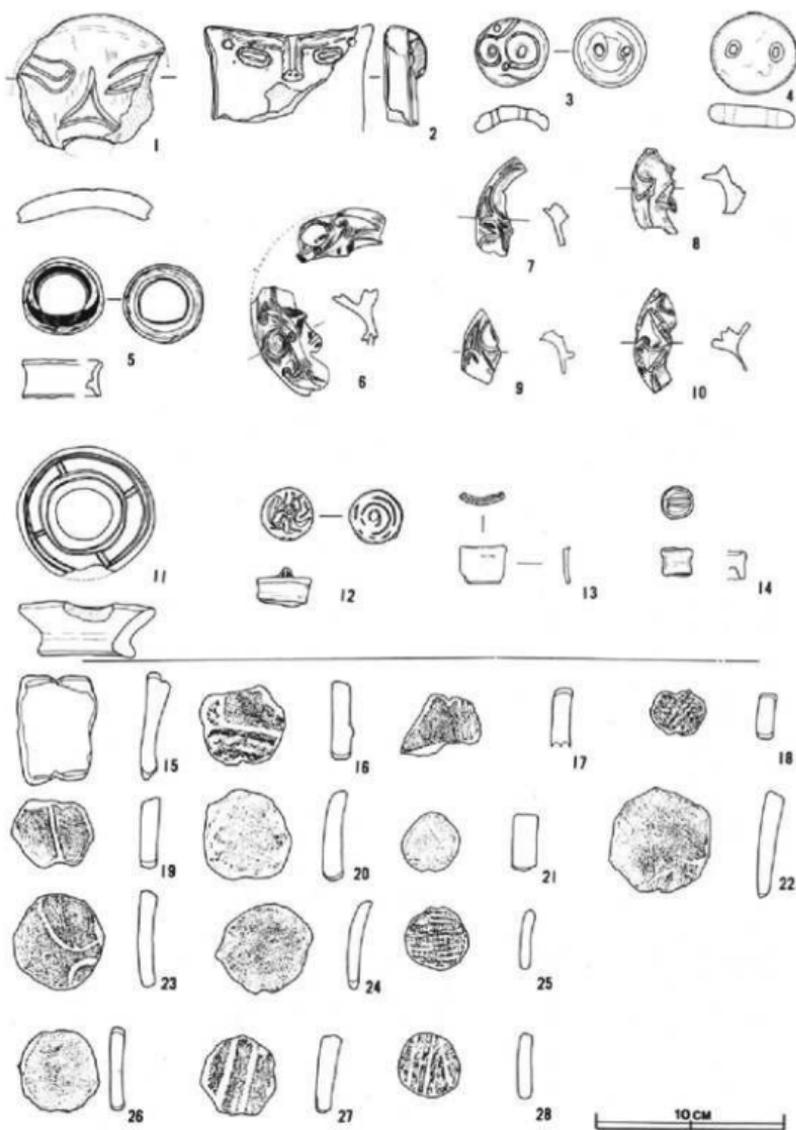
土塙は、住居址群の北寄りに住居址群とほぼ平行に並び、中央部に多く検出された。平面形は多岐にわたるが、円形状を呈するものが最も多い。床は大部分が平坦である。小ピットを有する土塙が数例見られた。第1号・41号の土塙の小ピットは柱穴と思われるが、他の土塙の小ピットについては、性格は不明である。

本貝塚において出土した土器は、縄文後期後半から同晩期に属するものが大部分を占める。第4号住居址の西側・南側から、小型深鉢等の完形品が多数出土している。遺構は確認することができず、むしろ「包含層」としてとらえるべきであったかも知れない。石斧・石鏃等はあまり多く出土していないが、台付石皿・石棒・独熊石等の石製品がみられた。

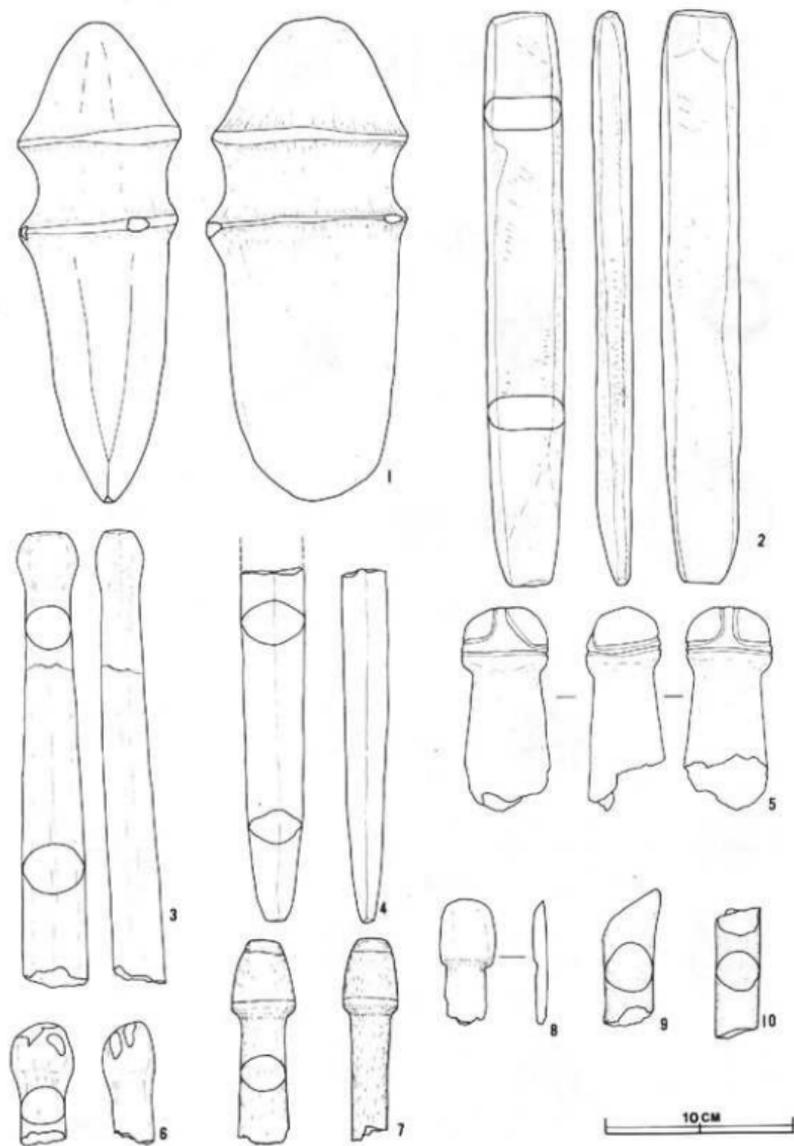
本貝塚は、遺物等から判断して縄文後期前葉から中葉にかけて小規模な集落が営まれ、同末葉晩期初頭及び中葉以降盛期をむかえたものと思われる。冬木A貝塚の隆盛期（後期前葉）にはすでに集落が営まれ、同貝塚の終末期である後期末葉に、最初の隆盛期を迎えたわけである。同貝塚において、同時に集落が営まれた可能性については、何とも言えない。しかし、将来的には冬木A貝塚において集落が営まれて貝塚が形成され、その後冬木B貝塚に集落が営まれたと見る事が妥当であろう。



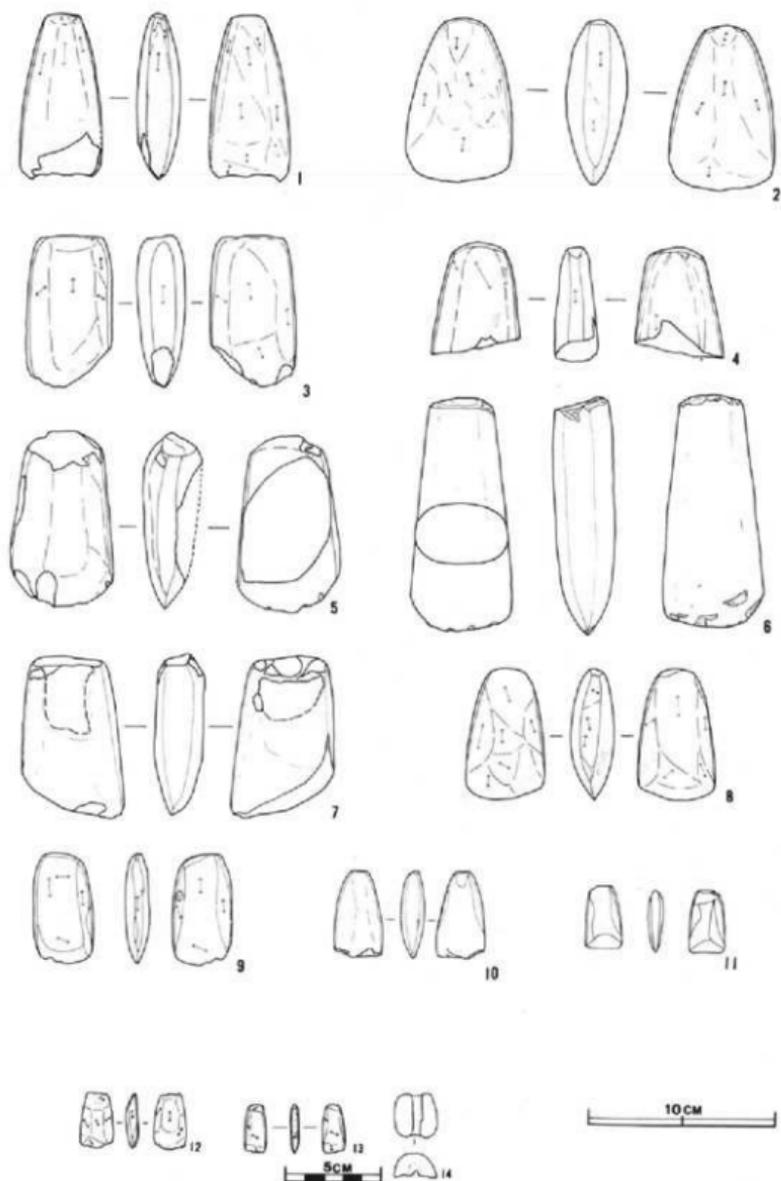
第170图 冬木A・B出土土偶



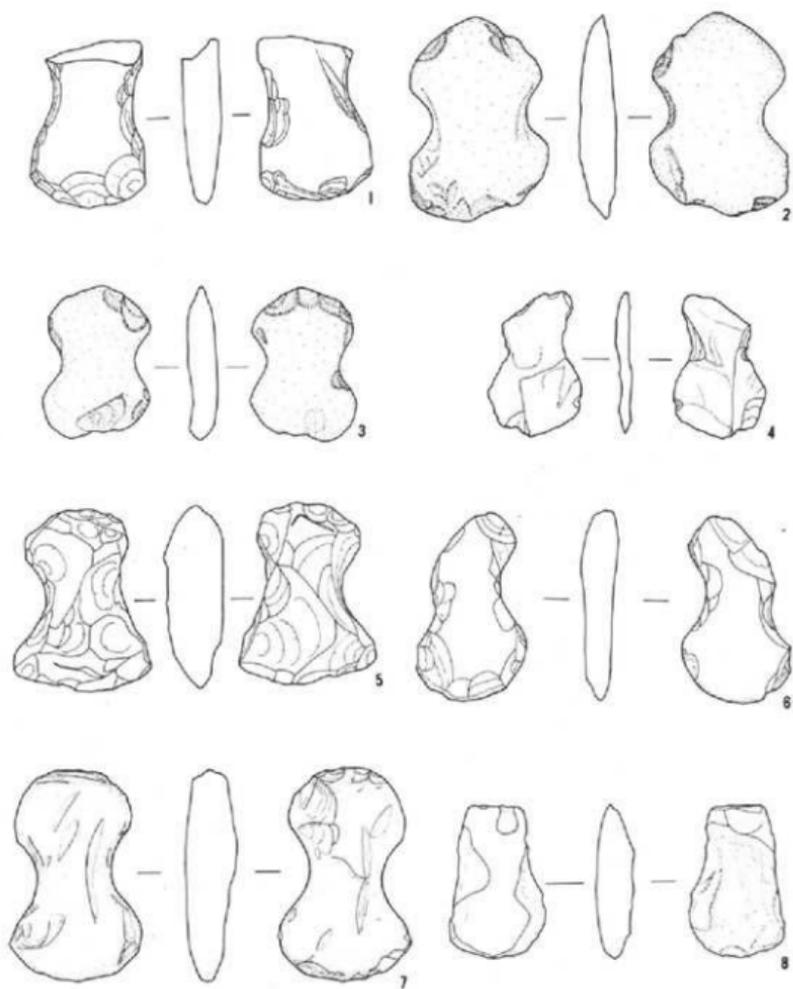
第171図 冬木A・B出土土製品



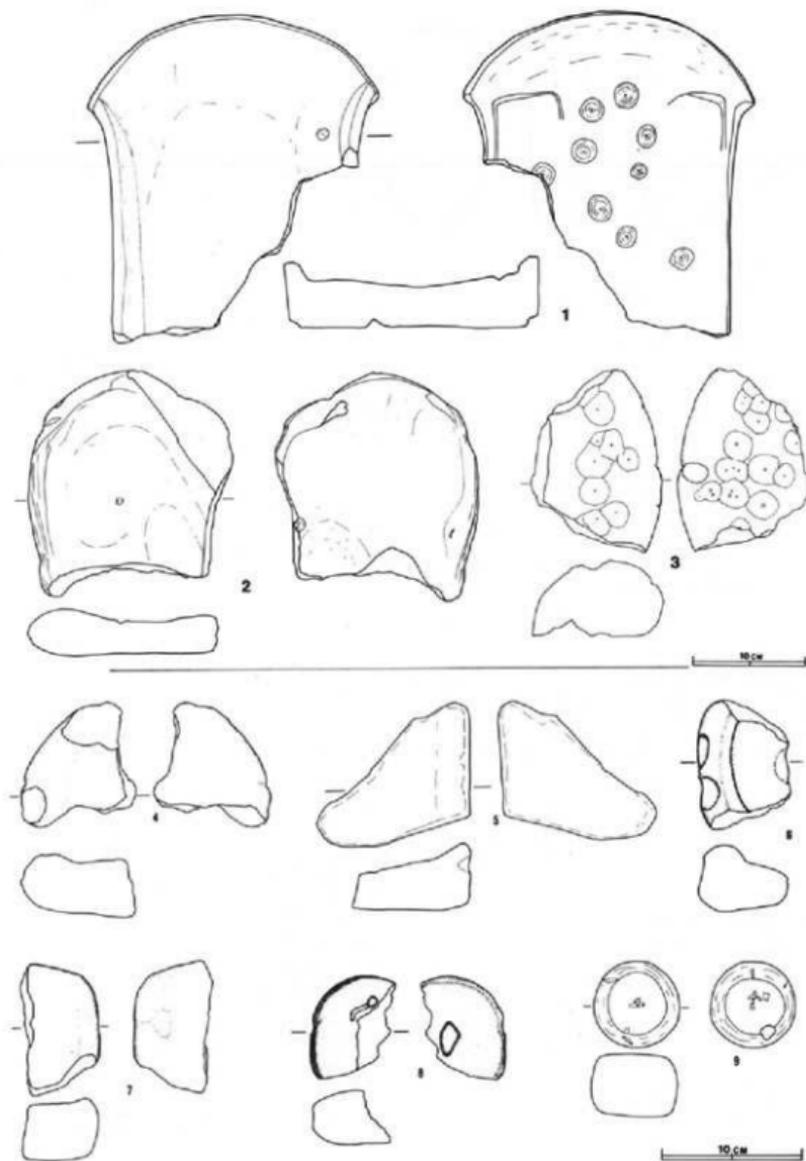
第172图 冬木A・B出土独鈞石・石棒・石刺



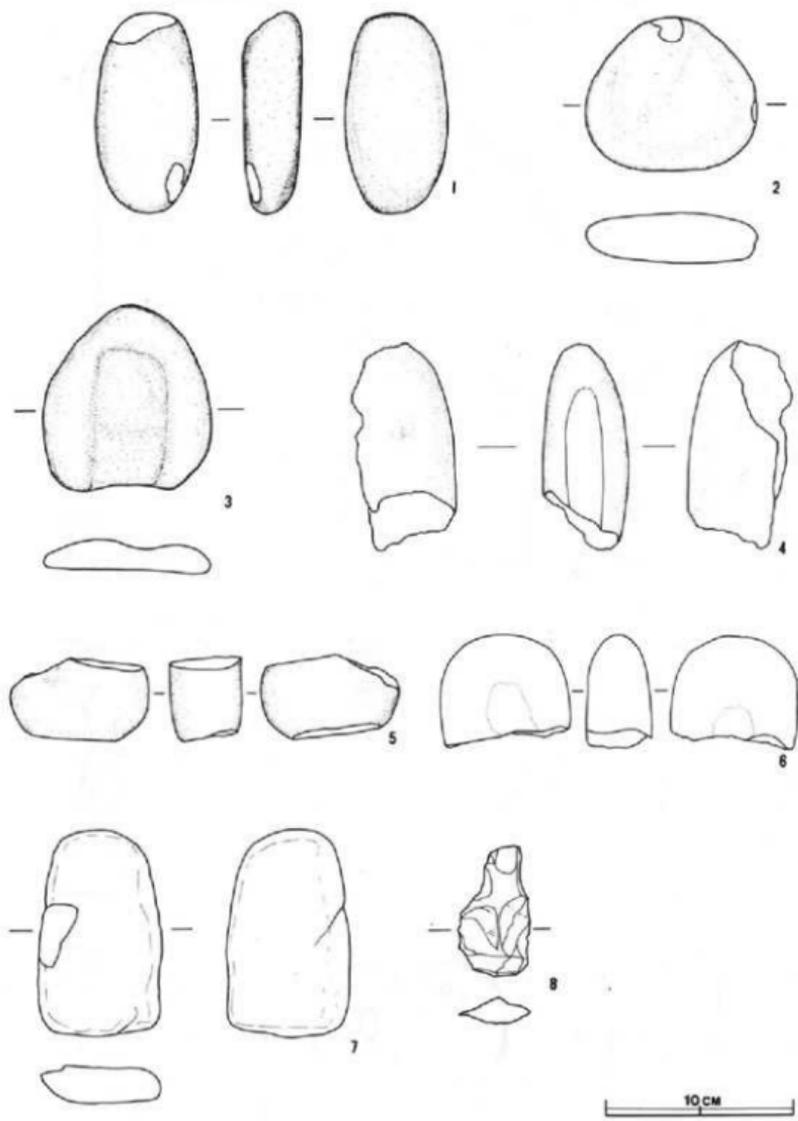
第173圖 冬木A出土磨製石斧



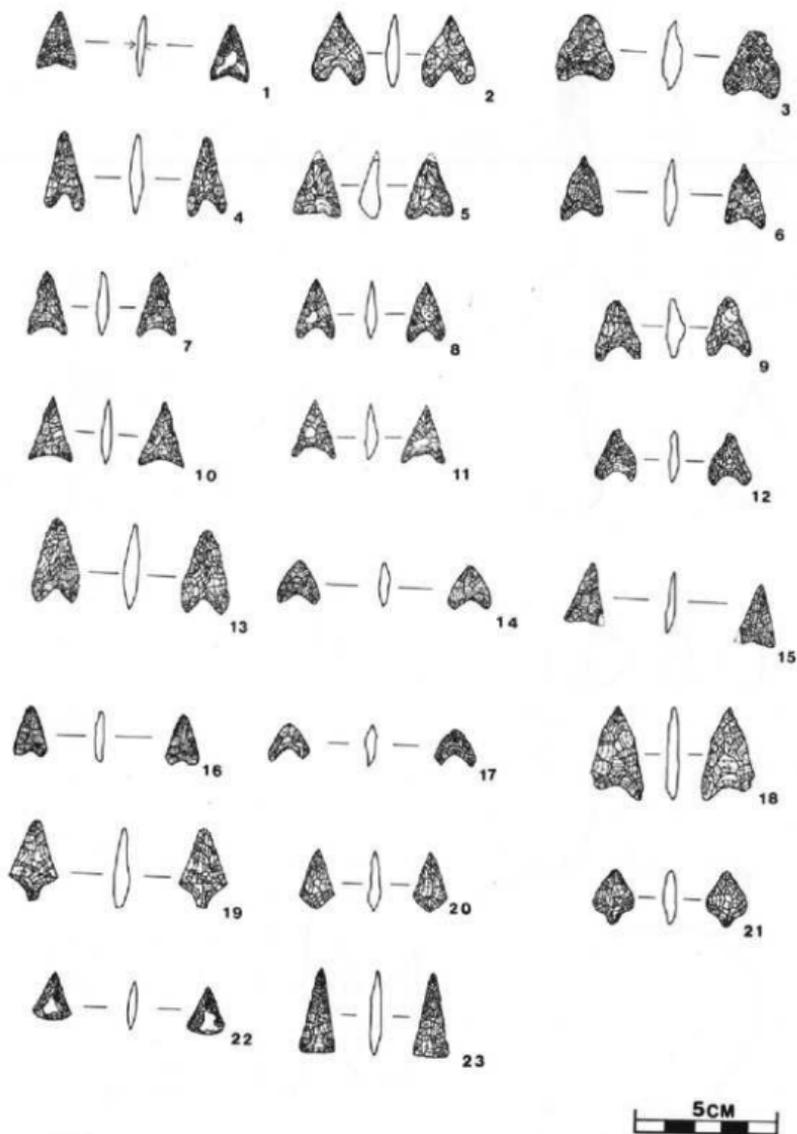
第174图 冬木A出土打製石斧



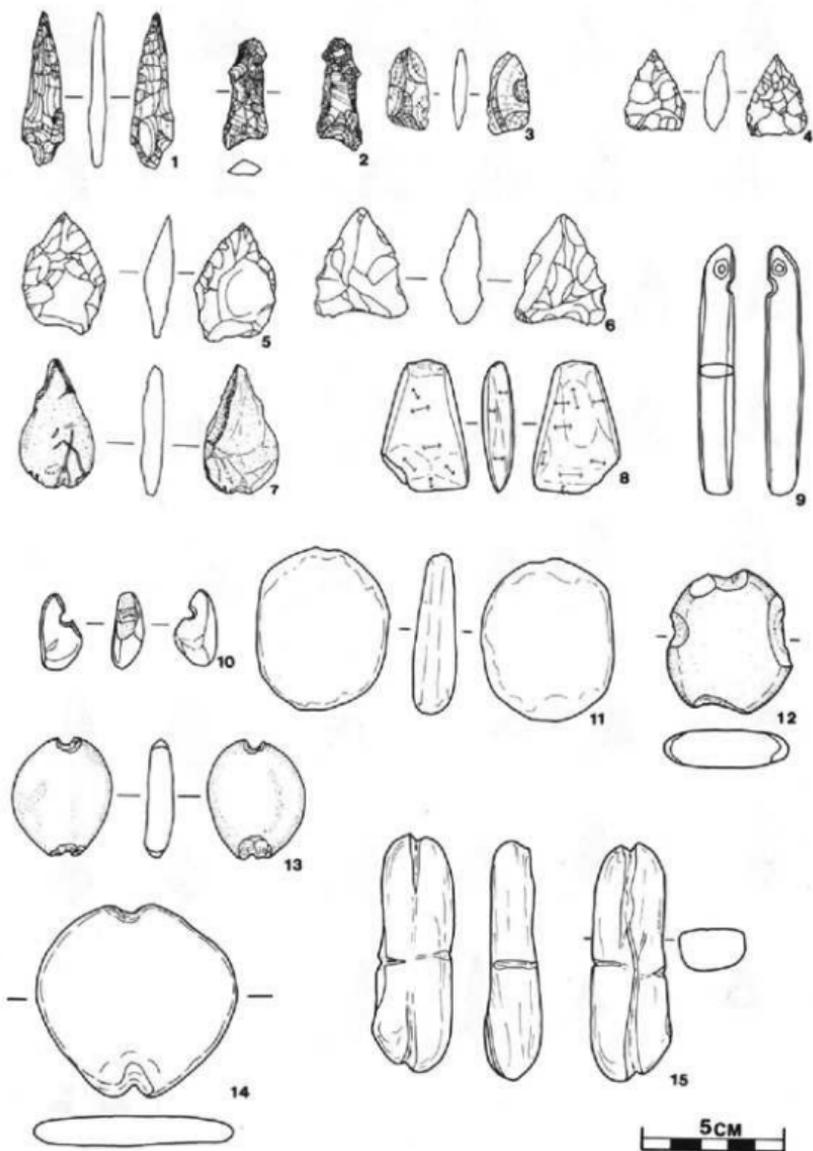
第175図 冬木A・B出土石器・磨石類



第176圖 冬木A出土磨石・凹石類



第177回 冬木A・B出土石鏃



第178圖 冬木A・B出土石製品

表112 第170図 冬木A・B出土土偶

No	冬木A・B	出土位置	部位	供考
1	A	C _{1a}	頭・左肩	目は凹形胎付、口は貫孔によって表現される。後頭部は髪を表現したと思われるブッシュ状突起の頸飾を残す。胴はA式陶 写52-1
2	A	C _{2a}	頭・肩	全体に粗粒で、体毛はヘラによる縦位のナデ。頭頂部は指頭による渦文。眼は刺突。鼻孔1つあり。丸管状B式陶 写52-2
3	A	SD ₁ C _{2a}	頭・胸・右足	乳房・腰を表現する。頭部を筒巻状に盛り上げ、髪を表現しているらしい。上半身はSD2、下半身はC _{2a} から出土。丸管状B式陶 写52-3
4	A	A _{1b}	頭・肩・肘・足	乳房・身などは胎り付。文様はヘツと丸棒状の土糸により浅い凹線が施される。頭部はS字状の窪みを有する。目及び化粧(?)は凹みで表現される。頸部は空洞になっている。焼文焼陶
5	A	C _{2a}	頭・胸	胸部を誇張、目・口は小り状の粘土を貼り付け、刺突を残す。後頭部は筒状突起。丸管状B式陶 写52-4
6	A	C _{2a}	胸	列点文により体の輪が表わされる 写52-5
7	B	SH	右足	念前に虎顔・塗部を配し、裏面には列点文が施される。朱が付着する 写52-6
8	B	A _{1c}	頭	眉・鼻は胎り付け。目・鼻孔・口・口は刺突により表現される。口は貫通孔である。後頭部に突起を付け、顔面には尖が残っている
9	A	B _{1a}	左足	下が太い丸人状。ヘツ彫きが施される 写52-7
10	A	C _{1a}	胸	浅い凹線により文様が施される。顔形はヘツによる縦位なので 写52-8
11	A	C _{2a}	頭・肩・左足	頭部は抽象的に表現される。胸部は丸棒状 写52-9
12	A	B _{1a}	下半身部	体部の整形は指頭による粗粒なもの。立つことができる 写52-10

表113 (No.1~14) 第171図 冬木A・B出土土製品

No.	名称	A・B目録	出土位置	層位	備考
1	土 壺	B	A _{1b}	III	断面は円筒し、口・底は流線状で、口は貫通している。ヘラ削り 写53-1
2	土 瓶	A	A _{1a}	II	赤巻状を呈し、頂部の左右に貫通孔を有する。口・底は降巻貼付で口は流線状で表現する 写53-2
3	有孔土製円板	A	C _{2a}	II K	流線及び刺突で施文し、中央左右の穴は貫通孔である。断面を表現しているのであらうか 写53-3
4	"	A	D _{1b}	II K	2ヶ所の貫通孔を有し、径 0.9~1.0cm である 写53-4
5	土 罎	B	SK63		直径 4.3cm、高さ 2.0cm を測る。内部にはがみのある膠着がみられる。土が黒色部には染が仕舞っている 写53-5
6	"	B	A _{1a}	III	極めて大形のお椀で流線 10cm をオーバーすると思われる。立体的な装飾がなされている 写53-6
7	"	B	A _{1b}	II	" 写53-7
8	"	B	A _{1b}	III	" 写53-8
9	"	B	A _{1a}	II	" 写53-10
10	"	B	A _{1b}	II	" 写53-11
11	"	B	A _{1b}	III	上面直径 7.8cm、下面直径 5.2cm、内部にはV字状溝を2段に施し、4ヶ所に層位の装飾を有す。黒色部に染が残っている 写53-12
12	"	B	SK29		粘土板を包いて仕上げたもので、上中央突起に突起がつく。上面は流線状の装飾を施し、下面には染を包いた位の流線状に見える直径 3.8cm 写53-13
13	"	B	A _{1b}	III	上面外縁に刺突が施される。厚さ 2.0cm 写53-14
14	"	A	A _{1a}	II	直径 1.7cm、厚さ 1.5cm、上面に2本の流線が施される。ヘラ彫形 写53-15

(No.15~28)

No.	名称	出土位置	ノコギリ長さ(長径)(cm)	幅(厚径)(cm)	重さ(g)	備考
15	土 罎	SK36	5.1	4.2	33.5	
16	"	SK25	3.9	4.9	25.5	上部欠
17	"	SK2b	2.5	3.8	14.0	下部欠
18	"	SD1	2.0	2.9	8.0	
19	"	SK55	3.3	4.3	15.5	切れ込み3ヶ所
20	"	C _{2a}	4.6	4.6	24.0	写53-9
21	"	C _{2a}	3.0	3.1	14.0	
22	"	B _{2a}	5.4	5.2	33.5	冬木B目録
23	土製円板	A _{1b}	5.2	4.7	24.5	冬木B目録
24	土 罎	A _{1b}	4.5	4.4	16.5	冬木B目録
25	"	A _{1b}	3.3	3.3	8.5	冬木B目録
26	"	B _{2a}	4.2	4.1	17.5	冬木B目録
27	"	A _{1a}	4.2	3.8	9.5	冬木B目録
28	土製円板	SK21	3.5	3.2	8.5	冬木B目録

表114 (第172図 冬木A・B出土石製品)

No	器 種	出土位置	層 位	石 質	備 考
1	独 站 石	SK52	覆 上	安 山 岩	冬木B貝塚, 使用痕あり 写51-4
2	石 剣	C ₁ f ₄	II	頁 岩	明瞭な擦痕が残る 写43 7
3	石 棒	B ₂ a ₁ A ₁ h ₆		閃 緑 岩	冬木B貝塚, 先端が B ₂ a ₁ ; 下部が A ₁ h ₆ から 山上 写51 2
4	Li 剣	A ₁ h ₆		"	冬木B貝塚, 断面変形を呈する 写51 3
5	石 棒	C ₂ a ₄	II	雲 母 片 岩	先端に沈線を配する 写43-1
6	"	A ₁ j ₅	II	安 山 岩	冬木B貝塚
7	"	A ₁ g ₆	II	閃 緑 岩	冬木B貝塚, 先端に2本の沈線を配する
8	"	A ₁ j ₅	II	頁 岩	冬木B貝塚
9	"	B ₂ c ₆	II	緑 泥 片 岩	
10	"	SK91	覆 上	"	

表115 (第173図 冬木A出土磨製石斧)

No	器 種	出土位置	層 位	石 質	備 考
1	磨 製 石 斧	SK106	覆 上	安 山 岩	使用痕 写42-1
2	"	C ₁ e ₆	II K	砂 岩	安山岩質 写42-2
3	"	C ₂ c ₁	"	安 山 岩	写42-7
4	"	C ₁ d ₄	"	砂 岩	写42-4
5	"	C ₂ e ₅	II	安 山 岩	写42-3
6	"	C ₂ e ₅	II K	"	写42 9
7	"	D ₂ a ₇	III	"	写42-8
8	"	D ₂ a ₇	III	"	写42-6
9	"	C ₂ c ₁	II K	チャート	
10	"	C ₂ f ₄	II	蛇 紋 岩	
11	"	C ₂ h ₇	II	"	
12	"	C ₂ g ₅	II	チャート	
13	"	C ₂ e ₅	II K		
14	玉	C ₂ h ₃	III	燧 石	穿孔部で半分欠

表116 (第174図 冬木A出土打製石斧)

No	器種	出土位置	層位	石質	備考
1	打製石斧	SI25	覆土		局部磨製 写42-14
2	"	B ₂ f ₃	I	頁岩	一方の端が三角形状に尖る 写42-5
3	"	B ₂ f ₁	II K	安山岩	局部磨製 写43-4
4	"	B ₂ d ₆	II K	頁岩	写43-2
5	"	C ₂ b ₁	II K	砂岩	写43-2
6	"	C ₃ a ₂	II	頁岩	局部磨製
7	"	C ₃ a ₃	II	ハンノウ岩	"
8	"	C ₃ b ₃	II	"	" 写42-11

表117 (第175図 冬木A・B出土石皿・磨石類)

No	器種	出土位置	層位	石質	備考
1	石皿	B1b ₆	II	安山岩	冬木B貝塚、良く整形されている 写51-1
2	"	SI10	覆土	緑泥片岩	両面に小さな凹み
3	"	SK056	"	安山岩	両面に多数の深い凹み 写43-9
4	"	SI11	"	"	多孔質
5	"	SK049	"	"	側面に深い凹み 写43-8
6	"	SK130	"	"	表面に明瞭な稜を持つ
7	"	SK085	"	"	表面に明瞭な稜を持つ
8	磨石	SK087	"	"	両面に浅い凹み
9	"	SI11	"	"	写42-16

表118 (第176図 冬木A出土磨石・凹石類)

No	器種	出土位置	層位	石質	備考
1	砥石	SI2	覆土	安山岩	磨石としても使用(?)
2	砥石	SK102	"	砂岩	砥石としても使用(?)
3	"	"	"	"	
4	凹石	SK025	"	安山岩	河面に浅い凹み
5	"	SK013	"	"	
6	"	SI25	"	"	西面に凹み
7	砥石	SI26	"	砂岩	
8	割片	SK188	"	安山岩	

写42 15

表119 (第177図 冬木A・B出土石類)

No	器種	出土位置	層位	石質	備考
1	石葉	B ₁ f ₄	IIK	黒曜石	
2	"	C ₁ d ₆	II	チャート	
3	"	C ₂ e ₅	IIK	"	
4	"	C ₃ e ₄	II	"	
5	"	C ₄ g ₅	IIK	黒曜石	
6	"	SI2	覆土	"	
7	"	C ₂ d ₇	III	チャート	
8	"	D ₁ c ₆	II	"	
9	"	C ₁ c ₄	II	"	
10	"	C ₂ d ₈	II	"	
11	"	C ₃ g ₅	II	"	
12	"	B ₂ h ₁	IIK	石英	
13	"	C ₃ f ₅	III	チャート	
14	"	SI-8	覆土	黒曜石	
15	"	C ₂ c ₆	III	チャート	
16	"	C ₃ f ₁	IIK	黒曜石	
17	"	C ₂ c ₄	II	チャート	
18	"	SI2	覆土	"	
19	"	B ₂ a ₁	II	"	冬木B貝塚
20	"	B ₁ f ₁		黒曜石	
21	"	C ₃ d ₆	IIK	チャート	
22	"	C ₃ a ₁	II	黒曜石	
23	"	C ₃ h ₁	II	硬質頁岩	

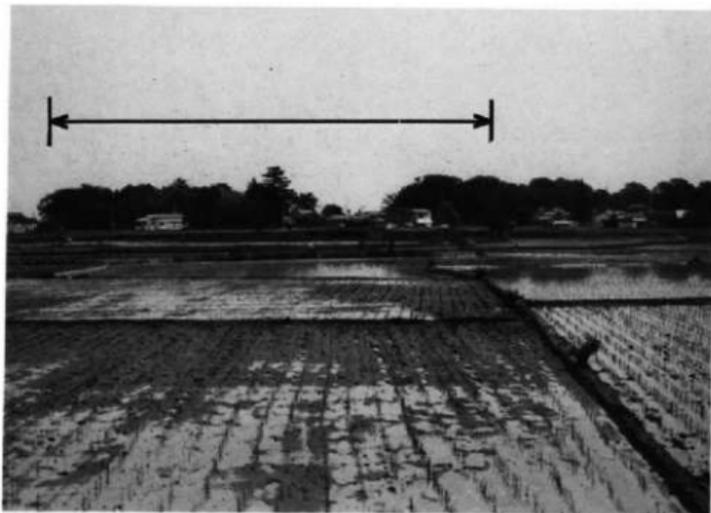
表120 (第178図 冬木A・B出土石製品)

No	器 種	出土位置	層 位	石 質	備 考
1	有柄尖頭器	B ₂ c ₁	II	硬質頁岩	
2	異形石製品	C ₂ b ₇	I	黒 曜 石	
3	石 錐	C ₂ e ₉	IIK	チャート	
4	石 錐	SI8	複 十	チャート	
5	〃	C ₂ h ₆		頁 岩	未成品
6	〃	SK78	覆 上	チャート	未成品 写35 4
7	割 片	C ₂ c ₂	IIK	砂 岩	自然面を残す
8	石 斧	D ₂ b ₈		蛇 紋 岩	研磨により光沢
9	垂 錘	SI-11	複 十		くびれあり(穿孔の痕跡か?)
10	〃	B ₂ d ₉	IIK	ヒ ス イ	穿孔部より欠
11	石製円板	B ₂ a ₈	II	泥 片	冬木B貝塚
12	石 錐	C ₂ h ₈		砂 岩	四隅を両面から打ち欠
13	〃	C ₂ b ₂	IIK	〃	両側を打ち欠
14	〃	C ₂ e ₂	IIK	頁 岩	打ち欠部に珪砂が見られる
15	〃	B ₂ h ₁	I	緑 泥 片 岩	断面V字形の溝

図 版

(冬木A貝塚)
(冬木B貝塚)

写真1 冬木A



1, 冬木A貝塚遺景



2, 冬木A貝塚発掘前全景



1, 調査風景



2, 調査風景



1, B1・B2区遺構全景



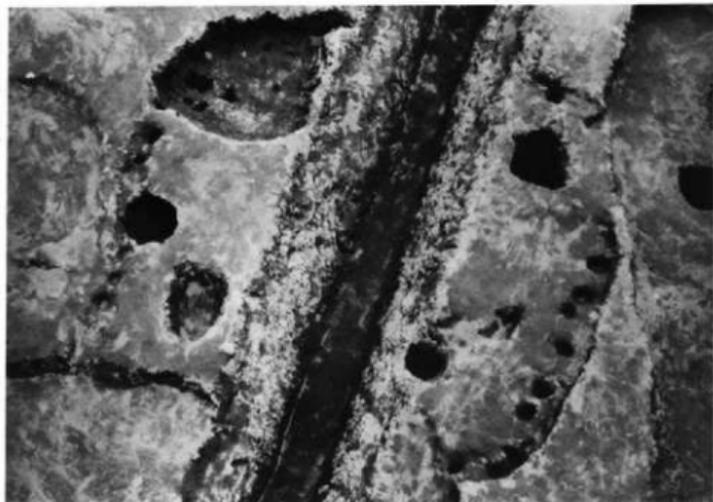
2, C2区遺構全景



1, C3区遺構全景



2, D2区遺構全景



1. 第1号住居址

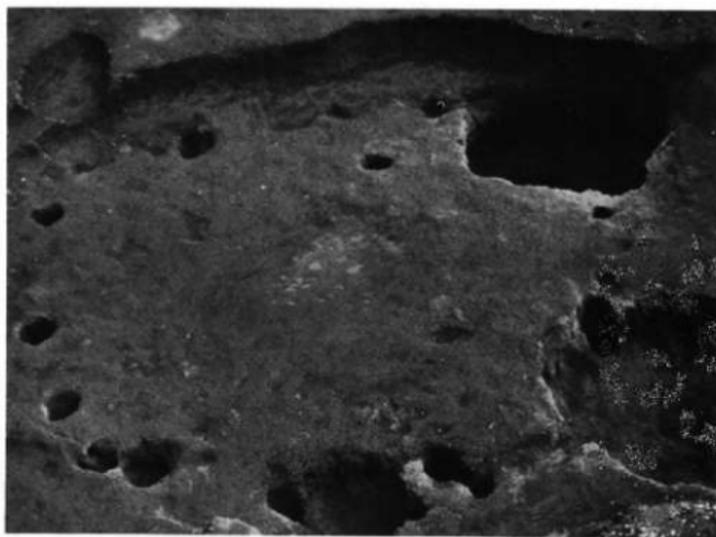


2. 第3号住居址

写真6 冬木A



1, 第4号住居址



2, 第5号住居址

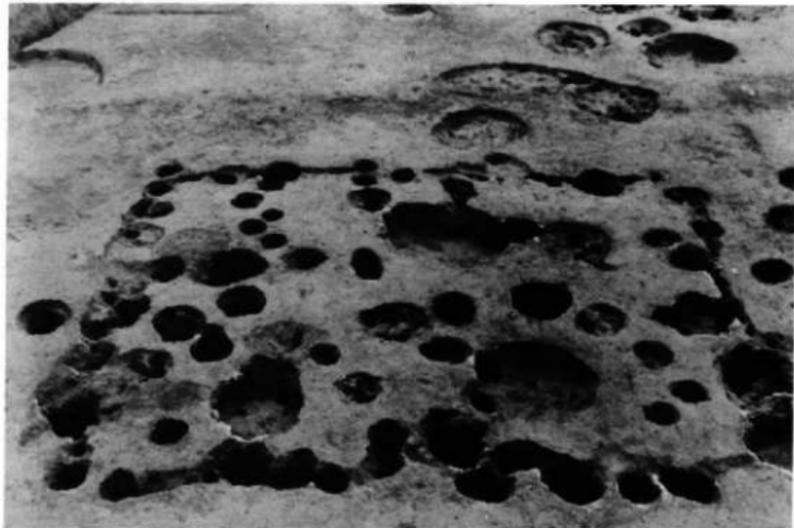
写真7 冬木A



1. 第6号住居址



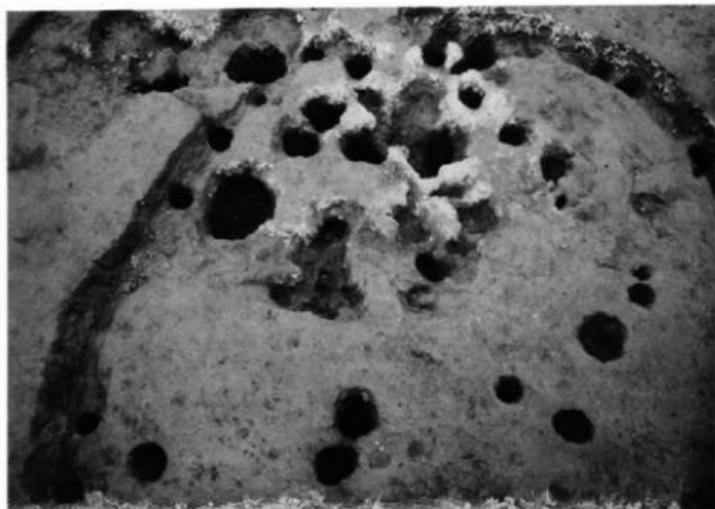
2. 第29号住居址



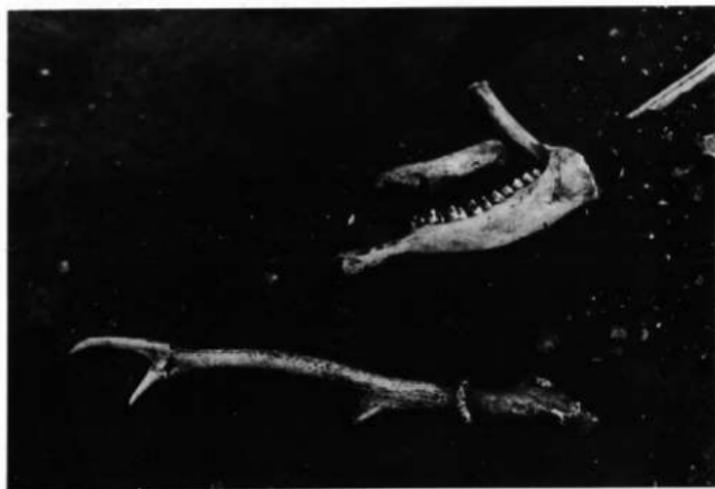
1, 第9号住居址



2, 第9号住居址炉址断面



1. 第10号住居址



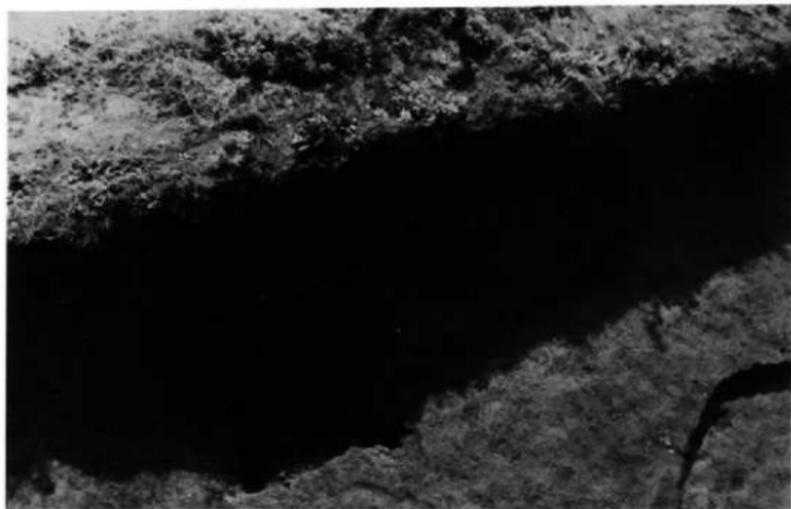
2. 第10号住居址遺物出土状況



1. 第11号住居址



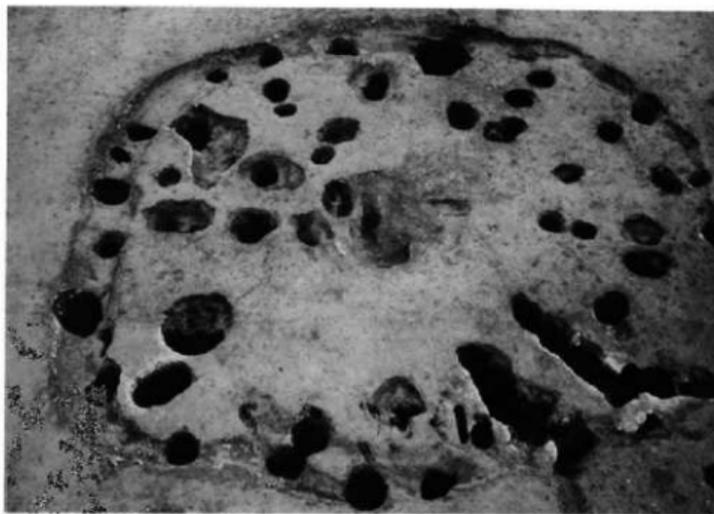
2. 第11号住居址炉址断面



1. 第15号住居址



2. 第17号住居址



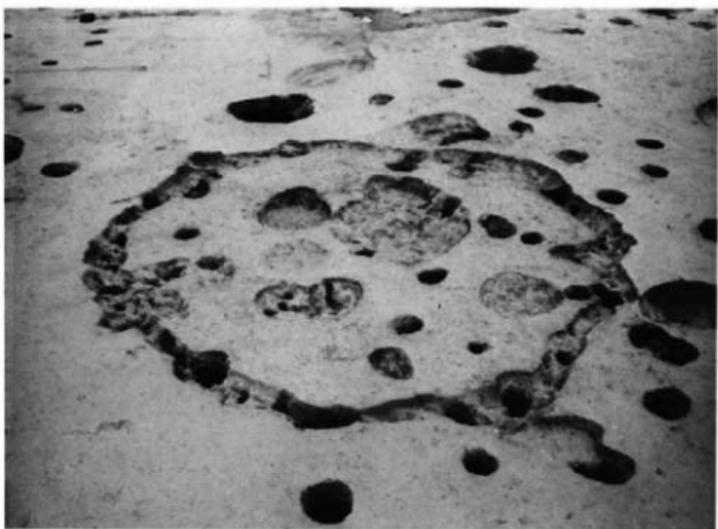
1, 第21号住居址



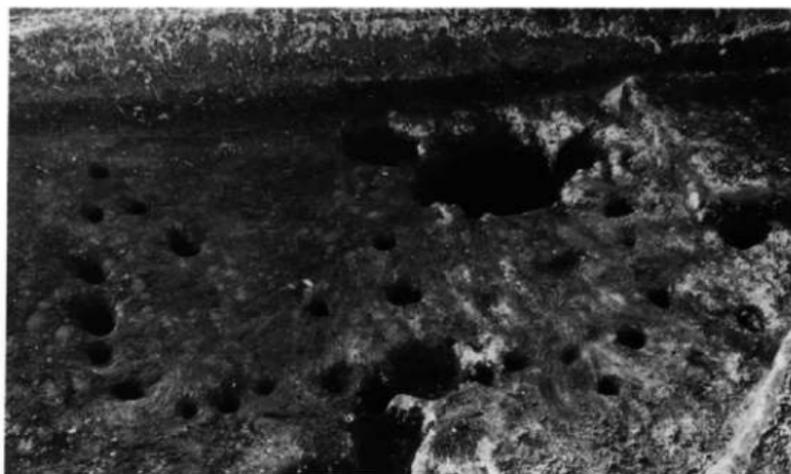
2, 第21号住居址土层断面



1, 第22号住居址



2, 第24号住居址



1, 第25号住居址



2, 第27号住居址



1, 第1号溝 (C3区内)



2, 第1号溝土層断面

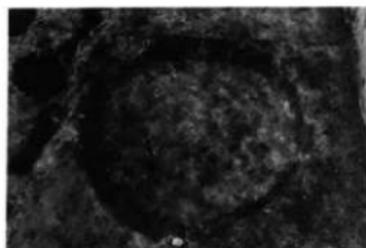


1, 冬木A員塚全景(航空写真)

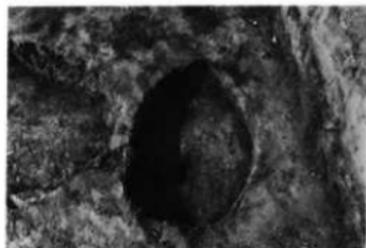


2, D2区具層分布状況

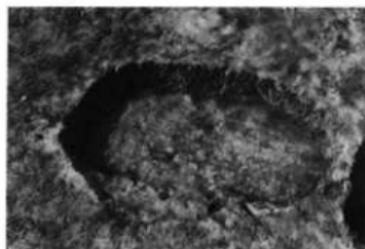
写真17 冬木A



1, 第3号土壤



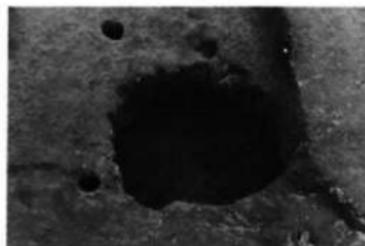
2, 第10号土壤



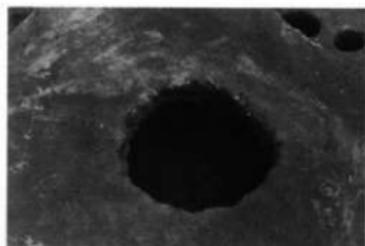
3, 第11号土壤



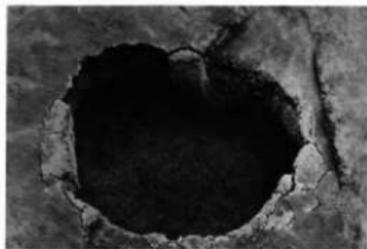
4, 第16号土壤遺物出土状況



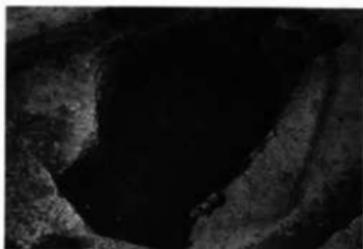
5, 第16号土壤



6, 第20号土壤



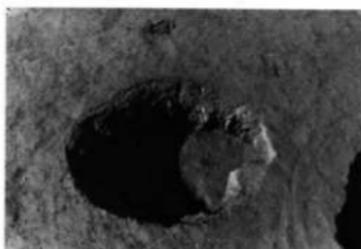
1, 第42号土壤



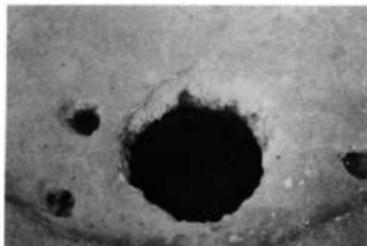
2, 第63土壤



3, 第87土壤



4, 第89号土壤



5, 第92号土壤



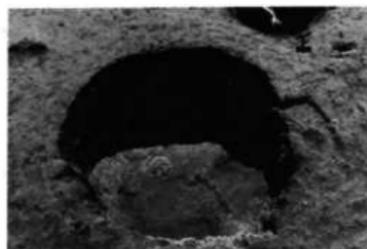
6, 第98号土壤



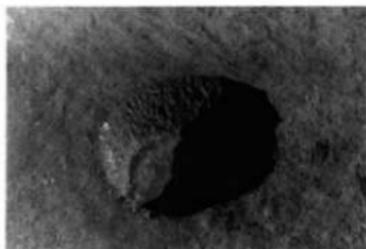
1, 第99号土壤



2, 第104号土壤



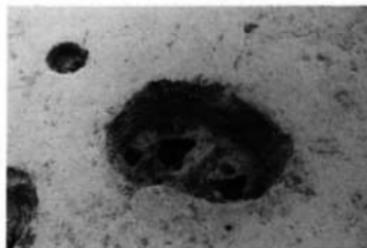
3, 第106号土壤



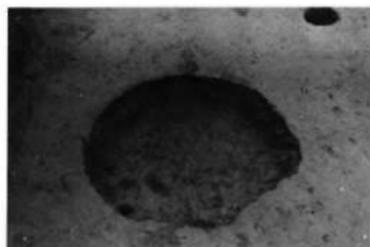
4, 第107号土壤



5, 第110号土壤



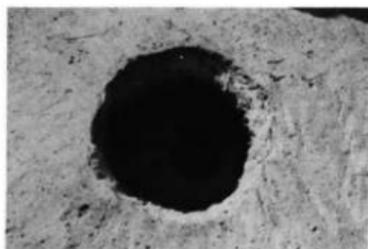
6, 第119号土壤



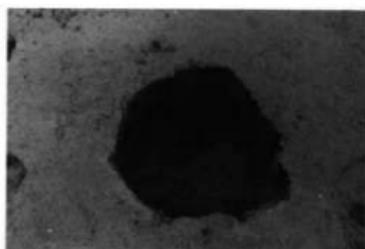
1, 第122号土壤



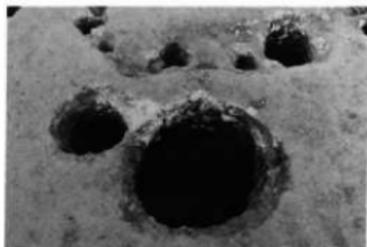
2, 第122号土壤土层断面



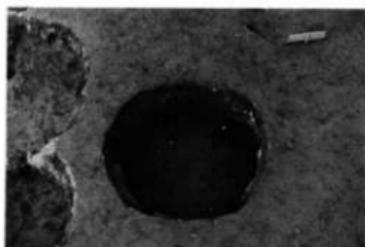
3, 第123号土壤



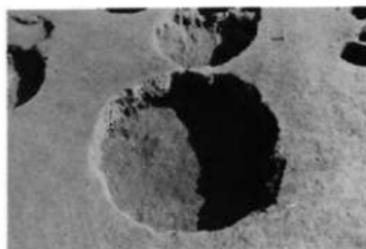
4, 第127号土壤



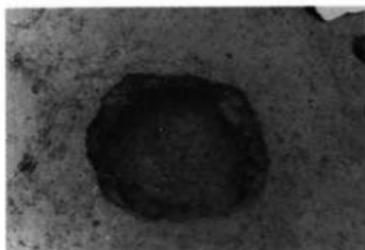
5, 第128号土壤



6, 第138号土壤



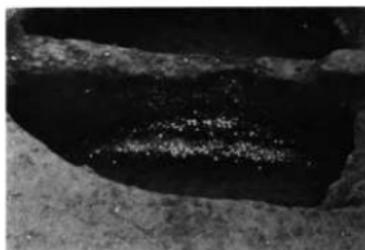
1, 第148号土壤



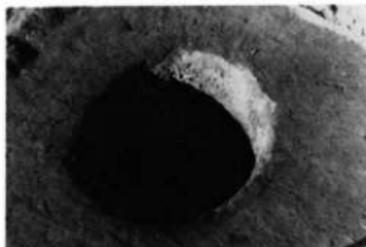
2, 第149号土壤



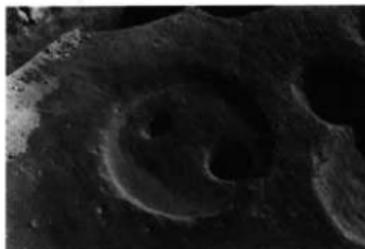
3, 第150号土壤



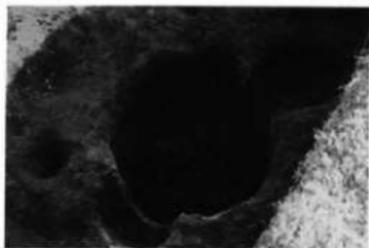
4, 第150号土壤土层断面



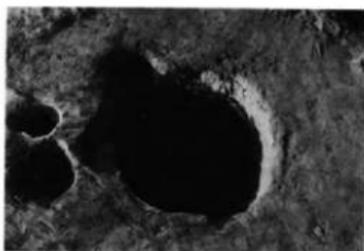
5, 第164号土壤



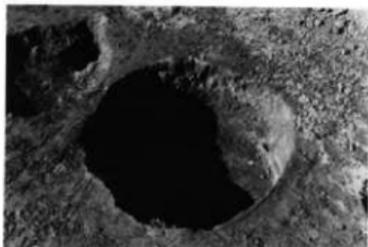
6, 第174号土壤



1, 第177号土壤



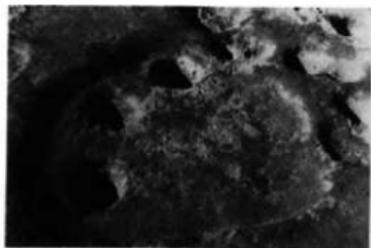
2, 第201号土壤



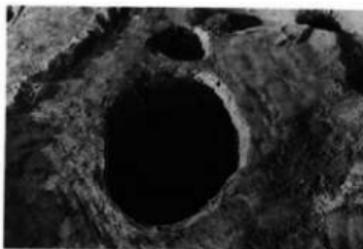
3, 第216号土壤



4, 第235号土壤



5, 第238号土壤



6, 第245号土壤



1. 第4号人骨出土状況



2. 第4号人骨顎部出土状況



3. 第7号・10号人骨出土状況



4. 第15号人骨出土状況



5. 第17号人骨出土状況



6. 第18号人骨出土状況



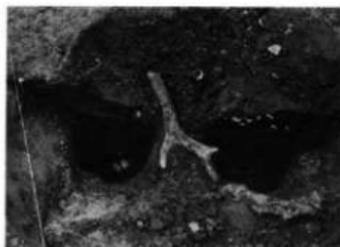
1, 第2号溝土偶出土状況



2, C2d土偶出土状況



3, C2hグリッド土偶出土状況



4, 第46号土壇崖角出土状況



5, 第105号土壇遺物出土状況



6, C3eグリッド遺物出土状況



1, C2e₉ グリッド遺物出土状況



2, B2h₃ グリッド遺物出土状況



3, C1a₉ グリッド遺物出土状況



4, 第4号土壇遺物出土状況



1. 冬木B貝塚全景



2. 冬木B貝塚調査風景



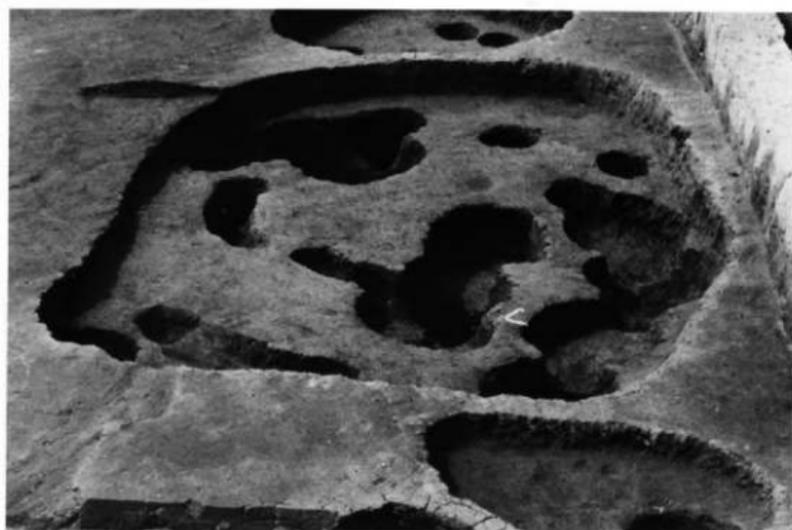
1. 冬木B貝塚遺構全景



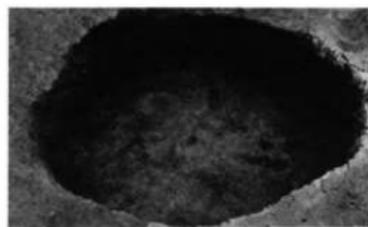
2. 冬木B貝塚C貝層分布状況



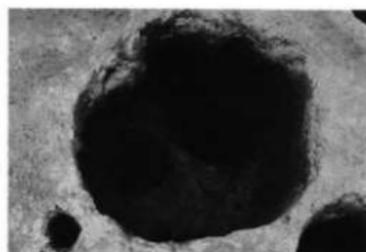
1, 第1号住居址



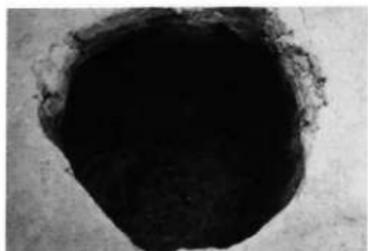
2, 第2号住居址



1. 第3号土壤



2. 第4号土壤



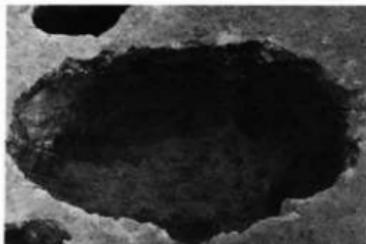
3. 第5号土壤



4. 第7号土壤



5. 第11号土壤



6. 第15号土壤



1, B1b₉ グリッド遺物出土状況



2, 第52号土壌遺物出土状況



3, A1h₇ グリッド遺物出土状況



4, A1i₉ グリッド遺物出土状況



5, A1i₇ グリッド遺物出土状況



6, B1b₉ グリッド獣骨出土状況



1



2



3



4



5



6

第26号住居址 (1), 第21号住居址 (5), グリッド (2~4, 6) 出土遺物 (S=1/2)



第17号住居址 (5), グリッド (1~4) 出土遺物 (S=1/4)



第92号土壌 (1), グリッド (2~5) 出土遺物 (S=片)



1



2



3



4

グリッド出土遺物 (S=1/2)



1



2



3



4



5



6



グリッド出土遺物 (S = ⅓)



1



2



3



4



5



グリッド出土遺物 (S = Ks)



1



2



3



4



5



6



7



8



9

第10号住居址 (7), グリッド (1~6, 8, 9) 出土遺物 (S=1/4)



1



2



3



4



5

第16号土壇 (1), 第129号土壇 (3), 第13号住居址 (5), グリッド
(2, 4) 出土遺物 (S=½, 3のみ×)



1



2



3



4



5



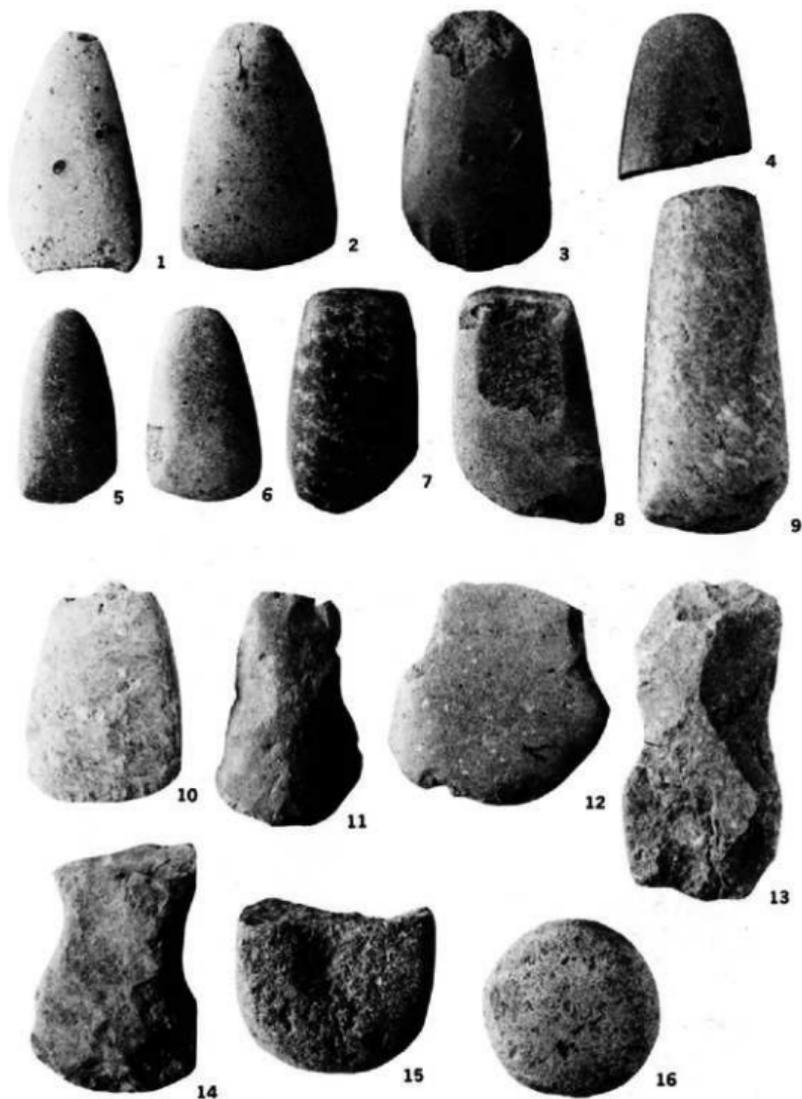
6



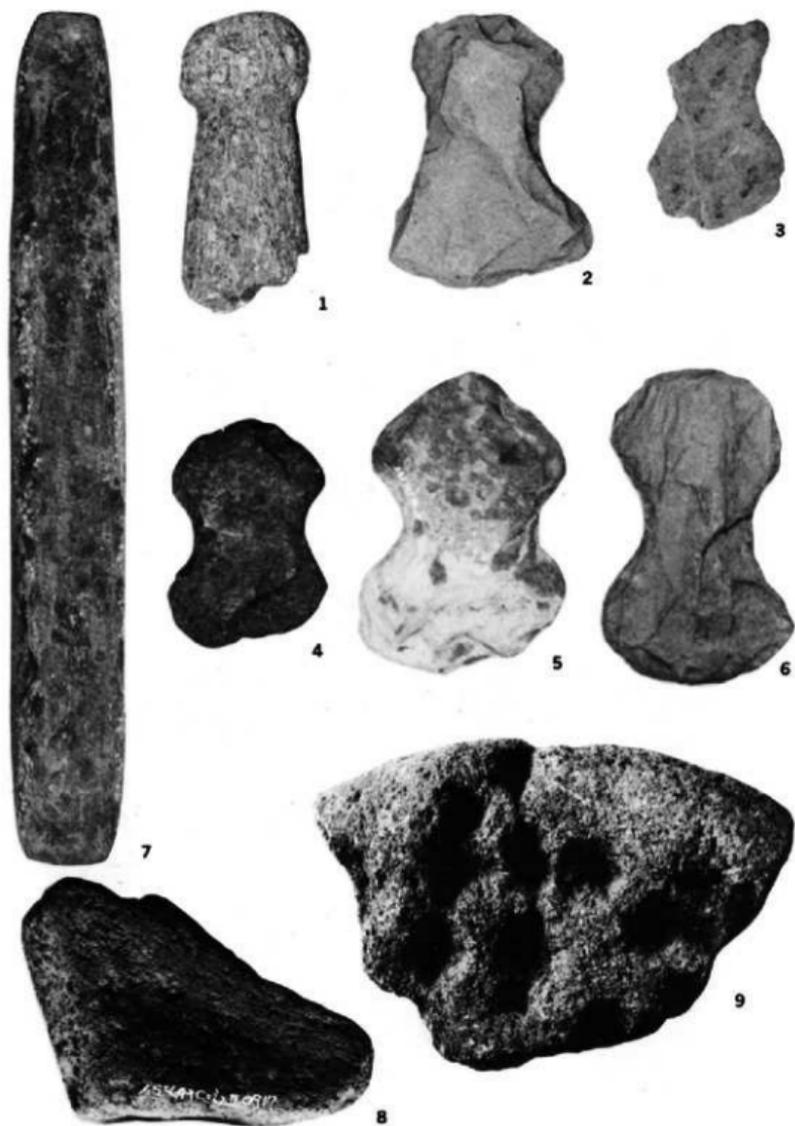
7



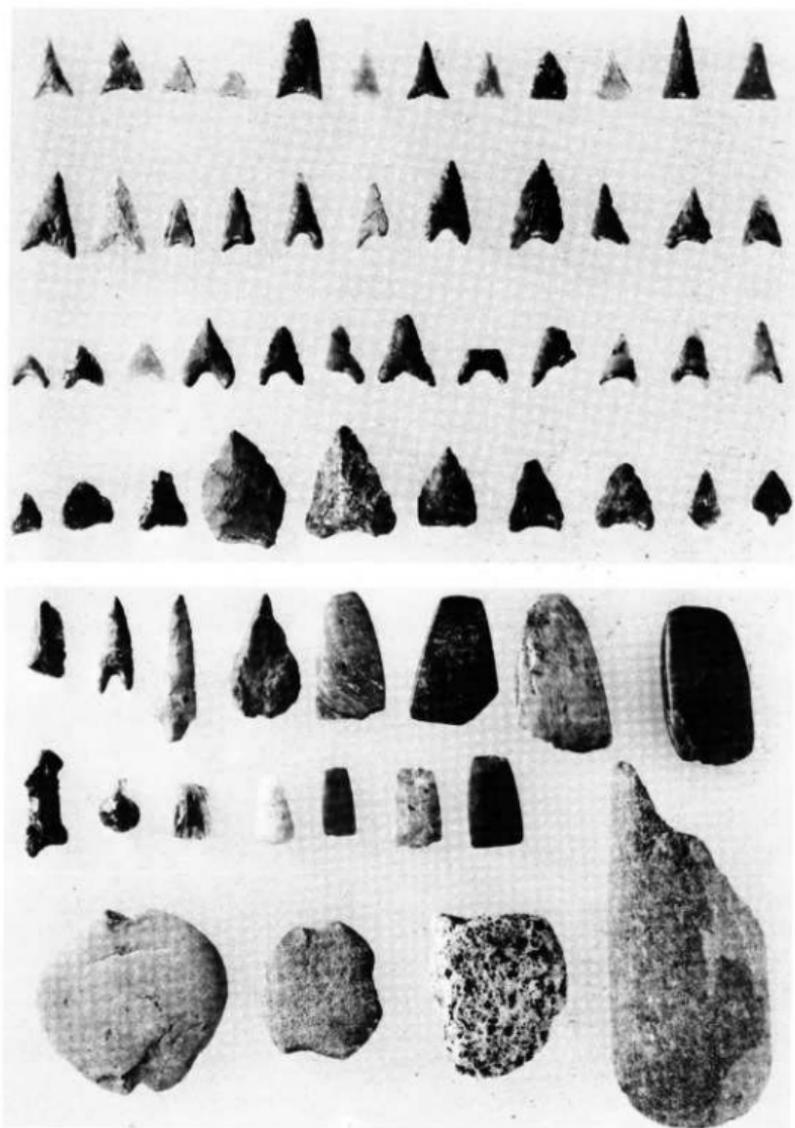
8



石斧・磨石 (S=1/2)



石棒・石斧・石皿 (S=1/2)



石鏃・石斧・石錘 (S=1/2)



1



2



3



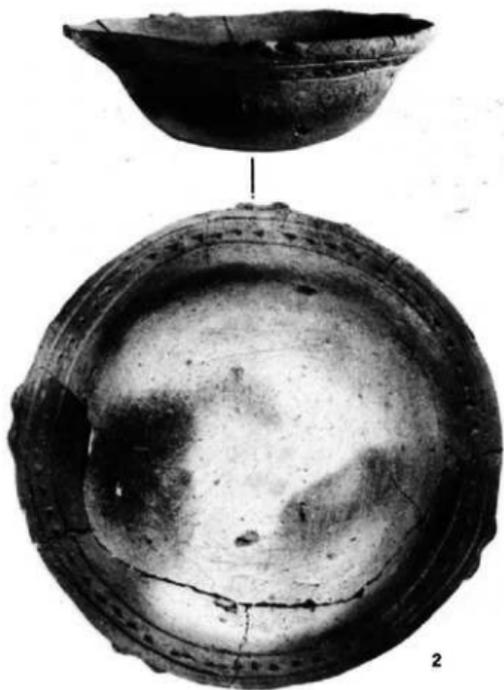
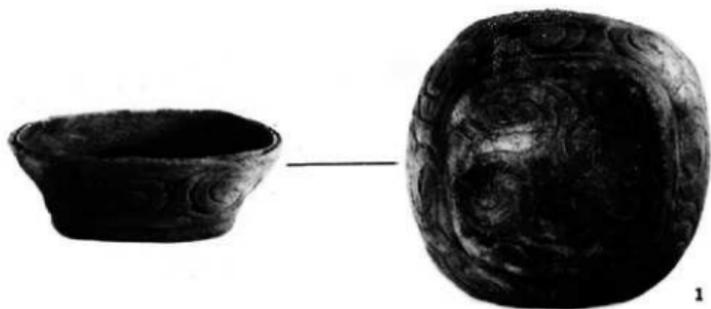
4



5



6



グリッド出土遺物 (S=1/2)



1



2



3



4



5



6



1



2



3



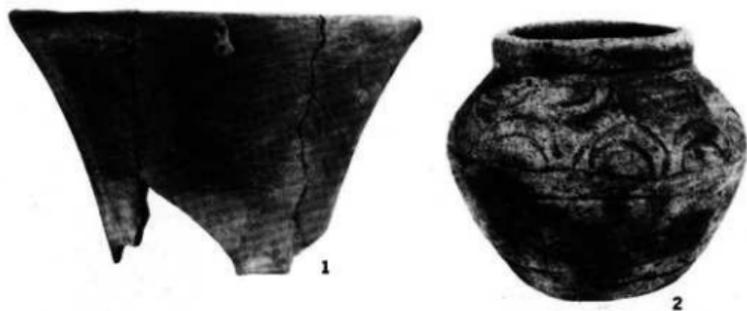
4



5



第56号土壇 (2), グリッド (1) 出土遺物 (S = 1/5)



1. 冬木Bグリッド出土遺物 (1 S=1/2) (2 S=1/2)



2. 冬木B石鏃・石製品 (S=1/2)



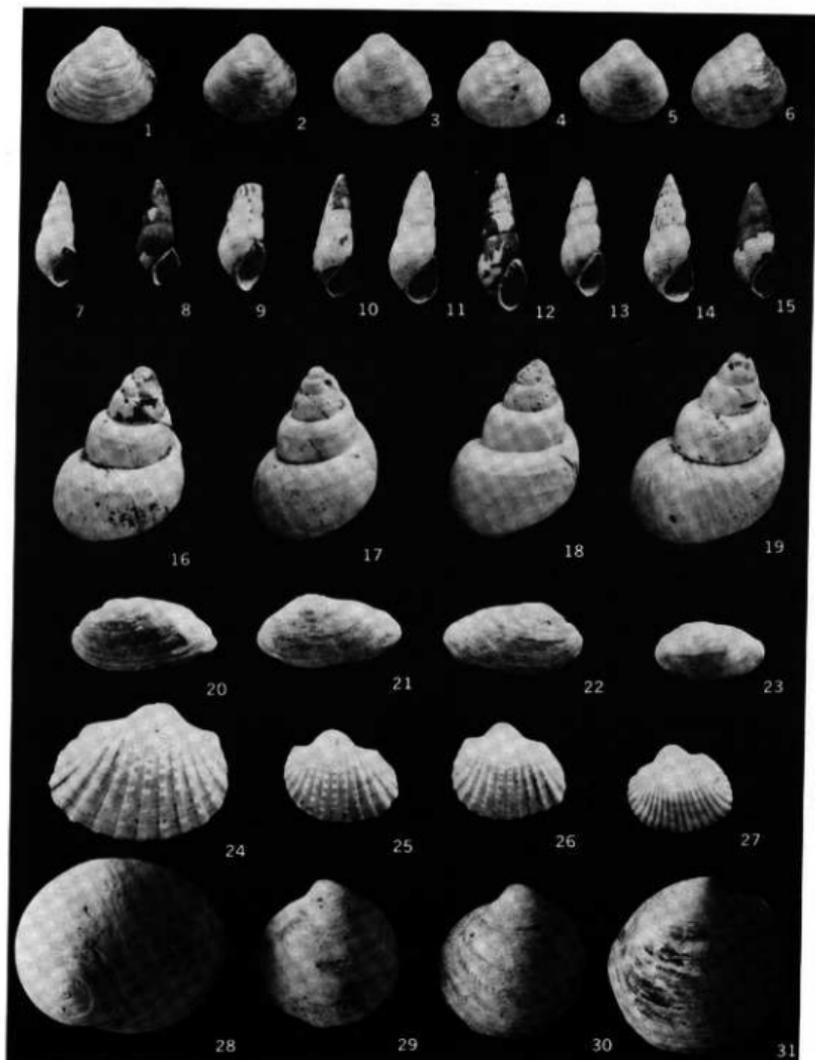
石皿・石棒・独鈷石 (S=1/2)



冬木A・B貝塚出土土偶 (S=1/2)

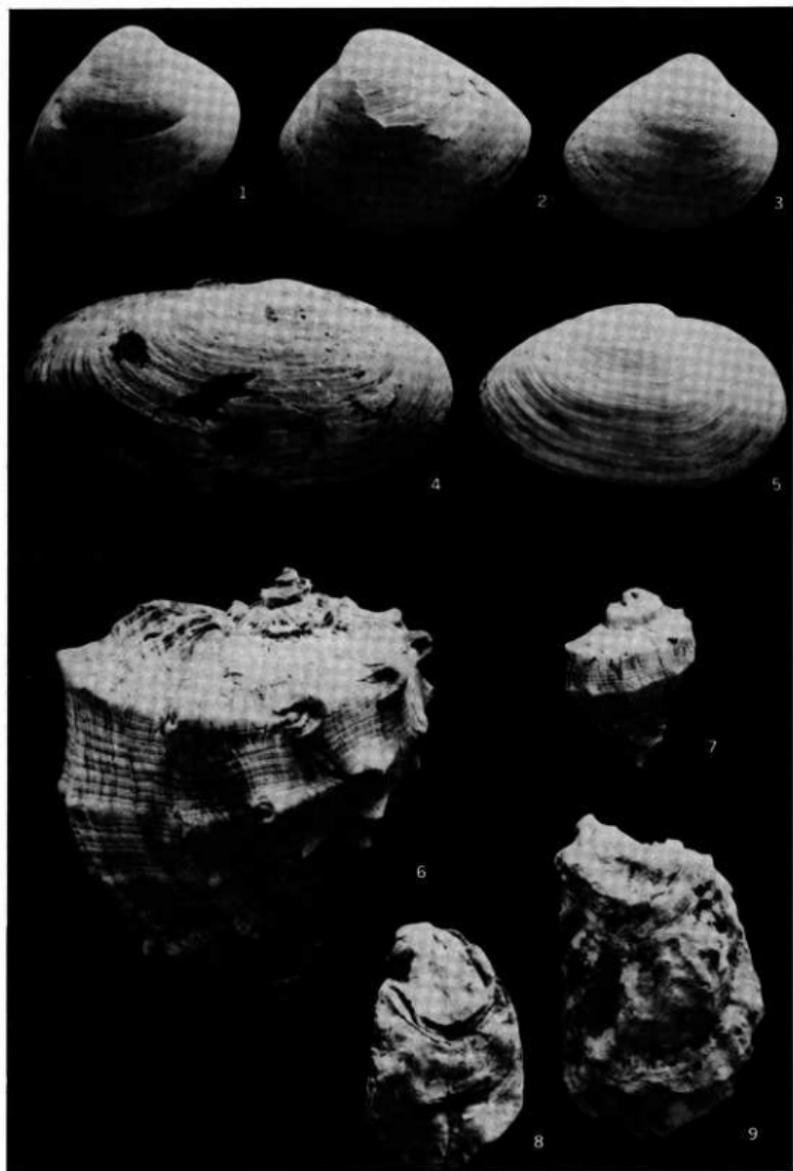


冬木 A・B 貝塚出土土板・有孔円板・耳栓 (S=1/2)



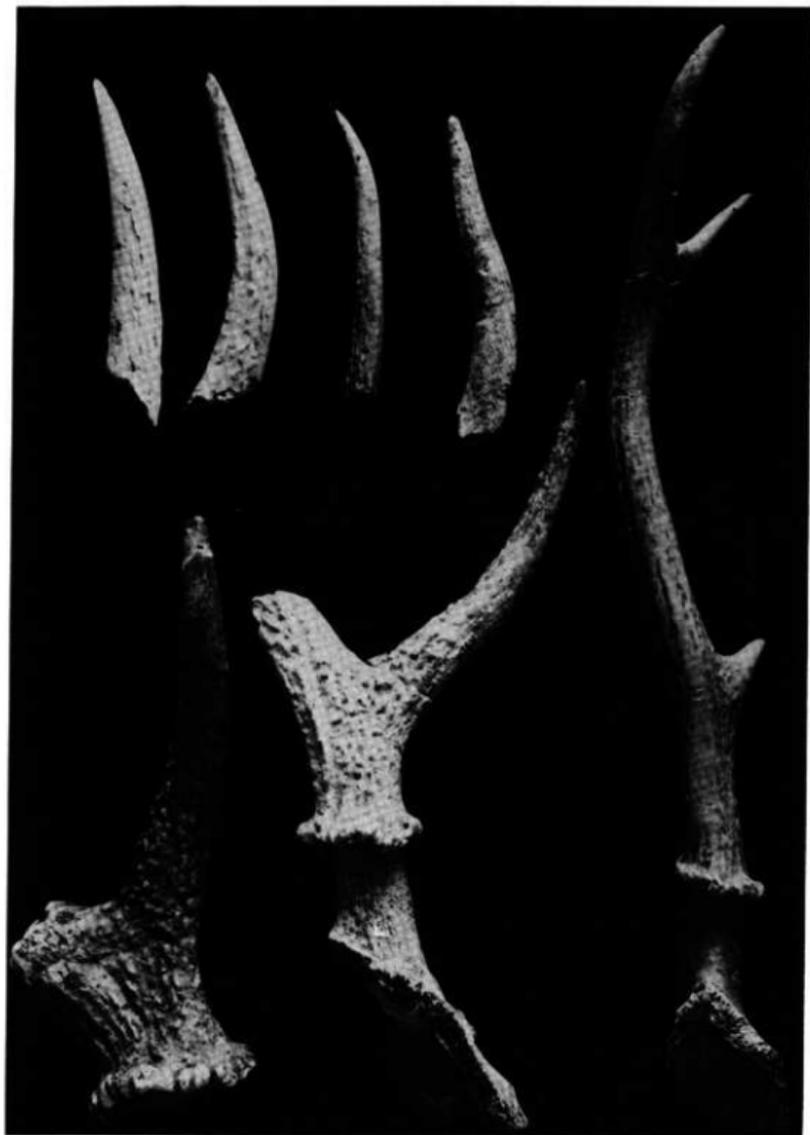
1～6ヤマトシジミ, 7～15カワニナ 16～19オオタニシ, 20～23イシガイ
 24～26ハイガイ, 27サルボウガイ 28ツメタガイ, 29・30オキシジミ, 31カガミガイ (S=½)

冬木A出土貝類

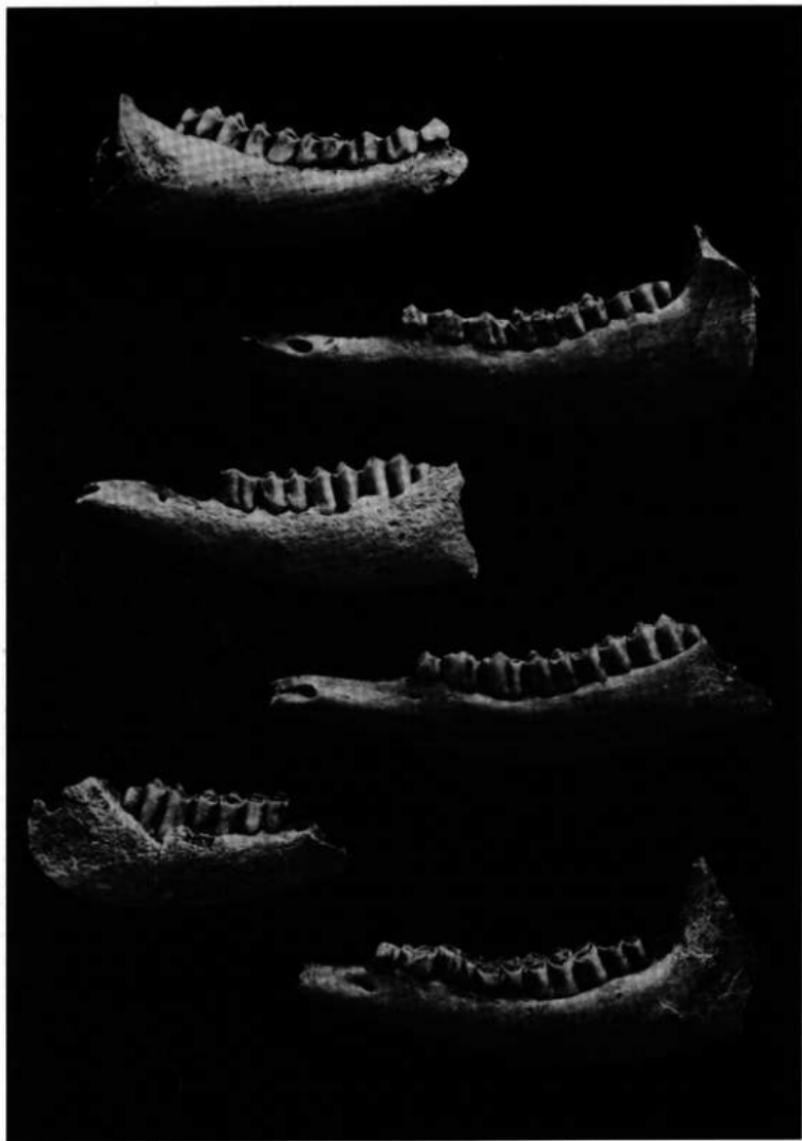


冬木A出土貝類

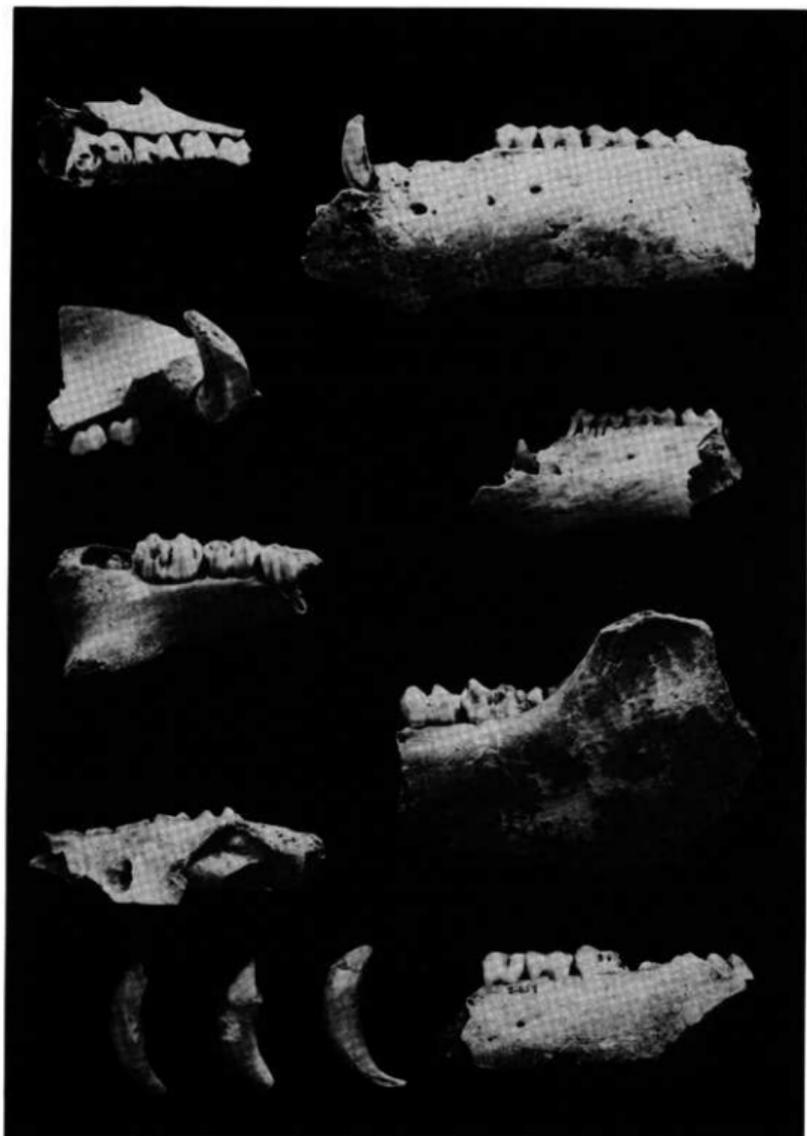
1～3 チョウセンハマグリ, 4・5 オオノガイ
6・7 アカニシ, 8・9 マガキ (S=½)



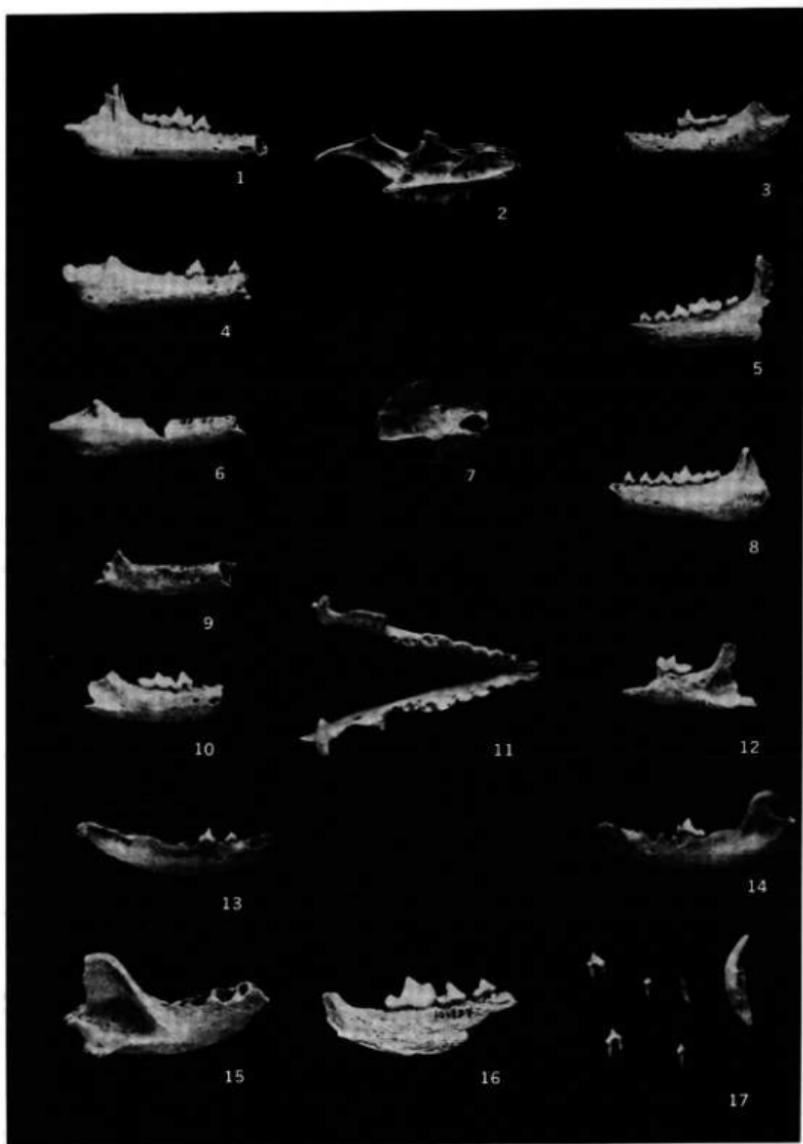
冬木A出土鹿角 (S=1/2)



冬木A出土獣骨(シカ)(S=1/6)



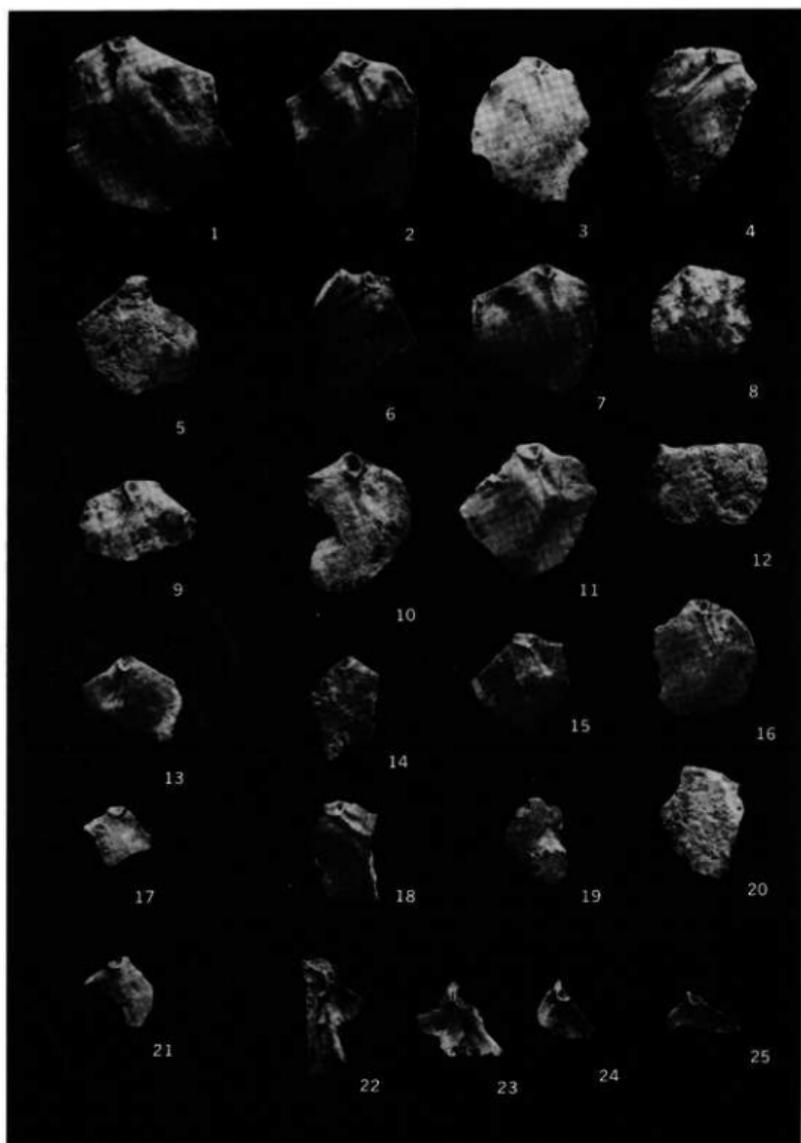
冬木A出土獣骨（イノシシ）（S=1/2）



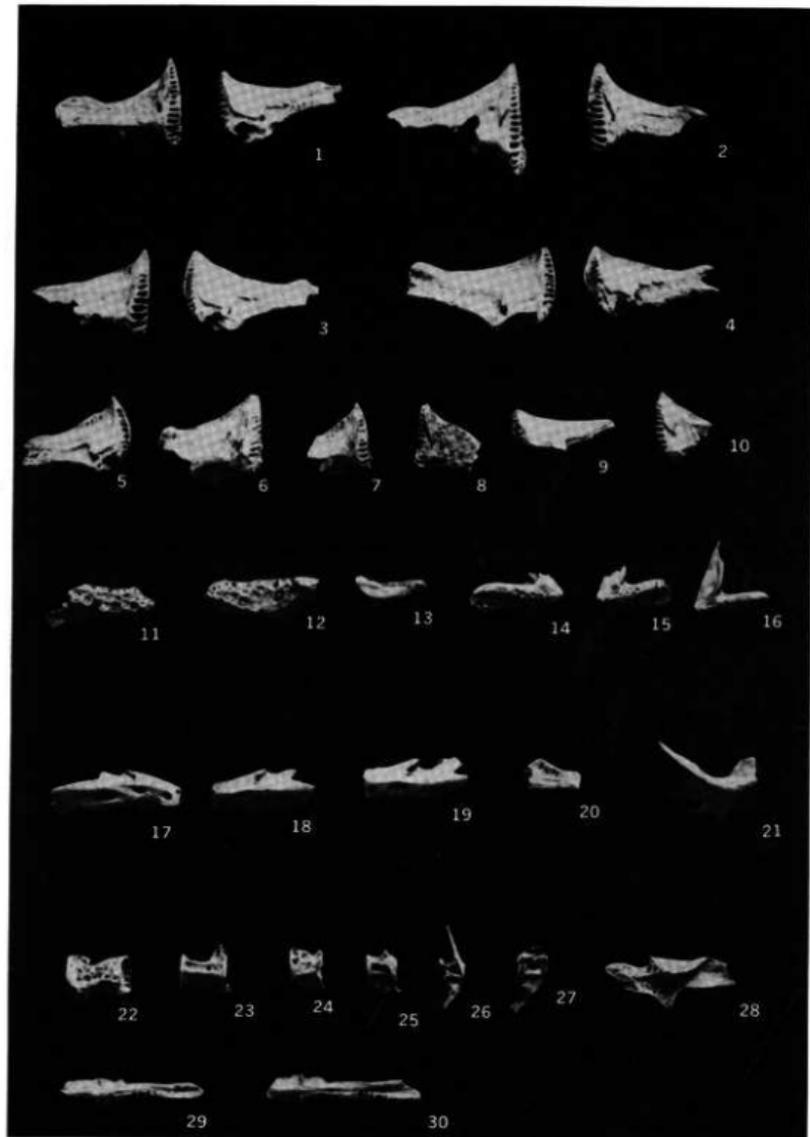
冬木A出土獣骨類 1~6・8・9・11タヌキ, 10テン 7・12~17イヌ (S=1/2)



冬木A出土魚骨 (ボラ) (S=1/2)



冬木A出土魚骨類 1～20スズキ鯉蓋骨 (S = ½)

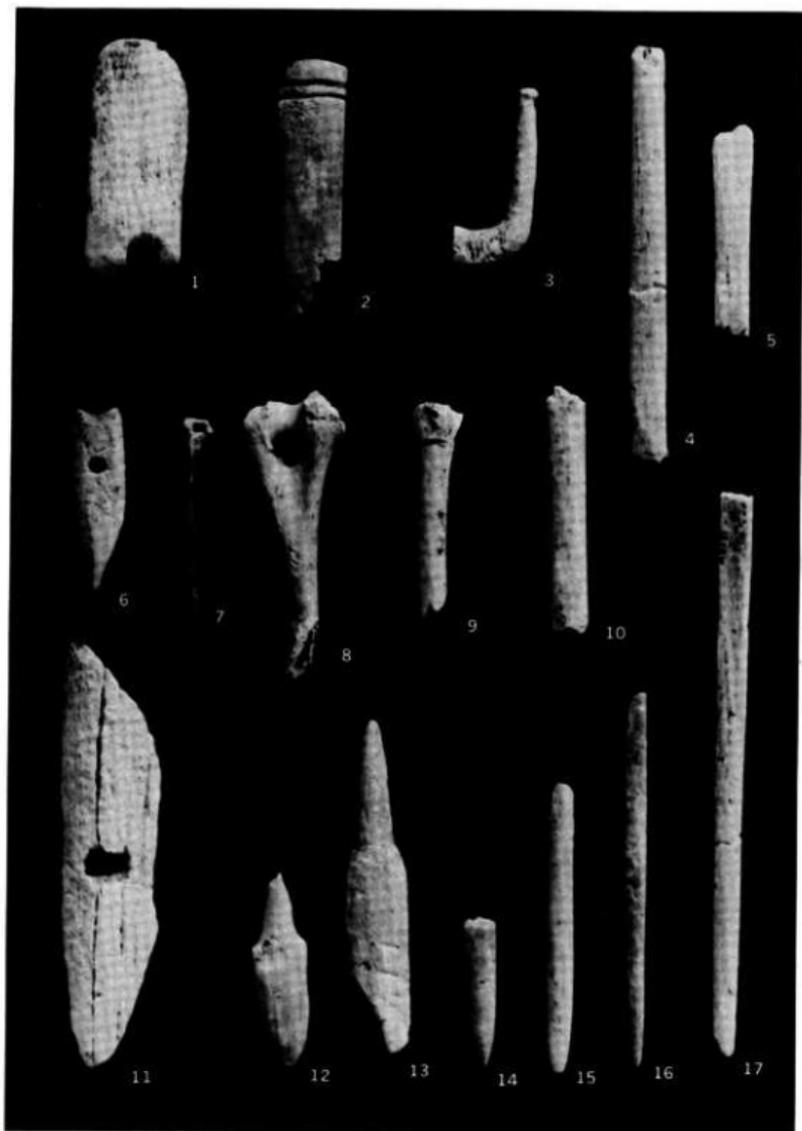


冬木 A 出土魚骨類

1~10フグ, 11・12・14~16クロダイ
13マダイ, 17~21スズキ, 25~27タイ (S=½)



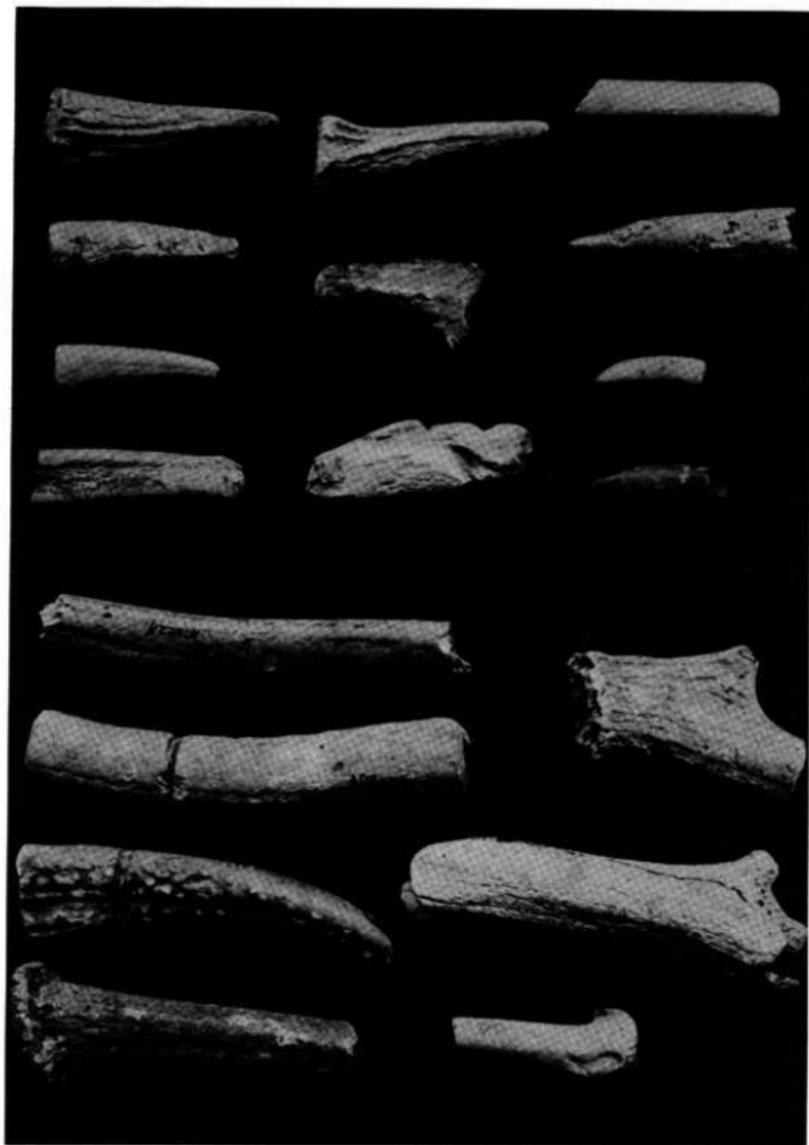
冬木A出土貝輪 (S=1/2)



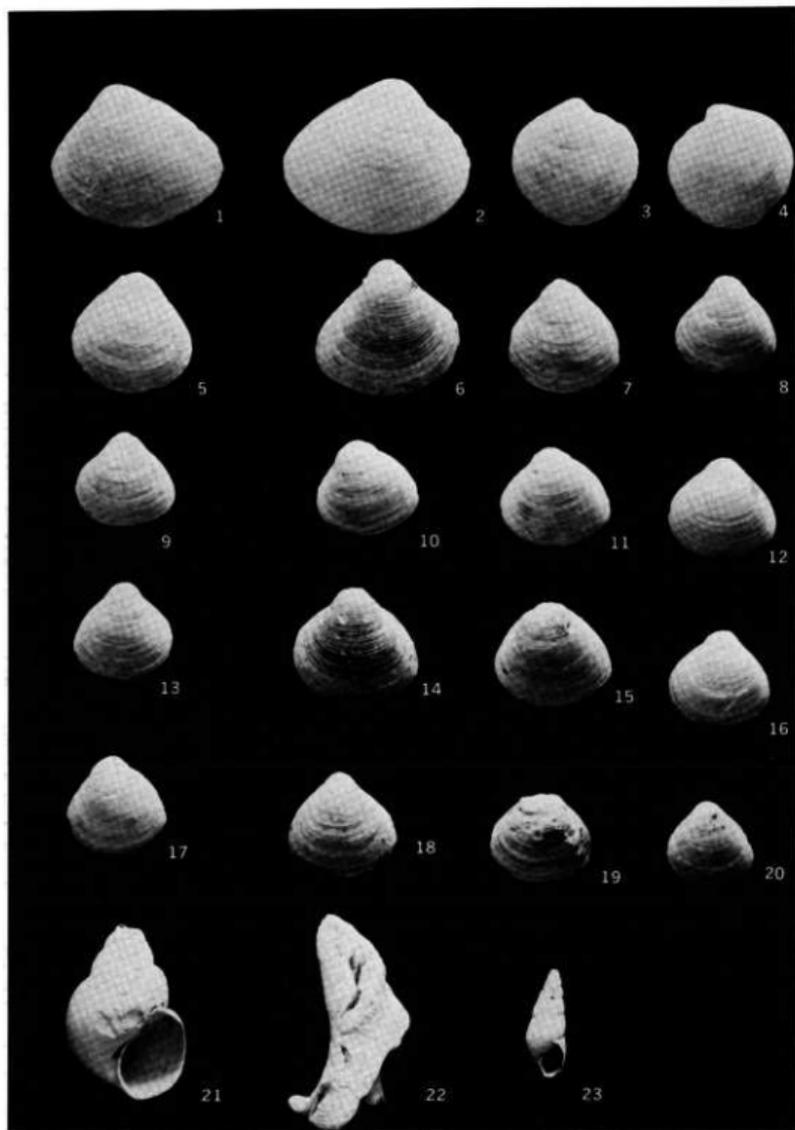
冬木A出土骨角器 1・11装身具, 2へら状製品, 3釣針 4・5・10・14~17針,
6不明(装身具か?) 7~9未成品, 12・13簋(S=1/2)



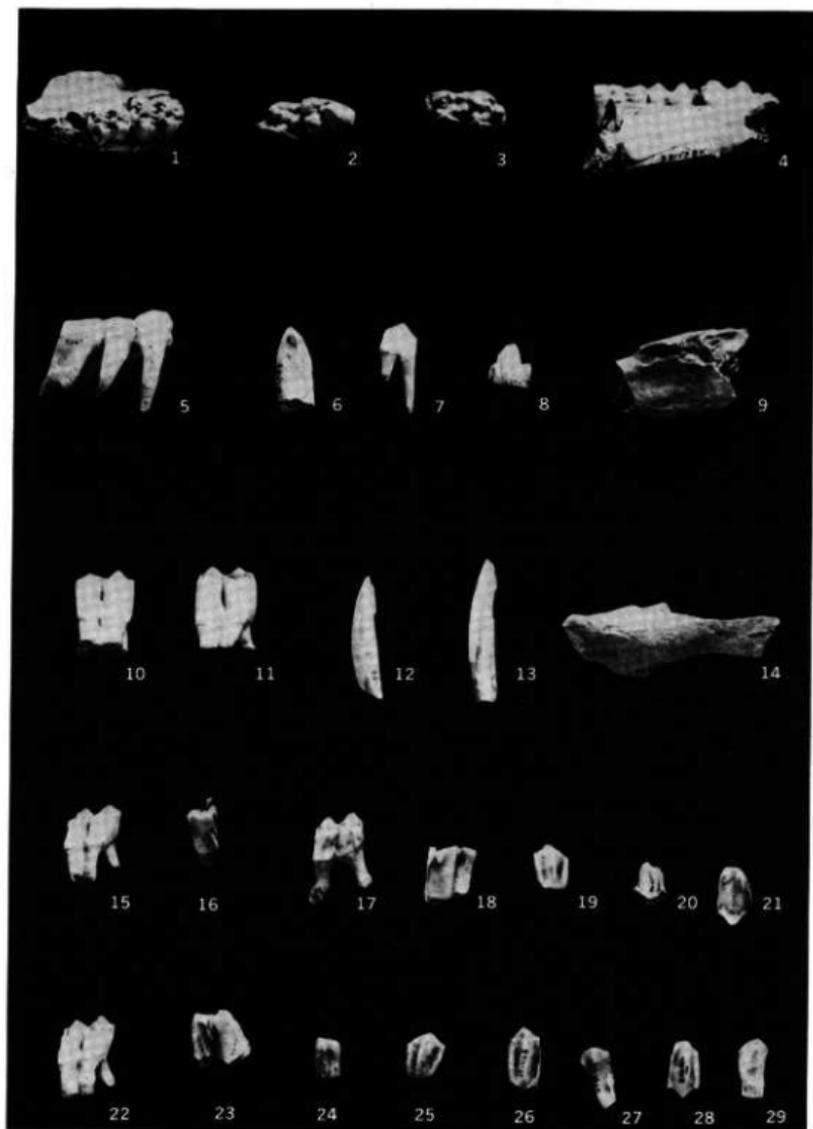
冬木A出土骨角器 1～4 いわゆるうき袋の口とその未成品 5・6 刺突具, 7～9 垂飾, 10 針 11・12 ヘラ状製品, 13 鏃(S=1/2)



冬木A出土切断痕を有する骨・角 (S=1/2)



冬木B出土貝類 1・2 ちょうセンハマグリ, 3・4 オキシジミ 5~20 ヤマトシジミ,
21 オオタニシ 22 アカニシ股軸, 23 カワニナ (S=1/2)



冬木B出土獣骨 1~9イノシシ, 10~29シカ (S=1/2)



冬木B出土獣・魚骨 1~4・6~10シカ, 11イノシシ, 13フグ (S=1/2)

別冊

冬木貝塚産魚種組成と
漁撈活動

赤沢 威 東京大学総合研究資料館

小宮 孟 千葉県文化財センター

1981

財団法人 茨城県教育財団

本論は冬木貝塚産魚骨の種同定結果を報告し、その先史学上の意味を検討することにある。本論は次の5章で構成されている。第1章は貝塚産魚骨の同定結果で、魚種の組成・種間の量的な組み合わせの特徴を検討することにある。第2章は、第1章で示す結果を他遺跡で報告されている同種の結果と比較することである。それによって冬木貝塚の魚種組成の特徴を解釈する手掛りがえられる。第3章は縄文時代の漁撈具の特徴を用いて縄文遺跡を分類する。この結果は魚種の組成にもついで特徴づけられる縄文貝塚を縄文人の漁撈適応という面から検討する手掛りとなる。第4章は以上の議論を総合して冬木貝塚人の漁撈適応を検討することである。最後に上記の研究の基礎となる冬木貝塚産魚骨の同定の結果を記載する。

第1章 分析標本と同定結果

今回扱う資料は、冬木A貝塚・第IIK層出土品である。標本のサンプリングは発掘と平行しておこなわれ、発掘時に検出されたものである。従って、すでにしばしば指摘されているように微小な標本が検出されていない可能性が高い。この問題点を考慮して、SK-87(第87号土壌)の堆積物で試みられた水洗選別法によって検出された標本が追加分析されている。

第1表は今回分析した第IIK層出土標本の同定結果を示す(同定の基準は第5章に記載されている)。同定部位を特定できないために魚種組成を個体数にもついで示すことはできない。しかし、この結果によって魚種の組成に関する一般的傾向を知ることができる。

出現頻度の高い魚種は、フナ属・ボラ科・スズキ属・トラフグ類である。同定部位を考慮して個体数レベルでの比較を試みると、椎骨数が高い値を示したフナ属の出現頻度を他のボラ科・スズキ属・トラフグ類の頻度と同一レベルとみなすことはできない。そして、フナ属を除くと、ボラ科の出現頻度が最も高く、次いでトラフグ類・スズキ属の頻度が高いという傾向が認められる。

以上4魚種の出現頻度は、相互の割合は別として、残る多数の同定魚種に比べて有意に高い。そして、クロダイ属の頻度がやや高い点を除くと、他の魚種はほとんど無視できる程度にしか出現していないことになる。

すでに述べたように、サンプリング法が必ずしも完全ではなく、かつ未同定の椎骨数が202点を数えるから、以上の結果をもって冬木貝塚の魚種組成とみなすには尚若干の問題を残す。従って、今回扱った標本の同定結果としては、フナ属・ボラ科・スズキ属・トラフグ類の出現頻度が高かったという点にとどめる。

第1表 冬木貝塚第II K層の魚骨標本同定結果

魚骨種別	種名	学名	種別	
			種	個体数
硬骨魚類 Osteichthyes	エイ目種不明	Rajiformes fam. indet.	r	1
	鰻目種不明	Fam. indet.	cc	1
	タラシ科種不明	Rhodeinae gen. & sp. indet.	ph	L 1 R 1
	ヒメギ属種不明	<i>Hemibarbus</i> sp.	ph	0 2
	フナ属種不明	<i>Carassius</i> sp.	mx	3 1
			de	1 0
			ph	15 16
			ce	PRECAL 174 CAU 114
	コイ	<i>Cyprinus carpio</i>	pmx	1 1
			de	2 4
			ph	5 1
	コイ科種不明	Cypridae gen. & sp. indet.	mx	1 0
	ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>	cc	PRECAL 1 CAU 3
	ボラ科種不明	Mugilidae gen. & sp. indet.	op	86 120
			ce	PRECAL 14 CAU 7
スズキ属種不明	<i>Lateolabrax</i> sp.	pmx	1 0	
		mx	0 2	
		de	8 9	
		ang	0 2	
		op	20 24	
クロダイ属種不明	<i>Acanthopagrus</i> sp.	pmx	5 7	
		de	8 3	
		ang	1 0	
		pal	1 0	
タイ科種不明	Sparidae gen. & sp. indet.	op	0 1	
ハラフグ類	<i>Takifugu rubripes</i>	pmx	39 34	
		de	27 43	
		ang	1 2	
		q	3 3	
コナ	<i>Platycephalus indicus</i>	pmx	0 1	
		de	1 2	
種不明	Fam. indet.	ce	202	

ang: 魚骨, ce: 産体, de: 歯骨, mx: 上顎骨, op: 主眼蓋骨, pal: 二葉骨, ph: 咽頭骨, pmx: 前顎骨, q: 方骨
L: 左, R: 右, PRECAL: 齧骨, CAU: 尾骨

第2章 他遺跡との比較

貝塚産魚種の組成が遺跡によって異なることはしばしば指摘されている。そこで冬木貝塚の魚種組成の特徴を先史的に検討するために、他の若干の遺跡で報告されている魚種組成との比較をおこなう。対比資料は、岩手県宮野貝塚（鈴木，1977）、茨城県上高津貝塚（小宮，1980）、千葉県新田野貝塚（小川他，1975）、同西広貝塚（金子・牛沢，1977）、同富士見台貝塚（金子，1964）、同鉈切遺跡（金子，1958）、神奈川県称名寺貝塚（鈴木，1977）、以上7遺跡である（第1図）。

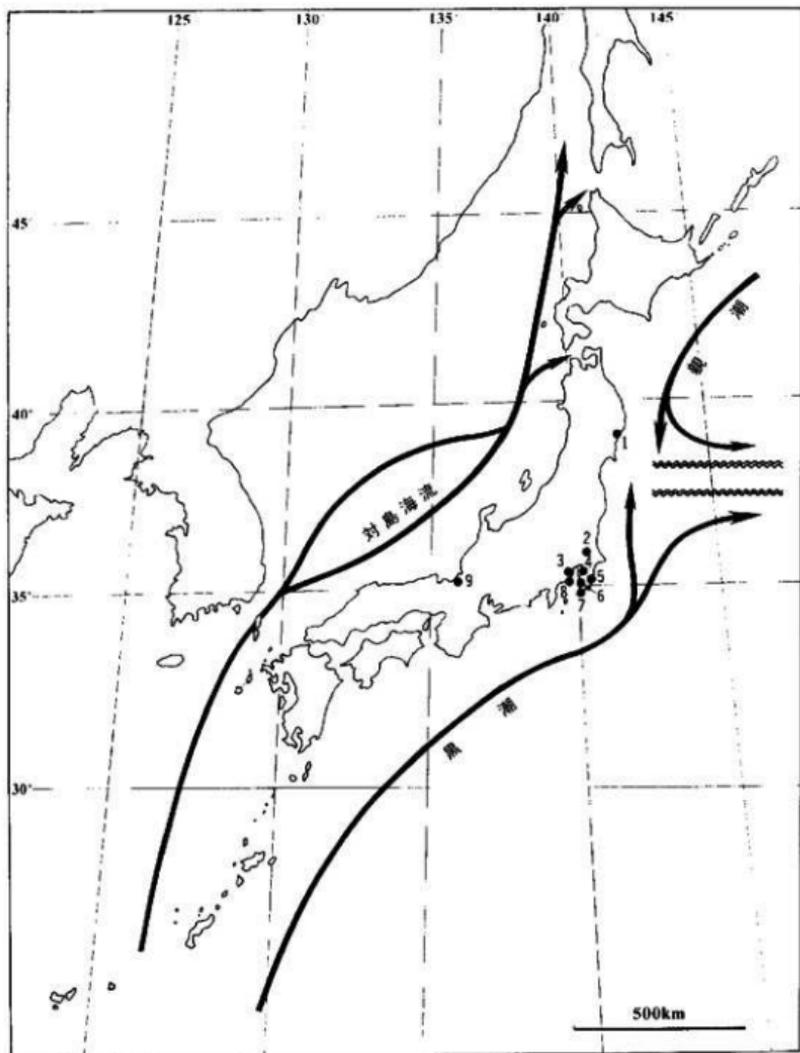
以上の遺跡は魚骨の分析結果が詳しく記載されており、尚かつ、宮野・称名寺・上高津貝塚では堆積物に対してシステマティックなサンプリング法が適用され、同じレベルの同定結果が利用できる。

第2表は、新田野・西広・菊名・富士見台・鉈切5遺跡の間で、スズキ・クロダイ・マダイ3魚種の出現頻度を比較したものである。その結果は極めて明瞭である。各遺跡における3魚種の量的組み合わせは様々であるが、その中で特に頻度の高い魚種が認められる。すなわち、スズキが新田野貝塚を特徴づけ、クロダイは西広・菊名遺跡、マダイは富士見台・鉈切遺跡をそれぞれ特徴づけている。

第2表 貝塚産：スズキ(1)、クロダイ(2)、マダイ(3)の前上顎骨+歯骨数の比較

	(1)		(2)		(3)		Total		文 献
	N	%	N	%	N	%	N	%	
新 田 野 縄 文 中 期	122	65.59	60	32.26	4	2.15	186	100.00	小川他 1975
新 田 野 縄 文 前 期	551	60.68	336	37.00	21	2.31	908	99.99	小川他 1975
西 広 縄 文 後 期 一 期 期	17	6.54	240	92.31	3	1.15	260	100.00	金子他 1977
菊 名 縄 文 中 期	10	34.48	17	58.62	2	6.90	29	100.00	小 宮 1976
富 士 見 台 縄 文 後 期	15	7.89	16	8.42	159	83.68	190	99.99	金 子 1964
鉈 切 縄 文 後 期	2	0.50	13	3.24	386	96.26	401	100.00	金 子 1958

第3表は、さらに宮野・称名寺2遺跡の魚種組成を追加し、第2表と同様の比較を試みている。比較には魚種の同定に利用された部位の数が用いられている。第2表は、同定が特定の部位数をもって表現されているため同一レベルで個体数を推定できる。第3表の場合には、個体数を同一基準で比較することができない。その代りに、前上顎骨・歯骨の保存が望めないか、あるいはそのような部位の同定が困難な魚種の出現頻度をも含めた一般的傾向を知ることができるという利点がある。



第1図

**本表では規定を属もしくは科段階までにとどめるのが望ましいと思われるもの

***小川ほか(1972)では鱈科属

****金(1968)ではマミ

データが不明なもの

この結果も第2表の場合と同じく、魚種組成の特徴によって遺跡のグルーピングが可能である。そして、第2表では認められなかった新しいタイプの魚種組成があきらかとなる。それは新たに追加された宮野貝塚の魚種組成にみられる。宮野貝塚の組成は第2表で用いられた遺跡の富士見台・鉈切遺跡の組成と比較的類似している。特に鉈切遺跡との類似点が多い。しかし両者の間には、サメ類・ニシン類・ウツボ・ウナギ類・ボラ科・マアジ・ブリ属・マハタ・クロダイ属・タイ類・カサゴ科・アイナメ科等において出現頻度に差異が認められる。また発掘容積を考慮して、すなわち発掘容積が非常に少なかった宮野貝塚でマグロ・カツオ・サバ・タイ科・カサゴ科の類

第4表 宮野・称名寺・上高津貝塚魚種組成

	宮野	称名寺	上高津		
			ST-III	ST-II	ST-I
軟骨魚綱(魚種不明)	13	7	54	38	6
ニシン類目	106	143	21	157	13
カタクチイワシ	33	10	21	346	38
ツト属	0	0	2*	4*	2*
コイ科	0	0	2*	0	0
ウナギ科	24	0	393	695	390
サヨリ科	0	0	46	204	23
ボラ科	0	0	3**	0	1**
カマス科	0	15	0	0	0
マグロ属	13	0	0	0	0
カツオ	27	0	0	0	0
マグロ属/カツオ	35	0	0	0	0
ソウダカツオ属	2	1	0	0	0
サバ属	41	9	0	1	0
アジ亜科	2	25	27***	36***	8***
スズキ属	5	5	4****	12****	9****
タイ科	15	7	8****	14****	0
マハタ	0	0	54****	125****	76****
カワハギ科	1	9	0	0	0
マフグ科	0	0	4****	2****	1****
カサゴ科	50	18	0	0	0
アイナメ科	39	8	0	0	0
コナ	0	0	0	0	1****
未特定	220	600	1,069	2,310	1,073

*遺卵有, **正総玉有, ***後鱈, ****鰻科

度が高いという結果となる。一方称名寺・富士見台遺跡の組成は、各種サメ類・ボラ科・マアジ・クロダイ・マダイ等の組み合わせが顕著な特徴といえよう。

残る4遺跡を調べると、第2表の結果ではスズキで代表される新田野貝塚と、それ以外のグループに分れる。しかし第3表の結果ではそのようなグルーピングは無理である。むしろこれらの遺跡はイワシ類・ボラ科・スズキ属・クロダイ属・フグ類・コチ等の出現頻度が高いという共通した特徴が認められる。

ところで第3表の同定結果は、すでに触れたように発掘容積に差があり、サンプリング法においても異なる出土標本にもとづいている。その結果を同一基準で比較するのは無理な面がある。次に宮野・称名寺・上高津3遺跡の同定結果を利用した比較を試みる(第4表)。

この結果は3遺跡の魚種組成がそれぞれ異なることを示している。マグロ属・カツオが宮野貝塚を特徴づけ、他の遺跡ではこれらの魚種が認められない。称名寺・上高津遺跡間の差異も顕著である。称名寺で同定されるカマス科・サバ科・カワハギ科・カサゴ科・アイナメ科等は上高津遺跡では認められない。しかし、フナ属・ウナギ科・サヨリ科・ボラ科・マアジ・フグ科等は上高津貝塚でしか同定されなかった。

以上3種類の表を用いて遺跡によって魚種の組成が異なり、しかも一定の基準をもうけることにより魚種組成にもとづいた遺跡分類が可能であることを示した。すなわち今回比較に利用した遺跡の魚種組成は次の3つのタイプに分類できる。

Aタイプ魚種組成

宮野貝塚の結果に代表される組成である。マグロ属・カツオ・サバ属・カサゴ科・アイナメ科等の出現頻度が高い。しかし、ウナギ・サヨリ属・マハゼ・ボラ科等の出現頻度は非常に低いが、ゼロに近い。

Bタイプ魚種組成

富士見台・鉈切・称名寺遺跡の結果に代表される組成である。タイ科、特にマダイの出現頻度が高い。Aタイプの魚種組成との類似が強いが、より沿海性の魚種の割合が多く、相対的にAタイプを特徴づけるマグロ・カツオ・サバ等の頻度は低くなる。

Cタイプ魚種組成

上高津・新田野・西広・菊名貝塚の結果に代表される組成である。このグループに分類される遺跡の間では組成が変異に富む。一般的傾向としてボラ科・ウナギ・フナ属・マハゼ・クロダイ

属・スズキ属等が高い出現頻度を示す。

以上3つのタイプに大別される魚種組成を調べると、それぞれのタイプを構成する魚種は相互に類似した習性・生態を示すことがわかる。例えば、Aタイプを構成する魚種は、いわゆる外洋性の回遊魚と岩礁性の沿海底棲魚から成るという特徴を示す。Bタイプの組成の主要魚は岩礁性の沿海底棲魚である。そしてCタイプの組成を代表する魚種は大湾域・河口・河川域に生息する潮間帯・淡水・淡水性魚である。何故このように遺跡によって同種の習性・生態を示す魚種が組み合わせをもつようになるかが問題となる。これを解決する鍵は遺跡テリトリーを想定することによってえられる。

遺跡テリトリーとは、遺跡の住人が食物その他の資源を得るために恒常的に利用していた地理的広がりである。遺跡テリトリーの範囲は当然遺跡によって異なっていた。資源の分布・密度・変異により利用法に変化が生じる。また採集狩猟民と農耕民とは当然活動範囲は異なる。縄文貝塚人のテリトリーの分析は未だ試みられていないので、今回は外国の研究者がしばしば利用する遺跡中心半径10 kmの円テリトリーを用いることにする。実は、このテリトリーは今回比較資料として利用した新田野貝塚に適用されたことがあり(Akazawa, 1980)、その結果分析概念として一応有効であることがあきらかになっている。この遺跡テリトリーを各遺跡に適用し、遺跡の魚種組成の特徴を説明することが、テリトリー分析の一つの目的である。

第2図は、第2・3表の作成に利用された上高津・新田野・西広・富士見台・鉈切・称名寺・菊名の7遺跡、及び冬木貝塚の分布区である。各遺跡は今回適用する半径10 kmの円テリトリーをもって表現されている。すなわち各遺跡の住人が恒常的に利用した地理的な広がりをもつテリトリーをもって想定してあることになる。

第2図には、約6000年前の縄文海進によって海水が侵入したと想定されている標高10 m以下の範囲があわせて記入されている。この縄文海進図は海進が最も進行した時点での状況を示しており、必ずしも各遺跡が形成された時々の海岸線図と一致しない。ただ、現在の自然地理学上の知見をもって縄文時代を通じての海岸線を復原することはできない。従って、この図をもって各遺跡テリトリーと関連する海岸線の一つのイメージとしておきたい。この分布図にもとづいて、遺跡テリトリーと魚種組成との関連を調べると次のようになる。

Bタイプの魚種組成に特徴づけられる富士見台・鉈切・称名寺遺跡は現在の海岸線に近く分布し、かつテリトリーの中に外洋水の影響を強く受ける海水域を広く包含している。また岩礁性の海岸線を有している点においても共通している。縄文海進の影響を受けた面積は少なく、淡水の影響を直接受ける部分も少ない。

Cタイプ魚種組成を示した上高津・新田野・西広・菊名貝塚は現在の海岸線から遠く内陸に位

置している。そして、テリトリーの中に縄文海進によって海水が侵入したと考えられる部分を多く含んでいる。このようなテリトリー内にはいわゆる干潟が広く形成され、それも淡水の影響を強く受けた淡水域が広く存在したことが想定される。

Aタイプの魚種組成を示した宮野貝塚は三陸海岸の太平洋岸に位置し（第1区参照）、テリトリー内の海岸線はいわゆるリアス式の岩礁性である。縄文海進の影響は殆んど受けておらず、テリトリーの海水域は黒潮・親潮が混流する外洋水から成る。一方淡水域の影響はないに等しいといえる。

以上のように遺跡テリトリーとその海水域の環境を想定すると、遺跡の魚種組成と遺跡テリトリーの潜在的な魚類生産との間に強い相関を認めざるを得ない。遺跡で同定される魚種がすべて遺跡の住人がテリトリーの中で漁獲したかどうかは疑問である。しかし、各魚種組成タイプを代表する魚種がテリトリーの中の潜在資源量と相関していることは明瞭である。簡単に要約すると、宮野貝塚のテリトリーは外洋性海水域に適合しており、潜在魚種である回遊性魚や外洋性種が実際に漁獲されている。鉈切・富士見台・称名寺遺跡テリトリーは外洋性から若干内湾性に向いているが、潜在魚種としては外洋性の岩礁性種が大きな比重を占めていたことが想定され、事実それら遺跡魚種組成もそのような特徴を示している。その他の遺跡テリトリーは内湾性の特徴を示し、潜在魚種として淡水性種・淡水性種が大きな比重を占めたと推測されるが、事実それら遺跡の魚種組成がそのような特徴を有している。

以上の結果から、遺跡で同定される魚種の組成が遺跡テリトリーの潜在魚種組成と強い相関を示すことがわかる。おそらく多くの遺跡に於て、精密なサンプリングがおこなわれ、正確な同定分類作業が試みられれば、以上の関係はさらに明瞭な事実となる可能性が高い。

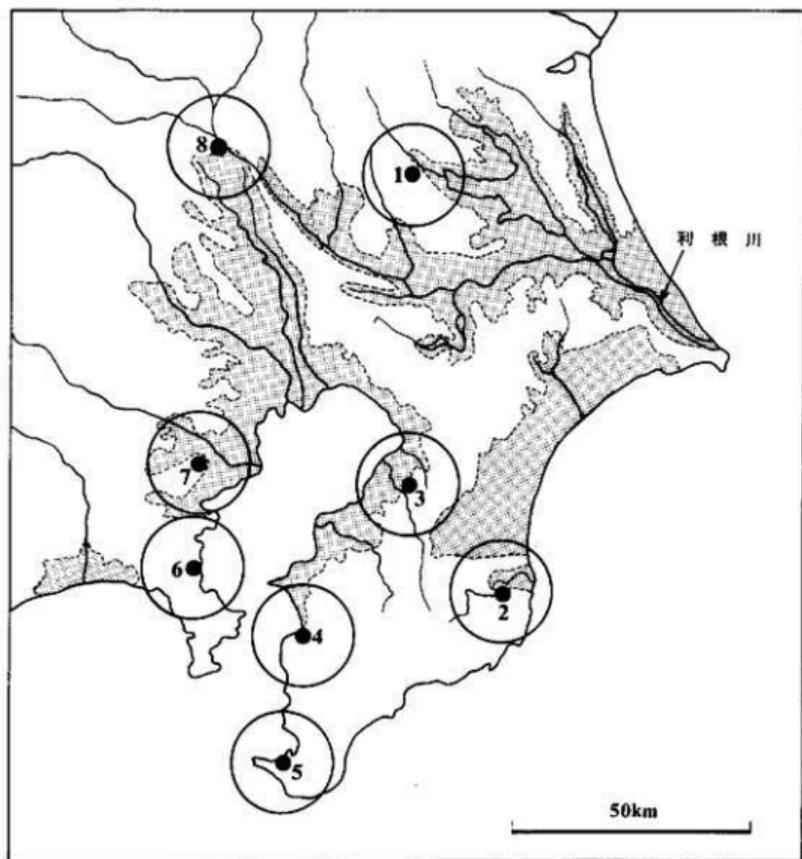
ところで以上のような関係は、冬木貝塚のテリトリーと魚種組成との間にも想定できよう。第3区は冬木貝塚のテリトリーを想定したものである。

冬木貝塚は縄文時代後期一帯の内式一の上層が大多数を占める。おそらくこの時期に形成された遺跡である。縄文海進はこの時期にはすでに可成り後退していたとする考え方が強い。従って、第3区に示されている標高10m以下の低地が海となっていたかどうかは疑問である。ところが一方でこの時期の海岸線のイメージを正確に描くこともできない。そこで今回の分析に利用している半径10km円テリトリーの中に海水が侵入していたという想定のもとに冬木貝塚資料を検討する。

まず冬木貝塚の魚種組成とすでに定義したA・B・Cの3タイプの魚種組成との比較を試みる。あきらかにその組成はCタイプとした特徴と一致する。フナ属・ボウ科・スズキ属・トラフグ類

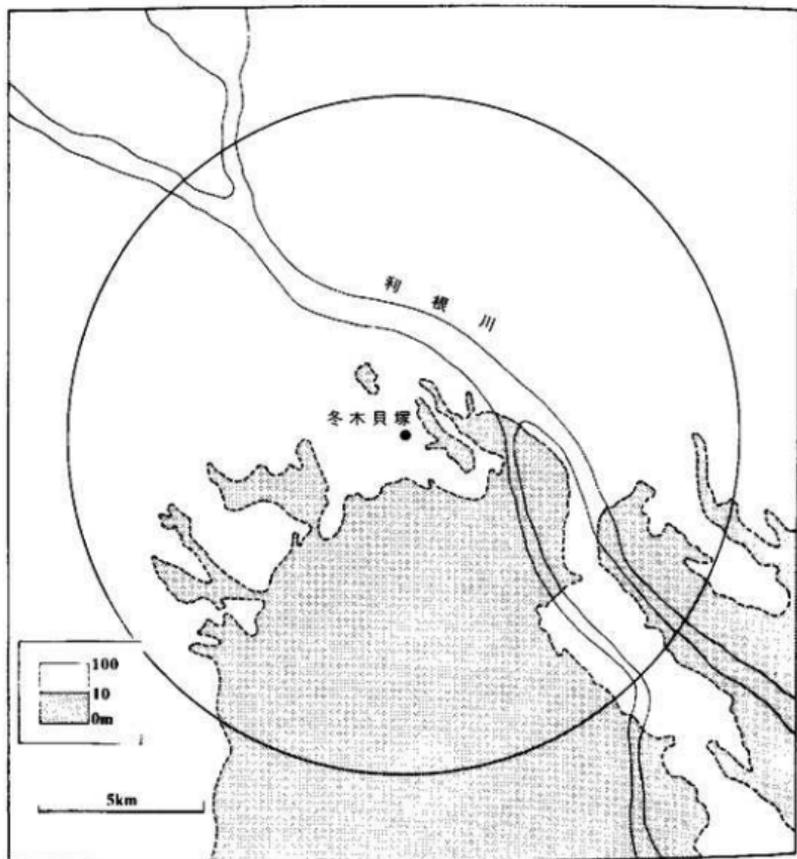
の組み合わせは、Cタイプの組成を特徴づける内湾性の潮間帯・淡水性・淡水性種の混在を示している。やや出現頻度が高かったクロダイ属も同じ傾向を示す魚種である。第1表と第2・第3表との比較を試みると、例えば上高津貝塚の魚種組成との類似が非常に強いことがわかる。

ところで一方、冬木貝塚テリトリーの環境を調べると、少くとも今回利用している分析基準では、Cタイプの魚種組成を示す遺跡群、すなわち上高津・西広・新田野・菊名貝塚等のテリトリーとよく一致している。



第2図

すなわち、冬木貝塚の魚種組成はCタイプを示し、その結果は遺跡テリトリーの特徴と矛盾するものではない。そして冬木貝塚においても遺跡テリトリーと漁獲物の特徴との間に高い相関が認められる。ここで問題として残るのはテリトリーを想定するために用いた半径 10 - km の基準である。この点については第 4 章で再検討する。



第 3 図

第3章 漁撈具にもとづく縄文遺跡の分類

遺跡産魚種組成が遺跡テリトリーと相関しているという事実は、遺跡産漁撈具の組成が遺跡テリトリーあるいは魚種組成とも一定の相関を示す可能性を意味する。縄文時代人は様々な環境に適応したが、そのテリトリーが有する潜在魚種を既発する過程で独特の漁撈具の組成を発達させた可能性がある。テリトリー分析はこの過程をあきらかにすることも有効である。そこで遺跡テリトリーが異なる若干の遺跡を用いて、発見されている漁撈具の組成にもとづいた遺跡分類を試みみる。

分析に利用する遺跡は、渡辺（1973）が記載した遺跡の中から漁撈具を比較的多量に出土したものの45遺跡である（第5表）。第4図は分析遺跡の分布図であり、北海道から近畿地方に分布す

第5表 分析遺跡リスト(渡辺1973から抽出)。遺跡番号は第4図の遺跡番号と一致する

番号	遺跡名	時期(縄文)	所在	番号	遺跡名	時期(縄文)	所在
1	植治	後	北海道札幌市	24	馬場	後	〃 原町市
2	ミツ音	後	〃 乙部町	25	万回	後	〃 浪江町
3	大涌	後	青森県青森市	26	蟹沢	中-後	〃 猪苗代町
4	敷の崎	後	岩手県岡谷市	27	大畑	中後	〃 いわさ市
5	宮野	後	〃 三陸村	28	守藤	後	〃 〃
6	西前	後	〃 陸前高田市	29	狐取	後	〃 〃
7	山沢	後	〃 〃	30	庄ノ上	中	〃 柳井市
8	大洞	後	〃 大船渡市	31	磯石内	中後	茨城県東海村
9	細浦	後	〃 〃	32	平原	中後	〃 〃
10	願沢	後	〃 諏訪高田市	33	若海	中後	〃 玉造町
11	三島	後	〃 花巻町	34	六ヶ所	中後	〃 西尾町
12	神矢田	中後	山形県酒田町	35	高松	中-後	栃木県足利市
13	西島	後	宮城県栗原市	36	姥山	中後	千葉県市川市
14	栗沢	中後	〃 〃	37	紙塚	後	〃 水戸市
15	山下	中後	〃 友田町	38	富士元台	後	〃 六甲町
16	花田	後	〃 〃	39	箕野	後	〃 鹿嶋市
17	沼津	中後	〃 石巻町	40	松名寺	後	徳島県徳島市
18	青蓮	中後	〃 〃	41	内富	後	〃 砂浜町
19	西の浜	中-後	〃 松島町	42	堤	後	〃 津市
20	台所	後	〃 鳴瀬町	43	松尾	後	静岡県沼津市
21	三日月	後	〃 三日月町	44	長瀬	中-後	岐阜県岐阜市
22	三雲	後	福島県葛西町	45	七雲	後	京都府向日市
23	小川	後	〃 新地町				

る。関東地方から東北地方の太平洋岸に分布する遺跡が多いが、若干内陸に分布する遺跡も抽出した。時期は縄文時代後期から晩期の堆積物を有するものである。

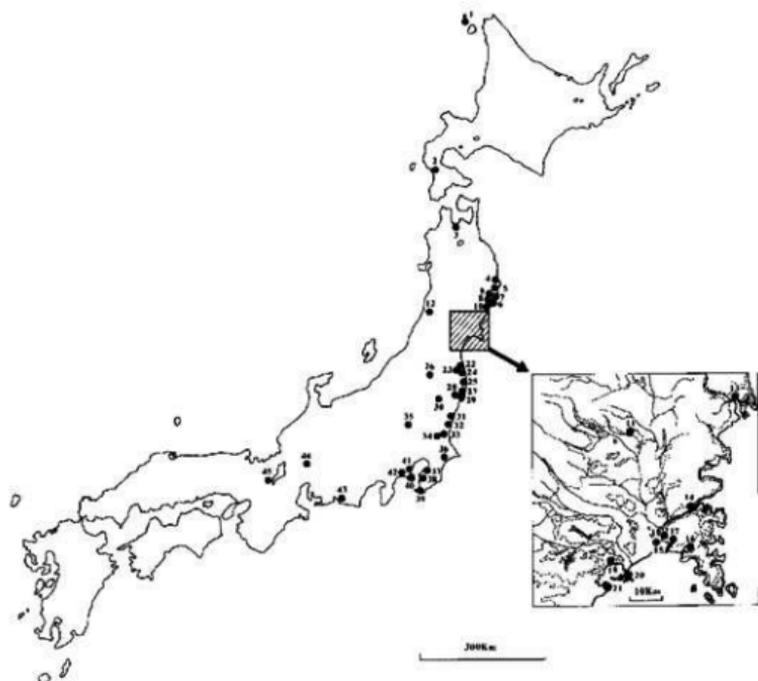
遺跡の分類には漁撈具が用いられる。すなわち渡辺が各遺跡ごとに集計した漁撈具である。ただ、渡辺の分類法が非常に詳細であり、その結果をそのまま利用した場合分析結果の解釈が困難であり、かつ分析上問題もある。従って実際の分析には渡辺の分類法を基本とするが以下のように修正し利用した。

分析変数	漁撈具の名称
1, H 1	開窓式回転式釣頭
2, H 2	閉窓式回転式釣頭
3, F 1	半式釣針
4, F 2	錐形半式釣針
5, F 3	組合釣針
6, N 1	土器片鏝
7, N 2	切目石鏝
8, N 3	有溝土鏝
9, N 4	有溝石鏝

具体的な分析目的は、上記9タイプに分類された漁撈具を変数として、45遺跡間の類似度を計算することである。統計計算には東京大学大型計算機センター、HITACシステムを利用した。分析プログラムとして、BIOMEDICAL COMPUTER PROGRAMS-Pの中からクラスター分析には BMDP 2 M、因子分析には BMDP 4 M、判別分析には BMDP 7 M をそれぞれ利用した。

漁撈具のコンビネーション

最初の分析は45遺跡を用いて分析変数とした9種類の漁撈具がどのようなコンビネーションをもって出現するかを目的とする。第6表は各変数が示した因子負荷量である。この結果9つの変数が4つのグループに大別されることがあきらかとなる。H 2・F 1・N 1が1つのコンビネーションを作り、主として第1因子によって支配されていることがわかる。ただH 2・F 1は正の値を示すがN 1は負の値を示している。第2因子で抽出される変数は、H 1・F 3である。第3因子ではN 2、第4因子ではN 3がそれぞれ抽出されている。以上の結果は45遺跡における漁撈具のコンビネーションを知る手掛りとなる。



第4図

第6表 漁撈具を変数とする因子分析によって抽出された4つの因子と因子負荷量

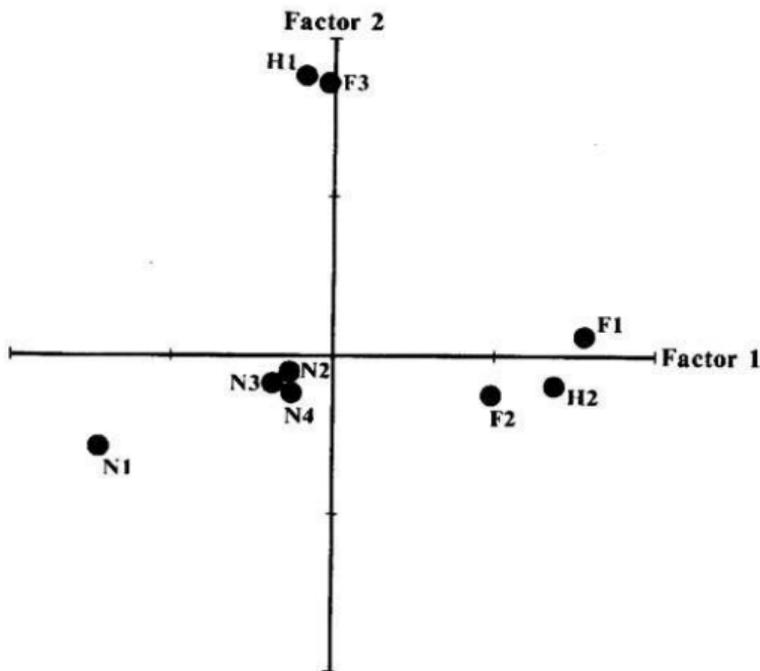
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
H1筒車式回転式船頭	-0.089	0.875	-0.643	-0.056
H2筒車式回転式船頭	0.694	-0.094	-0.133	-0.050
F1平式釣針	0.780	0.063	-0.265	-0.137
F2錐形平式釣針	0.491	0.119	-0.048	-0.130
F3組合釣針	-0.022	0.864	-0.057	-0.016
N1土器片罾	-0.717	-0.288	-0.458	-0.421
N2切目石罾	-0.147	0.963	0.872	0.222
N3有溝土罾	0.180	-0.079	-0.036	0.925
N4有溝石罾	-0.181	-0.081	0.540	0.326

次に変数ごとの因子負荷量を用いて漁撈具の関係を調べてみる。第5図は第1・第2因子負荷量を用いて9つの変数の相互の関係を二次元に展開表示したものである。第7表は因子ごとの固有値と累積寄与率とを示しているが、第1と第2因子負荷量を用いた第5図によって約40%の情

報が示されていることになる。

第5図の結果は9つの変数が4つのクラスターを形成することを明瞭に示している。すなわち、1) F1-F2 H2 クラスター、2) H1-F3 クラスター、3) N2-N3-N4 クラスター、4) N1 クラスターである。この結果を第6表の結果と比較してみると、4つのクラスターを構成した漁撈具のコンビネーションが抽出された因子によって、十分説明できることがわかる。

すなわち今回分析した45遺跡では漁撈具の組合わせとして次のような一般的特徴が認められたことになる。まず、閉窩式回転式鉤頭と2種類の平式釣針の組合わせ、開窩式回転式鉤頭と組み合わせた釣針の組み合わせ、上器片鉤を除く他3種類の踵の組合わせ、最後に土器片鉤である。すでのべたようにこの結果は約40%の情報しか含んでいない第1と第2の因子負荷量を用いた結果の解釈である。従って十分な説明には程遠いのであるが、一般的傾向を示していることは確かである。そしてこのような傾向から、遺跡によって漁撈具の組合わせに差が生じている、すなわち遺跡によって異なった漁撈具が発達していることがわかる。これが、おそらく異なった遺跡テリトリーへの適応の結果であることを、遺跡の分類によって検討してみたい。



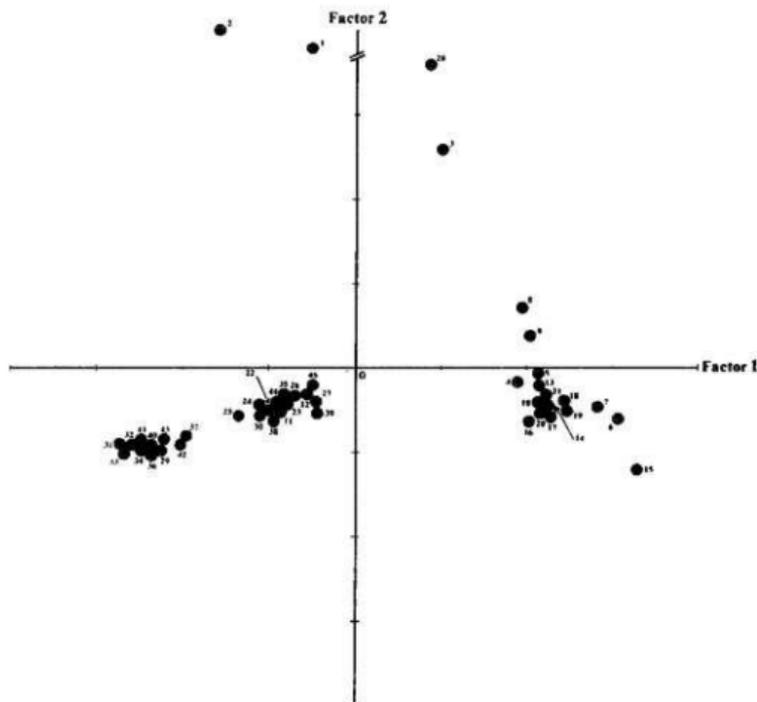
第5図

縄文遺跡の分類

第7表 因子分析で算出された固有値と累積寄与率

因子	固有値	累積寄与率
1	2.053	0.228
2	1.620	0.408
3	1.407	0.564
4	1.085	0.683
5	0.959	0.792
6	0.828	0.684
7	0.391	0.949
8	0.156	1.000

上記分析に用いたデータを利用して45遺跡の因子分析・クラスター分析を試みた。第6図は因子分析で算出された因子得点を用いて遺跡間の関係を二次元に表示したものである。一見して、45遺跡が3つのクラスターを形成することがわかる。1つはY軸の右側で一群を成す遺跡である。次にY軸の左側で近接して群を成す2つのクラスターである。X軸上方の4遺跡は必ずしもクラスターを形成するとはみなされない。

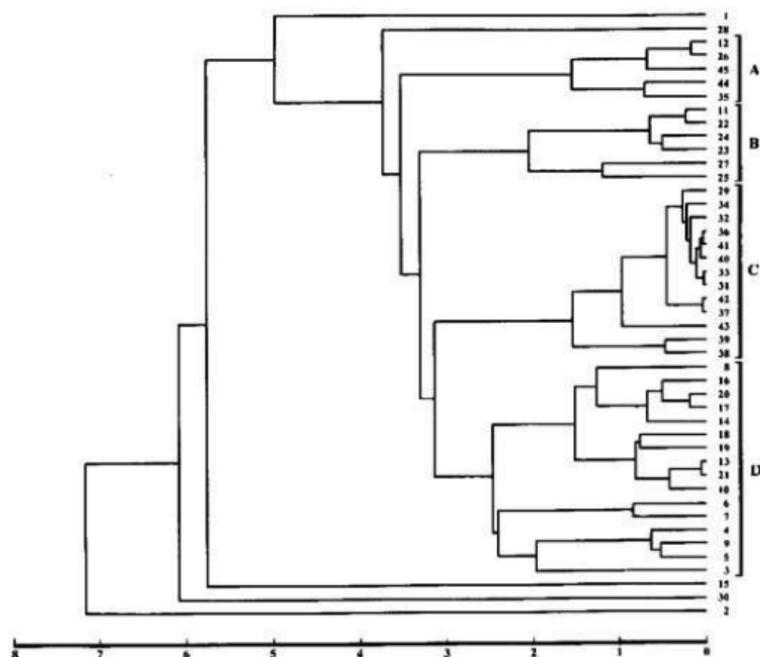


第6図

Y軸の右側でクラスターを形成する16遺跡は、開高式回転式鉾頭と2種の単式釣針が高い頻度を示すが、銚の出現頻度は低いという共通性を示す。一方Y軸の左側に分布する2つのクラスターは、銚が高い頻度で発見される遺跡で構成されている。ただ2つのクラスターの間で銚の組み合わせに差がある。より左側のクラスターは土器片銚、その右側のクラスターは他の銚が、それぞれ高い頻度で発見されるという共通性がある。

以上の結果は、すでにのべた漁撈具のコンビネーションの結果と比較的よく一致している。ただ遺跡のクラスタリングが未だ不十分という感をもつ。そこで同じデータを用いて45遺跡のクラスター分析を試みた。

第7図はクラスター分析の結果算出された遺跡間の距離を樹状図を用いて表現したものである。結果は明瞭であるが、例えば距離3.0の点で切ってみるとA・B・C・Dの4つの遺跡クラスターが認められる。遺跡の分類結果としては前記因子分析よりも説明し易い。この結果を分析に利用した遺跡の原データにもとづいて説明すると以下のようになる。



第7図

クラスターA

このクラスターを形成する遺跡群は、変数N2（切目石錘）が最も重要な因子として働いている。それに変数N3（有溝土錘）・N4（有溝石錘）等も同時に影響力をもった支配的因子として働いている。

クラスターB

クラスターAと同じく土器片錘を除く各種錘が支配的因子の役目を果しているが、特にN3（有溝土錘）が支配的変数として強く関与している。

クラスターC

このクラスターを形成する遺跡では土器片錘の出現頻度が高いという一般的特徴がある。ただ遺跡間の漁撈具組成の変異が大きく、変数F1（単式釣針）の頻度が高い例もある。

クラスターD

このクラスターを構成する遺跡はII2（附駕式回転式鋸頭）とF1（単式釣針）が多数発見される点で共通している。この2変数による支配因子として形成されたクラスターとみなすことができる。

以上の結果の先史学上の意味を検討するため、各クラスターを構成した遺跡の地理的分布を調べてみる（第4図参照）。

クラスターAを形成した12・26・35・44・45の5遺跡は日本海側から琵琶湖畔にかけての内陸に分布する。いわゆる河川流域・内陸湖水域に近く分布するといえる。クラスターBを構成する11・22・23・24・25・27の6遺跡は東北地方南部・関東地方北部の太平洋岸に近く分布している。クラスターCを構成した29・31・32・33・34・36・37・38・39・40・41・42・43の13遺跡は関東地方から東海地方に分布する。第4図では説明しにくい、このグループの多くの遺跡はすでにのべた縄文海進で形成された内湾に近く位置する。クラスターDを形成する3・4・5・6・7・8・9・10・13・14・16・17・18・19・20・21の16遺跡は東北地方の太平洋に面して分布するという共通性を示す。

以上の結果を総合すると、漁撈具のコンビネーションで分類された遺跡クラスターとその地理的分布との間の一定の相関が認められるといつてよいであろう。この結果をすでにのべた遺跡テリトリーと魚種組成との関係と一併にして考慮すると、あらたに遺跡テリトリーと魚撈具組成との間に相関が成り立つことがわかる。すなわち、遺跡テリトリーの潜在魚種と貝塚人との関係に

よって遺跡に特有の魚種組成があらわれるが、その両者の関係を結びつける技術として遺跡独特の漁撈具組成が発達した。ここに縄文人の遺跡テリトリーへの適応の一つの結果をみる事ができる。そのような適応状態を前記A・B・C・Dと分類された遺跡を用いて次のように要約する。

遺跡クラスターA

今回魚種組成を調べた遺跡の中にはこのクラスターに分類される例がない。すでにのべたように、このクラスターを形成する遺跡は内陸に分布し、河川域・内陸湖水域に近く位置している。今回は福井県鳥浜貝塚（福井県教育委員会、1979）を用いてこの遺跡のクラスターの特徴を要約する。

第8図は当遺跡テリトリーを示し、半径5・10-kmの2種類の円テリトリーが描かれている。10-km テリトリーの場合、外洋水域が含まれる。この場合には外洋性種、例えばBタイプの魚種組成に近いものが認められてよい。ところが実際に同定された魚種組成は、フナ属・コイ属を主としている。貝類の特徴は、ヤマトシジミ・トンガリササノハガイ・インガイ・マツカサガイ等である。すなわち、魚貝類とも淡水性・汽水性種の出現頻度が高い。ところが、外洋性ないし潮間帯性種であるマダイ・クロダイ・スズキ・サザエ・レイシ等の頻度は極めて低い。

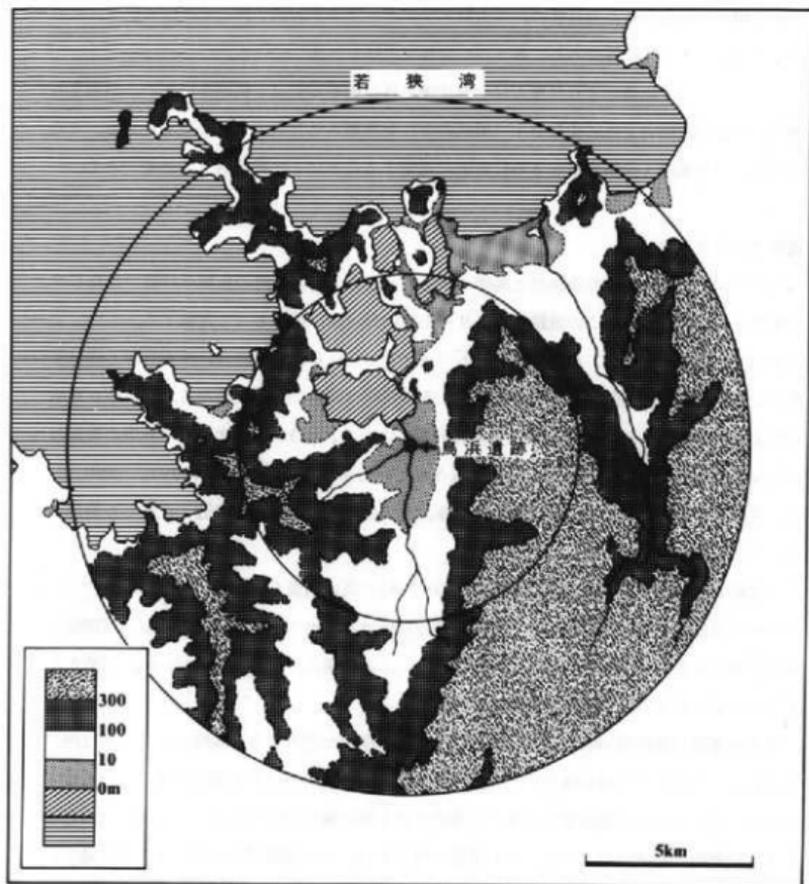
以上の魚類・貝類組成は、当遺跡テリトリーとして10 kmよりも5-km テリトリーを想定する方がより適当であることを示している。このテリトリーは縄文海進の影響を大きく受けていない。たとえあったとしても内陸湖水が拡大したにとどまる。以上の特徴はクラスターAを形成した内陸遺跡のテリトリーを定義する一般的特徴であったと考えられる。

このような遺跡テリトリー及び潜在魚種資源に対する適応結果として、クラスターAを定義した変数であるN2（切目石鎌）が発達する。事実鳥浜貝塚ではこの種の遺物の出現頻度は高い。また、今回の分析で利用されていない漁撈具であるヤスが同じくこの遺跡テリトリーと関連する（第8表）。

第8表 鋌頭(1)、釣針(2)、ヤス(3)の遺跡別出現頻度
(金子 1971; 第1表を改変)

	(1)	(2)	(3)	発掘面積(m ²)	遺跡ポイントタイプ(本文参照)
西の浜	38	43	10	274	D
花 雲	2	20	28	?	B
余 田	22	22	43	128	B
富士見台	4	7	9	24	B
赤 名 寺	12	6	16	70	B
人 倉 西	0	2	54	21	C
土 高 津	0	1	23	27.2	C
井 原 塚	1?	2	10	16	C
大 瀬	0	3	30	16	C
銀 塚	0	0	148	?	A
鳥 浜*	0	0	多	?	A

*鳥浜貝塚報告書 1979より



第8図

遺跡クラスターB

当クラスターを構成した遺跡は、富士見台・鉈切・称名寺遺跡を特徴づけたBタイプの魚種組成との相関が高い。今回は鉈切遺跡のテリトリーを利用して当クラスターの一般的特徴をのべる。

第9図は鉈切遺跡の10-kmテリトリーを示す。テリトリーの特徴は鳥浜貝塚とは著しく異なる。直接外洋に面し、かつ外洋水域の割合が極めて高い。また縄文海進の影響を受けた範囲は狭く、長い海岸線は直接外洋水の影響を受けている。このような遺跡テリトリーの潜在魚種組成は主として外洋性種・岩礁性種から成るはずである。事実当遺跡組成がそのような特徴を示す。

高い頻度で同定された魚貝種は、タイ科・ウツボ・マハタ・ペラ科・サザエ・マツバガイ・インシ・スガイ・アワビ等である。あきらかに潜在魚種と共通している。

このテリトリーに適応する貝塚人は土器片鏝以外の銚をとまなう例が多いという結果をみるが、実際には鉈切遺跡のように変数D1（単式釣針）を発達させたグループも認められる。このような矛盾は分析遺跡・分析変数をさらに厳密に選定することにより再検討する必要がある。

遺跡クラスターC

当クラスターを構成した遺跡は上高津・新田野・西広・菊名遺跡の魚種を特徴づけたCタイプの組成との相関が高い。この遺跡テリトリーを新田野貝塚の例をもって定義する。

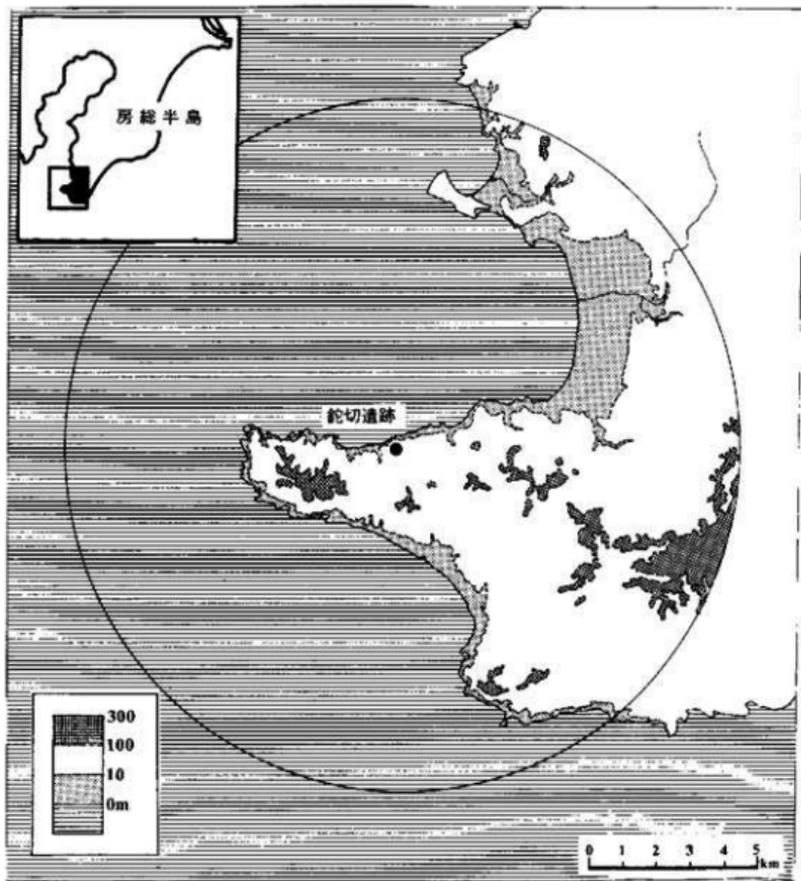
第10図は新田野貝塚の10 km テリトリーを示している。当遺跡は、鳥浜貝塚と同じように、海岸から5 km近く内陸に位置する。しかしその意味は両者で大幅に異なる。当貝塚が形成された縄文時代前期、約6000年前は縄文海進の時期にあたる。当時の遺跡テリトリー内の地形は現在と大幅に異なり、矢張川ぞいに内湾が形成されていた可能性が高い(Akazawa, 1980)。すなわち、鳥浜貝塚のような内陸湖水に面した内陸遺跡ではなく、実は内湾に近く位置した海岸遺跡であった。

当遺跡で同定されたCタイプの魚種組成の中で特に高い頻度を示したスズキ・ボラ・クロダイ・コチ・その他のヤマトシジミ・オキシジミ等の貝種は、すべて内湾の潮間帯種か一定期間内湾に侵入生息するものか、あるいは淡水性種である。この結果は、遺跡テリトリー内に内湾が形成されていたことによってはじめて説明可能である。

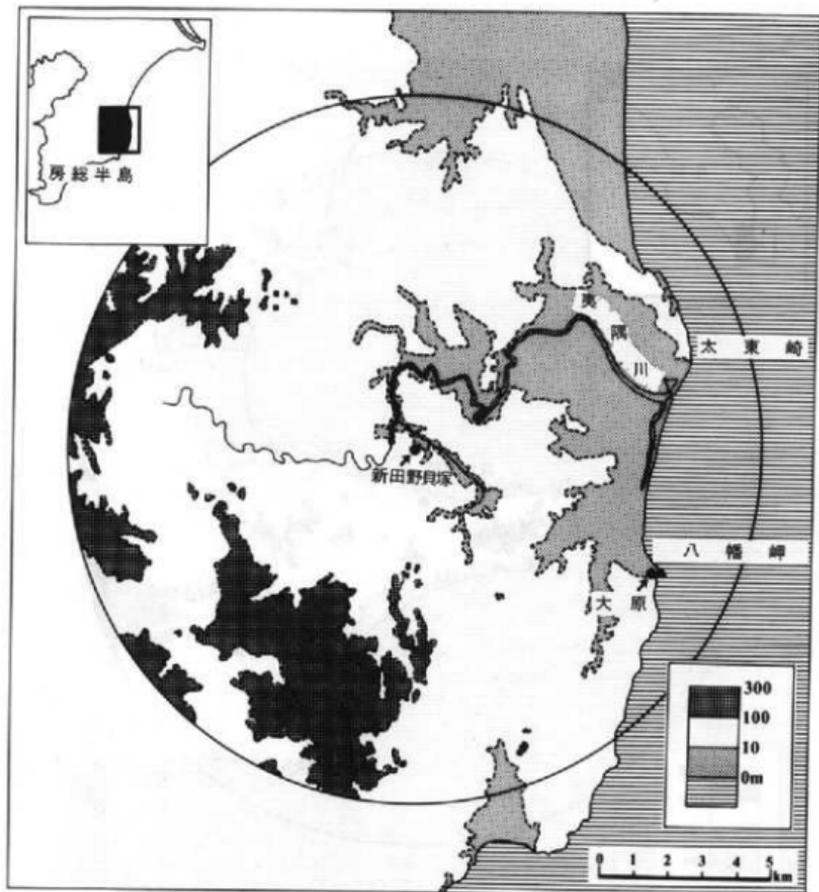
縄文海進期に沿岸地帯低地の多くが海となり、海岸線が増大すると同時に、ずい所に内湾が形成された。このような海水域をテリトリーの一部とした遺跡で以上の関係が成立したものと推定される。それとともに関東地方の多くの遺跡では土器片鏝が製作される。この用途は渡辺(1973)により魚網鏝と記載されている。その用途が何であれ、この遺跡クラスターと土器片鏝との関係は非常に密接である。この種の遺跡テリトリーをもった貝塚人の「日常的な活動」と関係があった遺物であることに間違いない。

遺跡クラスターD

当クラスターを構成する遺跡は東北地方太平洋岸に分布する。それを特徴づける魚種組成は宮野貝塚で同定されたAタイプである。第11図は宮野貝塚の10-km テリトリーを示す。同テリトリーはリアス式の岩礁性海岸を含み、黒潮・親潮が混流した外洋水域を包含している。この海域は現在でもよく知られた漁場であり、その潜在魚種資源としてマグロ・カツオ等の巨遊魚を含んでいることでもよく知られている。



第9圖

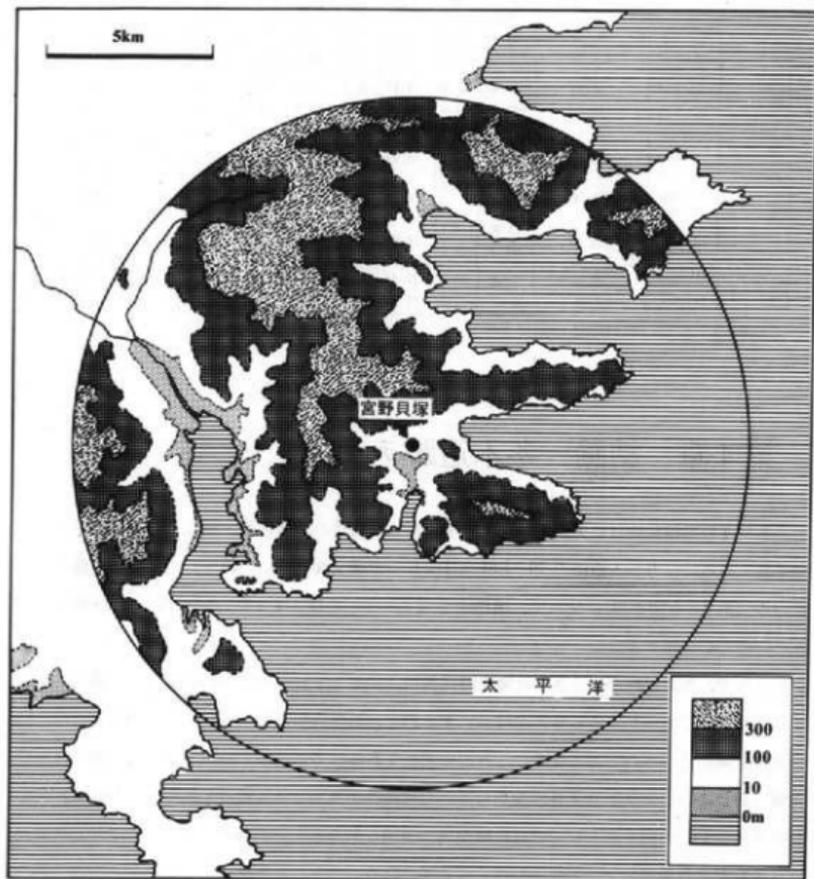


第10図

宮野貝塚はじめこの一帯の遺跡産魚種はこのようなテリトリーの特徴をよく反映している。すなわち、マダイ・カサゴ科・アイナメ科の外洋性岩礁性魚、マグロ・カツオ等の回遊魚が高い頻度で発見される。同じく高い頻度で発見されるイガイ・スガイ・チョウセンハマグリ等はいずれも岩礁性・外洋砂質性の貝種である。

このようなテリトリーに適応した縄文人は各種の漁撈具を発達させ、他のいずれのクラスターよりも海への適応度が高かったことがわかる。特に発達した閉窩式回転式鉤頭・単式釣針は、その形態の分化において、かつ頻度において、他のいずれのクラスターよりもまさっているのが特

徴である(第8表参照)。



第11図

今回は各遺跡テリトリーの特徴を魚種組成・漁撈具組成にもとづいて検討するにとどめた。しかし、各遺跡テリトリーは、図示されている地形上の特徴においてもテリトリー間の差異は著しいことがわかる(第9表)。すなわち、縄文遺跡のテリトリー分析は土地利用の状態を含めたものでなければならない(Akazawa, 印刷中)。それによって縄文人の遺跡テリトリーとの関係がより明確となり、縄文人の環境への適応形態、そのプロセスがより具体的に復原できるはずである。

第9表 遺跡テリトリーの標高差にもとづく地形区分とその面積比

	テリトリー面積 (km ²)	0 m以下		0-10		10-100		100-300		300以上		
		面積	%	面積	%	面積	%	面積	%	面積	%	
宮野	5-km	78.54	21.90	27.9	2.10	2.6	18.75	23.9	25.74	32.8	10.05	12.8
	10-km	314.16	142.35	45.3	8.40	2.7	49.85	15.3	74.16	23.6	39.30	12.5
蛇池	5-km	78.54	45.19	57.9	5.42	6.9	24.72	31.5	2.91	3.7	0	0
	10-km	314.16	199.70	63.6	21.20	6.7	84.13	26.8	9.13	2.9	0	0
新田野	5-km	78.54	0	0	13.32	17.0	63.32	80.6	1.90	2.4	0	0
	10-km	314.16	30.41	9.7	46.97	14.9	195.94	62.4	40.84	13.0	0	0
鳥浜	5-km	78.54	10.20*	13.0	8.70	11.1	24.30	30.9	16.74	21.3	18.60	23.7
	10-km	314.16	13.95*	4.4	16.60	5.3	51.96	16.5	89.85	28.6	80.55	25.7
冬木	5-km	78.54	7.68*	9.8	27.44	34.9	43.42	55.3	0	0	0	0
	10-km	314.16	16.45*	5.2	91.45	29.1	206.25	65.7	0	0	0	0

*内陸湖及び大河川。(例えば冬木の場合の鳥浜)。

第4章 結論—冬木遺跡テリトリー—

冬木貝塚の魚種組成はCタイプである。すなわち内湾性の潮間帯種・淡水性種が高い頻度で見られている。一方冬木遺跡の10 km テリトリーは縄文海進期に形成されたはずの内湾を有している(第2・3図参照)。従って、遺跡クラスターとしては、すでに分析した上高津・新田野貝塚と同種のCに属する。

ところで、冬木貝塚が形成された縄文時代後期、主として堀之内式の時期はすでに縄文海進は終り、海退期であったとする考えが強い。すなわち、海岸低地に形成されていた内湾は縮小ないし消滅の傾向にあったことになる。これが事実とすれば、冬木遺跡テリトリー内の内湾もすでに大幅に縮小ないしテリトリー外に後退していた可能性が強くなる。従って、今回の分析に利用した半径10-kmの円テリトリーでは魚種組成の説明を試みるのが無理である。そこで、テリトリーを想定する基準を10 kmより遠くするか、あるいは主たる魚種が交易その他の方法で持ち込まれた可能性を考えなければならぬ。今回の結果から以上の可能性を否定する証拠は得られていないが、もう一つ別の可能性を指摘し本論のしめくりとする。

冬木貝塚の堆積物の状態は、今回の分析標本を出した第II K層の下部に地質学的に細分される数枚の地層が認められる(堆積物の記載の章参照)。ところが、第II K層は純貝層と記載されるごとく多量の貝を包含するが、その下部層は極めて低い頻度でしか貝を包含しない。そして土層ないし混貝土層と記載されている。これら区分されている地層はそれともなう土層の型式から、同じ縄文時代後期、堀之内式の時期の堆積物とみなされている。このような堆積物の性質の著し

い差異を考えると、1)同型式の土器が使用されていた期間に海進海退が繰り返され、テリトリー環境が変わった、2)当遺跡の形成されたのは貝層が形成された時期であり、その期間に海進期でテリトリー内に内湾が形成されていた。従ってそれ以外の地層は二次的な堆積物であるという2つの可能性が考えられる。ただいずれの場合も、縄文時代の後期に海進期があったことを推察している。

以上の推測をうらづける直接的証拠はない。ただ今回行った遺跡テリトリー分析にもとづく限り、このような可能性によって冬木貝塚のデータを合理的に説明できる。また次に示す上高津遺跡のデータが以上のような解釈を間接的にうらづける一つの証拠となる(小宮, 1980)。

上高津貝塚は大別して縄文時代後期初頭(堀之内期)・中葉(加曾利B期)・末葉(安行I・II期)の堆積物から成る。魚種組成はCタイプである。遺跡テリトリーもクライスターCの特徴を示し、魚種組成との間に矛盾はない。ところが、後期中葉の魚種組成がその前後と若干異なる。すなわち、この時期の堆積物からマダイが高い頻度で見られる。この事実も、冬木貝塚の場合と同じく、遺跡テリトリーの範囲を変更するか、テリトリー外から持ち込まれた可能性を検討する必要がある。にもかかわらず、その前後の時期では何故同じ事実が認められなかったかという疑問が残る。この現象が海進海退が繰り返された結果にもとづくこととすれば、冬木貝塚において示した2つの可能性も十分に考えられることになる。

今回は魚種の同定結果を中心とした分析結果である。その他の遺物を加味したテリトリー分析を試みるにより以上の問題も解決するであろう。

第5章 冬木貝塚産魚骨の同定結果

今回分析した標本は12種類に分類された(第1表参照)。以下その同定基準を記載する。学名については、中村(1971)・内田穰(1979)を用いた。微少な標本はオリンパス製 X Tr 型実体顕微鏡を用いて6.3倍に拡大し同定した。同定に利用した現生骨格比較標本にはHKC(Hajime Komiya Collection) 番号・体長(cm)・採集場所・採集年月日を示した。

軟骨魚綱 Chondrichthyes

エイ目 Rajiformes

種不明 Fam. indet. (Plate I ; fig.1)

同定標本は特徴的な形態をもつエイ類の歯で、2つの歯が連なったまま採集されたが、いずれも一部が欠損する。欠損部を復原したのち計測した歯の左右両端間間は約28mmである。咬合面は平滑で硬く、ほぼ全面に前後方向に走るかすかな溝が多数存在する。裏面は櫛歯状になる。咬合面側から見た歯の形状は弱い弓形で両端は尖らない。

現在比較に用いるエイ類の比較骨格標本が不備であり、科以下の同定はおこなわない。

尚、軟骨魚綱に属する小形の椎体が1点採集されている。ただ目以下の同定は困難であった。

硬骨魚綱 Osteichthyes

真骨類 Teleostei

コイ目 Cypriniformes

コイ科 Cypridae

タナゴ亜科種不明 Rhodeinae gen. & sp. indet.

同定標本はタナゴ *Acheilognathus morioaka* (HKC 7206.7.0, 茨城県北浦, 1967.IX) の咽頭骨に酷似するが、前腕・後腕などは欠損している。さらに同標本は小林・前田(1961)が記載するタナゴ亜科咽頭骨の特徴と以下の点で一致する。

- (1) 咽頭歯は1列で少なくとも3本以上の咽頭歯をもつ。
- (2) 前角と後角がある。
- (3) 前角と後角間の長さに対して咽頭骨幅が相対的に広い。

以上の点から本標本をタナゴ亜科に同定した。なお、同標本の咽頭骨のサイズは、小林・前田の

方法にもとづく推定体長 5~6 cm 前後の個体のものとなる。

ニゴイ属 *Hemibarbus* sp. (Plate I : figs. 2-5)

同定標本は破損した咽頭骨である。figs. 2-3 は比較的大形で、コイ *Cyprinus carpio* の可能性もあるが、以下の点に着目しニゴイ属とした。

- (1) 後突起は側扁し、比較的長くのびる。
- (2) 後突起先端部がわずかに曲る。
- (3) 咽頭歯が3列で、その大部分は脱落しているが、残存する2列第1歯は小形で先端が尖り、咀嚼面は刻まれない。

咽頭骨を復原計測し、小林・前田の方法で体長を推定すると約 50 cm の個体となる。

上記標本以外にも破損したコイ科咽頭骨片が認められた (fig.4)。この標本は咽頭歯の列数を復原することが困難であったが、以下の6点からニゴイ属とした。

- (1) 咽頭骨が大形である。
- (2) 残存する1本の咽頭歯は大きく、それが1列目の歯である。
- (3) 咽頭歯の先端部は曲り、前縁部が凹状である。

この標本の推定体長は 50~60 cm と考えられる。

中村 (1971) によれば、わが国に分布するニゴイ属はニゴイ *Hemibarbus barbus* とズナガニゴイ *H. longirostris* である。後者は近畿地方以西に分布する。縄文時代にこの2種がどのように分布していたかを推測するには比較標本が不備である。従って今回の同定はニゴイ属にとどめる。

フナ属 *Carassius* sp. (Plate II : figs. 6-8)

同定標本はギンブナ *Carassius auratus langsdorffii* (IHKC 7905, 15.0, 千葉県東金市, 1979, IV) の咽頭骨・前上顎骨・歯骨および椎体に類似する。同標本は HKC 7905 比較標本とのサイズを比べると、体長 10 cm 前後の個体の資料とみられる。

フナ属の尾椎標本はニシン科 Clupeidae の尾椎と類似する。しかし今回の標本については以下の基準にもとづいて区別することができた。

- (1) 側隆線は1本で明瞭であるが、隆起の程度が相対的に弱い。
- (2) 前神経棘突起および前血管棘突起は前方に細くのびていない。
- (3) 神経弓門・血管弓門の発達は良好であり、前面観では両者の基部が椎体の側面側にそって発達する。

コイ *Cyprinus carpio* LINNAEUS (Plate II : figs. 1-5)

同定標本は咽頭骨・上顎骨・前上顎骨・歯骨である。同定の基準は咽頭骨の咽頭歯であり、それが臼歯状を呈し、第1列第1歯を除いて、他はいずれも咀嚼面を横切る溝が認められる。この標本類はそのサイズを現生比較標本と比較することによって、推定体長約 15 cm の個体となる。

ウナギ目 Anguilliformes

ウナギ科 Anguillidae

ウナギ *Anguilla japonica* TEMMINCK ET SCHLEGEL

同定標本は椎体である。以下の特徴にもとづいて同定した。

- (1) 神経弓門と椎体が癒合している。
- (2) 神経棘が椎体後部から発し、短い。
- (3) 側隆線が網目状で、側方に突出する脊柱突起がない。

スズキ目 Perciformes

ボラ科 Mugilidae

種不明 Gen. & sp. indet. (Plate III : figs. 1-5)

同定標本はボラ *Mugil cephalus* (HKC 7430, 22.0, 神奈川県葉山町, 1974, X) の主鰓蓋骨・椎体に類似する。わが国では本種以外に、セスジボラ *Mugil carinatus*・メナダ *Liza haematocheila* 等の近縁種が分布している。しかし、比較標本が不備のため属以下の同定は困難であった。

当日塚産ボラ科標本は保存状態が極めて良好である。貝塚産ボラ科の主鰓蓋骨は関節部位周辺を除いて欠損している例が多い。ところが冬小貝塚標本には完全なものが極めて多く、鰓蓋縁部の特徴を詳しく観察できる。

スズキ科 Percichthyidae

スズキ属 *Lateolabrax* sp. (Plate IV : figs. 1-5)

同定標本はスズキ *Lateolabrax japonicus* (IHKC 7002, 57.5, 千葉県夷隅郡人原, 1967, XII) の前上顎骨・上顎骨・歯骨・角骨・主鰓蓋骨の特徴と類似する。マハタ属 *Epinephelus* 比較標本との対比をおこなっていないが、今回はスズキ属と記載する。

わが国にはスズキ属に分類される2種が分布している。ただ貝塚産標本をこの2種に区別することは困難である。

同定標本の多くは、上記 HKC 7002 標本と同じ程度の推定体長を示す個体である。

タイ科 Sparidae

クロダイ属 *Acanthopagrus* sp. (Plate V : figs. 1-4)

同定標本はクロダイ *Acanthopagrus schlegeli* (HKC 7003, 43.0, 千葉県館山町, 1969, X) の前上顎骨・歯骨・角骨・口蓋骨の特徴と一致する。ただ、現在兵庫産標本を、本属に属する3種に分類することは困難である。従って同定は属のレベルにとどめた。

採集標本の中に、HKC 7003 標本の主髭蓋骨と類似したものがある (Plate V : figs. 5)。しかし、チダイ属 *Eynnus* ・ヘダイ属 *Sparus* ・マダイ属 *Pagrus* ・キダイ属 *Dentax* など本属以外のタイ科標本との十分な対比が困難であったため、当標本の同定をタイ科レベルとした。同定されたタイ科・クロダイ属の標本はいずれも大きく、上記 HKC 7003 標本と同程度の個体と推定される。

フグ目 Tetraodontiformes

フグ科 Tetraodontidae

トラフグ属 *Takifugu*

トラフグ類 *Takifugu rubripes* (Plate VI : figs. 1-4)

同定標本は歯と顎骨とが癒合し、嚙状になった前上顎骨・歯骨・角骨・方骨である。フグ目には歯が嚙状になるものが比較的多く、同じ特徴はフグ科以外にもウチワフグ科 *Triodontidae* ・ハリセンボン科 *Diodontidae* ・マンボウ科 *Molidae* などにも認められる。またフグ目以外にも、イシダイ属 *Oplegnathus* ・アオブダイ属 *Ypsiscarus* に於ても同様の特徴がある。しかし、冬木貝塚の標本は以下の点でフグ科に同定した。

- (1) 歯板の咬合部が刃状で臼歯状を呈していない。
- (2) 上顎・下顎の歯板で中央部の縫合面が明らかで、上下顎骨とも左右の歯板がこの縫合部分でつながっていたことが明瞭である。
- (3) 当標本がブダイ科 *Scaridae* に属するとすれば、その咽頭骨が発見される可能性が高い。しかし全く発見されていない。

フグ科には今回同定したトラフグ属以外にもキタマクラ属 *Canthigaster* ・サバフグ属 *Lagocephalus* ・モヨウフグ属 *Tetraodon* 等が分布する。標本からこれらを区別することは困難である。しかし当標本類は以下の特徴からトラフグ *Takifugu rubripes rubripes* もしくはカラスフグ

T. rubripes chinensis と同定するのが適當である。

- (1) 上下顎骨のサイズが大きく、復原推定体長が 60~70 cm 以上の個体が多い。
- (2) フグ科には上記 2 種以外で以上の体長に成長するものがある。カナフグ *Lagocephalus laevis* *inermis* ・センニンフグ *Pleuronacanthus scleratus* ・シマフグ *Takifugu xanthopterus* 等である。ただしいずれもわが国にはほとんど分布しない (阿部, 1963)。

カジカ目 Scorpaeniformes

コチ科 Platycephalidae

コチ *Platycephalus indicus* (LINNAEUS) (Plate VII : figs. 1-2)

同定標本は大給 (1943) が報告したコチの標本と特徴の一致する前上顎骨・歯骨である。

種不明 Fam. inder.

目・科レベルの同定が困難な椎体 202 点である。いずれも真骨類の椎体である。そのうち 194 個は椎体直径 1~2 mm であり、おそらくその多くは小形魚に由来すると考えられる。

腹椎標本は、いずれも神経棘がよく発達しており、かつ神経棘基部が椎体から脱落せず残存している。さらに神経弓門が椎体と癒合していない。以上の特徴を総合的に検討すると、これら椎体は、少なくともニシン目・ウナギ目以外の魚種に属する可能性が高くなる。

引用文献

- 阿部宗明 1963 「原色魚類検索図鑑」北隆館
- AKAZAWA.T 1980 Fishing Adaptation of Prehistoric Hunter-gatherers at the Nittano Site,Japan. *Journal of Archaeological Science*, Vol.7, pp.325-344.
- AKAZAWA.T 印刷中 Cultural Change in Prehistoric Japan:The Receptivity Process of Rice Agriculture in the Japanese Archipelago.In *Advances in World Archaeology* edited by Fred Wendorf.Vol.1.Academic Press.
- 金子浩昌 1958 「熊山鉦切洞窟」千葉県教育委員会
- 金子浩昌 1964 「富士貝台貝塚」千葉見教育委員会
- 金子浩昌 1971 「現利根川下流域の縄文貝塚にみる石器時代漁撈の諸問題」利根川、pp.113-132
九学会連合利根川流域調査委員会
- 金子浩昌他 1977 「西広貝塚」平福田大学
- 小宮 孟 1976 「横浜市菊名貝塚採集の魚貝類遺存体」史学 Vol.47,pp.335-358
- 小宮 孟 1980 「上田市上高津貝塚産出魚貝類の同定と考察」第四紀研究 Vol.19,pp.281-299
- 中村守純 1971 「原色淡水魚類検索図鑑」第2版 北隆館
- 大谷 尹 1943 「史前漁撈関係資料としてのハマとコチ」史前学雑誌 Vol.15,pp.26-41
- 小川信子他 1975 「脊椎動物」新山野貝塚 pp.52-61 立教大学考古学研究会
- 鈴木公雄 1977 「先史時代遺跡における魚骨標本の組成に関する基礎研究」自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 昭和52年次報告書 pp.115-150
- 渡辺 誠 1973 「縄文時代の漁業」雄山閣

図 版 説 明 文

第 1 図 本論で分析する縄文時代遺跡の分布図。

1. 宮野貝塚 2. 上高津貝塚 3. 菊名貝塚 4. 西広貝塚 5. 新田野貝塚
6. 富士見台貝塚 7. 鉦切貝塚 8. 称名寺貝塚 9. 鳥浜遺跡

第 2 図 本論で分析する関東地方の縄文貝塚分布図 (1. 上高津貝塚 2. 新田野貝塚 3. 西広貝塚 4. 富士見台貝塚 5. 鉦切遺跡 6. 称名寺貝塚 7. 菊名貝塚 8. 冬木貝塚)。各遺跡を中心とする円は半径 10 - km であり、本研究用に想定される遺跡テリトリーを示す。当図は約 6,000 年前の縄文海進期の海岸線のイメージを示す (破線が縄文海進期の海岸線)。

第 3 図 冬木貝塚の半径 10 km を用いた場合の遺跡テリトリー図。縄文海進期の海岸線 (破線) のイメージが記入されている。

第 4 図 縄文遺跡のクラスター分析に用いた 45 遺跡の分布図。遺跡は抜選, 1973 から選択。

第 5 図 45 遺跡で発見される 9 タイプの漁撈具の頻度を用いた因子分析の結果。因子負荷量第 1 と第 2 を用いて 9 タイプの漁撈具相互の関係を示す。9 タイプの漁撈具が 4 つのクラスターを形成している。

第 6 図 45 遺跡の因子分析の結果, 因子得点第 1 と第 2 を用いて遺跡間の類似関係を示す。

第 7 図 45 遺跡のクラスター分析によって算出された遺跡間の距離を示す樹状図である。A・B・C・D は距離レベル 3.0 で切った場合に認められる 4 つの遺跡クラスターを意味する。

第 8 図 鳥浜貝塚の半径 10 - km, 5 - km を用いた場合の遺跡テリトリー図。縄文海進の影響が弱いことがわかるが, たとえあったとしても 5 km テリトリーの中の内水湖の割合が増加したことになる。

第 9 図 鉦切遺跡の 10 - km テリトリー図。

第 10 図 新田野貝塚の 10 - km テリトリー図。

第 11 図 宮野貝塚の 10 km テリトリー図

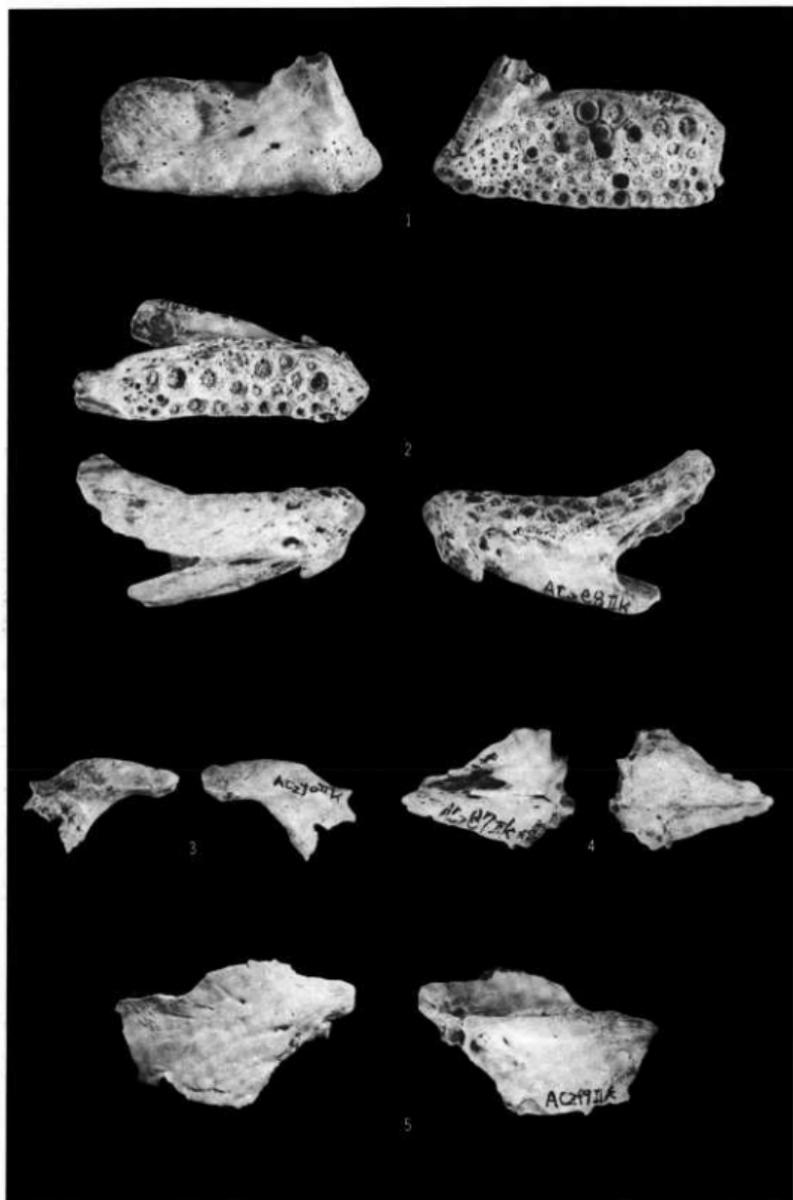
图 版

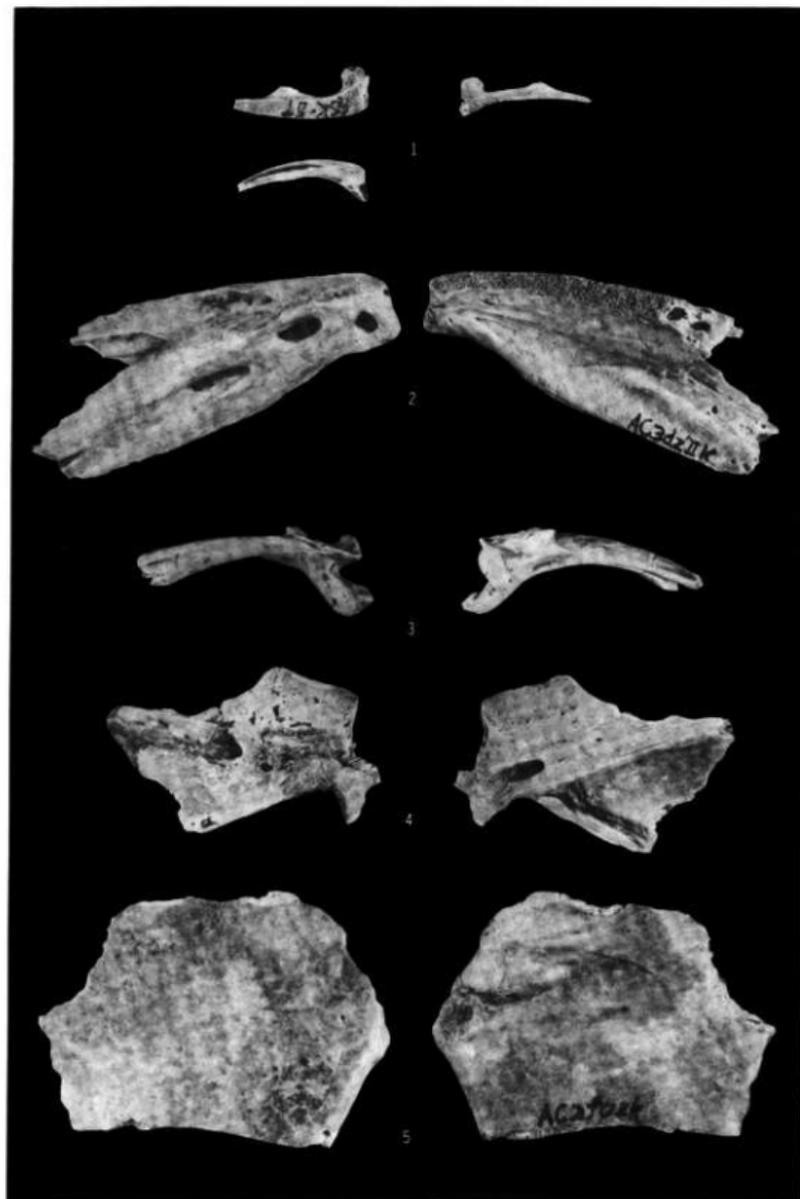














茨城県教育財団文化財調査報告Ⅹ

昭和56年3月27日印刷

昭和56年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3-4-57

印刷 有限会社 縮印フrint社
水戸市城東1-5-21